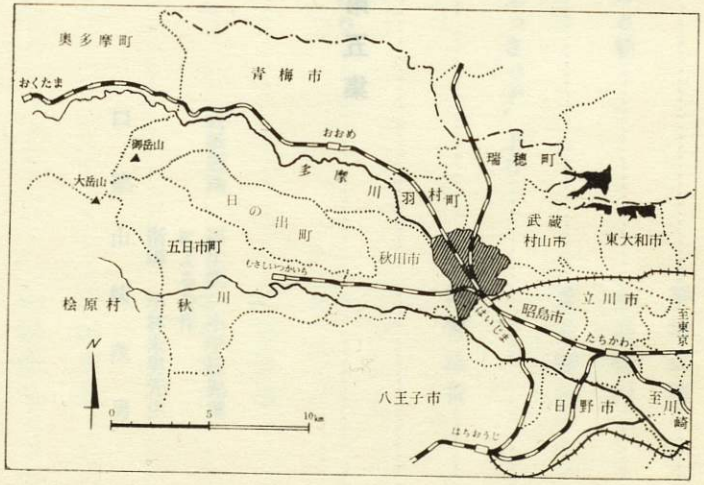
詩的な糸のつながり

吉　増　剛　造

ときおり福生の実家（熊野橋近く）に帰るとき、牛浜駅でおりるときが多いのだけれど、あのような駅を橋上駅とでもいうのでしょうか、あそこから眺める風景が好きなのです。たいてい夕暮どきで、まず夕暮どきの雲の様子が眼にうつり、奥多摩の山がみえるときには大嶽御嶽の特徴のある姿を眺めます。といっても、じっとたたずんで眺めるというのではなくて、歩きながら大嶽御嶽に手を振ってあいさつをするといった感じなのです。

東京にいるとなかなか山なみをみる機会がなくて、ときおり福生に帰って、牛浜駅の橋上にたつと大嶽御嶽がまじかにみえて、懐かしい気分が襲ってくるようです。どこかで読んだ記憶があるのですが、昔は江戸湾の舟の上から大嶽御嶽がみえて、この山々をめじるしにして航行したということでした。そんな感じもよくわかります。牛浜の橋上にいると……。

わたしが小学生の頃、そのころわたしの家は福生駅の東口近くだったのですが、一連の貨物列車暴走事件が起りました。早朝、ガアーンという凄い音がして駅に走ってみにいった記憶があり



都心から電車で一時間と少し、緑と清流の奥多摩や秋川渓谷へも近い。福生は都心と奥多摩をおりまぜたような住み良い町である。（中央斜線部分が福生市）

ます。（小作から貨車が流れてきて、福生で暴走がとまったのでしょうか。）なぜこんなことをおもいだしたのかといいますと、青梅線から中央線へ、そして東京湾へ鉄道の線路がゆるやかな傾斜でずっと下っていっていることが子供心にも鮮烈に記憶にきざみつけられているからなのでしょう。たとえば横田基地のガソリン車が一台静かに滑りだしたとすると、やがて猛烈なスピードで東京湾のほうへ疾走しはじめるわけです。

ですから牛浜駅の橋上にいて大嶽御嶽の山々を久しぶりにながめていると、そんな東京湾からの高低の具合とでもいうのでしょうか、地理感覚と福生の位置がわたしの頭のなかに鮮かに浮かびあがってくるのです。たとえばそれは福生の地名にもいえて、わたしは福生のこの地名が好きなのですが、加美、志茂、これはきっと多摩川ぞいの上（かみ）、下（しも）の美称なのでしょうが、そんなところにも鉄道の傾斜にそった流れがみえて（もちろんこちらの方が昔からあった町を流れる歴史の本流なのでしょうが）それがみえてくるのです。やはりこれも国鉄の広告で福生の地名の由来が「麻（あさ）」であることをみたのにつながってくるのですが、大昔の人々もこの土地で多摩川に麻布をさらしたりしていたのでしょう、いくつもの流れが眼前をよぎるようです。

わたしは福生に生れた福生っ子といえないかも知れません。というのは戦後すぐに父の故郷の疎開先の和歌山から移ってきて、終戦の年に小学校は福生第一に入ったのです。けれども少年期に焼きついた風土と福生の空気からは生涯逃れられぬようで、いわゆる「福生っ子」とはちがっ

ても変種の福生っ子とでもいえるのでしょう。

子供のときから福生駅の一カ所に書かれていた「友昇塚」の記述が奇妙に印象に残っています。「友昇塚」は森田殷史氏宅にあるということですが、いま手元に「福生町誌」（昭和三十五年刊）があるので一部分書きうつしますと、芭蕉直系第八代を襲いだという友昇は

その生涯を通じて娶らず、酒を愛し、旅を愛した。そして明治二十七年瓢然として行脚の草鞋を履くや、行雲流水と共に還らず、数奇な運命を辿ったという。……友昇の俳諧の道での弟子・北村透谷は明治二十六年十月自殺をとげている。その自殺がなんらかの影響を師、友昇に与え、それで、友昇も瓢然と旅にのぼり、そのあとを絶ったのではないかと考えられる。

「瓢然として」この言葉がとても子供心に印象に残ったのでしょう、いまこうして書きうつしつつ考えてみてもなぜか胸さわぎのするところです。ここに述べられている北村透谷について、何年か前わたし自身森田さんのお宅にうかがってお話を聞いたことがありました。といいますのは、なにか因縁のようなものがあったのでしょうか、この明治の天才詩人、改革家透谷にひかれて、わたしも透谷についての評論を書きだしていたからでした。わたしは立川高校を経て慶応の文科にゆき、その頃から詩を書きはじめていましたが、日本の近代詩の原点が透谷にあることに

気がついて、近頃になってしきりに読みなおしはじめていたのです。その微妙な出発点が福生駅の案内にあったとはいいきれませんが、不思議なつながりの糸を感じています。

つながりの糸といえば、わたしの子供時代よく多摩川で水遊びをしていました。多摩橋の下や渡船場がその場所でした。なかでも渡船場の印象が非常に強く、そこで泳ぎを覚えたことがわたしが詩を書く上でとても重要な意味を持ってきています。といってそれははっきりとした自覚としてあるのではありません。あそこに不思議な渡船場があって、仮橋のような橋がかかっていたなということがいつの日だったでしょう、突然おもいだされたのでした。むこうは草花、十二天、山の神などと小学校の低学年で遠足にゆくところがありました。多摩川に興味を持ちだして塩野半十郎さんの本を読んだりしたのですが、記憶のなかの風土というのですか、故郷の光景というのですか、それはわたしの場合それほど鮮明なものではありません。といってみえていないというのでもないのです。半透明とでもいうのでしょうか。半ばみえて半ばみえない不思議な風土として「福生」もわたしのなかにあるのでしょう。

それはたとえばこうした視覚の状態に似ています。いつだったでしょう。キャサリン台風かアイオン台風が襲ってきて、多摩橋も崩れるほどの大水が多摩川の川幅いっぱいに流れていたときのことです。濁流に一変した多摩川を眼前にして子供たちは茫然と立っていました。そのときわたしは岸からすこし川に入って泳いでみたのです。いつもの癖で水中で眼をひらいて……。すると水中にみえたもの、それは異様な光景でした。流れる泥水のなかで眼をひらいたのですから、みえるものとてありません。しかし、なにもみえないという驚きと眼の痛みがそれこそ痛烈にわたしの印象に残ったようです。それがもう一つの多摩川の姿だったのだとおもいます。

だからこれからもきっと「みえない福生」が形をかえ姿をかえてわたしの感覚を襲うということがあるのだとおもいます。「みえない福生」あるいは「幻の福生」と書いて、ああ、これは「福生」という名にふさわしいなと瞬間気がつきます。きっと、「出身地は？」と問われて、しきりに「幸福の福」と「生れる」です。それで「フッサ」と読んで……と説明しつづけてきた記憶の糸とつながっているのだとおもいます。わたしが詩を書くからなのでしょうか、この「フッサ」には不思議な響き、古代からの詩的な糸のつながりが感じられているのです。

詩人　吉増剛造氏のご両親が住まわれている福生のお宅からは、多摩川をはさんで、奥多摩の山なみから富士山が、いつも美しく眺められる。

三年前、その吉増氏に、「月刊・ふっさっ子へ書いてください。」と、あつかましくもご両親を通じてお願いした。まもなく、幸運にもこのような玉稿を頂戴できた。じつは、こんどの第一小学校卒業生の第二話のころ、吉増氏がその仲間として同校に通学されていたわけだ。あわよくばその座談会にも、と、声をかけさせていただいたが、その時は渡米されていた。

山崎　茂男

ホタルの光　いつまでも

山崎　茂男

はじめに

昭和二十年八月。日本は戦争に敗けた。

戦争のためになにも欲しがらず、一つの方向に歩かされた戦前。そして戦後は、おさえられてきたものから解き放され、自由は得たものの、きびしい耐乏生活が続いた。

この福生でも、人々の生き方は、それと変わることはなかった。いや、戦後の福生は、敗戦による生活の重荷を、かなりきびしく負わされてしまった。米軍基地の町となり、そして、生活にいくらかおちつきが見られたころからは、都市化という波にもまれた。

その中で、子どもたちの生き方も、はげしく変わった。大人と同じに、なにもかも不自由させられた戦後まもなく、基地のさわがしさにも、じっと耐えながら、どうやらひとなみの学校生活も過ごせた。やがて、テレビ、進学戦争のように、どこにいようと、いやおうなくかかわらされたものも多い。いまは、与えられ過ぎ、豊かさをもて余しているようにも見える、子どもたちだ。

子どもには〝子どもの歴史〟がある。その『ふっさっ子・戦後史』の一部を、このさい書き残

しておくことにした。これから、その時代別に、彼等にじかに語ってもらい、まずい文ながら、なんとかまとめてみたいと思う。

なにより、その当時のことを、直接その人たちから聞かせていただくことにした。

時代は、戦争の終わった昭和20年から35年まで。舞台は、福生第一小学校を中心にその近辺。そして、対象は小学校六年生当時に焦点をあてて進めてみた。つごうで、その話の会を四回に分けた。この分け方には、別に意味があったわけではない。が、戦後すぐのことで、なにもかも不足の中で過ごさせられた『耐乏生活』として、23年までの人たちにお願いした、それを第一話にした。そして、第四話まで聞かせていただいたところで、ひとまず福生の変動期が過ぎ去った、と感じたあたりでうちきった。

また、そこに出た話題に、特別つながりの深かった人たちに、それぞれの思い出を執筆していただいた。そして、当時の子どもたちの文集の中からも、その時代を反映しているものについて使わせていただいた。

表題の『ホタルの光・いつまでも』には、つぎのような意味をこめた。

○小学六年生の卒業式の日にうたった、あのけがれのない「蛍の光」の歌をいつまでも……

○〝ふっさっ子〟たちは、まばゆい金の光ではない。きよらかな自然に育つ、蛍の光だ……

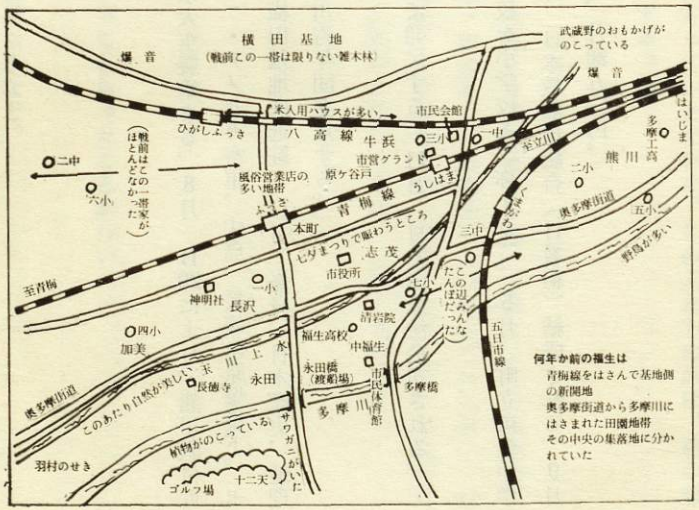
○いつまでも、蛍のとびかうふるさとであってほしい……

第一話　耐乏生活

昭和14年、福生の東北部にひろがっていた雑木林地帯が、陸軍航空関係の敷地として、接収された。終戦とともに、この施設は米軍におさえられ、横田基地となった。

その基地に続く地帯は畑地であり、段丘を一段下がると、青梅線沿いに住宅が点在していた。青梅線を越した福生駅前通りが、この町ただ一つの商店街であった。

さらに一段下がった多摩川沿いは、水田がひろがっていた。町はずれには、武蔵野のおもかげが濃い雑木林も風景美を添え、素朴な住民が生活していた。昭和20年の人口は約一万人で、世帯数は二千戸にちかかった。



おもなできごと

一九四五（昭和20）年

3月　硫黄島の日本軍全滅。米軍機による東京大空襲始まる。8月　B29により、熊川駅付近爆撃される。（8月2日、八王子市空襲される）・アメリカ空軍、広島、長崎に原爆投下。ポツダム宣言受諾、終戦の詔勅。9月　占領軍、横田基地に進駐。11月　修身、日本歴史、地理の授業停止。・福生青年団、続いて12月には熊川青年団発足する。

一九四六（昭和21）年

10月　福生、熊川青年団、合同福生青年団として発足する。11月　日本国憲法公布される。

一九四七（昭和22）年

4月　六・三・三・四制の新学制実施（国民学校を小学校と改称する）。5月　町立福生中学校開設する。・日本国憲法が施行される。6月　日本教職員組合（日教組）結成される。9月　福生第一小学校で母の会を結成する。給食開始、月額五〇円。

その『第一話』のために、過日、次の皆さんに寄っていただいた。この人たちの話は、戦中戦後の、耐乏そのままを生きてきた、痛ましい証言であった。

出席者（氏名はぜんぶ当時のままとした）

（福生第一国民学校昭和19年度卒業生）三枝チヨ、田村英一郎、中森ミス子、山崎政一（20年度）岸章子、窪田太子、原嶋卓也、細谷唯一、細渕米子（21年度）秋山京子、村野久子（福生第一小学校22年度）井梅高明、木村輝幸、清水良男、田村和子、中森信行

当時の生活の一端を知るために、次の質問をこの席の人にしてみた。（男・女6人ずつ）

手伝いは、水汲みと子守り

一、兄弟は何人ずつだった。

平均5、1人。最多9人、最少3人。

一、家族旅行につれていってもらったか。

全員が、一泊旅行どころか、日帰り旅行も、やってもらったことがない。

一、うちの手伝いは、どんなことをしたか。

男・水くみ、畑仕事、子守りは全員。ほかに風呂たきなど。

女・水くみは全員が。子守り、畑仕事、掃除がこれにつぐ。ほかに食事の手伝い。

一、子どものために、家の中に備えられていたものは。

勉強机（共用で）が10人。勉強部屋があった（共用で）が2人。ほかには記憶に残るものなし。

一、おけいこごとは何かしたか。

お習字が女子に1人だけ。他には何もなし。

（このころ、当校の前身の福生ソロバン会がはじまっていたが、まだ小学生の入会者はなかった。）

一、誕生祝はやってもらったか。

3人だけがやってもらったという。が、そのなかみは。—その日、うちであずきご飯をたいてくれた。母が、手打ちうどんをつくってくれた。父が、リヤカーに乗せて、八王子までつれてってくれた、というようなことだった。

一、学校の教科書のほかに、愛読書はあったか。

男・5人が少年クラブを。1人がノラクロを。

女・3人が少女クラブを。幼年クラブ、マンガ、家なき子、が1人ずつ。

一、家での親のよび方は。

14人が、おとうちゃん・おかあちゃん。1人が、おとうさん・おかあさん。1人が、おとっちゃん・おかあちゃん。

一、お店へ買物に入った時は。

男「売ってくれ」5人。「こんちは」1人。

女「売ってくれ」3人。「ちょうだいな」2人。「おくれ」1人。

一、「川へ魚とりにいきましょう」というのは。

男「川へようとりにいくべえ」が全員。

女「川へいくべえ」が5人。「かあへいかねえ」が1人。

【座談会】

ここから、前記の皆さんの座談会に入る。発言者名ははぶかしていただいたが、状況により、（　）内に発言者名を記した。司会と記録は山崎茂男である。

敗戦前後

司会　敗戦のころの、思い出話からお願いします。

○学校にいても、勉強なんてやんなかった。草むしりなんかさせられて。警戒警報のサイレンが鳴れば、授業なんかすぐやめて家へ帰った。防空頭巾をかぶって、帰る方向ごとに一列にならんで、急いで帰りました。

○家へ帰ってから、どこかの家に皆が寄って勉強したんです。上級生は下級生のを見てやったんです。決戦勉強とか、決戦クラスなんて言ってました。先生は自転車で、そういう家にまわってきて、ようすを見て帰りました。

○朝、登校するのに、グループをつくって並んでいった。カバンのほかに、防空頭巾をしょって木の名ふだをひもにつるして、それらをタスキにかけていった。木のふだには、親の名前も住所も書いてあったんです。

学校の門のところには、上級生が木銃をもって立っていました。その前を通るときは、兵隊さんのように歩調をとらされた。それから、校庭の西にあった奉安殿（天皇の写真のご真影や、教育勅語が納められていた建造物）に最敬礼して入ったものです。

○二宮金次郎の像があったけど、そのまわりの鎖なんか、みんな供出させられた。金属のものはどれもこれもだめ。戸障子のレールまでやられて、竹のレールになったもの。

○学校へ行くカバンの中に、茶つぼに入れた大豆を、非常食糧に持っていました。走ると、その豆がカバンの中でカチャカチャ音がしたんです。空襲で防空壕へ入った時、その豆を食うのが、楽しみでした。

○先生が授業中に、食える草のことを教えてくれて、野草つみに行ったりしたんです。

○農家では、そのころは庭にあったさつま床から、とこざつまがよく盗まれました。あれは、さ

つまの苗のかすだから、ふつうでは食べられるものではなかったんだ。あれをきりぼしにして、サツマダンゴにして食ったよ。

○どんぐりの実の供出もあったな。

○原ケ谷戸の方には、どんぐりが多かったよ。

○そのどんぐりの実を食って、腹をこわした先生がいたんだ。戦争中に代用教員できていた先生で、独身の人だった。その先生が、授業中にボリボリとどんぐりを食っていた。それでひどい腹くだしになっちゃって、いく日か授業を休んだだろ。

○桑の木にたかる、尺取虫もとりにいったな。

司会　この辺でも、ほんものの空襲があったんだね。

○今の大聖病院のわきに、高射砲陣地があったんです。米機が落ちた、なんていうと皆で見に行きました。P51をおっことした時は、米兵の捕虜がつかまったよ。敵機をおとした時は、大人にはふるまい酒が出て、子どもにも角砂糖をくれたんです。今の上等のチョコレートより、当時の角砂糖はもっと貴重品だったよ。

○熊川がやられた時のさわぎは、でかかったな。

○うちは、そこから近かった。すぐに防空壕に入れられて、おやじだけが見に行った。そしたら、焼夷弾がどんどん落ちてきて、すごかったらしいよ。おやじがもどってくると、「もう今夜

でさいごかもしれねえな。死ぬならみんな一緒だからかくごしておけ。」なんて言ったんで、俺たち兄弟はふるえていた。

○あの日は、福生では夏祭りが終わって「やっぱり神様のことだから、今日はアメリカもこねえな。」なんて言ってた。そのあとやられたんだ。八王子の方がばんばん燃えていた。

○わたしなんか、近所の人とリヤカーに荷物を積んで、薬師様の森の中へ逃げました。

○わたしの家は、加美の方の桑畑の中へ逃げました。

○焼夷弾が落ちている時、防空壕へ入っているのはいやでしたね。入っていて死んじゃうかもしれない、なんて思って。それより竹藪の中がいいなんて、そこへかくれたり、まごまごしていた。

○本当におっかなかったけど、いくらかおもしろ半分のところもあったな。

○艦載機がキュー、という音で飛んで行くところなんか見ていて、おっかねえのと、またこわいもの見たさで、防空壕の中からとび出したりした。

○どっちかっていうと、七・三でおもしろい方がかっていたかな。

○毎日、防空壕へ入んのが日課みたいなものだったから、あんまり敵機がとんでこねえと、なんかものたりねえような気分もあった。まあ、子どもだし、この辺はでかい爆弾なんか落ちなかったんで、のんきだった。

○艦載機は東京へ向いて行く時は、こわくなくて見ていられた。その帰りがおっかなかった。それがみんないっちゃったとなると、とび出していって薬きょうひろいをした。

○電波妨害に使ったスズみたいのが、キラキラ落ちてきて、あれを拾ってきて遊んだりしたね。

○空襲がひどくなってから、学校のクラスの人数がふえたな。

○俺たちのクラス（19年度）は男だけのクラスだったけど六十人だった。

○都内で焼けだされた人が、この辺へも逃げてきて、それで人数がふえたんだ。

○うちのしんせきの人が、その空襲でやられて逃げてきたのを見た時は、心臓が氷るようだったね。まさか、と思っていたのが、本当に黒くこげた荷物をかついでふらふらしながらやってきたんだもの。

司会　敗戦のラジオ放送は聞いたんですか。

○天皇陛下の放送を聞きましたよ。でも何を言ってんのか意味がわかんなかった。

○ラジオのある家も少なかったから、何軒かが集まって聞いたんです。町会で集まったところもあったけど。

○うちのあたりは、今里歯医者さんのところへ集まったんです。

○その放送聞いていた大人が、負けたらしいよ、なんて言っていた。

○そのうち、親や姉さんなんかが涙をこぼしてんのを見ていて、なんで泣くのかなと思っていた。

○その日は、すごく暑くてなあ。
○天皇陛下は神様だ、と教えられてきたから、神様が何か言っている、と思っていた。おそれおおいことだ、なんて気持があったんですよ。

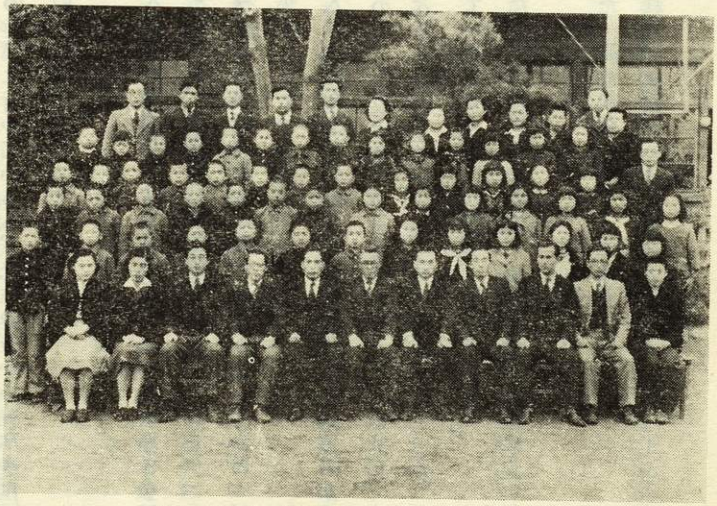
学校で

司会　戦後の学校のようすを話してください。
○戦争が終わったのが夏休み中のことで、そのあと、九月に学校に行きはじめた時のことは、なんにも覚えてないなあ。
○教科書に墨をぬらされただろう。天照大神とか、神武天皇とかが出てくるとぬらされた。「歴史の本の何頁をあけろう。何行目ぬれえー」なんて。
○教室の窓が割れていても、ガラスを入れてくれなかったから寒かったなあ。
○教室のならび順が、一週間おきに列が変わったんだよ。日の射しこむ暖かいところを交代に、ということだったんだ。廊下の方になった時は、寒かったなあ。天然の暖房しかなかったんだから。
○あのころの先生は、こわかったなあ。
○教員室なんかへの出入りは、やかましかったものだ。まず戸を開けたところで、「何々先生に

用事があって入ります。」と言って入り、先生のそばに行ってからも、先生の方から「なんだ」と言われないうちは、話しかけられなかったもの。
○まったく近よりがたかったなあ。
○それでも、先生にいたずらはしたな。教室の入口の戸を少し開けておいて、上へ黒板ふきをはさんでおく。うまくすると、先生の頭へストンと落ちて、大喜びしたものだ。
○その入口の廊下のところを、さざんかの実でみがきこんでおいたんだ。先生が急いでかけつけた時、すべってころんでスッテンコ、となればサイコーだったよ。
○教室でさわいだりしたバツで、バケツに水を入れたのを、両手にぶら下げて立たされるのがあった。あれはきつかったよ。それよりまいったのは、「女の前で立ってろ」ってやられたの。あれはみじめだったなあ。
○22年から、学校給食が始まったな。給食なんていうとしゃれてんけど、油汁だったな。
【牛乳の中から脂肪をひきぬいて乾燥粉末にした脱脂ミルクのことで、少年の骨格形成に良いといわれていた。（編者注）】
○きれの袋におわんを入れて学校へ持っていった。肝油が配られたこともあったよ。
○福生の子供は、ことばづかいが悪いっていわれて、標語で『ことばづかいをなおしましょう』というのがあったでしょう。

司会　山崎さんは、終戦の年に都立二中（現都立立川高等学校）の生徒だったんですね。

○そうですね。20年の4月から通学したんです。当時の進学者はクラスの一割か二割ぐらいの人でした。二中のほかには、八王子の二商、青梅の農林、私立では立川の昭和第一工業へ進んだのがほとんどでした。学校へ通うのに、いつもゲートルを巻いて兵隊さんみたいでした。学校にいて、警戒警報が鳴ると、帰されたんです。空襲になっちゃうと、学校の防空壕にもぐったり、日野橋の方へ逃げたりしました。戦争が終わって九月に学校へ行った時のことは、どうも記憶がはっきりしないんです。新学期で学校へ行って、まもなく進駐軍が体育館を使うようになったんですがわずかの期間だったと思います。



昭和23年度　福生第一小学校卒業生と職員

遊び

司会　家のまわりの遊び方は、どんなことをしたんですか。

○どこの家でも、俺たちが学校から帰るのを待ってて、子守りや水汲みなど手伝わされた。夕方になると、その手伝いをさぼるために、そっと家をぬけ出すんです。そして、なんとなく皆が集まる所があって、そこへ行く。話しあったように皆がくるんです。それから、まずカクレンボになる。

○女の子は、子守りなんかしながら遊びましたね。

○皆が子守りをしているので、自分だけしていないのはカッコ悪くて、よその子をおぶってやったりしたものです。

○学校が休みの日は、男の子は兵隊ごっこだった。

○自転車に乗って遊んだりしたけど、子供用の自転車なんてなかったね。女の子だって、大人の自転車に三角乗りをしたんです。

○学校の休み時間や、家のまわりでは、石けりをやったものです。

○石を、つばきの実でみがいたりして、すべりをよくしたんですね。

○地面に釘をとおす遊びがあったっけ。

○ベエゴマのギャンブルもはやったなあ。
○あれをやってて先生にみつかっちゃって、全部をとりあげられたことがあったけど、〝ひとしんしょう〟をすったような気がしたなあ。
○ギャンブルといえば、ビー玉やメンコでもやっただろ。
○ハサミ将棋や軍人将棋もやっただろ。
○雪が降ると、雀とりのパッチをかけた。朝早くそれを見に行って、人のかけたのから雀を横取りしちゃったりしました。
○竹馬だって、ふじづるを自分たちでとってきて、つくったな。
○ゴム銃も自分でつくったよ。枝ぶりのよいのを探してな。
○五寸釘を線路において、電車にひかせるなんて悪いこともやったよな。
○うちの弟は、線路のポイントを動かしてしまって、駅の人にひどくおこられたことがあった。
○原ケ谷戸は雑木林が近くにあったので、よい遊び場でした。そこの木を切って皮をむいて、刀を作ったんです。手で持つところだけ木の皮を残して、それを腰にさして遊びました。
○桜の木だと、うまくそっくりぬけたな。
○竹で鉄砲をつくって、〝進めえ〟なんてね。
○戦争のまねばかりで、チャンバラはやらなかったな。

自　然

司会　あのころ、豊坂のところにサワガニがいっぱいいたよね。
○いたいた。みんなでとりに行きましたよ。
○女の子も行ったわ、女どうしで。上級生がひっぱってったのね。
司会　女のガキ大将かな。
○女の中にも、そういうリーダー格がいました。悪くいえば〝オテンバサン〟でしょう。
○あのころは、男は男、女は女だけで遊んだもの。いっしょに遊ぶと、「男と女とマーメンジ」っていじめられたんだ。
○サワガニは、クルマボリにもいたですよ。それに、縞屋の滝（第七小学校裏のガケ地にある）のところにもいた。
○加美の上水わきの、いま加藤さんの別荘のある、あのあたりもいたね。
○豊坂のところは、まだいるよ。縞屋の滝にもいるらしいぞ。
○水窪の前にもいたよ。和田さんの家の下の方だった。
○クルマボリでは、カタッケがとれただろ。黒っぽいやつで、あれは貝の一種だっただろうな。あのクルマボリはイモリがうんといて、足にたかられると血を吸われたな。

○長沢の神明社の湧水はきれいだったな。
○神明社の道にそって清水が流れていたでしょ。あそこには、ハヤやウナギ、それにドジョウもたくさんいたですよ。
○神社へお参りに行った時は、あの清水の湧き出ているところで手を洗い口をすすいで、それから神様の前に行ったんだ。
司会　蛍はどうだったですか。
○玉川上水のところ、たんぼの方など、どこにもいっぱいいたですよ。
○ホウキをかついでウチワをもって、みんなで行ったね。あのころは、本町のあたりでも気まぐれなやつが飛んできましたよ。寝る時に、カヤの中へホタルを飛ばしておいたりしました。
○夏休みになると、セミとりをよくやったよ。それと多摩川へ毎日泳ぎに行きました。柳山や永田クラブの下が深くて泳ぎやすかったんです。
○多摩橋から二百メートルぐらい下のところも深かったよ。
○わたしは、浮袋のかわりに、布の米袋をもって行きました。
○小学生は、みんなパンツなんかはかずにフリキンで泳いでいましたね。
○中学生でもはかないのがいたよ。いっちょうふんどしが何人かいたでしょ。
○女の子も、パンツだけで泳いでましたね。

○そのころ、玉川上水で泳いだものですよ。加美の方から牛浜のところまで流されていくんですが、それを監視の人にみつかるとおこられた。私もその現場をみつかって追いかけられ、水窪の山の中へ逃げこんだことがあります。
○長沢や永田の道は、草ぼうぼうのところが多くて、うっかり歩いているとヘビに出あったな。
○うちのまわりにもヘビはうんといたよ。小さい時からだからなれちゃってて、ヘビをポケットに入れて遊んだりしていました。でもマムシはこわかった。マムシの毒の出るところをうまくつかめば、なんでもなかったんですがね。
○狐の嫁入り、なんて見ましたか。
○十二天の方で、それらしいのを見たことがあります。チカチカ光っていたのを見たんです。
○お不動様のあたり（福生駅東口近くにあった）には、そのころ狐がいたんですよ。麦畑の中へすっと入ってゆくのを見ましたね。あの辺、家が何軒もなかったですから。
司会　ひとだま、というのは？。
○うちの近くの、安藤さんのあたりで見ましたね。赤や青の光ったのが、ふらふら動いていたんです。
○牛浜の婦人生活館のあたりで見ました。背すじがぞーっとしました。
○屠殺場の裏のところに、牛や馬の骨をほうってある所があって、あそこいらではよくとんだで

すよ。
○まったく今の状況とはちがいますからね。私が中学へ通っていた時、うちで（大聖病院裏）朝飯を食ってて、電車に気をつけているんです。電車が羽村の駅を出るのにピリピリってやっているのが、ここらまで聞こえたですよ。駅のこちら側には家が何軒もなかったし、朝は静かなものでしたから。
○車だって、バスは木炭バスでうしろへストーブみたいのをくっつけて走っていましたね。坂道を登るときなんか、かけていけば追いつけたもの。

年中行事

司会　当時の一年間を、おってみてください。
○元旦には学校へ式に行ったよ。
○二日は大師様だよ。
○大師様へ行くと、あのころ水みたいな甘酒を売っていたのを飲みましたね。ほんものの甘酒なんて飲めなかったからね。
○サクランボっていう菓子があったでしょ。
○初午の時は、前の晩に旗を書いて、その日に稲荷様へ持って行った。そうすると、子供にごち

そうしてくれたんです。
○どこでも食うものに不自由していた時だけど、大人が皆でもちよってくれたんだな。子供のことだからと、無理してくれたんだよ。
○お不動様のところのお稲荷さんも、近所の子を集めてみかんなんかくれたですよ。
○ひな祭りというのは、あまり記憶がないわね。友だちをよんで賑やかにやるような習慣はなかったものね。
○七夕様には学校であれこれ書いて、皆で竹の枝につるしたね。
○あのころはお盆様は楽しかった。こづかいがいくらかでももらえて、かんたん服なんかのおしきせが出てよ。そのまえには、お盆にそれをつくってやるからなんて言われて働かされた。
○お盆の十五日は瑞穂のせんげんさまでよ、すもも祭りとも言っただろ。行きは八高線へ乗って、帰りは歩ったものですよ。
○夏休みに入ると、地元のお祭りのことばっかりだったな。
○九月には〝なかのくんち〟って、長沢のお祭りだっただろ。はやしや、おかぐらがあってな。
○あのころは、あちこちで素人演芸会というのがさかんだったぞ。
司会　七・五・三や帯ときはどうだったですか。
○かんたんなものだったけどやってもらったな。

○クリスマスなんてものは、まるっきり知らなかった。
○暮れには、足袋や下駄を買ってもらったね。ふだんは上の者のおさがりばかりだったけど、盆と暮れには新しいものを買ってもらった。だから暮れから正月にかけては嬉しかったなあ。

社会と子ども

司会　そのころ目立ったガキ大将というとだれですか。
○あちこちにいたけど、うちの方のなんかひどいものだった。命令には絶対服従でね。でも、ここで名前を出すのはさしさわりがあるなあ。
司会　かみなりおやじは、健在でしたか。
○親爺にはよくおこられましたよ。こわかったものです。
○俺がいちばんいやだったのは、おこられて土蔵の中へ入れられることだったな。入れられて、カギの音がガチャーンとすると、泣いたってさわいだってどうしようもねえだから。腹いせに、中で小便しちゃったりしたけど。
○うちはカジ屋だったんです。いつもその手伝いをやらされました。こちらのやり方が悪いとハンマーが飛んできたですよ。「鉄はあついうちに打たなきゃあー。」ってどなりとばされて。
○うちは農家で、蚕が始まるとわたしたちの寝るところがないんですよ。子どもなんて犬ころみ

いなものでした。〝ひきりひろい〟ってやらされました。桑の葉をつみにいって、桑の実を食べて遊んでばかりいました。
司会　皆さん、子どもだけで、電車に乗って出かけたことがありましたか。
○あまり記憶がないですね。男の子は立川までぐらいは出かけたんでしょう。
司会　おけいこごとなんかは。
○なにもなかったですね。戦争前から福生にはそういう所はなかったらしいですね。わたしたちのころ、女子は何人かが、東青梅までお習字に通った人がいます。もと、福生の小学校の先生だった人が、先生をやめてから自宅で教えてくれたんです。
司会　家での勉強はどんなふうでしたか。
○家でやった者なんて、いなかったでしょう。勉強どころじゃあなかったもの。
司会　米軍基地の影響はすぐ出ましたか。
○まえの原ケ谷戸の人たちの話のようなことがありましたが、一般の者にはまだ関係はなかったんじゃないですか。日本人の特殊な女の人たちのことでは少し影響があったな。
○たしかに、女に部屋貸ししていたまわりでは困ったこともありますが、あのころ、子どもたちにとって、米兵というのは自分たちと人種が違うんだから、と思っていましたから。今の子供たちがテレビや雑誌で刺激を受けるのとは、違うものだったと思います。

○ラジオで『鐘の鳴る丘』はよく聞いたね。戦争中は、〝警戒警報発令〟がはやった。

のびのび遊べました

司会　六年生ぐらいは食べたいさかり、遊びたいさかりだっただろ。そのころ思うように食えなかった。なにもかも無いものづくめだった。思えば皆さんのころは気の毒な時代だったね。

○いや、ちがいますよ。なにより自然に恵まれていましたよ。どこへいっても、その中でのびのび遊べました。今の子の方がかわいそうですよ。

原げえと（原ケ谷戸）

この時代、福生の中でもより福生色の濃かったような、原ケ谷戸地区について、あらためて話を聞かせていただいた。出席者は、細谷唯一（20年度卒業生）山崎政一（19年度）と、笹本巳代治（17年度）原島定雄（16年度）の人たちである。

司会　この四人では、まんなかの巳代治さんのころで話を進めてみてください。

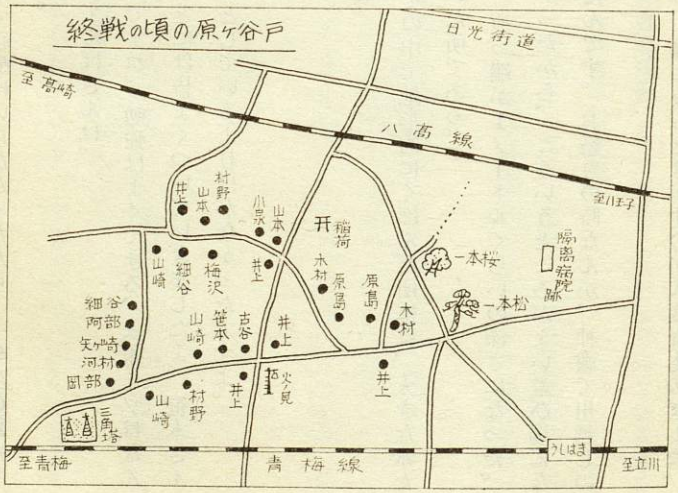
山崎　俺が、このころ（終戦のころ）の原ケ谷戸、福生流にいえば〝原げえと〟の戸数を調べてみたんです。二十六軒ですね。この中で、月給とりは二軒だけ、あとはみんな農家だったな。

笹本　小学校へ通っていた子供の人数はね、俺が高等科二年の時は一年生まで全部で、男が二十五人です。女では、井上フミちゃん、ハマちゃんにミサちゃん……で十四人だったな。これが原ケ谷戸の学童数でした。

原島　学校へいくのに、皆で誘いあって、そして固まって行くんです。しぜんに集団登校という形になっていました。

笹本　あのころは停車場（本町の地区名）だって現在の銀座通りのサクラ屋の四ツ角までぐらい家が並んでいたが、それからこっちには家がなかったもの。

山崎　登校の時は固まって行ったけど、帰りは道くさ食いながらだったね。道っぱたの、いったんどりや野苺をつんだり、桑畑へ入ってどどめ（桑の実）をとって食ったナ。



細谷　家の無い淋しい通りでも、車だとか誘拐なんて心配はいらなかったから、一年生の親だって、子供について学校までなんて人はいなかったな。

司会　やっぱりガキ大将はいたかね。それから、おてんばさんは。

山崎　目の前の笹本さんが、俺たちにはこわかったですね。勉強はよくできる、スポーツはなんでもこい、という人だったから、笹本さんの言うことには皆よくついていきましたよ。笹本さんにおこられてしまうと、家へ帰って一人でしょぼんとしているよりほかなかったですよ。

司会　そして、遊び方は。

笹本　皆でいつも遊んでたけど、女は別だったな。

原島　俺たちには、池っ端がいちばんなつかしいな。

（原ケ谷戸は昔から湧水が多かった。そして、その中で地形的にくぼんだ所には、大きな水たまりができた。その一つが、池っ端とよばれていた所である。）

梅雨どきや台風のあとは、野水がどんどん出て、池っ端が1メートルぐらいの深さになった。ここらは多摩川に遠くて、あまり水あびに行かなかったから、こういうところがよい遊び場になって、泳いだり、げんごろうとりをしたりで遊んだんです。お祭りの時なんか、神輿で川越しのまねをしたりしたんだ。

笹本　カクレンボだって、原ケ谷戸中でやったから、鬼になるとさがすのが大変なものでした。

山崎　ここへは、ほかの地区の子が遊びにくることも少なかった。だから孤立していた感じだったな。牛浜や中福生とは近かったので、わりと同族意識があったですよ。だから、皆で少し遠くへ遊びに行ったという所は、たんぼの方のクルマぼりが多かったな。

原島　チンチロリンや鈴虫とりもよくやったぞ。がんばってうんととると、上級生にとりあげられちゃってな。みんなで栗林へ入って虫を探していたら、栗泥棒にまちがえられて、追いかけられたことがあった。

山崎　今の基地の中の方に、養狐園があって、そのまわりまで戦争ごっこに行きました。

原島　毎年の春と秋に稲荷様へ集まって、おこもりというのをやっただろ。みんなの家でごちそうをもちよって、大人も子供も集まるんです。そこにたき火をたいて、そばで年寄りが念仏をとなえた。そのあと、みんなでごちそうを食べたんです。

山崎　秋になると、柿の実の袋かけを頼まれてやっただろ。

細谷　尺取虫を取って、小づかいかせぎもしたよ。

笹本　あのころは、ここの地区で井戸が（かぞえて）十三カ所あったんです。だいたい二軒に一つだったな。それで風呂も二、三軒が交代でもらい湯をしていたんです。

細谷　行水をよくしたよ。タライに水を入れて、そこへ桃の木のはっぱも入れて、アセモの薬だなんて入らせられたんだよ。

笹本　どこの家でも蚕をやっていたから、子供の手伝いも、桑つみなどの蚕のことが多かったんです。あとは麦ふみ、茶つみとか、子守りはいつもやらされました。

細谷　お祭りのあと、おさい銭のわけまえをもらって、停車場へ行ったな。当時は親から小づかいなんてもらえなかったから、子供がお金を手にできたのはこんな時だけだった。模型飛行機がはやって、立川の三角堂という店まで買いに行ったこともありました。

司会　地元で買物しなかったですか。

山崎　原ケ谷戸には、お店というものはなかったんです。

（この地区での開店第1号は、昭和24年に古谷新蔵さんが始めたお店である。）

司会　基地に一番近いところだったけど、そこらの関係はどうでしたか。

原島　戦争中に、今の第三小学校の辺がハケになっていて、そのハケを掘って日本軍の戦闘機が三、四機かくしてあったんです。戦後はその飛行機が、けっこう子供の遊び場になっていたんです。その穴のあとから良い砂利が出たので、米軍がそこを掘って基地へ砂利をはこんだ。そこへ俺たちが遊びに行くと米兵がガムなどくれました。度胸のよい奴は、そのトラックへ乗せてもらって基地の中まで行ったんだ。そしてチョコレートなどたくさんもらってきた。

（注・こうしてハケをけずった跡地に、第三小学校や町営グランドができた。）

司会　爆音などの被害は？。

笹本　はじめは戦闘機が主だったようでわりと静かだったんです。それと、滑走路の関係でここらは爆音はわりと聞こえなかったんです。朝鮮戦争のころからうるさくなったんでしょう。

細谷　基地づくりで労務者の飯場ができて、それはこわかった感じでした。間組・浅沼組・株木組と三つの飯場が近くにあった。

原島　22年ごろから、米軍人相手の女がポツポツ入ってきて、農家で蚕室を改造して貸部屋にするのが出てきた。

細谷　こういう女が米軍人から買った品物を、ブローカーの男たちと、雑木林にかくれて取引したんです。それがMP（米軍憲兵）に見つかるとピストルの音でおどされた。女やブローカーは品物を放り出して逃げちゃうんだ。そのあとへすぐかけつけると、タバコやカンヅメなどちらばって落ちていた。みんながそれを知って、ピストルが鳴るとそこらへかけつけて拾ったりした。

それとね、米兵が菓子やタバコを持って物々交換にきたね。あのころは、どこの家でも戸にカギなどつけてなかった。それで米兵はだまって戸を開けて入ってきちゃう。こわいから着物など出すとそれらととりかえて帰るんです。でもこわかったなあ。

山崎　うちでは二階がわりと広かった。ある時、MPが二階へどかどかと上った。そしてすぐひきあげたけど皆でふるえていた。女に部屋を貸しているのではないかと疑われたんだと思うね。

こうした耐乏の生活の中にも、若者と子どもたちとの、こんな交流もあった。

加美子ども会と福生児童合唱団

大野貞次氏談

はじめ、加美子ども会をつくった。21年のことで、ぼくが一九才だった。浅見さん、横田さんに田村さんなどが、一緒になって手伝ってくれた。会員の子どもたちは四〇名ぐらいだったと思います。幻燈会や紙芝居をやってみせたり、勉強を教えあったりしました。夏休みには、永田クラブで合宿して、すぐ下の多摩川で水泳をしたり、宿題を見てやったんです。

ところが、こういうことの中で、どうもこの子ども会に性が合わない子もいた。そんな時に、福生一小の先生の金井清さんが、子どもたちに歌の指導をはじめました。こちらの子ども会から、その歌の会へ何人かがうつって行ったんです。その子たちは、どっちかといえば、学校で金井さんのオキ（お気に入り）の子たちだよと、やっかんでいた子もいました。そして、子ども会へも入らないが、金井さんのグループにもなれず、どちらにも反発したように、かってに遊びまわっていた子も多かったんです。

金井先生が指導していたグループは、その後、福生児童合唱団となりました。三〇人ぐらいの

会員だったろう。そのころ、音羽ゆりかご会とか、東京児童合唱団が有名でした。この福生合唱団もその人たちと一緒に舞台にあがったこともありました。

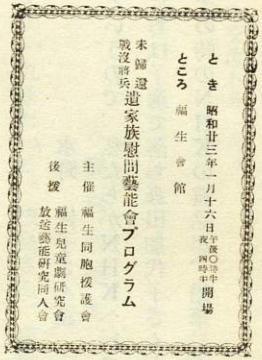
そういう時に、金井さんたちの提案があってね。この町にも、こんどの戦争で、戦死したり、まだ戦地から帰ってこられない人たちがいる。その家族の人たちを慰める芸能会をやろう、という話だったんだ。すぐに賛成しました。この会では、入場料をいただいて、その収益はぜんぶをそれらの家族にさしあげたいということだった。この芸能会は成功しました。この日の出演者には、童謡の川田孝子、のど自慢で有名なピアノの天池真佐雄という人も特別出演していました。

けれども間もなく、この合唱団員たちが小学校を卒業となった。金井さんも、都内へ転勤となってしまい、それでわずかの寿命で解散してしまったんです。私の方の加美子ども会も、私自身の進学のことなどで、それから間もなく終わりにしました。

水野民子さん談

NHKのど自慢が、ラジオで放送される。それに出るというので、私たちがNHKへ行きました。合唱団の中から数人が行ったと思います。しかし私たちは予選で落ち森田加代子さんだけが本番へ出ました。そして、鐘二つの合格だったんです。その時のNHKの賞品が、鉛筆二本だったそうです。23年のことです。

子どもたちと、うしろ右が大野さん、左が金井さん



とき　昭和廿三年一月十六日夜（午後〇時半）開場
ところ　福生會館
未歸還戦没將兵遺家族慰問藝能會プログラム
主催　福生同胞援護會
後援　福生兒童劇研究會
放送藝能研究同人會

吉川五代子さん談

わたしが小学校五年生のとき、NHKののど自慢大会が五日市へきました。そして私が『見てござる』を歌って、鐘が鳴ったんです。こういう入賞者に、ピアノで有名な天池真佐雄さんや、安西愛子さんたちからよびかけがあって、合唱団が結成されました。天池さんが伴奏で、安西さんが司会でした。五日市や吉祥寺、三鷹などの舞台へ出ました。でも、私も小学校卒業とともに、この会をやめてしまいました。

戦争中に、福生の縁故をたよって、都内から福生へ越してきた家族も多かった。その人たちの中には、とりわけきびしい耐乏生活者がいた。

疎開者

福生市　無名氏

うちでは、戦争中、東京が空襲されるようになってしまって東京にいられなくなり、福生の親もとをたよって、逃げてきたんです。その、戦中から戦後のことは、苦しい思い出ばかりです。いちばんつらかったことといえば、食べるものさがしだったでしょう。食べざかりの子が四人もいましたからよけいでした。

終戦後、大豆が配給になって、ごはんのかわりに大豆となり、お茶をがぶがぶ飲みながら食べました。ふつう米のごはんの中には、さつまいも・こうりゃん・人参・ごぼう、食べられるものはなんでも入れて食べました。小麦の焼けこげたのを、分けてもらって食べたのなど、ごちそうでした、空襲でやられたものでしょう。フスマやヌカを焼餅にして食べた時は、じゃがいもをすって、それをつなぎにしたのです。いったんどり・せり・よもぎ・しいの実・それから名を知らない草を食べました。前に住んでいた都内の家のあとに草が生えていて、それが食べられる草だったので、何回かそこまで取りに行きました。

リュックサックをしょって、羽村の方の農家へ買出しにも行きました。お金のほかに、生地など持って行かないと、分けてもらえませんでした。床ざつまとか、じゃがいもの芽の出たカスのようなものも買いました。食べてもカスカスで味はありませんでした。

そのうちに、進駐軍からの放出物資で、お米のかわりに砂糖が配給になりました。その砂糖は喫茶店に売って、ほかの食べものと代えました。バターやベーコンが配給になったときは、食べ方がわからなかったものです。燃料にする薪なども、基地の方の雑木林へ拾いに行きました。帰りは、二宮金次郎のようなかっこうで、薪をしょってきました。

自転車に荷を積んで、畑道を走っていた時、おまわりさんにつかまりました。自転車の鑑札が都内にいた時のものだったので、うたがわれてしまったのです。

この家のまわりは、土のところはみんな掘りかえして、大豆やこうりゃん、とうもろこしなどを、わずかですが作りました。

学校に通う長男が、こちらの子たちとなかなかなじめず、毎日のように泣かされていました。「売ってくれ」というような、福生式のことばづかいでないからと、いじめられたようでした。女の子の方も、友だちによばれて「ハイ」というのが、やはりいじめられた原因のようでした。

でも、こうして福生の土地に長くお世話になると、もうすっかり福生の住人です。福生が、どこの町よりも、住みよい、気持よい町だとわかってきました。

福生にきて、こんな経験をもたれた方もいたのです。

卒業式に出席して

杉　美津子

私どもが、疎開先の神奈川県足柄から福生へ移ってまいりましたのが、終戦の年の十二月、お正月にあと幾日もないという時でした。お餅も親類からおすそわけという、そんな状況の中で年が明けました。子供達は空襲におびえることもなくなり、食糧の乏しさも意に介せず、元気に三学期から第一小学校の新入生の生活をはじめました。

敗戦後の基地の町ということで、社会環境は決して良いものではありませんでしたが、乏しさの中で、親子がたがいに労りあい寄り添って暮らしました。一年はわけなく過ぎ、いよいよ長男の卒業期を迎えました。お友達のお母さんともご相談し、卒業式には出席することにしました。あちこちと持ち運ばれ、くたびれた紋付の羽織を一着におよび、式場に入ったのは良かったのですが、父兄の出席は私どもとあと一人のお母さんと三人だけ。私どもは最前列の来賓席に案内され恐縮やら気まり悪いやら。型通りに式は進行しましたが、予期せぬ戦争の傷痕、敗戦をくぐりぬけ、無事六年の課程を了え卒業を迎えた吾が子の姿に、三人三様の感慨が胸を熱くしました。「仰げば尊し」の歌が式場を流れると、不覚にも涙を流してしまいました。

式後、校長先生はじめ諸先生とお茶を戴きましたが、卒業式に父兄の出席は、私どもが初めてであったようで、担任の田中先生は殊のほか喜こんでくださり、これを機に、ぜひ卒業式に父兄の出席もお願いしたいと申されました。このようなことで、私どもは卒業式父兄出席の、草分けになったようです。

子供達は、新しい土地という珍しさもあって、学校が終わるのを待ちきれぬように、多摩川での魚釣り、野山をかけまわり、自然の中で伸々と生活をしたようです。「こんな花が咲いていたよ」と採ってきてくれた片栗の花が、毎年吾が家の庭で咲きます。

板ぎれを集めコイルを巻き、時間をかけて部品を探し、やっと完成した砿石ラジオに、ぎらぎら目を輝かせていたのも、ついこの間のように思えます。ボディはボール紙、部品の車輪やレール、トランス等は、基地の新聞配りをして買い整え、六畳の部屋に敷きつめたレールの上を、何十分の一かの省線電車が走り始めた時は、親子で喜び合いました。テレビはもちろん、プラモデルなどという、組立てれば間にあうようなもののなかった当時、子供は子供なりの楽しみを、創意工夫していたようです。お金さえあれば完成したものが手に入る現在、子供達は働いて得るお金の尊さも、物を創り出す喜びも知らないのではないか。ただただお金に執着し、お年玉で万の単位のカメラや電算機を買い求める。こんな良き時代の子供達に、物質文明の崩壊が、少しずつしのび寄っているように思えるのは、老人の杞憂でしょうか。

〝ふっさっ子〟入団記

清水希益

〝ふっさっ子〟になる

太平洋戦争が終ってからしばらくたった、昭和二十年九月十八日、私は西多摩郡福生第一国民学校初等科五年一組に転入学した。日付を覚えていたわけではない。古い資料の中にあった通信簿で知ったのである。

その日、私たち一家五人は疎開先の埼玉県から福生町本町に引越して来て、菓子屋を営んでいた祖父の家に間借りした。近くに飛行場があることが子ども心に物珍しく思われた。数ケ月して、川向こうの草花に移り住み、私は渡船場の橋を通り永田の坂道をのぼって学校へ通った。

学校のこと

五・六年のときの勉強のことは、ほとんど忘れてしまったが、幸いここに通信簿（葉書二枚分のガリ版印刷）がある。参考までに優良可で示される学業成績表を写して置こう。

武道・裁縫・家事・農業といった科目には成績が記入されていない。修身・国史・地理には書いてある。しかし、六年生の通信簿の修身の欄は空白なので廃止されたのであろう。ローマ字を六年で習ったのは、福生の土地柄か。ＡＢＣに初めて触れ、夢中でローマ字の日記を書いたことを想い出す。

先生のこと

当時の校長先生は浜中雄一先生。受持は田中貞雄先生（昨年福生第二中学校長をご勇退された）で、男子ばかりの学級であった。すらりと背が高く端正なお顔立ちの田中先生は、時に厳しく叱ることもあったが、いつもは優しく皆んな懐いていた。印象に残っているのは、算数の居残り勉強、進学をめぐっての相談、正月、五・六人の友だちと歩いて箱根ケ崎のお宅へ行き、カルタ取りをしたことなどである。

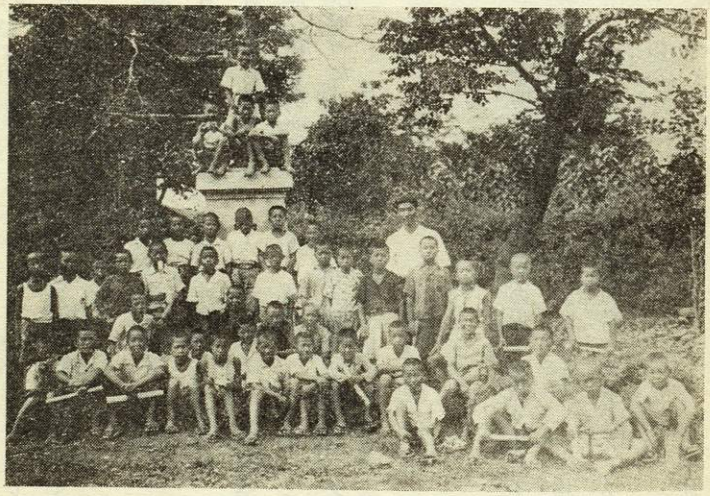
男女組を受け持たれた田島定雄先生は、姿勢正しく、大きな明るい声をしておられた。岩下伴蔵先生が、放課後、誰もいない校庭で黙々とハンマー投げの練習をされていたのを想い出すが、

その頃のことであったろうか。

戦後の新しい教育がまさに始まろうとする時期、福生第一国民学校は若い先生を迎え、活気で満ちあふれていたのである。

友だちのことなど

六年生の夏。一組の皆んなで写真を撮った。総勢、先生を入れて五十五名。場所は、校庭の一角で、二宮金次郎の銅像が立っていたところである。みんな丸坊主。半そで開きんシャツの者もいれば、ランニングの者もいる。ズック靴は数名、残りは下駄履きである。見栄を張る余裕などなかったのであろう。金次郎の銅像は戦争に供出されてなく、四名の腕白な友だちが代りに立ち登り、おどけて見せている光景がほほえましい。



6年1組55名　田中先生と

子供はいつの間にか遊び仲間を作るものであるが、当時の私たちは東京などよそから来た者と、土地の者とに分かれて遊ぶ傾向はなかったろうか。別にケンカはしないが、あだなを呼ばれて始めは嫌になったことはある。

先生の目を盗んでは、私たちはよく二階の階段の手すりに馬乗りになって一階まで滑り降りた。都心の歴史の古い小学校では、今は、手すりの各所に板を張って滑り止めがしてあるが。寒いときは、廊下で押しくらまんじゅうをした。外に出るときには、六人ぐらいでチームを組み、相手と馬乗りをし、ジャンケンで勝てば何回も飛び箱を飛ぶようにして、高くジャンプをして、数珠つなぎになった友だちの背中にドシンと飛び乗った。下の者は相手が全部乗り終わり、ジャンケンに勝つまで、じっと耐えるのだった。

楽しかった遊び

夏の多摩川は、プールのない当時にあって唯一の泳ぎ場である。渡船場の近くが深く流れも速かった。八王子に住んでいた頃から泳ぎが好きで、「六尺（約一八二センチ）ふんどし」を格好よく締めるのに気をつかった。急流をぬって対岸に泳ぎ着くには、勇気と気合いが必要だ。大水のときも泳ぎに行ったのは挑戦するのが面白かったのだろう。

秋から冬になると、ほおじろなどの鳥を取りに、パッチをかけに野原に出掛けた。いまの福生

二中あたりは、うっそうとした繁みで、小鳥が群がって飛んでいる。あの木の下で何か食べているな。そこへ仕掛けて置こう。直径三〇センチぐらいの半円のパッチに稲や粟の穂をつけ、ワクを草などで隠して、翌日を待つ。夕方かけて、翌朝見に行ったただろうか。雪の日もある。こんな努力にもかかわらず、小鳥が網にかかっていたという記憶はない。

近ごろ小学四年生の息子が、模型飛行機を二台作って喜んでいる。部品のヒゴは、寸法通りに曲げられていたりして、ロウソクを使う必要もない。プラモデルとさして変らないな、と思った。私たちのころもよく作った。しかし、ヒゴ、角棒、アルミ管など、みんな素材のままである。設計図に合わせて、曲げたり切断したりした。ロウソクの火にかざし、息をのんでヒゴを曲げるのであるが、いびつになったり、途中で折れてしまい、小学校の近くのお店に部品を買いに行ったものである。グライダーが安くて簡単に作れるので、気に入っていた。

日々の暮し

父の話によれば、金属関係の仕事は、マッカーサー元帥の命令により禁ぜられ、国民は一人五千円以上は持ってはいけないとされていたとか。円の封鎖である。毎日の食物は配給で、時には主食として砂糖ばかり十日分も支給されたり、カンパンを五・六日も配給を受けたこともあったようである。野山の草類で食べられる物は、みんな採り尽され、採りに行ってもなかったという

のは胸を打つ。しかし、私の通学用のカバンが実は、終戦まで勤めていた日本無線の相撲部で使っていた父のふんどしで作られたものである、と聞いたときは、苦労話にしても、一寸嫌な感じがしないでもない。

子どもたちへ

昔のことなど、めったに話すことはないが、自分の子どもが食べ残しなどをすると、つい「お父さんの子どものときは……。」と小言をいってしまう。貴重な経験を少しは伝えて置いてもよかろうとも思うので。終わりに、「あらそい」と題する一文を転載させていただく。これは私が大学生時代、珠算学校の新聞に載ったものである。

あらそい

懲子ちゃん、今日はお兄さんが懲子ぐらいだった頃のお話をしましょう。懲子は今まで福生の町で育ってきましたね。兄さんは小学校三年生まで、父さん、母さん、孝真兄さん、鴻子姉さんと一緒に八王子にいたのです。

四年生の時、父さんを留守番にして、秩父の山奥に引越すことになりました。なぜかって。それはね、当時、日本は戦争をしていたのですが、この頃、空襲が激しくなったからです。父さん

も一緒にと思うでしょうが、お仕事の都合で行けませんでした。

さて、山奥での生活についてお話をしましょうね。私たち兄弟三人は、家のすぐ裏の清らかな川に行っては魚を、すぐ前の山へ登っては、イタドリ、山イチゴをとるなど、大自然を相手に日を送りました。楽しいようですが、実は大変淋しい日々だったのですよ。なぜなら、町から来た人を山奥の人たち、それに学校のお友だちまでも大変きらって仲良くしてくれなかったからです。また、毎日の生活は苦しく、ごはんの代りに、おかゆ、大豆、トウモロコシなど食べる日が多くありました。

懲子ちゃん、こうした生活の中で、私たちの一番の楽しみは何だったと思いますか。そう、おみやげやお米を持って、八王子から来る父さんに会えることです。その日が私たちにとってどんなに楽しかったか、分かるでしょう。

こうしたある夜、「どこか焼けている。」という村びとの声で私たちは目をさまされました。見ると、南の上空が赤く染まっています。方角からみて、八王子だ、とすぐ思いました。私たち親子がどんなに父さんのことを心配したか、想像できますか。父さんに聞けば、その時の様子をこんな風に話してくれるでしょう。

「さわがしい物音で目をさまされて外へ出たら、方々に爆弾が投下されたのでしょう、火の手があがっていたよ。フトンに水をかけて、命からがら山の方へ逃げた。持ち物を運び出すどころ

ではなかったよ。」と。

それから二週間ほどして、悲しい戦争は終りました。八王子の家は燃け跡と化してしまったので、ひとまず、おじいさんの家に落ちつこうというので、福生に来たのです。兄さんが小学校五年生で、ちょうど慧子の年です。

慧子ちゃん、兄さんは自分の「わんぱく時代」を家庭に起きた出来事を通してお話しました。慧子の目にはどう映ったかしら。考えてみると、嵐は私たちの家庭だけでなく、みんなの家庭にも吹きつけていたのです。この世の多くの人たちが、苦しい、そして悲しいおもいをしたと思うのです。

慧子ちゃん、そんな不幸はない方が良いとは思いませんか。そして、世の中の人が仲良く話し合い、お互いに助け合っていけば、そのような不幸は、二度と起こらないとは思いませんか。

（東京都教育委員会指導主事）

第二話　さあ　町づくりだ

不幸にして、大戦で戦死した若者はかえってこなかった。

その戦場から、命からがら福生に帰りついた青年たちは、しだいにおちつきをとりもどし、自分たちのまわりから、再建にとり組みだした。この時代、それら青年たちの意欲をうけいれる条件には恵まれていた。戦時中、中央の文化人は戦禍を避けて、各地に移り住んだ。青梅や五日市にも、そうした人々が居住した。敗戦とともに、その人たちから影響されていたものが、ぱっとひろまった。また、小・中学校の積極的な教師たちが、そのもてる活力を地域の中にふりまいた。

このころ、青年たちはそれぞれの家業手伝いに励げんでいたのが大部分であった。彼等が修養と娯楽を求めたところが青年団であったろう。その青年団には、小・中学校の教師たちも含めて、よき指導者が多かった。こうした力を結集して、よりよい〝ふるさとづくり〟が進行した。

婦人会の発足は24年の四月であった。その活動の結実のように、26年には、この町で初の婦人町議が生まれた。24年には、小学校のPTAも発足した。耐乏しか知らなかった学童たちのため

山車の前で青年と子どもたち（昭和23年）

に、これからPTA会員たちの大活躍の時代となる。一般住民の文化活動も活発となり、文学・美術等のグループが、つぎつぎ結成され活動してゆく。が、残念ながら、これらの活動は、ほとんどの会が短命であった。生活に追われて会を離れる人が多かった。

商店街も活気を見せ、26年には、現在もつづく、福生名物の七夕まつりがスタートした。この26年には、教育の場にも明かるさが見えはじめた。第一小学校では、臨海学校が始まり、福生中学校が、雑木林にかこまれた現在地(福生第一中学校)に移った。そして、この町で初めての増設小学校である、第三小学校も開校した。

25年の人口は、一四、六六九人となっている。

（青年団、PTA、婦人会をはじめ、文化活動のようすなど、くわしくは『ふっさっ子・第二集』を参考にしていただきたい。）

おもなできごと

一九四八（昭和23）年

1月　帝銀事件が起きた。7月　福生中学校、牛浜の新校舎（現第三小学校）に移転する。

一九四九（昭和24）年

5月　福生第一小学校と第二小学校PTA発足する。8月　福生町営グランド竣工する。・下山、三鷹事件が前月、この月松川事件がおきる。11月　湯川秀樹ノーベル物理学賞受賞する。

一九五〇（昭和25）年

6月　朝鮮戦争はじまる。10月　第一回青年団支部対抗駅伝マラソン大会開催。

一九五一（昭和26）年

1月　ラジオ東京開設、民間放送始まる。6月　福生七夕まつり始まる。8月　福生第一小学校の臨海学校を開く。9月　福生第三小学校開校する。・サンフランシスコ対日平和条約、日米安全保障条約を調印する。

『第一話』につぐ『第二話』には、つぎの皆さんに寄っていただいた。

出席者

（福生第一小学校23年度卒業生）清水文子、田村栄義、貫井政子、村野末男、森田昌利（24年度）井上真一、野口秀世、細谷正行（25年度）井梅義彰、磯村一、木村恵子、村野恵子、村野藤子（26年度）栗原一郎、鳥海秀子、細谷寿太郎、吉田礼子、吉永千代子

兄弟は五人ずつぐらい

はじめにつぎの質問に答えていただいた。

一、兄弟は何人ずつだった。

平均四、八人、最多九人、最少一人。

一、家族旅行に連れていってもらったか。

一泊も日帰りもなし、一六人。日帰りで行ったのが二人（上野動物園・多摩川園）

一、うちの手伝いは、どんなことをしましたか。

男・子守り、畑仕事、水くみ、草むしり、まきわり、牛のえさの草刈り。

女・子守り、水くみ、畑仕事、店番、夕食のしたく、ぬいもの。

一、子どものために、家の中に備えられていたものは。

勉強机（個人・共用ともで）一二人。勉強室（共用で）一〇人、（個人で）一人。自分用自転車一人。家族でのラジオ一四人。蓄音機一人。

一、おけいこごとは何かしましたか。

珠算一〇人。珠算と書道二人。なにもなしが六人。

一、誕生祝はやってもらったか。

六人がやってもらった。そのなかみは、あずきご飯をたいてもらった。一二人はなにもなし。

一、学校の教科書のほかに愛読書はあったか。

男・少年クラブ、少年王者、風の又三郎、次郎物語、少年画報、ビルマのたてこと。

女・少女クラブ、少女、イソップ物語、サザエさん、みにくいあひるの子。

一、家での親のよび方は。

一五人が、おとうちゃん・おかあちゃん。三人がおとうさん・おかあさん。

グローブを買ってもらいたかった

あと一つの質問にも答えてもらった。

一、父と母ではどちらがこわかったですか。

男・父がこわい八人、母がこわい二人。
女・父がこわい七人、母がこわい一人。
一、父親がいつもうるさく言ったことばは。
男に　○勉強しねえなら外へ行って遊んでこい。○畑に行け。○勉強しろ。
女に　○宿題おわったか。○気がきかない。○食事のあとのびをすると叱られた。
一、母親がいつもうるさく言ったことば。
男に　○（遊びに行くとき）早く帰ってこい。○勉強しろ。○勉強しねえなら手伝え。○わるさをするな。○遊びに行ってこい。そうじ手伝え。
女に　○手伝いしなさい。○けんか（姉妹）をするな。○早く帰ってこい。○行儀をよくしなさい。○人さらいがくるから暗くならないうちに帰ってこい。
一、当時ほしかったのに買ってもらえなかった物は。
男・ズック靴、グローブ、ユニホーム、自転車。半分の者がグローブをほしがっていた。
女・オルガン、本、靴、高級ソロバン、おさがりでない洋服。
一、タバコを吸う女の人を見て。
男・バーの女、やくざの女、商売女。
女・特別な商売の人、不良の人、女のくせに。

一、遠足でむすび飯をあまらせたら。
○あまるほど持たせてもらえなかった。○あまったことがなかった。○家へ持ってかえり、兄弟に見せびらかして食べた。
一、先生との会話は敬語を使いましたか。
男○全員が敬語だった。○いなか言葉だったが尊敬の念をもって話をした。
女○敬語、（一人だけ）そうでなかった気がする。
一、横田基地を（または米兵を）どう思っていたか。
男○なんでも余るほどあるのを見て敬服していた。○父親が勤務していたので好印象。○トラックが日本のとくらべてすごかった。○そのうち日本がとられると思った。○眼玉が青いのがこわかった。○ガム・チョコレートをもらった。○日本人は小人だと思った。
女○黒人は気持ち悪かったが白人はカッコいいと思った。○いやな人間（小学二年の時ナイフをつきつけられた）。○こわかった。○うすきみ悪かった。

【座談会】

学校で

司会　前記してあるように、町のようすも少しずつ元気づいてきたのですが、皆さんの方はどんなだったですか。まず、小学校のことから聞かせてください。

○兵隊がえりの先生がだんだんふえて、おっかなかったなあ。

○職員室へ入って、ただ「先生」というと、「なに先生に用だ」なんておこられた。ちゃんと名前を言わねえから悪かったかもしれないけど。

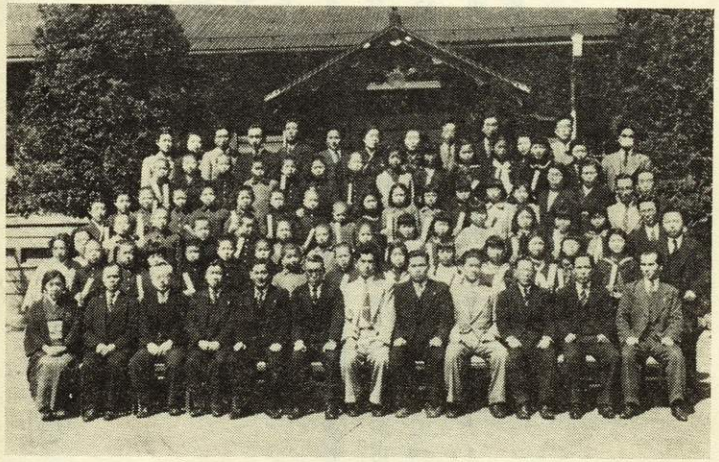
司会　なぐられたことはありましたか。

○いっぱいあるよ。わけがわからねえでなぐられたのもある。

司会　女子もなぐられたかね。

○あまりなかったでしょう。

○ストライキやったことがあったな。授業中に



昭和25年度　福生第一小学校卒業生と職員

皆で川の方へ行っちゃったりして。

○廊下へ立たされたなんていうのは、しょっちゅうだったな。

○教室のそうじをやらねえで帰って、つぎの日に、いっせいにひっぱたかれたこともあったよ。

○便所のそうじは、よくさぼったな。

○便所掃除の時は、職員室の方へ、せっこう兵を一人出しておくんだ。それで、先生がこねえとわかると、渡り板なんか水をぱっとかけただけですましちゃった。

司会　二宮金次郎の像は、まだあったですか。

○あったですよ。金次郎をもはんにしろ、なんて言われました。

司会　給食はどんなだった。

○脱脂粉乳をアルミのコップへ一杯だけだったんだ、まずくてなあ。みそ汁が出ただろ。PTA役員のお母さんが出てつくってくれたんだ。いろんなものが入っているみそ汁だったな。

○給食はあったけど、弁当を持っていったな。

○弁当に麦の入っているのをかくしながら食ったですよ。みそ汁がわりに油汁を飲んで。

○農家の人は麦飯だって持っていけたけど、わたしはさつまのふかしたのを持って行きました。

○兵隊が使っていたザツノウを、カバンがわりにしょっていったよね。

○モンペにはつぎがあててあって、またその上につぎしたのをはいて行ったものです。

○私は、上の者のおふるばかり着せられて、六年生までに新しいものを着せてもらったことがなかったんです。
○今の子にくらべれば、こじきの子のようなかっこうで、学校へ通っていたのね。
○学校でDDTをかけられたでしょ。シラミたいじで。
○靴なんかも配給だったでしょ。クラスに三足ぐらい、長靴だとかズック靴がきて、くじ引でわけたのね。
○わたしたちのクラスは、生まれ順だった。
○銃剣術の木銃の先についていたのを、ケシゴムに使ったでしょう。
○戦争中は、学校に銃剣術の用具が一式あったんですね。戦後それを焼いてしまおうとして、その木銃の先についていたゴムをはずして、先生がそれを細かく切って、生徒に配りました。
○よく消えなかったわね。
○配給の靴だって再生ゴムかなにかだったから、はいていると足がくさくなった。
○われわれは冬でも素足でしたね。夏は、昼食を家へ食べに帰って、ついでに多摩川で泳いできちゃうんで、そんなつごうもあって、はだしのまま帰りました。
○体操の時間だって、みんなはだしだったわ。
○俺たちのクラスに転校してきた木村君というのが、皮靴をはいてきた時は、みんなびっくりし

ちゃったな。
司会　そのころの子の俳句で、『うすい下駄、ぬかるみ歩いてあつくなる』なんていうのがあったぞ、卒業生文集の中にあったよ。

修学旅行

司会　修学旅行はあったんですか。
○江の島、箱根あたりへ行ったね。
○旅行に行くには、二合ぐらい米を持って行かなけりゃ、いけなかったんです。袋に名前をつけて米を入れて、宿屋へ行ってからあけました。その米が俺たちのは配給米でくろかったんです。農家の者は、よくついた米をもってくるから白かった。俺たちはその米をあける時、いやだったですよ。

紙芝居

○あのころ、紙芝居がよくきて、おもしろかったな。
○5円か10円だったと思うけど、諸をもって行った方がおじさんが喜こんだんです。お金や諸を出した者には、水アメやコンブをくれて、それをくるくるやってなめたりしながら見ていました。

○ぜにを出さねえ者がくると、皆で、〝見せめえ〟なんて妨害したりしました。
○だから、俺はいつも木の上へ上って見ていたよ。
○〝黄金バット〟なんかをやったんだな。
○俺は、ぜにをもらえねえ日には、タイコを叩いてやったり、中をまわってぜにを集める役なんかやって、タダで見せてもらったよ。
司会　紙芝居屋さんは、どこからきた人でしたか。
○飯能からきていたんだよ。

ガキ大将

司会　ガキ大将について聞かせてください。
○みんな中学三年にならなけりゃあ、いばれなかったんだ。
○地区でまとまって遊んでいたから、ガキ大将の言うことは親よりこわかったよ。
○クラスの中にもいばったのがいたけど、家のまわりの大将がだんぜんこわかった。
○俺は、家からスルメを持ち出して親分にすぐ渡しちゃった。親分は足の方だけ二本ぐらい俺にくれて「きょうはおまえは、おまわりさんの役にしてやる」なんてやられていたんです。
○アイスキャンデーなんかなめてんのを見られちゃうととりあげられちゃって、なめたあとのボ

ウだけかえしてもらった。
○ひどいガキ大将がいて、かっぱらいをそそのかされたり、犬をけしかけられたりした。
○ベーゴマをやっていて、大将に勝っちゃうと大変なんだ。
○当時の遊びは、近所の子が皆集まって集団をつくっていたんです。その中でいばれるのは、兄弟が多い子。そういう子はいつも家の中できたえられているから、けんかも強いし、すばしっこいんです。それに上の子が大将なら、その弟たちはしぜんにいばるんです。うっかりそういう子にいじ悪すると、兄弟からきつい仕返しをされました。
○なかには当人のかんろくで、まわりからかつがれていた者もいました。
○俺たちのクラスのボスは、学校へ行く仲間が家まで迎えに行ったんです。そして家の前で馬を組んで、それに乗って登校する。ほんとにかつがれてたんです。そのあとを下級生がくっついてったから、大名行列みたいだった。
司会　女の子のボスは？。
○女では、金持の子がわりといばっていました。
○〝おてんば〟で知られていたような子もいたけど、とくにボスだった子は知らないね。
○わたしたちのクラスで、男子のいばっていた子を、クラスの女子みんなで泣かしちゃったことがありました。

自　然

司会　皆さんのころになって、自然は何か変わったと思えますか。

○前の回の人たちと、変わっていないでしょう。

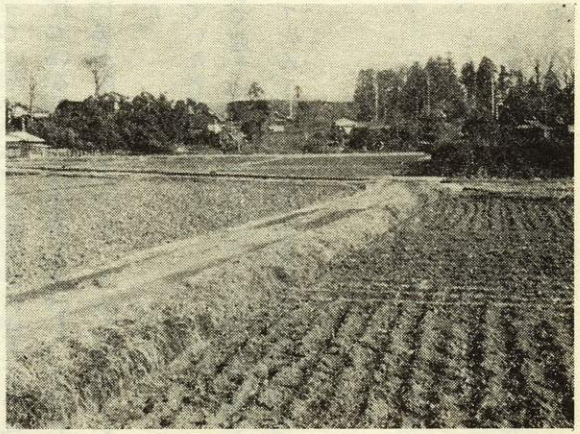
○同じようなことをして遊んでいましたね。

○うちは農家で、鶏をかっていたんですが、その鶏をイタチにときどきやられたんです。あのころ農家のまわりには、イタチがいたんですね。狐はいなかったようです。

○多摩川で泳いだこと。上水で泳いでおこられたことなども同じです。

○俺たちは上水で泳いでいて、監視の人に着物を持っていかれたりしたけど、皆でその人に石をぶっつけて抵抗したりした。

○男の子で、黒いヒモのついたふんどしをしめるのがはやってきた。マルミで一五円ぐらいで買ったんです。



現在の、福生高校のあたり。
春は一面にれんげの花が咲いた。

○女の子もパンツだけでなくて、シミーズを着て泳ぐ子がふえましたね。

○上水で泳いでおぼれる子が多かったんです。うちは上水の近くだったので、父がおぼれた子を何人も助けました。

司会　蛍もたくさんでしたか。

○いっぱいいました。

○たんぼの方に、とりに行きましたね。

遊　び

司会　遊び方も変わりませんでしたか。

○野球がはやりだしたんです。

○『六・三制　野球ばかりがうまくなり』のはしりでした。

○スポンジボールで、グローブは手作りでした。シートの古いのを切ってつくりました。バットは竹が多かったです。川原へ行ってやりました。

○川原の広いところをみつけて、蚕に使ったコノメ（竹であんであった）をバックネットがわりにずうっとならべてやったんです。

○せっかくいい球場になっても、大水が出るとそれがみんな流されちゃったんです。

○そのあとは、また別のところを探してやったな。
○学校ではテニスボールで、三角ベースというのでした。ピー玉やベーゴマもさかんだった。川原へ遊びに行って、野火をよくやっただろ。
○あれがどんどんひろがっちゃって、泣きだしたことがあった。
○あのころは、川向うの子とよくけんかしたんだ。川をはさんで石を投げっこしたり。
司会　それはずうっと昔の子からうけつがれている遊びだ。
○川向うの子とけんかした時、俺たちのガキ大将が先に逃げちゃって、俺たちは向うの者につかまっちゃった。それでうんと泣かされたことがあったよ。よくケガをしなかったなあ、という遊びばっかりしていました。
○どういうわけか熊川ともよくやった。大師様の帰りにあそこいらを通ると、つかまっていじめられたりしたよ。
○十五夜の時、皆であるっただろ。「おばさん、梨くんな」なんていいながら。
○えんがわにかざってあったものを、もらってあるったね。
○まんじゅうだって、あんこなんか代用品のものばかりだったけど、うまかったんです。
○あの、素人演芸会は秋に多かったんですね。あれを見て、それから皆でまねをして遊びました。
○運動会が終われば運動会のまね。お祭りのあとは、おみこしを作ってあそびました。

○一小の西門の近くにお店があって、そこにパチンコ台がおいてあって、アメが出てくるんです。昼休み時間にそこへやりにいってて、先生にひどくおこられたことがあります。

社　会

司会　男の子と女の子は、まだ思うように遊べなかったの。
○俺たちのクラスで、男と女の人数がはんぱで、どうしてもひと組だけ男と女とすわらなければならなかった。そこへ指名された奴が、言われるとすぐ窓から飛び出して家へ帰っちゃった。
○今の子のように、手紙のやりとりなんてないけど、ひそかなおつきあいはあったんじゃないの。
○そのころ、グループ学習がさかんにとりいれられて、その男女のグループごとでは、女子の方が積極的に男子に声をかけていました。
○でも、今の子のようなおつきあいはなかったですね。
司会　進学の準備なんてあったんですか。
○私立へ進んだ子は、クラスに一人か二人いました。そういう子は担任の先生が特別に見ていたようです。家庭教師をたのんでいたような、そんな子もいたんでしょ。
○グループで勉強会なんてあって、だれかの家へ集まったりしました。
○本町の子は農家が少なかったから、そういう時に永田の方の家へ行って、たんぼへ入れてもら

ったりしたな。

○俺たちはその勉強会で池田君の家へ行った時、コーヒーというものをはじめて飲んだ。カステラというものもはじめてだった。おばさんがごちそうしてくれました。

○でも、そういうふうに勉強した子は、ほんの一部分だったよ。ほとんどの子は、ちっともやらなかった。

司会　おけいこごとは。

○そろばんをはじめました。

○お習字もはじめた子がかなりいたでしょう。女の子ばかりだったかもね。

司会　私のところの珠算へ通いはじめた子が多くなったんです。あのころのそろばん通塾は、子どもが何もやることがないから、変な遊びを覚えるよりはそろばんへでも通いなさい、ということだったんですね。大部分の子が、おけいこごとといえばそろばんだけ、ということだったんです。家でのお手伝いはどうでしたか。

○やっぱり水汲みが多かったんです。うちはつるべ井戸だったから、風呂くみが大変だった。男でも子守りもやったし、よく手伝いました。

○女の子は、なおさら手伝いはよくやらされました。

○うちは蚕をやっていたので、とても手伝いが多かったんです。

○どこの家でも、水汲みが子どもの仕ごとで大変でした。

司会　まだ学用品など不自由だったんですね。

○食べるもの、着るもの、みんな不自由でした。特に紙がなくて困りました。

○あのころ、コッペパンがお店に出はじめたんだ。うちは百姓をやっていたから、その配給キップをもらえなかった。キップがないと買えないんですよ。それでもどうしても食いたい。家の米や麦をそっと持ちだして、友だちの家へ持って行って、それをキップと交換してもらって、パンを買って食べました。

○ことばづかいだって、女もベエベエことばだったですよ。

○じぶんのこと、おれって言ってたんです。アタイって言いかたの人もいました。

○男はみんな、おれだったな。おやじのことだって、「お父さん」って言ってたのは、ほとんどいなかったぞ。

司会　米兵相手の女の人に部屋貸しする、そんな所がふえてきたと思いますが。

○みんなで、米兵と女の人たちがいる部屋の近くへ行ったことがありました。そして、兵隊と俺たちで石を投げあっ

昭和25年
児童用並少年用菓子配給
一、配給対象
① スイートキャラメル
2才～20才　1人1箱 20円
② 黒砂糖かけ焼菓子
5才～10才　1人1箱 30円
一、希望者は家庭用購入通帳を販売店に提示し購入すること
一、販売期間　2月4日～15日まで
(昭25.2.6 福生町役場掲示同覧用)

2小100周年記念誌より

たこともありました。何か、そういう女の人に、抗議でもしたい気分からだったと思います。

○それから何年かしてのことですが、わたしたちのクラスの子で、中学の卒業まで行かないまま、そういう女の人のようなことになった人もいました。

司会　そういう話もあちこちで聞かれたね。男の子でも、そんな人たちに影響されて、悪の道に入ってしまった例も多い。だんだんと青少年の非行問題ということが現れてきたんです。28年には、福生町風紀取締条例が出る。31年に西多摩郡青少年問題協議会がつくられ、37年にはこの町の青少年問題協議会を発足させるような事態になってゆくわけです。

一面では、皆さんが子どものころ、26年ですが、福生名物の七夕まつりが始まった。なんとかこの町に活気をよびこもうと、当時の関係の人たちが、苦心してのことだったでしょう。

まったく、戦争末期から戦後にかけて食糧不足がひどくて、今では考えられないようなものまで食べて、飢えをしのいだ時期があった。福生でもそういう経験をもつ人が多いのです。けれどもこの辺では農家も多く、食べるものはなんとか手に入った。だから、皆さんの思い出の中で、飢えというものはわりと少ないね。初午だ、天神講だと、昔からの物日などには、とぼしいながらも大人がごちそうを用意してくれた。アメリカ兵たちによる環境の悪化というようなことはあったけれど、ひろく当時の子どもたちとくらべたら、恵まれていたといえるでしょう。

夏　祭　り（その一）

この項は、前回と今回（昭和19年度より26年度まで）両者の話をまとめたものである。

司会　福生の夏祭りは、七月三十一日が宵宮で八月一日が本祭りだった。むかしは天王さまって言っていました。ちょっと、俺たちのころのようすをしゃべらせてください。

俺たちの時代には、まず五月のお節句のあと、その払い下げられる人形をもらって歩くのからお祭り準備に入ったんだ。高等科二年生が大将で、そのころから下級生はなにかと夜集合させられた。そして、「あいつ生意気だな」と大将たちににらまれているのは、個別によび出されて、夜警の夜番小屋などでこづかれた。高等二年だといってもなかには弱虫もいたんだけど、こんなことをしている間に、みんな大将らしくなっちまうんだ。そのほか、度胸だめしだとか、太鼓たたきの練習とか、理由をつけて皆がよび出される。それらの中で勤務評定も進められて、お祭当日の役わりなどもきめられたんだね。なにかのことで「おめえは、お祭りにせえねえ（入れない）」と言われてしまったら、お祭りが終わるまで、子ども社会から村八分にされちまうんだから、大将たちには絶対服従だったよ。

当時、だれがさしずしたのでなくとも、子どもの最上級生ともなると、みようみまねできちっ

とやったんだからえらかったね。おとなも、彼等はそういうことをやれるもの、と子どもにまかせきっていたわけです。いそがしくて、かまっていられなかったのかもしれないけどね。だから、戦中でも、お祭りを休んだ年はないんだね。

○なにもねえ時代だったけど、八月のお祭りは毎年やったな。お祭りでもやんなきゃあ、楽しみがなかったからだよ。

○終戦の年は、お祭りが終わった頃に、八王子の大空襲があったんだ。あの年は熊川はお祭りをやらなかった。その熊川の五日市線近くがやられた。

○あのころは、子どもはお祭りや初午なんかの行事で、季節というものを強く感じたな。

司会　皆さんの時代も、子どもだけで準備をし

最近の祭礼風景（本町中央町会にて）

たのかね。

○そうですね。中学三年が親方でした。七月のはじめから準備に入ったんだ。

○親方のさしずで、新聞紙やうどん粉もらいにまわった。うちわや花や、万燈を作るのに使ったんです。

○なにもない時代だったけど、どこでも少しずつ出してくれたんです。俺たちの仲間で、そのもらった粉で、やきもちをつくって食っちゃったのがいた。

○高級なのりづくりに米が必要で、もらって歩ったけど、米はめったにもらえなかったよ。

○出席が悪いとすぐ「お祭り、せえねえ」っておどかされた。

○中学一、二年は神輿をみがいて、六年生は花をつくってとか、分担させられたな。

司会　そういう時、大人はいなかったですか。

○夜はおとなが出てきたけど、昼間は子どもだけでした。

○タル神輿をつくる時、子どもだけじゃあどうしようもなくて大人が手伝ったな。

○万燈も大人に教えてもらって作ったんだ。

司会　お祭り当日は、みんなかつぎに出たんだね。

○みんな出ました。でも、祭りばんてんを着ていかないとかつがせてもらえなかったんです。

司会　カッカードンドンという、太鼓のたたきかたはできましたか。

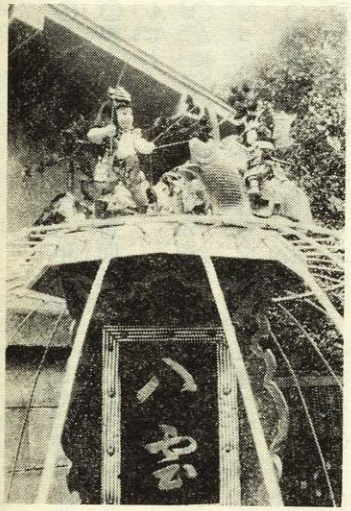
○笛は年上の人が吹きました。太鼓たたきは練習させられたから、みんなできました。

司会　子どもに、おやつのようなものはでたんですか。

○そういうことは何もなかったんです。お祭りがすんでから親方が相談して、学年順にこづかいがもらえたな。

司会　そういうやり方は、皆俺たちの時代と同じだね。高等二年が五〇銭、六年は一〇銭、一年は二銭とかもらったものです。

○そういうものの資金になったおさい銭もらいも、一軒一軒歩きました。くれない家に「ケチンボ」なんて言って、あとで親方におこられたり、おさい銭箱に手をつっこんで、いくらか猫ばばしたりしたんです。



本町中央町会有志がつくった見事な万灯（54年うつす）

司会　昔の神輿は、ふだん気にいらない家なんかへおしこんだりしたことがあったけどそんな乱暴はなくなりましたか。

○そういうことはなくなったでしょう。でもそのころは夜までかつげたから、駅前の方へ上っていきたくて、本町ともみあったりしました。

○あっちこっちのガキ大将がこういう時にぶつかって、大げんかをしたことがあります。

○大人のまねして、お酒をのんだりタバコをすったりという事件もあっただろ。

○大人が、茶わん酒をすすめたりしたんだ。

○もらったタバコを、農協の倉庫の二階に上ってすっていたのを見つかったものもいた。

○でも今みたいに、それをすぐに非行だ、なんだと深刻にとりあげたりはしなかったな。その時の問題として処理されたんだ。

司会　こういうお祭りのやり方については、26年までの皆さんの時代は、昔どおりのお祭りであった、と言えますね。

ここで、昭和23年度中学一年生の作文を使わせていただく。
当時の、お正月風景をつづったものだ。（名前は偽名にした。）

お　正　月

一A　岩本　勇

ぼくは、暮れの二十八日は、羽子板市だったので、停車場へ行ってみたらにぎやかでした。人が大勢いて、店が十けんぐらい出ていて、アメだの羽子板だのいっぱいでした。三十一日には、ぼくは家のまわりや庭などを弟といっしょにそうじしました。いよいよつぎの日はお正月です。

ぼくは五時ごろ父といっしょにおきて、神明社におまいりしに行ってみると、男や女が大勢おまいりにきていました。昼ごろ、ごはんをたべてぼくは友だちといっしょに立川へ映画を見に行きました。夜になると、ともだちといっしょにぼくの家でトランプやかるたとりをやりました。弟が、ぼくのことをたこをつくってくれといって、骨をもってきたのでぼくは作ってやりました。つぎの日、ぼくのことを、あがらないからあげてくれといったのでぼくがあげてやりました。そしてよくあがったので、弟はあがったあがったと、よろこんでいました。それから友だちといっしょに十二天へ遊びに行きました。かえり道に木をとってきました。それをうえ木ばちにうえたらいきいきとしました。それから友だちと金を出しっこをして、五十円でみかんを買ってきて、みかんつりをやりました。そしてぼくは六つとりました。

一B　佐藤敏子

「おめでとうございます。」というあいさつを、みながかわしている。どういうわけでおめでたいのか私にはよくわからなかった。でも元旦の式で校長先生が、くわしくそのことを話してくれた。学校から帰ると、近所の友だちが集まって、羽根つきをしたりカルタやトランプ、すごろくをしたりして、たのしく元旦をすごした。夜は家中で、みかんつりをしたり、ローマ字カルタなどをして九時ごろねた。

二日の朝をむかえた。家の手伝いがすんで、村山さんと二人で十一時ごろまで羽根つきをした。

そして、裏の家の真弓さんや多恵子ちゃん、三年生の岡部さんといっしょに、拝島の大師様へ出かけた。途中、牛浜の大通りのところで友達にあった。大師様へつくと、電車へでものったようにぎやかでした。いろいろな店がならんでいた。見せものもあった。池には氷がはっていた。それから石段を上がってお参りをした。上の方の店で、魔よけのおふだと、指輪を買った。下へおりてしばらくほうぼうの店を見て歩いた。みんなどれも高くて買えなかった。岡部さんがそこでおもしろい俳句をつくった。〝大師様、値をみただけで目をまるく〟そこでみんなはどっと笑った。帰りに昭和前（昭島）から電車に乗って帰った。福生の駅へおりた時は、もうお日様はしずみ、西の空は夕やけで真赤にやけていた。（カッコ内は編者注）

また、こんなやさしい男の子たちでもあった。

弟

一B　三上久夫

うちの弟は今二才ですが、ぼくが学校からかえると、ぼくの顔を見てすぐにこにこしている。そして、おんぶ、というような顔をしている。昼ごはんを食べてからすぐにおんぶしてやったらよろこんで背中で、しゃんしゃんはしゃいでいる。ぼくが子守りをよくするので、姉さんがお使いに行ってくると、アメなど買ってきてくれる。だから、ぼくはなおさら弟のめんどうを、よくみてあげるつもりです。

戦後の思い出

成田和子

三十年余り前の思い出である。
母校の一小で、私が教員としての一歩を踏み出したのは、敗戦から二年半程たった昭和二十三年四月であった。
戦争の傷あとは大きく、いろいろな形で残っていた。
街には粗末な品物が少しづつ出回り始めてはいたが、食べること着ること総てに乏しく、充分ではなかった。
また、大人も子供も、「民主主義」とか「自由」といった言葉を盛んに使ってはいたが、心の何処かでは、芯の摑み切れない不安定さを噛みしめていた時代であった。
人びとが、落着きを求め、心のより所を求めていた時代であったと思う。

雨ニモ負ケズ

「雨ニモ負ケズ　風ニモ負ケズ」

教室の前に張った宮沢賢治の詩を、毎朝よんだ。こども達と、声を出してよんだ。
全部が理解できなくてもいい、少しでも摑んでくれたら、一つでもわかってくれたら……。
そんな気持ちでいっぱいだった。
「雨ニモ負ケズ……」
詩をよむこども達の声は、ほかの教室からも聞えていた。
最初のこども達を受持った　二十三、四年頃の思い出である。

ゴム靴

ゴム靴を配給した。
再生ゴムで作った靴である。
どの子に配給したのか、覚えてはいない。
ただ、ゴムだけで作った靴の、
つやの無い黒い色と、だぼっとした型だけが、
こころに残っている。

学童服

黒い洋服が汚れていた。
衿の有る学童服の、色あせた袖口が、アカで汚れていた。
黙ってノートを差し出したこどもの、
うつむいた顔と、洋服の色が、今もこころに残っている。

ニシキ木

玄関の左側の教室で、職員会議をした時であった。
会議の始まる前のひととき、窓下の一本の樹を指して校長先生が聞いた。
「あれは、ニシキ木です」と、小林先生が答えた。
午後の陽ざしの中で、ニシキ木の葉は燃えるように赤かった。

カーキ色のスーツ

教師になって最初に着ていったスーツである。
戦争中、将校の軍服用に作られたというカーキ色の服地が、敗戦後、一着分づつ配給されたのを仕立てもらったスーツである。
父や母の着物地などを使って、自分で縫っていた私にとっては、唯一枚の新品のスーツだった。

始めての日、そのカーキ色のスーツを着て朝礼台に立った。
暫して、先生方とも慣れてきた或る日、職員室で男の先生が言った。
「そのスーツは、色が悪いよ」と。
軍隊の経験を持つ先生二人で、カーキ色は悪いというのである。
数日後、その洋服は、すずめ屋さんでコゲ茶色に染めてもらった。

民主主義の教育

「民主主義になってどうですか？」
「やはり、今の教育の方がいいですか？」
と、お医者さんに聞かれた。
「何だか徹底しなくて……。」「今迄の方がいいって言う人がいますけど、私もそう思います。」
と、答えた。
すると、先生は、驚いたような表情をなさって私を見た。
「まずいことを言ってしまった」との思いが走り、そんな自分を恥しいと思った。
民主主義という言葉も、今は余り使われなくなったが、あの時の、あの一瞬の先生の表情と、心のとまどいとは、今も忘れることができない。

洗　濯　機

放課後、裏庭の井戸の所に何人かの先生が集った。
小使室から長いコードが引っぱられ、洗濯機は音を立てて回った。
「イモを洗うようなもんだな。」と、誰かが言った。
ほんとうにきれいになるのか？とか、生地はいためないのか等と話しながら説明を聞いた。
洗濯機を造り始めた立川飛行の社員が、学校に宣伝に来た日のことである。
脱水は、上の方の横に取付けた二本のローラーを手で回しながら、布をはさんでしぼる式のものであった。
タライと板を使って、手でごしごしやっていた洗濯を、機械がみんなやってしまうという。
驚きであった。便利さへの驚きと、それでいて何かまだ信じ切れない思いとの中で、洗濯機の回るのを見ていた。
電気製品が普及し出した、三十年代始めの頃の思い出である。

いつか三十年の月日が過ぎた。

福生のまちも変わり、こども達の生活も変った。
食べ物も着る物も街に溢れている。豊かさの中の弊害さえ問題にされるような生活になった。
戦争はいやだし、戦後の厳しさもいやだ。
けれど、あの頃の生活の中にあった人びとを思う時、たまらなく懐しいとおもう。
学級に配給された模造紙を、教室の床に広げて、グループ毎の作品を夢中で書いていたあのこども達。
うす暗い電灯の下で、真剣に話し合っていたあの先生達。
賢治の会、道芝会、あかざ会の方達の熱心な話し合いを聞き、「考えて生きる」ことの大切さを教えられたのもあの頃である。
戦後の十年余
それは、私の人生にとってもまた大きな節目であったとおもう。
教師になってがむしゃらに歩んだ時期であり、病気との闘いの中で自分を見つめざるを得なかった時期でもある。
今、戦後の思い出を繰る時、自然があり、人との出会いがあり、生きる厳しさ、美しさがあったことを思うのである。

（元、福生第一小学校教諭）

はるかなる　わたしの福生

田嶋定雄

わたくしは終戦の年の九月に福生第一国民学校訓導として赴任、以後十六年半をここに教師としてすごした。

いま、求めに応じて、その間のことを書こうとしている。あれこれの思いは時間をこえ、所々にとびにとぶ。

これからどのように筆がとんでいくか、わたくしにもわからない。

一、先生がほしい

教師第一歩、それは戦後の虚脱の中であった。五年生の担任として。この五十七名の子どもたちは、年令的に近いせいもあって、わたくしには終生わすれることのできない仲間である。

兵隊帰り、軍服姿に下駄ばきの、このたよりない教師を、子どもたちは「おらほうの先生」として親しんでくれた。ありがたいはなしである。

戦時中は勤労動員、つづいて軍隊生活と、ろくな学生生活をしていないわたくしは教育実習とやらも経験しないまま、現場へとびこんだ形になってしまった。

わたくしは子どもたちの前に立ってふるえてしまった。しかし、目の前にいる新任教師であるわたくしになにものかを求めて期待している子どもたちの目は美しくひかっていた。

わたくしはきいたものである。「いま、お前たちがほしいものは何か。」――軍隊口調である。答えが返ってきた。

「おらあ、先生がほしい。」と。

わたくしは耳をうたぐった。子どもたちの言い分はこうなのだ。

戦争中、つぎつぎと担任の教師はかわった。いま、教えてもらっている先生はいつまで、このままおられるのかわからない。ついこの間までは教頭先生や校長先生が入りかわりたちかわり教室へはいってきた。だから、きまった先生がほしい――と子どもたちはいうのであった。

うーん、かわいそうな子どもたち。「そうか、そうなのか、きょうからおれは、お前たちの先生だぞ。決して、どこへもいかないからな。」と、この新任、二十歳になりたての教師は子どもたちの前で大見栄を切る。いがくり頭の子どもたちの熱っぽい視線をあびて、はじめて教師としての実感をあじわうのであった。

二、ばなしのはなし

若い教師が多かった。何もかも自由な時代であった。勝手なことをのびのびとやっていた、といってもよいわたくしの教師生活のはじまりであった。

その頃は宿直というのがあった。二週間に一回ぐらいまわってくる。そいつがまことに楽しい。物のとぼしい終戦直後のこと、食事は全部自分でつくらなくてはならない。

魚をかってきてはダルマストーブの上で焼く、職員室はもうもうと魚の煙りにつつまれる。ろくな始末をしないまま、原紙をきったりしているうちに夜もふけて、そのままねてしまうのである。

翌朝、教頭先生がはやめにお出ましになる。職員朝会がはじまる。教頭先生がやおら立ちあがる。

「みなさん、この職員室に魚のにおいがまだ残っている。ストーブの上で、何やら生魚をやいたようだ。しかも、きちっとしたあと始末もしてない。やりっぱなし……。とうしゃばんは刷りっぱなし、魚は焼きっぱなし。どうも近頃の若い者は、ばなしが多くて、まことに困る……。」

だんだんと語勢がつよくなる。それにしたがって、昨夜、宿直でいっしょにとまった仲間とわたくしの頭はだんだんとさがりっぱなしになるのであった。

三、このばかやろう

はじめての校長先生が、濱中雄一先生であった。たいへんな先生であった。この方のおかげでわたくしはまがりなりにも、なんとか教師の道をあゆみつづけて今日にいたっている。

私は宿直の夜、受持ちの子どもたちを多数あつめていた。宿直室で幻燈を見せるためであった。

「おおい、今夜はおれの宿直だ。幻燈をみたい者はみんな集まれや。」

まことにおおらかである。ワイワイと子どもたちはあつまってくる。

その頃は軍隊が残していった反射幻燈があった。物語等を一枚一枚ていねいにかいていく。文字通り手製なのである。

子どもたちにとっても娯楽とて何もないそのころ、若い教師のこのことばは大きな魅力であったにちがいない。

その子どもたちがまっ暗な教室、あかるい職員室をワイワイとはしゃいでかけまわっている。わたくしが幻燈の準備をしている間のことであった。

そこへ校長先生がおでましになる。校長住宅は、いまの校舎西側の道路になってしまったところにあったが用務員の細谷さんの家に用事があってこられたのであった。

「おおい、だれが宿直だ。」という。つづけて、かみなりがおちる。

「宿直の晩に子どもを、こんなにたくさんあつめて、ワイワイワイワイ。なんだ、これは。一体、お前の勤務はどうなってるんだ。ええ。」

当時は若い教師はいつも幾人かは同僚の宿直にごろごろしていた。

みかねた仲間が、

「でも、校長先生、宿直の夜に子どもを集めるのもひとつの教育じゃあありませんか。」

といったものだ。校長先生、すかさず、

「ばっかやろう。子どもの管理はどうするのかといっているんだ。それに宿直は勤務なんだぞ。そんな初歩的なことがわからないのか。」

なるほど、とわたくしは思うのだった。子どもが夜、学校へくる。十分たのしませて帰らせる——いいことだ。ただ、これだけしか考えていなかった。

校長先生は、あの戦後のけばけばしい時代だ、十時すぎに学校から帰る途中、もしものことがあったら困るではないかということなのだ。

そういえば電話などある家はほとんどない。子どもが学校へきているかどうかもわからない家があったにちがいない。

四、教育的価値

また宿直の話でおそれいる。男の子どもたちが先生の宿直の晩にあつまったことを知った女の子どもたちが今度はわたくしに団体交渉におよぶ。

「あたいたちは、先生の宿直の時にあそびにいっちゃいけないの。」と。

問われて若い教師はいやとはいえないのだ。

「おお、いいともよ。」

と、いともたやすくOKを出すのだった。

さて宿直の晩、女の子どもたちはぞくぞくと集まってくる。幾組にもわかれてトランプにうち興じ、十時をすぎるのであった。キャッキャッと子どもたちは十分に満足する。さて翌朝、また職員朝会の時、教頭先生がやおら、となりの校長先生に問いかける。

「校長さん、どうでしょうね。宿直の晩に女の子を集めてトランプをするというのは。」

校長先生、パッと立ちあがる。

「宿直の晩に子どもを集めてトランプをする、どこに教育的価値があるのか。」

大きな声が職員室にひびきわたる。寂として声なし。この時ばかりは、だれも助け舟を出す仲間はいなかった。この時もわたくしの頭はさがるばかりだった。

五、学校が燃えている

またまた宿直の晩のはなし。どうして宿直のことがこう頭に残っているのだろうか。あれは昭和何年ごろだろうか。土屋パン屋さんが焼けた晩なのだが。

その夜、わたくしは、宿直であった。岩下伴蔵先生（当時濱中伴蔵先生）をはじめ若い仲間がいっしょにとまっていたのだった。

真夜中、どんどんと宿直の戸をたたく無礼者がいる。

「おおい、宿直、おきろ、火事だ。」

と、いったらしい。すわ、と立ちあがって下着のまま職員室へとぶ。

あきらかに校舎の東側、便所のあたりが燃えている。どんどん職員室の方へ燃え移っている——とわたくしにはみえた。

あわてて、宿直室へもどり身じまいをしようとする。ところが今度は腰がぬけてしまい、どうにも壁にかかっている体育用ズボンを取ることができない。

ガタガタガタガタ、ひざがふるえっぱなしなのである。

なんとか気をとりとめて支度をすると、なにはともあれ、学校長に報告しなければと、校長住宅へはだしですっとぶ。

「校長先生、宿直の田嶋であります。ただいま、学校東側の便所が燃えております……。」

「なにを言っているか。お前を起こしたのは、このおれだ。学校が火事ではない。もえているの

は土屋のパン屋さんだ。火の見下の高木先生の家を用心せよ。」

身じまいをしている校長先生におさとしをいただく。これには、まいったのなんのって。

やがて多くの近火見舞の方々が学校の玄関にみえられる。わたくしは濱中校長先生のそばで小さくなっているだけであった。

六、福生第一日本一

戦後間もなく岩下先生や若い教師であるわたくしたちと子どもたちでいっしょにつくった「福生カルタ」がある。「いろはがるた」なのだが。いろいろなことばがでてくるのだが、㋐のところではたといきづまる。あれこれしているうちに、「福生第一日本一」ということにおちついた。

「いいじゃないか、これよ。「福生第一日本一」。

しかし、これは当時、福生第一小学校に教師として籍をおいた者のひとしくもっていた心意気でもあった。こと子どものこと、教育のことに関しては、まばゆいばかりのものがあった。

「どだい、こんな程度の低い授業をしていて、それでも教師などといえるのか。」

とは、はじめて研究授業というものをしたわたくしへの濱中校長のことばであった。

「やることは、ちゃんとやろうじゃないか、ええ。」

というのが、この校長の口ぐせであった。つまり、運動会をやっても、学芸会をやっても、授業

をやってもぶざまなまねはするなよ。お前たちはプロなんだぞ。勉強せいよ。泣きながら勉強しつづけるのが教師の生活なのだ——と、からだで、わたくしたちに教えておられたのだった。

わたくしは、この濱中雄一校長先生に、新卒以来十三年間、先生が定年で退職されるまで、常に身近かにご指導をあおぐことができた。

福生一小に赴任させていただいてなにが幸せかといえば、なによりもこの校長の下に仕事をさせていただいたことだった。

なによりも、教育とは何か、教師はいかに生きなければならないかを、からだで教えていただくことができた。この校長のおかげで、多くのよき人々にあうことができた。そのわたくしの蒙を啓いていただくこともできた。

わたくしはその十三年のご指導の間、一度もほめられたことはなかった。いつもしかられてばかりいた。

昭和四十一年秋、先生は忽然と亡くなられてしまった。いま少し生きていてほしかった。寝たままでもいいから生きていてほしかった。その枕もとにでも出かけて、その新任の頃のはなしを、ゆっくりとしたかったのが、いまは、それもかなえられない。おしみてもあまりあることだった。

七、オーバーゼアー

当時この町にはアメリカの兵隊が多く姿をみせていた。その夜、わたくしは一人で宿直、職員室で、あすの授業のための教材研究に余念がなかった。

午後十時ごろだったろうか。アメリカの兵隊がひとり、職員室へとびこんできた。わたくしはギクッとして足がふるえ出していた。しかし、相手は一人、こっちも一人だ。ままよと、腹をくくって職員室前の廊下へ、このアメリカ兵を押し出した。

なんと、若い兵隊である。わたくしになにか言おうとしている。その手ぶりや身ぶりから、わたくしにはわかるのだった。MPにおわれているから、どこかにかくしてほしい——ということらしい。若いわたくしに哀願するこの若者のまなざしがまことにいじらしい。

わたくしも日本人、一はだぬぎたくなっていた。「よっし、こっちだ。」——わたくしは、宿直室のとなりの衛生室のベッドの下へ、このわなわなふるえている兵隊をもぐりこませる。

やがて、ドヤドヤとMPが五名、靴のままあがりこんだ。この無礼者、ここをどこと心得ている。大きな腕章をつけて、手に手にピストルをもっている。たまげたのなんのって。

「兵隊がにげこんだろう。」という手ぶり。ここでわたくしが、へなへなとなっては日本男児の名おれだ、とまでは思わなかったが、勇をこして、わたくしは大きな声を出す。「オーバー・ゼ

アー。」

大きなゼスチュアーで校庭を指さした。MPたちは靴音高く走り去った。

八、学　芸　会

やはり書いておかなくてはならないことのようだ。わたくしには限りない思い出がこの福生一小の学芸会にはあるのだから。

そう、わたくしの新卒のころの学芸会の脚本には、みな「GHQ」の大きな印がおされていた。この印なきものは上演することができないのだった。その頃は脚本集とて思うものがなく、教師自らが劇をつくるか、物語の脚色をするかが主であったように思う。

わたくしは、はじめての学芸会に自ら筆をとった。題名だけは今におぼえている。「次郎とその母」というのだった。原紙を切り、わたくしは勝手に練習をはじめていた。そうしておいて、その脚本が校内の学芸会委員会で検討されたのだった。多くの意見の中で、ベテラン教師の某が曰く、「きみ、これは新派悲劇じゃないか、こんなものが民主主義の世の中の国民学校で上演できると思うのかね。全面的になおさなくてはいかんよ。」というのであった。

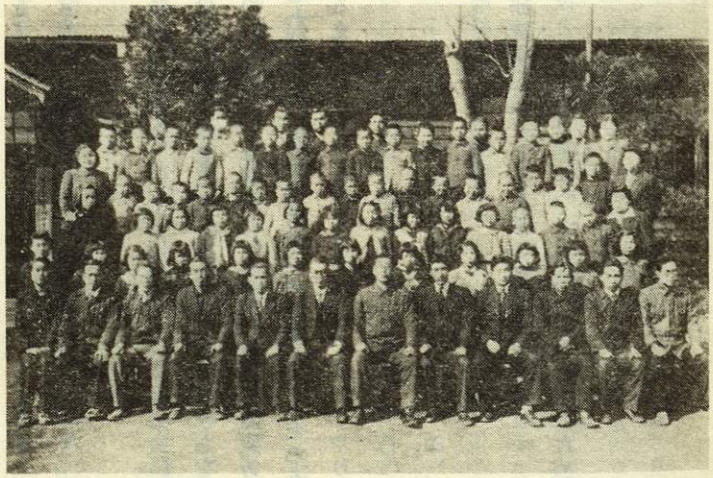
ははあ、民主主義の世の中というのは大へんなものだと思うのだった。よいと思って、何日も徹夜してかきあげた脚本は、みじめにも陽の目をみずにおわらんとしている。その検討会がおわ

って泣き伏しているわたくしに、当時、わたくしの学年主任であった田中貞雄先生はやさしくいうのであった。

「男は、やたらに泣くもんじゃない。まだ時間はあるんだ。二人でつくりかえようじゃないか。」

わたくしはありがたかった。これは神の声にも思えた。ふたりは、小使室へあがりこんだ。長い時間をかけて原案ができあがった。題名は「芽」というのだった。戦後の子どもたちの生きざまを、ピチピチとえがいた、あかるいタッチの生活劇であった。この劇は上演されたものの中でも評判がよかった。

いきおいを得てわたくしは、つぎの年に「首途」という脚本を書く。脚本の中では、自ら主要な役を演じ、加えて演出という、オ



昭和21年度　福生第一国民学校6年3組卒業生と職員

ーソン・ウェルズばりの役割をはたしていく。そして、宮沢賢治ものの脚色に熱中し、斎田たかしものへとうつっていく。こうして、福生二小の学芸会全盛時代とともにあゆんだ日々はなつかしく、教師としての生きがいでもあった。

わすれてならないことがある。いまも福生一小に健在である小林末男先生は、この学芸会になると、大へんな力量を発揮するのであった。玄人はだしの舞台装置は、常にみる者のどぎもをぬくのであった。小林末男先生は、この舞台づくりのために何日も徹夜し、上演当日はその疲労がかさなって、ぶったおれてしまうのであった。申しわけないことを何度おねがいしたことだろう。

自由な時代であった。教師は、その生命のもえるままに、子どもたちと四つにくんで、やりたいことをやっていた。

九、算数の研究授業

昭和二十五、六年と福生第一小学校は東京都の研究指定校として算数の授業とそのカリキュラム作りにとりくんでいた。この夏休み、全職員はほとんど毎日学校へきては、その研究のための資料づくりに大童であった。

指導主事の根本なんとかという先生がこられて、懸命にわたくしたちがつくった資料に手を加えてくださる。つっかえされ、つっかえされ、資料はその朱筆でまっかになっていく。

公開の研究会が近づいてくる。この研究会では、まず全員が算数の授業をするのだが、その他に三人だけ、いわば代表のような形で、特別に一時間だけ授業をすることになった。わが中学年は、どうもわたくしがしなければならない雲行きである。わたくしはまよった。名誉ある福生一小の公開研究会にわたくしが授業をしてよいものか。なにせ、わたくしは学生時代、代数三点、幾何五点で落第生候補、職員会議の話題になったくらいだから、なんといっても自信がない。当時、数学の教師は、わたくしをつかまえて、「代数はなみだか溜息か」といったものだ。

しかし、ここへきては、ひくにもひけなくなってしまった。目をつぶって、「おれ、やる！」と手をあげたものだ。それから指導案づくりがたいへん。当日はたちまちきてしまった。件の代表授業となる。

くるわ、くるわ。わたくしの教室は顔もみしらぬ全東京都の教師でいっぱいになってしまった。授業がはじまった。なんでも、かけ算のところだったのだが。さらりとやってしまえば簡単なことを、むずかしく教えたから、さあいけない。導入の部分で授業は泥沼にはまってしまった。にっちもさっちもうごかない。ふだんは、わたくしの目の色ひとつで、みごとにうごく誰某も彼某も、この時ばかりはテコでもうごかないのだ。

時間は刻々とたっていく。たまりかねて、当時新卒の同学年の小林皓先生は、参観者のだれにもわからないように、教室の一番うしろで、高々と手をあげる。その左腕にはめられている大き

な腕時計を右手でゆびさす。「時間だ、時間だ、おわりが近くなってしまったぞ。」と、友情のサインをわたくしに送るのである。

しかし、子どもたちはうごかない。わたくしは汗びっしょりになっている。のどがカラカラとかわいてきた。そうこうしているうちに終わりのチャイムがなってしまった。

参観者はぞろぞろと教室を出ていく。わたくしはもういる場がない。この時ぐらい子どもたちがにくらしく思えたことはない——なに、教師であるわたくしが無力であっただけなのだが。それでもおわった、おわったのである。わたくしは、そばの机にへなへなと、たおれかかってしまった。子どもたちもシーンとしている。

子どもを責めるわけにはいかないのだ。泣きたい気持ちをこらえながら、みんなで「雨ニモマケズ」を暗誦しておわりにした。

茫然としているわたくしの肩をたたく者があった。当時、新設の福生第三小学校長になられた広瀬義雄先生であった。彼れは、ゆたかにたくわえられた髭をなぜながら、やさしいまなざしでわたくしをみつめるのだった。

「田嶋さん、いい授業だったじゃないか。子どもたちが、廊下へ、ある場所の長さをはかりに出かけようとする、走り出させておいて、『ちょーっと待った。お前たちは、今、なにを、どこへ、どのようにしらべにいくのか。』と、問いただしたところあたり、圧巻だった。」

というのである。わたくしは完全にまいっていたのである。このひとことで、かろうじて、歩き出し、全参会者があつまっている、その検討会へいくのであった。この二年間に、わたくしは六キログラムやせて、はじめて作った背広のズボンが、がたがたになっていた。

十、「小さな手帖」発刊のころ

PTA活動がしだいに軌道にのって地道な仕事をはじめていた頃、わたくしは、その社会教育委員会に属していた。当時、PTA会報は、その年度ごとに、名称もあらためられて作られていたが、わたくしの属する社会教育委員会では独自に、手軽な「小さな手帖」を発行しては全会員に読んでもらっていた。

いま、ここに、その第二号からのつづりがある。残念ながらその創刊号がないのだが。その二号は、昭和三十四年五月三十日の発行となっている。ここには、子どもの小さな作文が二篇のせられてあり、その下に脚註として、なにがしかの解説がしてあるのである。作文は、こんなものである。

夕がた、おとうちゃんと、しょうぎをやった。一回目はおれが勝った。二回目もおれがかった。三回目もまたおれがかった。

おとうちゃんは笑いながら、「あああ。」と、ためいきをついたと思ったら、ゴロリとたたみにねころがって、タバコをふかしはじめたが、「ふとんをしいて、ねるぞ。」と、急にブッキラボウにいった。おかあちゃんが、そばから、「むすこに負けるようじゃ、たよりにならないねえ。」とじょうだんをいった。おとうちゃんは、また笑いながら、「ヒロブミが帰ってくればなあ。」といった。

ヒロブミは、ぼくの弟で、いま病院にいる。ヒロブミは本しょうぎがとてもつよい。この前病院へいって、しょうぎをやった時、おれは、かんたんにヒロブミに負けてしまった。おとうちゃんにおれが勝ち、おれにヒロブミが勝つ。かいだんみたいだなと思った。

これが、そのまま、今につづいているのであろうか。いま、福生一小の「小さな手帖」は広報委員会の編集になり、八十号をかぞえると聞く。もう、あれから二十一年になる。

十一、「ちょうれいだい」の思い出

福生一小の沿革史には、「昭和二十九年、学校文集『ちょうれいだい』創刊」とはしるされていないかもしれないが、あきらかにその一月一日、お年玉として、全校の子どもたちにくばられた。昭和三十九年、福生第一小学校の九十周年の記念誌に、請われて、わたくしはつぎのような文

章をかかせていただいた。

毎年毎年、てんらん会のあと、国語の部屋の作品を文集にまとめてみようと思いながら、ついついいままで、のびのびになってしまいました。昭和二十八年のてんらん会のあと、ことしこそはというので、学校やＰＴＡのお力添えをいただいて、やっと学校文集を出すことができました。

――昭和二十九年一月一日、お年玉として、子どもたち全部にくばった「学校文集」のあとがきである。一・二・三年生用、十三ページ建て、四・五・六年生用、二十ページ建てと、二分冊、印刷所は福生かすみ謄研。これが、いまも福生第一小学校につづく学校文集「ちょうれいだい」の第一号ということになる。

その後、先生方に、日記や作文や詩や観察記録など、子どもの文筆活動の中から生まれてくる作品を原紙一枚にまとめて印刷していただき、各学級のそれを集め、百部を製本、各学級に配布、毎日の学習に役立てた。後に部落毎に何部かを渡して回覧、父兄も特に親しむようになった。

これが、先生方全部の美しいお力添えで、二ケ月に一回のペースで刊行されていった。毎年お正月にはお年玉として、子どもたち全部に一冊ずつくばられている。

「ちょうれいだい」――この名前になっているのは第二号からである。名づけの親は、たしかに、いま福生第二小学校におられる矢口先生であった。当時（昭和二十九年頃）の国語研究部員の衆知を集めてのものであった。「ちょうれいだい」、それはすがすがしい朝を思わせる。「ちょうれいだい」、そこには学校全部の子どもと先生方があつまる。そして、新しいもの、美しいもの、真実なものが求められていく。福生第一小学校の子どもたちが、この文集「ちょうれいだい」によって、かしこくなってほしいというあついねがいがこめられていた。

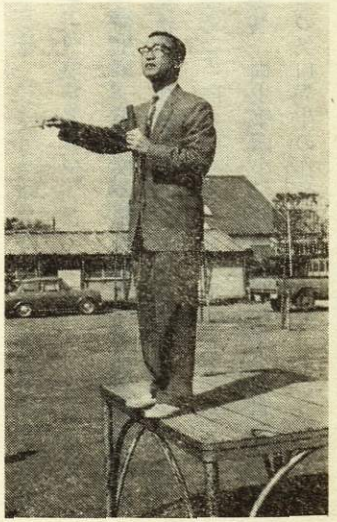
各学級、百枚のプリントが次々と高い山になっていく。国語研究部では、表紙、前がき、あとがき、中とびらと、それぞれの分担の仕事が進められていく。各号とも、しめきりまぎわの職員室はたのしい忙しさでいっぱいであった。

製本は国語研究部が担当。一ぱい八十円のなべやきうどんをすすりながら、「とうとう四十八号までこぎつけたか。あと二号で五十号だなあ。」「うん、今回の表紙、なかなかいかす。中とびらのセンスも一流だね。」――「子どもたちの作品も、ぐっとあつみがでてきた。やはり、こうしてつづけることが大切なんだなあ。」――などと、まず完成のよろこびに胸をふくらませるのであった。

いつか、五十号が出された時、わたくしたち、転任した者もよばれて内輪のたのしい会がもたれたことがあった。この時かけつけた仲間のひとりが、次のような詩を送った。

いく千、いく万の友が
こだまとなって
あつまっては、散っていった
校庭の朝礼台。
そのこだまは、
今もひびきつづけ、
なりわたっている。

そして、
福生第一小学校の道は
ひらかれ作られてきた。
「ちょうれいだい」の道、
ぼくたち、私たちの道。
おにいさん、おねえさんたちの道。
いつまでも　どこまでも
新しいものを、



お元気だった日の矢口先生（福生二小校庭にて）

よりよきものを求めて
歩み続ける道。
希望の道、未来を見つめる道。

よろこび、いかり、
かなしみ、たのしみの幾山河をのりこえて、
多摩の流れの若鮎のように、
ピチピチと元気よく、
伸びよ、「ちょうれいだい」の子ら。

そして十年、いま六十号をかぞえるという。福生第一小学校の歴史と共に学校文集「ちょうれいだい」は力づよく、そのあゆみをつづけることであろう。

この文中に出てくる矢口先生は昭和四十二年夏、福生第四小学校の教頭になって間もなく、にわかに亡くなられた。この文中の詩もまたこの矢口先生の作品ではあった。そして、この「ちょうれいだい」は、いまにつづいているという。なんと、いま、百三十六号になるという。

十二、子どもたちのこと

わたくしは福生一小での十六年半に、よき、校長、よき先輩、よき仲間に大事に育てていただいたことを、なによりもまず感謝しなければならない。そしてまた、よき子どもたちに恵まれて、教師としての無力さも、この心きいたる子どもたちに助けられて、なんとかすごすことができた。その一人ひとりの顔を思いだすたびに、年がいもなく胸があつくなる。まことに残念なのだが紙数のつごうで二人の子どものことをかかせていただきたい。

若き挫折――その才能のすべてと山――森田　格さん

雪の荒川岳から帰還せず――某週刊誌のトップをかざる見出し。「ヒマラヤ登頂もむなし」の小見出しに、つぎの文章がつづく。

オブザーバー、いわば顧問格で参加したのは、ヒマラヤの経験を持つ森田格さん。三十歳、東京営林局森林計画課勤務で、月のうち二十日間は担当の南アルプスの山々に入り、樹木の成長率を調べている。昭和二十九年に昭和山岳会に入会、三十三年の冬には、谷川岳幕岩Cフェースの初登はんに成功した。

三十六年、三十七年に、ジュガール・ヒマールの主峰、ビック・ホワイト・ピーク（七〇八

三メートル）の日本遠征隊に参加。三十六年には頂上まで、あと三十三メートルというところで涙をのんだが、そこで雪穴を堀って二晩ビバーク（雪中での仮泊）というのは世界的にもめずらしい記録。

三十七年には再びいどんでみごと成功。森田さんは第一次アタック隊の一員として頂上に立った。

当時の高橋昭隊長（日本山岳連盟常任理事）は、「けっして、テクニシャンではなかったが、山をよく知っていたし、体力もあり、円満で協調性があったから遠征隊に選んだ。」といっている。一メートル五十の小さな体で、雪の中をもぐるようにして歩くので、「ノーチラス」（原子力潜水艦の名）というあだ名がついていた――と、彼の業績と人柄をたたえ、その死をいたんだ。

昭和二十年、わたくしは新卒の教師として、彼の担任となり、五年・六年と二年間、その生活を共にした。

当時の彼は、いわゆる秀才タイプではなかったが、よく勉強した。よくいたずらもして、そして友だちを大事にした。「ターボーちゃん、ターボーちゃん。」といわれて、下級生からも愛されていた。線がふとく行動的であった。各担任の彼の性行概評はつぎのようになっている。

一年――無邪気ナルモ、幾分勝気粗暴ナリ。二年――動作は敏捷ニシテ、元気極メテ旺盛ナリ。

三、四年、動作機敏ナリ。元気亦旺盛、而シテ粗雑ノ質アルハ残念ナリ。統率力アリ。勝気の標本。五年――研究心に富ム。明朗活発ナリ。イタズラモスルガ、真面目ナリ。六年――明朗。何物ニモオクセズ、堂々ト自ラノ意見ヲ発表ス。追究心旺盛ニシテスベテニ真剣ナリ、とある。

それぞれの表現はちがっても、いずれも彼の人柄をついている。

こんなエピソードがある。六年卒業も迫ったある日のこと、彼の父親（当時町長）がわたくしをたずねてきた。あの子を私立の中学へいかせようと思うんだが、本人はどうしても、うんといわない。ひとつ、先生から、私の意にそうようにしてはもらえまいか――ということである。この父親がまた頭のきれる実践力のある人であった。多い自分の子どもの中で、最も彼を愛していたかにわたくしには思えた。

新卒のわたくしは、町長自らの出馬にいたく感激して、翌日、さっそく彼をよび、このことをはなした。だまってきいていた彼は、わたくしのはなしがおわると、澄んだその目をひからせてわたくしをにらむようにすると、

「先生、ぼくは、私立の中学へなんか、死んでもいかない。みんなといっしょに新制中学へいくんだ。みんなといっしょの方が、はるかにおもしろい。あおっ白い顔をして、いばったような顔をして、電車で遠くまでかようなんて、まっぴらだ。」

こういって、てこでもうごかない。

手をかえ、しなをかえても、とんと動く気配はない。とうとう父親もおれて、本人のいう通りにしようということになった。

また、彼が大学へいっていた時のことである。山好きの彼は山へもぐりこみ、学校へ出席しない。当然、規定の単位がとれない。学校当局は本人に忠告することしばしば。それでも彼の山への情熱は、すこしもくじけることを知らない。当局は、ついに最後の勧告をおこなった。彼の答えはこうであった。

「ぼくは山のほうがすきだ。だから学校はやめる。」

――こうして、彼は大学を中退してしまったのである。

あくまで自分の主張を通す。思いつめたらその通りに行動する彼であった。こんな彼でありながら実に多くの人々に愛されていた。小学校時代の同級生があつまると、みんながいうのであった。

「ターボーはどうした。まだ、こないのか。あいつがいないと、なんとなくさびしい。けっしてはしゃぎやではないんだけどなあ。」

なによりも家族の人々は、この本人の考え方を、そのまま認めて、彼のやりたいことを、そのままさせていたようだ。放縦にしたのではない。彼の人柄のよさを、特に両親はするどく見抜いて、そのすべてを信じていたにちがいない。

ヒマラヤ遠征に出発のさい、小学校同級生の歓送会に彼は、藤村の「惜別の歌」――とおき別れに耐えかねて、この高殿に登るかな、悲しむなかれ我が友よ――彼独特のふしまわしで、しみじみとうたうのであった。

また、その登頂に成功して帰れば、これが日本山岳界の十指に数えられる大家であるという印象を少しもわたくしたちに与えなかった。

森田格、遭難の報に、その実家へわたくしがかけつけた時、彼の母親は蒼白な顔に笑みを作った。「格は、やりたいことをやりました。そしてわたくしたちも、やりたいことをさせました。格は、みなさんが、一生かかってやることをやったんですから、もう何もいうことはありません。」と、深くその首をたれるのであった。

あれから、もう十五年もたつのであろうか。

町一番――働く成人者の意見発表――柿沼八千代さん

ことしの福生町の成人式で、六人の成人者が意見発表をしました。みんな、しっかりしている意見で感心しましたが、その中で特に柿沼さんは立派でした。

出てくる時の態度、発表中のはっきりとした声、実に自信があふれていました。あとできくところによると、柿沼さんは、福生第一小学校から福生中学校に進みましたが、中学一年の時、お

かあさんの大病で、高校進学を断念しなければなりませんでした。

三十五年四月に中学卒業と同時に、昭島市のフォスター電機に入社しました。そして成績のよい模範社員として活躍しています。三十六年の十一月、工場内に掲示されていた「働く年少者の生活文」募集に応じました。そして、見事に都知事賞をうけました。

三十九年十一月には、「勤労青少年の作文」に応募して、労働局長賞にえらばれました。中学卒業後も、こつこつとひとりで勉強をつづけたという本当に感心な人だと思います。

——と、当時、福生町婦人会々長であった、今野つよさんは、福生珠算学校月報百八十七号（昭和四十年二月一日発行）に「町一番」ということですいせんしている。

その成人式での柿沼八千代さんの意見発表を、同月報よりおかりして紹介することにする。

もう昔々のお話になってしまったような気のする昭和十九年、戦争の中で私は生ぶ声をあげたという。もちろん私には戦争の記憶がない、何一つとして。ただ戦後の混乱期でしょうが、長ぐつがなくて、紅のあしだに雨のつめたさを強く感じたこと、そして配給で買ってもらった長ぐつをはけた時の、水たまりをけってあるきたいような、あの喜び、その思い出がわずかに戦争の後を思い出させる。

それだけに食糧難の、その日々を幼い私をかかえて育ててくださった両親のご苦労が思われる。しわも多く、しらがも多くなって何か老人を思わせる両親に、私は深く頭を下げたい。

両親より背の大きくなった今の私に、父母は一体何を望んでいるのだろうか。私をこれまで育てて下さった両親に、成人式の晴れ着を買うつもりでためた貯金の一部四万円をお礼の手紙と共に渡した。それが私の成人式を迎える両親への贈物であった。

「気持ちだけでいいのよ。」母は眼をしばたきながら云ったものである。しかし、今の私に何が出来よう。七千三百日余りの、その日々のお礼をするのには、何をもっても出来ないのではないだろうか。これからの私の肩にその何かがかかっている。何か？　私はその一つとして会社での職場生活に、私の力を出したい気持ちでいっぱいである。

その職場を昨年労働省で行った働く青少年の作文コンクールで、労働局長賞を受賞した私の作文で、ご紹介したいと思います。

空をみて思うこと

私は今空を見ています。

高い青い、私をすいとってしまいそうな空を——中学を出、会社の組織の中の小さな歯車になってから五年目の私が今空をみているのです。入社当時のあの暗い淋しそうだった私が。

一人の無言のボイスコイル巻線上から月日の流れと共に、私は今マイクロホン生産のチーフという、小さな肩書きを胸に抱きながら、その生活を涙の出るくらい満足しています。

冷たい朝の空気をすって六時五十分に出勤、七時半に会社につくと、作業の準備をベルトコンベアー付きの作業台の上にします。半田ごて、ドライバー、テスター。

「おはよう。」「おはよう。」、グループの仲間が職場に入ってきます。平均年齢十八歳、七名のグループの人達が集まると、それをまっていたかのように作業始めのチャイムが社内に流れます。「さあ、いきましょう。」「いいわよ。」——次々にスマートなマイクロホンが、私たちの手から指先から生まれます。

「柿沼君、明日の十時までに四百本あがるかな。」、班長さんに言われ、「はい。」私は迷います。（出来そうもない、間に合わないとお客様に迷惑がかかってしまう。）そう考えると、私はひとり急につかれを感じます。（私の生産予定の組み方がいけないのかしら）強く思うと、それが知らぬ間に顔に出てしまうのです。

すると、「やっちゃん、どうしたの、元気ないわよ。」「だって出来そうにもないでしょう。」「やれば出来るわよ、絶対できる。」「ハッスルハッスル。」と、笑い声の中でみんなは私を力づけてくれます。

また時には、グループの作業している真剣な姿に我れに帰るときがあります。皆の無言のはげましが、私を勇気づけてくれるのです。いつでも気持ちよく協力してくれます。良い会社の中で、良いグループの人達に囲まれ、私は本当に幸せ者です。「良い人」とひとくちにいって

も、人間同志ですから意見の違いも出てきます。でも私は、グループの一人ひとりの人間的良さを、いつも信じてあげなくてはいけないと思います。一時の自分の感情だけで、人を判断しては絶対にいけないと思います。

三名のチーフの中で一番若い二十代になったばかりの私にとって、今の職務は重荷になることもあります。部品の調達、生産方法、検査、出庫と、いつも与えられたものを自分の判断と責任によって選ばなければなりません。一つ気をゆるめ、仕様書通りの品物でなければ、お客様お得意様にごめいわくがかかります。正しい満足のいける品を送らなくてはなりません。

そして私生活の面でも若い私たちは悩んで壁につきあたってしまうことがままあります。そんな時グループの人達皆に相談します。皆一生懸命、自分のことの様に考えます。私たちはまだまだ自分の道を発見し、他にはない独自の道を切り開かなければなりません。

私たちにとってはこの職場は重要です。そして会社にとっても私たちはなくてはならぬ一人ひとりであると思います。人手という古い考えから放れ、会社組織の中の一部となり、信じてもらえれば、その信用に答える仕事をしなくてはいられません。一つの半田付けもとても大事に思います。

私は今まで、こんなに強く、働くことの厳しさと仲間のいる楽しさを思った事はありません。私は思います。私たちはお互に勉強し話し合って、今仰ぎみるあの高い青い空にとどくよう、

生きる限りのびていくような生きいきとした生活をしていきたいと空に向って思うのです。

以上が私の作文である。

そして、第二に私は大人の眼で現在の社会をみたい。○平和共存をとなえる反面、南ベトナム、コンゴのゆれうごく不安な顔、○不況にあえぐ一部中小企業者の顔、○米軍横田基地を持つ福生住民の顔、その中で私は、したいことが沢山ある。自分にどれくらい力があるかためしてみたいし、あたり前のことを、あたり前のこととして受けとる前に何かみつけ出したい。

私は、今までの大人が生きてきたより、もっとすばらしい私なりの生き方をしたい。そして、自分が大人の世界に入っているにたり得るだけの価値を発見したい。

今日、私たちの成人を祝って下さった町の方々のお気持ちを忘れずに、この大人と認められた初心を忘れず、その大人の世界の中で、子どもの美しさを持ち真剣に生きたいと思う。

世界の破滅という悪夢は消えつつある。そして平和共存が原則になってきつつあり、低開発国の民族主義もしっかりと地についてきた。世界が平和である事の喜びをかみしめ、夢を大きく持ちながら、一瞬一瞬に真剣でありたいと、成人式を迎えた私は思うのである。

いまから、ちょうど、十五年前の文章である。この筆者、柿沼八千代さんは昭和二十九年から三年間、福生第一小学校でおなじ教室で勉強した仲間であった。わたくしは、この教え子たちに

教えられることばかり多い日々をすごしていた。

いま、この八千代さんは二児の母親として、子どもにも、そのご主人にも尊敬されつつ、人もうらやむよき家庭をつくりあげ、ゆたかな、みのり多い人生を送っている。

十三、子どもたちの作品

わたくしは、この福生一小で子どもたちが作文や日記や詩をかくことが、その教育の上でいかに大切なものであるかということを、常に身近かにあってご指導をいただいていた岩下伴蔵先生加藤哲郎先生から、ていねいに教えていただいた。そして、そのことを常に念頭におきつつ、文集・詩集づくりにあけくれた多くの日々をなつかしくいま思いみている。それらの中から、その作品のいくつかをひろってみたい。

げっこうかめん

一年　ながい　まさひで

げっこうかめんが、
ばん、と、てっぽうでうちました。
てれびでみました。
たあっていって
きえました。
げっこうかめんが、
とおくにでてきました。
ころしやえくすが、
くやしがっておいかけました。
だいいっかんのおわり。

（昭和三十四年）

鉄棒

三年　清田　孝太郎

てつぼうができない。
手がいたい。
いくらやっても
できない。
富士山がさかさまで
いくらやってもだめだ。
野口君に
おっぺしてもらった。
やっとてつぼうにとまった。
富士山が
まっしろく、でっかくみえた。

（昭和二十六年）

水のかげ

三年　田村　盛一

ばけつの水のかげが
天じょうでゆれている。
あれは、
くじゃくだ。
くじゃくがあたまをあげて
こっちをむいた。
くじゃくが
ゆっくりはねをひろげた。
くじゃくのはねがひかっている。
すうっと
くじゃくがきえた。

（昭和三十五年）

ミミーの日

三年　真柄　健

ミミーにかしをやろうとした。
ミミーはしっぽをふりながら
ぼくにとびついてきた。
ぼくは、
ミミーの前足を手でささえてやった。
ミミーはぼくの目をみた。
ミミーの目はテレビのようだ。
ぼくの目が
ミミーの目の中にあった。

（昭和三十五年）

川原

四年　森川一明

いいなあ、
空はまっさおの
ひゅうひゅうだし、
いちょうはどんどん
みどりになるし、
川原に人があそんでいるし、
宿題はやっちゃったし、
あしたは日ようで十二天だし、
あーあ、
ひとつ、ひっくり返ってねてやろう。

（昭和二十七年）

新らしい自転車

四年　巻田文男

おかあちゃんが
病気でねている。
おれはまいばんおとっちゃんに
新しい自てんしゃがうれたかときく。
おとっちゃんは
ううんとくびをふる。
うれないんだ。
きょうもおれは
店ですわっていると
アメリカの兵たいがはいってきた。
まわりをぐるぐるみて
家の新しい自てん車をさわっている。
ていねいにさわっている。
おれはかうのか、
こんどこそかうのかと
胸がどきどきした。
アメリカの兵たいは
だまっていってしまった。
もう今月は
うれないらしい。

（昭和二十七年）

おとっちゃん

四年　阿部　勲

がっこうへくると
みんながおれのかおをみる。
へんなかおでみる。
おれのことをおとっちゃんという。
おとっちゃんという。
おとっちゃん。
おれのズボンだ。
おれのズボンがおかしいんだ。
おれのズボンは
かあきいろで上がふとくってだぶだぶして
下がきゅっとほそくって
おまけにそこにあなぼこがあいて
ひもがとおしてあるんだ。

そうしてでっかいつぎがある。
それだからわらうんだ。
それだからおれのかおをみてるんだ。
おとっちゃん。
それでもいいんだ。
これでもこのズボンは
かあちゃんがかあちゃんの手でぬったんだ。
おとっちゃんが死んじゃって
かあちゃんがはたらきにいっている。
わらわれたっていい、
わらわれたって
はいてゆくんだ。
このズボンは
かあちゃんがぬったのだ。

（昭和二十七年）

おとっちゃん

五年　矢沢年道

おとっちゃんは
おれに
「はやくでっかくなって
とうちゃんのあとつぎをしろよ。」
という。
おれは、おとっちゃんが
よっぱらっているから
「うん。」という。
おとっちゃんは
おれのかたをたたいて
「いい子だ、いい子だ。」という。
よっぱらってても
おとっちゃんの

ふとくて、でっかい
ゆびの一つ一つが
おれのかたに
がくんと、つよくぬくい。

（昭和二十七年）

みさ子

五年　矢沢年道

三つの
みさ子は
おれが
「やざわみさこ」
なんてよぶと
「ハイ。」
とへんじをする。
「百てん。」というと
おかめを
おどってるみたいにして
足をばたばたさせて
うれしがる。

（昭和二十八年）

うなぎ

五年　中丸武

どうなかも
じんばらも
あたまも
ほねも
べつべつになってんのに
ぴくぴく
うごいてやあがる。
まったく
いきのいいやつだ。

（昭和二十八年）

水あび

六年　矢沢年道

「金子ー、はやくとびこんでこおよー。」
「おーい、いまいくどー。」
「それー。」
「あっぷ、ひゃっけえ。」
「おれのあとをついてくんだあぜ。」
高久も野口もついてくる。
みんなおれのけらいのようだ。
「ぶーぶー。」いってらあ。
「おーい、金子ーう。」
太陽が水にくだけて
げんとうをみているようだ。

（昭和二十八年）

まきわり

六年　松本勝良

おらがじゃあ
まきわりは
おれのしょうばいのようなもんだ。
ふといならの木がスカーッとわれて
まっしろい肉がみずがでるように
ポロリッとたおれる。
からだ中がじくじくする。
あせがふきでる。
しんぞうがどっきどっきする。

（昭和二十八年）

週番

六年　唐渡洋子

今週
はじめて週番になりました。
左のうでに
赤と白のわんしょうをつけるのです。
週番は
いばってはいけないのです。
やさしく注意してあげるのです。
「そこの窓をあけて下さいね。」
「そとへ出て下さいね。」
私は
きょうから週番です。

（昭和二十八年）

とびこみ

六年　田辺英昭

ヨッ、あっ、だめだ。
やっぱり、とびこめない。
白いあわが台の足を
もっこもっこあらっている。
おれは、とびこみ台の上へしゃがみこんだ。
「だらしがないぞう、英昭、
とびこめ、かまわずとびこむんだ。」
と、田嶋先生がおよぎながらどなる。
ヨーシ、いま一回。
おらあ、目をつぶった。
ウッ、アッ、パシャーッ。
とびこんだとびこんだ。
おらあ、太平洋へとびこんだ。

海で

六年　中丸　武

あの時、
海の水が白くひかっていた。
われかえる
海に向って先生の声。
「いいか、
おかあさんと大声で言おう。
一、二、三、それっ。」
一組の者はみんなおどりあがった。
「おかあさーん。」
三回つづけたあと、
「おとうさんと言おう。」
「おとうさーん。」
みんなが地ひびきするように
どなった。
おれはいわなかった。
ただくちびるをかんでいた。
やっと二回目に
小さい声で言った。
三度目は言った。
でっかい声でだ。
おとうちゃんがいないからだ。
八年まえ、いおうとうで死んだ。
こんなに
白い海がみえたかもしれない。
おれは言った。
たたきつけるようにどなった。
「おとーさーん。」と。

（昭和二十八年）

ねごと

六年　矢沢　恵美子

「えみちゃん、
　まだ毛布のとりっこをしてんの。」
急に左からきこえてきた。
土屋さん。
私はブーッとふき出した。
でも、
「まだ毛布のとりっこをしてんの。」
と考えた。
土屋さんは学級委員。
一学期から児童会や総会で
一組のためにがんばってきた。
至楽荘へ来て
ひるねしててもこの学級のことを
考えているのかもしれない。
土屋さん。
土屋さんはいい人です。
だまってそうじをします。
きょうも、
だまって、えんの下の下駄を
そろえていました。
何もいわないでわらっているのです。
土屋さん。
口をパクパクとしたと思ったら
また、
「えみちゃん、
　まだ毛布のとりっこしてんの。」
といった。

（昭和二十八年）

おばあさんいますこし

六年　井梅　ミチ子

「おばあさん、
　この次にゃあ、きっとくるよお。」
私は
耳のところで、でっかくいった。
「へえへえ。」
と力がない。
おばあさんは、
やつがしらをむく手をやめた。
「ことしは、
　いもはだめだけどや
　ひとりでくうだからや
　ちっとんべえでもいいだや。」と
いいながら、
「ははあ。」
と、ちっちゃくわらった。
ごそごそのえんがわで、
しわだらけの手先から
むきだされたやつがしらは
ちっちゃかった。
川に夕日がうつって
金色にくだけている。
けさのラジオはあかるかった。
興安丸がくる。
八百人かが
八年ぶりに
日本の土をふむ。
だが、
森田、

いくらさがしても、
新聞には
森田という人はいない。

川むきの
むいから屋根の
トボッとくらいこの家で
たったひとり
シベリヤからの子どもを
こんどこそ
こんどこそとまって、
このおばあさんは
八十三になった。

（昭和二十八年）

家にいる弟へ

六年　唐渡洋子

けんじ、わかったよ。
海の水がしょっぱいのはねえ、
川がはこんだ
水の中に塩分がふくまれているんだよ。
その水分がじょうはつして
こんなにしょっぱくなったんだよ。
それは、
千六百億年もの長い間
かかったんだよ。
ねえさんは
千六百億年も前からの
このしょっぱい海で
あしたもおよぐんだよ。

（昭和二十八年）

ウマオイ

六年　酒井利昇

えんがわで
ウマオイが
スイッチョ、スイッチョと
かなしそうな声でないている。
お月さまが金色につめたい。
おれは、
「ああ、ないてるなあ。」といった。
おかあちゃんは、
「きょうは、ひるまもないていた。」
といった。
おれは虫のかごをみた。
いっときなきやんだが、
すぐまたなきはじめた。
からだをふるわせてないている。
夜空にむかって
力いっぱい、だれかをよんでいる。
おれは、
このウマオイは
今夜、
死ぬんじゃないかなあと思った。

（昭和三十三年）

おじいさん

六年　矢沢年道

一

おじいさんは死んだ。
うすぐらい電気の下で
いきをひきとったのだ。
六月一日、
それは
べっとりとたたみがおもかった。
とうちゃんはいない。
とまりがけの仕事だった。
おかあちゃんは
のどを
ゴクーン、ゴクーンさせながら
「どうしたんだよお、
どうしたらいいんだよお。」と
ただ
うろうろしていた。
せんこうが
フラーリ、フラリ
まっすぐに
とんではきえていった。

おじいさんは
いきをひきとる時、
たったひとこと、
「おれが死んだら
あんな
あんな
あ、あのはたけを大事にな。」
と胸から声をふり出した。

二

おじいさん
あれから三年たちました。
おれは
こんなにでっかくなったけど
おじいさんが
あんなに大事にと思っていた
あのいなり様のはたけは
間もなくかわれて
赤線という場所になりました。
バーというものが
いくつも
いくつも
たってしまったのです。
今は
後藤山から
夕もやがおしよせるころ
そこは
アメリカの兵隊でごたごたし、
やがて
夜になると、
赤、青、黄、緑の
ネオンサインが
ギラッ
ギラッ
ついてはきえ
きえてはついて、
レコードの
はらわたを
ひっかきまわすような
音楽が
ひっきりなしにながれてくるのです。

三

おじいさん、
おじいさんが思っていた福生とは
すっかりかわった福生になりました。
やく師様の森で
おじいさんは
今、
どんなことを考えているのです。
きっと
年道は、
秋にはあのはたけで
とうちゃんと
仲よくさつまほりをし、
春が近づけば
くろい土に青くのびた麦畑で
まくりあげる北風を
首ねっこにうけながら、
せなかをまるめて
ズックズック
麦ふみをしているにちがいないと
思っていることでしょう。
でも
今はそうではない。
おじいさん、
そうではないのです。

（昭和二十九年）

筆者の新任当時
（現瑞穂町立瑞穂第三小学校長）

第三話　基地の町

「昭和18年ごろから、疎開者の移住、終戦後は横田基地を目ざして方々から集まった営業者、戦災のため家を失った人々が住むための都営住宅の建設等によって、町の人口とともに、小学校の児童数も年々に増加した。昭和16年に九四三人、23年には一〇九四人、26年には一三二二人と増加の一途をたどり、したがって二十一の教室では収容しきれず、二部授業を実施するようになった。26年一〇月には、牛浜、原ケ谷戸、志茂を学区域として福生第三小学校が設置され、当時の児童数は四百人余で、校舎が落成するまで、二階建表校舎を仮校舎として、一時同居の形で発足した。

いよいよお別れの朝、第一小学校の職員と児童が正門まで両側に整列する中を、別れ去る学友、教え子、見送る人々の目にも、別れ行く者の目にも涙が光っていた。」

福生一小記念誌「九十年」より

これまで、小学校といえば、福生（一小）と熊川（二小）の二つだけだったものが、こうして町内に初めて学校が増設された。だが、この新設校の歩んだ道は、はなはだ険しかった。

今までの学校ならおちついて勉強ができるのに、なにもかも不備だらけの新しい学校に通わせ

るのはいやだ、という新学区編入反対の声も大きかった。PTAはその設備不足を補うべく、労力奉仕をはじめ、あらゆる協力を涙ぐましいまでに買って出た。

新開地に移住してきた住民にとって生活はきびしく、一部の町民に、米軍人相手の夜の女への部屋貸しが流行した。そのため環境悪化を招き、その浄化運動にもPTAが立ち上った。青年団婦人会もこれに協力した。28年のことである。（左の記事参照）「学校が二つ、総戸数百軒という静かな地区に夜の置屋が半数近く四十軒も出来たのでは青少年の教育に悪影響を及ぼすと、地区の有志が立上り浄化運動に乗出そうとしている」という新聞記事となった。

こうした町民の動きの中で、それら風紀上の営業関係を、一定の地域に集めることとなり、赤線の設定となった。この赤線は、一小の学区域内であり、米軍人とその家族相手の店舗も増加した。このころ、福生駅周辺の商店街も、活気を呈してきた。基地勤務のため福生に移住してくる人も増えた。

地元民が街の浄化運動起す

"夜の女"の一掃期す

福生町牛浜で請願書提出

29年ごろからハウス（米軍人用貸家）の建築も目立った。この年あたりから数年間は、年間二、三百戸のわりで建てられていた。

週刊紙等で、福生のことをとりあげ、『基地の町・赤線の町』とはやしたてた。

おもなできごと

一九五二（昭和27）年

7月　第一五回オリンピック大会（ヘルシンキ）に日本参加する。　11月　福生町教育委員会発足する。

一九五三（昭和28）年

2月　NHKテレビ放送開始する。（8月に民間テレビ放送も）　7月　朝鮮戦争終る。

11月　福生町風紀取締条例を公布する。

一九五四（昭和29）年

7月　福生町簡易水道各戸給水が開始される。防衛庁、自衛隊および新警察制度発足する。

一九五五（昭和30）年

4月　福生第一小学校で給食実施する。月二四〇円。（9月には第三小学校でも実施する）

7月　砂川町民大会（基地拡張反対決議）、9月　強制測量開始。

『第三話』では、つぎの皆さんに寄っていただいた。

出席者

（福生第一小学校27年度より30年度にわたる卒業生）

井上知加子、榎本末智代、川島静雄、坂本昭、佐藤清子、清水俊勝、清水敏子、関谷昌代、竹島紀子、原島初子、細渕弘子、村木勉、持田巽、山本光子、（第二小）佐伯公子、（第三小）木村幸子

おけいこに、四つも通った子も

はじめに、つぎの質問に答えていただいた。

一、兄弟は何人ずつだったか。

平均三、八人。最多六人、最少一人。

一、家族旅行（一泊以上）に連れていってもらったか。——全員なし。

（日帰りでは）——ありが二人だけ。一人は鳩の巣へ、一人は上野動物園へ。

一、家の手伝いは、どんなことをしましたか。

男・水くみ、風呂たき、まきわり、草むしり、畑仕事。

女・水くみ、子守り、店番、風呂たき、草むしり、家畜のせわ。

水くみは、ほとんど全員がよくやらされたようだ。

一、子どものために、家の中に備えられていたものは。

勉強机（個人・共用ともで）一四人。勉強室（共用で）一二人。家族ともにのラジオは全員あり。テレビあったが一人。

一、おけいこごとは何かしましたか。

珠算だけが九人、珠算と習字一人、珠算・習字・バレーが一人、珠算・習字・日舞が一人。

珠算・習字・絵・バレーが一人。なにもなしが三人。

一、誕生祝いはやってもらったか。

七人がやってもらった。そのなかみは赤飯やまぜご飯をつくってもらったがほとんど、一人だけ友だちの家へよばれておみやげももらったりした。九人はなにもなし。

一、クリスマスプレゼントをもらったか。

一人だけあり、なにをもらったか不明。これより前の年代ではこれは考えられなかった。

一、学校の教科書のほかに愛読書はあったか。

女子は少女クラブ・少女をほとんどとっていた。男子は少年クラブが一人、他はなし。

一、家での親のよび方は。

一三人が、おとうちゃん・おかあちゃん。三人がおとうさん・おかあさん。

一、お店へ買いものに入った時は。
男・全員が「売ってくれえ」
女・三人が「売ってくれえ」八人が「ちょうだいな」
一、川へ魚とりにいきましょう、というのは。
男・全員が「川へよう（魚）とりにいくべえー」
女・べえべえは二人だけだった。

まだ、父親上位

あと一つの質問にも答えてもらった。
一、父と母ではどちらがこわかったですか。
男　父がこわい三人、母がこわい二人。
女　父がこわい八人、母がこわい三人。
一、父親がいつもうるさく言ったことばは。
男に　○仕事を手伝え。○あいさつをしろ。○きまりよくしろ。○きちんと座って食べろ。
女に　○店を手伝え。○早く帰ってこい（遊びの時）。○きちんとして食べなさい。
一、母親がうるさく言ったことば。

男に　○弟を連れていけよ（遊びの時）。○勉強しなさい（宿題を）。○この弱むし。
女に　○女らしくしなさい（ことばづかいに）。○子守りをしなさい。○行儀が悪い。
一、当時ほしくても買ってもらえなかった物は。
男　皮のグローブ・自転車・ズック靴。
女　長靴・皮靴・人形・本・こうもりがさ・自転車。
一、タバコを吸う女の人を見て。
男　商売女。嫌悪感。べつに何も感じなかった。
女　不良だと思った。そういう人はあまり見かけなかった。
一、遠足でむすび飯をあまらせたら。
○あまったことがなかった。○あまったらもちかえって家で食べた。
一、先生との会話は敬語を使いましたか。
敬語だった。（放課後だと、友だちと同じようなことばで話した、というのが一人）。
一、横田基地を（または米兵を）どう思っていたか。
○店番をしていてチョコレートやガムなどもらった。ジープが通っただけでもこわかった。
○ぜいたくをしていてうらやましかった。その家の子と遊んだりした。
○基地はうるさいと思った。

【座談会】

自然

司会　皆さんのころは、まだ多摩川で泳げたの？。

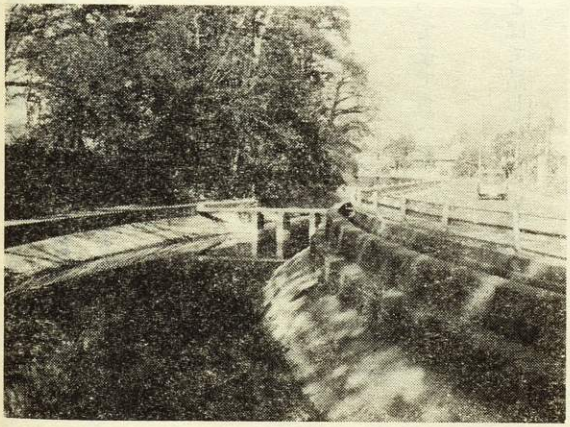
○夏は毎日行っていたんです。そのころの泳ぎ場は多摩橋の下、柳山、渡船場の下（永田橋）、長徳寺の下なんかが深かったですよ。

○羽村へゆくと、向うのやつらにいじめられたな。

司会　水着なんかはどうだったの。

○男は、小学生のうちはほとんどがフリキン（パンツなし）だったな。鵜原（臨海学校実施地）へ行くようになってから、みんなパンツかフンドシをつけるようになったんだよ。

○わたしたちも、それまではパンツだけで泳いでいて、臨海に行くので水着を買って、それからは水着



このあたりで、監視の目をかすめて泳いだ。

で泳ぐようになったんですね。

○俺たちは、おほり（玉川上水）で泳いだよ。

○女の子でもあそこで泳いだ子がいましたよ。

○おほりで泳いでいると監視の人がまわってくるんだね。見つかるとたいへんだ。前回の人たちの中にも、着物をとりあげられちゃった人のことなんかあったけど、俺たちはそれのために、ぬいだものを、監視の人のくる反対岸においといたんだ。監視の人が気がついて着物をとりあげようとしても、橋をわたってぐるっとまわんなけりゃあならない。そこで俺たちはさっと逃げちゃう、というてをつかってたんです。

○わたしは熊川だったので、拝島の駅に近いほうの、上水のあたりで泳いだんです。そこの鉄橋からとびこみをするのがおもしろかったですよ。あの辺は流れがかなりはやかったので、泳ぎに自信のある子でないとあぶなかったんです。電車が鉄橋を通るとすぐに線路にあがって、そこから飛びこんで、ということで遊びました。

司会　かなりおてんばだったんだな。

○男の子が多かったけど、その中にまじって遊んでいました。

司会　多摩川で釣りもやったんでしょ。

○泳ぐか、そうでなけりゃあ釣りかでしたからね。いまのように入漁料なんてなくて自由に遊べ

ましたね。

○松本さんとか佐藤さんのおじいさんたちが、まだ鮎漁をしていたんだね。それを見ていて、網を寄せるのを手伝うと、あとで小さい魚を分けてくれたよ。

○子ども会のお母さんたちが、すいかわりをやらせてくれたでしょ。

司会　小学校のＰＴＡが24年にできて、いろいろ活動をはじめた。その中に子ども会というのがあって、その役員さんが出てくれたのだろう。地区の子どものために、脱衣所をつくったり、泳ぎの場所で見張りをしてくれたり、というようなことが、このころから始まったんだろう。

○今の子のようにプールで泳ぐのとちがっておもしろかったけどこわいこともあった。泳ぎに行くにも近所の連中でまとまって出かけた。泳いでいると、上級生にいじ悪されてね。いじめられながらむりやり泳ぎを覚えさせられた。石を深いところへ投げて「拾ってこい」と言われる。やっと拾ってあがろうとすると顔をおさえつけられて、ぶくさせられる。それでも仲間はずれになるのがいやだから、泣きながらでも泳ぎまわっていた。

司会　サワガニもまだとれたかね。

○近所の子たちみんなで行きましたよ。豊坂の方なんかね。

司会　まだ、男と女と別行動でしたか。

○男と女と一緒でも、なにも言われなくなってたね。中学生はそうはいかなかったでしょう。

○わたしもみんなのあとについて行きました。男の子と一緒だったね。

○前の人たちが言ってた、サワガニのいる所は、ぼくたちもみんな行きました。

司会　蛍がりもさかんだっただろ。

○たんぼの方や上水のあたりにいっぱいいたから、みんなで行きました。

○長沢あたりでは、そのころイタチがいたんですね。鶏をねらって出てくるんだ。

○虫とりに柳山へよく行きました。羽村の、まいまいず井戸の方までガチャガチャを取りに行って、羽村の子とけんかをしたりしましたよ。

○春はたんぼの方のれんげがきれいでね。れんげつみなんて楽しかったね。

○わたしは第一小学校の庭で、糸を通した針をもって、桜の花びら集めをしました。地面にいちめんにおちている花びらを、一枚ずつ針の先にとおしていくんですが、糸が長いとなかなかいっぱいにならないですね。友だちと競争で暗くなるまで集めました。その日はきれいなんですが、一夜明けるとふちが黄ばんじゃって少しがっかりだったんです。できあがったのを輪にして、ハワイのレイのように首にかけて遊びました。

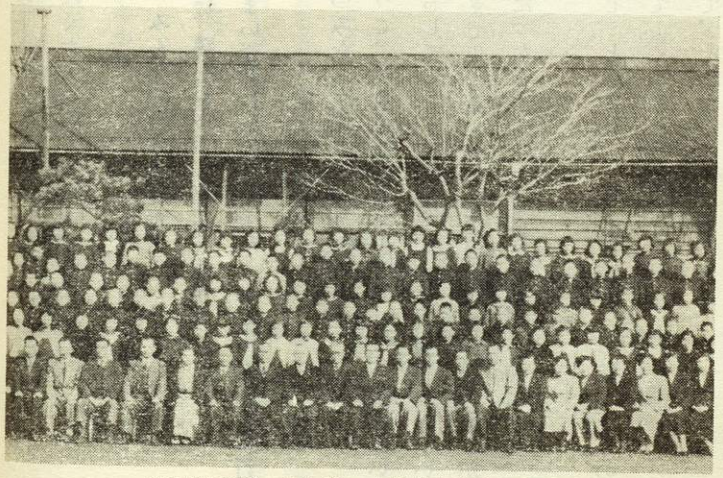
○夏には、その校庭でセミとりをしたよ。アブラゼミとかミンミンゼミとかとったね。セミの目をつぶしてはなすと、その飛びかたがおもしろくてよくやった。

○秋には校庭の水たまりに赤トンボがいっぱいきて、それをホウキで追ったな。

○おおきい、いちょうの木がきいろになって葉が落ちてくると、その葉っぱを集めました。
○むかしの学校は、夕方なんか本当によい遊び場で、子ども天国だったよ。
○夜は度胸だめしに集められて、便所の怪談なんか聞かされて、そこへ行ってこいなんて。
司会　ひとだまとか、狐の嫁入りなんて見たかね。
○知らないですよ。
○わたしは家の近くでひとだまというのを見ました。
司会　関谷さんのほかには見た人がいないんだね。

学　校　で

司会　戦後すぐの先生たちは、とてもこわかっ



昭和28年度　福生第一小学校卒業生と職員

たようだけど、まだきびしかったですか。
○こわかった、こわかった。教室でもみんなピリピリしていましたよ。
○職員室へ入るのは本当にいやだったね。模範生はよかったけど、俺たちはだめだった。戸をあけて、ちゃんと礼をして入らないとおこられた。
○俺は授業中遊んでいて、廊下へ立たされた。バケツへ水を入れて持ってたよ。
○俺は竹ん棒のムチでひっぱたかれた。
司会　女の子もやられたかね。
○女子はあまりやられなかったんでしょう。
○わたしたちのクラスで、男子が先生をバカにして、それで先生がおこった。そのあとみんなでゴトウ山（福生病院の先）の方へ逃げちゃったんです。二時間ぐらいそこで遊んで帰ってきたときは、男も女も皆立たされました。
司会　教室での並び方は、男女同席かね。
○クラスによってだけど、男と女と交互だったじゃないの。
○俺たちは女と並ばされた。机の上へ線をひいて、こっちへくるな、なんてやっていた。
司会　先生との話しぶりはどうでしたか。
○休み時間なんかは、気楽に話せたわね。

○ことばづかいも、今の子ほどじゃないけど、かなりざっくばらん調だったでしょ。
司会　給食の思い出は。
○袋におわんを入れてそれを下げてって、脱脂粉乳の、まずいのを飲んでいました。
司会　臨海学校は、どうでしたか。
○行きました。あれはもう最高に楽しかったですね。今思い出しても、うきうきしちゃいます。
司会　奉安殿のあとは、まだ残っていましたか。
○奉安殿って、なんですか。そんなものあったんですか。
司会　今、一小に体育館が建っている、あの辺に奉安殿があったんです。中には教育勅語や、天皇の写真など入っていました。神殿のようなつくりで、まわりも神社の森のような感じにしてありました。戦時中は、校門を入る時、そちらに最敬礼をして通過させられたんです。
○そのころ、男の先生でね、毎朝門のところで立ち止まって、そっちの方向におじぎをしていた人がいましたよ。
司会　前回の人たちの時は、まだその跡がはっきり残っていたんだが、じゃあ皆さんの時はもうそれもきれいに片付けられたわけですね。二宮金次郎の像はどうでしたか。
○あれは知っていました。でも台だけですよ。金次郎は消えていました。
○我々のころは、金次郎より、宮沢賢治の詩でした。毎朝読まされたんです。

司会　先生にいたずらはしかけたかね。
○前の人たちがやったようなことは、ひととおりやりました。私たちのころは、廊下をすべりやすくするために、豆腐のオカラでみがいたんです。
司会　そうかね。オカラは立派な食糧だったですよ。こんなことに使えるほど、食べものに余裕がでてきたということかね。それでは、配給キップというのは知ってたかね。
○パンの配給というので、土屋パン屋さんへ並んだおぼえはあります。うどんなんかも自由に買えなかったと思ったね。衣類などのキップは知りません。
○パンも粉をもってゆくと交換してくれたんです。配給の米を、一升ビンにつめて、棒でつっついて白くしたのを知っています。マッチも配給で思うように使えないから、ツケ木なんていうのを使いましたね。
○履物はほとんど下駄だったですね。上履にはぞうりを使っていました。ぞうりの裏は自転車のタイヤの古いのが使ってありました。
○運動会も、みんなはだしでしたね。運動会のまえには、庭の石拾いを何回もやらされました。
○あのころ、靴をはいていた者はいなかったろう。運動靴なんて、知らなかったよ。
司会　三小ができて、一小から分かれて行った中に、ボクシング世界チャンピオンになった、海老原博幸さんがいたんだね。

○俺は小さい時、海老原とよく遊んだよ。銀座通りの、いま穂高という店のあたりが、空地だったんです。あの辺で、ベーゴマをやったり、川原で遊んでいて、けんかをしたりしたんです。

年中行事

司会　四季の行事を追ってみましょうか。まず、新年は、式に、学校へ行ったんですか。

○元日に行って式がありました。年賀状がいくらかはやり出したんでしょう。

司会　初午は、覚えていますか。

○近くに稲荷様があったので、そこへ行ってごちそうになりました。

○本町のあたりでは、そういうことはあまり知らなかったですよ。

○熊川のわたしたちは、天神講でごちそうになったのが楽しかったです。ＰＴＡのおばさんたちが出て、ごちそうを作ってくれたんです。

司会　天神講というのは、旧の福生地区では加美の一部を除いて、ほとんどやらなかったでしょう。熊川では、南・内出の方で昔からのやり方がうけつがれてきたようです。戦後は、第二小学校のＰＴＡの子ども会などで、やってくれたところもあるようです。ひな祭りは、どんなでしたか。

○ちゃんと人形を飾ってもらったのは覚えているけど、友だちをよんでとかいうようなことはやりませんでした。

○春は、羽村のせきのお花見には、みんなで行きましたね。

司会　夏休みは、七月末からでしたか。

○二十五日からだったろ。登校日がとても多くて、よく学校へ行きました。

○臨海学校はたのしかったな。ラジオ体操もよく行ったよ。

○神明社のところのお祭りで、舞台がかかって芝居なんかもあったな。あれは秋だ。

司会　七・五・三はどうだったの。

○今みたいに、はでではなかったけど、リヤカーなんかに乗せられて、着物はたいてい上の子のおさがりなんか着せられてね。それでも嬉しかったね。

○うちは履物の仕事をしてたんですが、あのころボックリがなくて、父や母がずいぶんさがしまわったそうです。

社会と子ども

司会　今は名物になっている、商店街の七夕祭りがはじまって間もないころだったけど、そのころはどんなだったかね。

○コヤマのあたりに飾りが出ていたのを覚えているけど、今のようでなくあっさりしていました。

○雨の降ったあとでその下を通ると、着物がよごれたんです。飾りものは紙でできていて、色が雨でおちちゃうんですね。まだまだ、夏祭りの方が賑やかでしたよ。

○あのころは、七夕が七月で、学校のテストの時期と重なっていました。おちつかなくてね。

司会　駅前といえば、年末の羽子板市なんかどうでしたか。

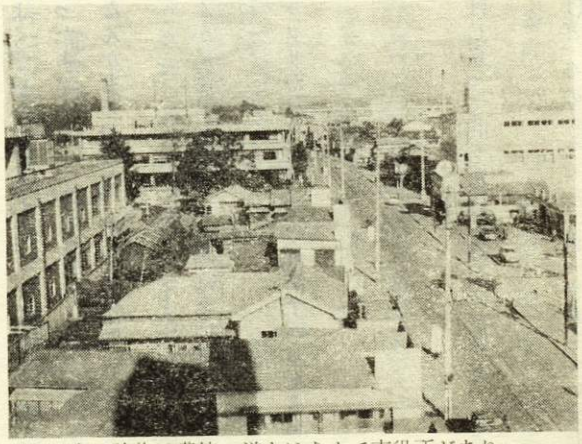
○そういうのを覚えていないですね。

○堀田薬局が焼けたことがあっただろ。あれはよく覚えてる。でかい火事だったよ。

○俺はあの時、小学校が二部授業だったから家にいて、すぐ見に行った。ふるえて見ていたな。

司会　ことばづかいは、まだべえべえだったの？。

○わたしは、うちが男の兄弟ばかりだったんです。その中で育ったからことばが荒らかったんですね。学校にいるうちは気をつけていたんですが、家の近くで遊んでいる時は男の子と同じにな



右の建物は農協、道をはさんで市役所があり、その間、遠くに見えるのが第一小学校

ってたんでしょう。ある時、学校の友だちがそこへきていてわたしのことを、「へんなことばだね」って言われちゃったんです。ショックでした。

○わたしは、外地からの引揚者だったんです。福生にきてから、そのべえが使えなくて、みんなに遊んでもらえなくて、いつも姉と二人でした。仲間のことを「あなた」なんて言うと、「わっ」とひやかされたんですよ。

○たしかに木村さんは「あなた」なんて使ってたわね。だから〝おたかい子〟なんて、わたしたちもついつい近づきにくかったのよ。

司会　子どもの社会で、土地っ子と、よそもん（福生への移住者）との差別というような感情は戦前はたしかにありましたね。戦後もしばらくはそれがあった。私のところの珠算へは、近隣の町の子が大勢きていたので、福生の子とそれらの子とよくけんかをしました。多摩川へ泳ぎに行っても、多西や羽村の子とすぐけんかになった。しかし、この感情も皆さんの時代までぐらいで、それからはもう、土地っ子なんていい方もだんだん消えたんでしょう。大人のつきあいでも、PTAや婦人会の中でも、同じことが言えたようですよ。

当時の『そろばん塾月報』（『月刊・ふっさっ子』の前身）で、つぎのようなことが書いてありました。

27年度の福生中学校卒業生の進路状況では、高校への進学者が46％、就職者が54％だった。内

訳は、全日制への進学が、男三九名・女二一名。定時制への進学が男女で三七名。就職と家事が一一四名となっていますね。

28年のお正月に、子どもに聞いたもので、「お年玉千円を、自由に使えたら」との問いに、買いたいものとしてあげたものは、こうせきラジオのセット・電気スタンド・グローブ・写真機・空気銃・手さげかばん・アルバム・トランプ、などです。かばんというのが多かったのです。

食べたいものとしてあげた中では、デコレーションケーキ・おしるこ・もち、が多かったね。

福生二小　昭和28年度文集『思い出』より

ここで、このころの子どもたちの作文を読んでいただこう。これらの文は、福生第二小学校の昭和28年度卒業生文集『思い出』から、使わせてもらった。

「日本独立のお正月」。こんなにしっかりした考え方を発表できた子もいた。

「天神講」。は、旧熊川村の地域で行なわれていた。戦前、この辺では、米の飯は子どもたちに最高のごちそうだった。戦後、食糧難のこともあって、子どもたちはよけい、こういう集まりを楽しんだ。ごもくめしを、おひるにふつうに食べて、また三時ごろにはおひると同じに食べた、という子どもたちは、さぞ満足だったろう。

「十二月一日」。によれば、子どもたちの誕生日を祝って、餅をついてくれたという家の

ことだ。自家の畑でとれた餅米をだいじにたくわえて、この日にそなえてきた父親の心がけで、こんなことがやれた、恵まれた家庭である。

「保育園へお手伝い」。クリスマスの飾りつけの手伝いをした話だ。個々の家庭には、まだクリスマスなんて行事はなにもなかった。こんなことからヒントを得て、クリスマスをそれぞれの家でまねする子どもたちの行事が、ひろまったことだろう。

日本独立の　お正月

第二小学校六年生　望　月　由美子

日本が独立して初めてのお正月、そのお正月元旦に私の所へとどいたお年賀、それは、石上先生からでした。石上先生の詩はこういう詩だ。

「お正月を迎えて私はこう思う。食べ物がないと言ってリュックをせおってさつまのかい出しにいった七年間、食べ物も着るものも、住む家も不足して、人々がとんがった顔をして、鼻つきあわせた七年間、日本のことを日本人が自由にできなかった七年間だけど、足かせがとれて、独立して、初めて迎えるお正月、今年の正月は七年ぶりに晴々として迎えるお正月です。今日の日のために、人にも知られず南の島や大陸のはてで、名前も知らず今でも知らないよその国に、さみしくねむっている人々のことを私たちは忘れずに『ありがとう』と言っておぞうにを食べよう。

昭和二十八年元旦」

先生の詩はこういうふうにかいてあった。私はこの詩を読みながら、私が五つの時、リュックサックをしょって、せんろを歩いていた時が一ばん心にひびいた。だれだってみじめな思いをしたでしょう。日本人だけでなくして、どこの国でもだ。でも今はちがう、七年前のお正月とはちがう。国旗をあげて祝う、今までのように外国にペコペコ頭をさげなくてもいいのだ。もう日本は独立したのに、遠い国から帰ってこない人がいる。これからの日本をきづきあげるには、一人一人が協力しなければ独立日本はできないのだ。今の私たちが一生けんめいやらなくてはならない。それでこそ日本のいいところが生まれてくるのだ。

天神講

石川菊子

今日は天神講です。私の家でするので朝早くおきてごはんをたべてしまった。八時ごろ六年生がきた。そして米をといできたり、いろいろなものをにたりした。いろいろなものがおわったのはまだ早かったので、みんなで火にあたったりしていた。そのうち十一時ごろになった。もう大勢庭などにきていた。十一時半ごろみんなで天神様へいった。一人一人がおがんで帰ってきた。おひるになったのでみんなを中へいれた。はじからちゃわんをあつめてもってやった。みんなお

いしそうにたべた。たくわんこうこもすぐなくなってしまった。

たべおわったものから外へ出てあそんでいた。一年生なんかあとまでたべていた。みんなでてしまって六年だけであとをきれいにしたりした。おわって六年生も外へ出てみんなであそんだ。おにごっこをしたりしておもしろかった。一時ごろから歌をうたったりした。ちいさい子がいくどもいくどもうたったりした。一時間ぐらいした。とてもたのしかった。

また三時ごろごもくめしをたべた。おひるにたべたくらいみんなたべた。もう三時半ごろはみんな帰った。あとをかたずけたり、そうじをしたりして、六年生だけで、そとであそんだ。

十二月一日

野島松江

今日はついたちだ。この月で今年もおわろうとしている。

私の家ではちょうど弘の誕生日なので、もちをつこうというので、お父さんがきたらすぐつけるようによういをしてお父さんがくるのを待っていた。やがて十五分、入口の戸がガラガラッといったのでいってみると、お父さんが帰ってきた。お父さんはお茶をのんでからはじめようといってこしをおろした。「これからお茶をわかすのか」「うん」といったら、お父さんはおこって立ちあがった。うすもようしてあったので、すぐにペッタン、ペッタンとつきはじめた。うす

ぐらい中を、きねの音だけがひびく。弘はこたつでいねむりをしている。きゅうに「だいふくだ」といったらとんできた。また、だいふくをつくって、弘の誕生日をいわった。

保育園へお手伝い

田中靖子

今日は学校の大そうじだ。朝礼がおわってから一年のそうじをしに、小山さんたちとかけて行った。生子さんがすすをとるのを作ってきたので、その竹ですすをとった。関谷さんがすすをとっているあいだ、みんなでまどをふいた

The Mainichi (日刊) 昭和28年2月12日

基地の町から夜の女

幼いながら批判の目

福生町某校の"クラス文集"より

真似をするから…

パンパンがふえるわけ

り、はたきをかけたり、中の物をろうかに出した。そうじが終って教室へはいって、図画やしけんの紙をかえしてもらってから、保育園へ女子だけクリスマスのよそおいをするのを手伝いに行った。保育園へきてみたら、もう三組の人たちはせっせとゆかをふいていた。私たちもまどやゆかをいそいでふいた。

福生新聞

各小中學校の夏期休暇行事

臨海学校の子どもたち

加藤哲郎

昭和三十年八月六日から十日まで四泊五日の臨海学校を、千葉県夷隅郡興津町鵜原の東京学芸大学至楽荘で行なった。福生第一小学校では昭和二十六年八月に第一回を、この至楽荘で福生第二小学校と一しょに実施し、以後は単独で毎年続けていた。第五回目の福生第一小学校の臨海学校であった。

第一小学校の臨海学校実施計画がそうであったように、この三十年八月の臨海学校も、これらの子どもたちが五年生であった、二十九年六月から準備が始められた。四泊五日の臨海学校に必要な児童一人の経費は一千二百七十五円で、五年生の六月から月々八十五円ずつ十五か月の積立て貯金をしていた。宿泊費、交通費、食糧、おやつ費、その他雑費であって、医薬品や臨海用備品、看護婦さんをたのむなどの、その他諸々の臨海学校経費は公費やPTA費等で補助されまかなわれていたことはもちろんである。

臨海学校の事前指導は例年のように、プール施設の設置されていなかった水泳指導は永田の川原に行って、渡舟場の多摩川で泳ぎ、児童一人一人の泳力の調査や泳ぎ方の指導をした。

出発一週間前には、横田寿照校医先生による身体検査を行なった。又、宿舎で使用する寝具の毛布や、じゃがいもを鉄道便で前もって発送しておいた。

まだこの臨海学校の時も、米・梅ぼしなどは児童が持っていったものだった。

六日の早朝に福生駅を出発し、青梅線・中央線・房総東線と乗り継ぎ約五時間かかって、午後二時頃宿舎至楽荘に到着した。この日は早朝からの移動で子どもの身体が疲労しているので海には入れない。宿舎内外の清掃、持ち物の整理、開校式、食事の準備の仕方、入浴の仕方、就寝の作業等の実施方を知らせるようにして夜を迎えた。

七日はうす日がさす曇り日であったが水温も高く、午前・午後とも海に入り、千葉県の外房である太平洋の海で泳いだ。しかし、午後はこの年の第十四号台風が本土に接近してきて波も高くなってきていた。

八日は朝からしゅう雨性の雨足の強い雨が見まい、宿舎の屋根に水けむりを立て宿舎のまわりに水たまりをつくったり、又、カラッと強い夏の陽射しの太陽があたったり、宿舎のガラス戸を風がはげしく鳴らしたりした。

海は終日荒れて水泳ができなかった。そこで予定を変更して、管理人の田中さんから、海や漁について経験談を二時間も話してもらったり、臨海学校子ども会を開いたりした。

台風は房総半島の南の海上を東北に去り、九日は天気も上がったが、海はまだ荒れていた。

九日午前中は、房総東線の鵜原駅から二つ駅を南下するとある小湊町へ行き、日蓮上人をまつる誕生寺や小湊水族館の見学遠足をした。

午後は水泳ができて、じゅう分にたのしんだ。

十日は宿舎をかたづけ、小雨の中を福生へ向って出発し、午後五時近く福生駅に帰ってきたが、福生の方はよく晴れた暑い日だった。

この臨海学校の体験を「ふっさっ子」の子どもたちはどう受け止めていたろうか。

★臨海学校実施を目の前にして

八月六日からの臨海学校を控えて、七月十八日に至楽荘管理人の田中才一郎さんに生活班代表者は、挨拶の手紙を出している。

田中さん、僕達六年生は、八月六日から十日までおじゃまします。はじめての臨海学校なので、さわいだり、あばれたりしてうるさいでしょうけれども、よろしくお願いいたします。

先生に聞くと、田中さんは漁師もしているそうですね。僕達は海のことをよく知りません。魚のえさはどんなのを使いますか。海にはどんな魚がいますか。どのくらいとれますか。さめはどんなにあばれますか。田中さんがとったタコの大きさはどのくらいですか。

僕達は臨海学校へ行って、一人もさびしさやくやしさの涙を出さないような、たのしい生活をしたいと思っています。おばさんにもよろしくお願いします。

坂本英雄・栗原弘

田中さん、こんにちは。私達は六日から十日までお世話になります。

鵜原でも、お祭りや七夕があると思いますが、福生のお祭りは、大きいみこしやだしがでます。七夕様は、かざりつけきょうそうみたいにして、一等や二等などときまります。鵜原へいったら、この話をもっとくわしくお話ししてあげますよ。

田中さんは、海の事はくわしいと思います。ひきしお、あげしお、魚の種類や魚がどんな食べ物を食べて大きくなるかとか、どうやって魚をとるかということを、くわしく知りたいと思いますので教えてください。おばさんやみなさんによろしく。

細谷マス子・松原春子

また、「これから自分が、また自分たちが行なう行動について、前もって考えることは、自分はなにをどうしたらいいかはっきりさせることなので、しっかりした行動をとる人になるために大切なことだ。」ということを指導されて、班毎に、出発までのこと、車内のこと、宿舎の生活の

仕方などについて相談し約束なども話し合っている。

★臨海学校へ出発・・・鵜原へ

「ゴウ、ドドウ、グウッ」と電車が止まる。どっと人が乗ってくる。「それ、それっ。」といいながら押し込んでくる。「あっ」と思った時、ぼうしのゴムひもが切れた。女の人と人の手にはさまれてひっぱっていく。「わっ、どうしよう」と思って、下を向きながらぼうしをさがしたがわからない。まっこちゃんが「都ちゃん、とっといてやったよ。」と、座席をとっといてくれた。「まっこちゃん、いまね、ぼうし、どっかの女の人にひっぱられてしまったの。どうしよう」と話した。最後のころになって森杉さんが、ぼうしを持ってきてくれた。「どうもありがとうと、いってきなよ。」とだれかが言った。私は中の方に行って「どうもありがとう。」とおじぎをしてきた。（細谷　都）

千葉から出ているガソリンカーは不便だ。線路が一本だし、車はガソリンで走るのだもの。電車はあまりなくて、のろいけど汽車よりよかった。いつになったらこの房総東線が電気で走るようになるかな。そのころには家も多くなって、人も多くなるだろう。田んぼがなくなっていくだろう。（大田永才）

ガソリンカーに乗って海のそばまできた。浜辺より少しはなれた所に田んぼがあった。見ると水がない。それなのにきちんと、福生の田んぼのいねと少しもかわらない。福生では水がないと育たない。こっちはどうして育つのだろう。海の水がしみていて、それで育つのだろうか。福生ではあんなに水があるのに、どうして育たない所があるのだろう。川の水と海の水とでは海の水の方がひりょうにいいのだろうか。（磯村　仁）

カタン　コトン　ガタン　ゴトン
ガシャン　ゴリ
ガシャン　ゴリ
電車の音が
いつか
おかあちゃんがくわを切ってる音にかわった。
おかあちゃん、
いまごろかいこに
くわをくれているだろうな。（坂本英雄）

ボストンバックを持って、ホームにおりた。千葉から三時間くらいのったので、ボストンバックを持つと、足がよろよろとくずれるような気がした。目の前に大きな山がどかっとそびえていた。あの山の下あたりに臨海学校があったら、すずしいだろうな。今ばんのおかずはなんだろう。そんなことを考えながら歩いていると、あんなに重かった荷物が少し軽くなった。

（中西美津子）

砂浜で「あっ、こんなおもしろい貝がらがあるよ。」とひろっていると、波がやってきて、げたにひっかけたりします。私は、はじめて海に来たので、波がよせてくるとおもしろがって、はいったりしました。お風呂にはいった時みんないっしょだったので、「きゃあ、きゃあ」いっていました。私は家のお風呂にはいる時には、手ぬぐいを入れてはいるので、私はいれてしまった。ほかの人はみんながはいるので、手ぬぐいをいれなかった。私は後にはいる人に悪いなと思いました。（細谷よし子）

臨海学校につくとすぐ、そうじにとりかかった。私はお便所のそうじだ。でも、つかれているので、するような気になれなかった。春日さんといっしょに水くみに行った。来たばかりで知らなかったので、ちゃわんをあらう所で水をくんでいたら、おじさんが来て「それは便所の

バケツだろう。」と言った。また「ここは、おちゃわんを洗うところだからだめだよ。おふろ場の水道でくみな。」と教えられた。（内田栄子）

至楽荘に来てかなしくなりました。そうじもやり、なにからなにまで自分でするのです。おかあさん、おばあさんはほんとうに大変なのだと思いました。家にいれば、おばあちゃんがやってくれる。きょうは、はじめてさびしくなりました。どこからふいてくるのか、宿舎の中は砂でざらざらでした。私たちは、ぞうきんでたたみをふきました。（及川知子）

磯遊びに行ったら、貝がらが砂の中にたくさんうずまっていました。岸のはじの方に、大きな岩があったのでびっくりしていると、田村先生が岩のことについて話をしてくれました。この岩は、海の中でできた「地層」だということがわかりました。私は海の中から、こんなに高くうき上がってきたことが、変でしかたがありません。（細谷マス子）

夜のごはん。みんなとおんなじおかずなのでうれしくなりました。マス子さんが「気をつけ、しせいを正しくして下さい。いただきます。」と言って、「いただきます」をして食べはじめました。大きいごはんのどんぶりの中に、まっ白いごはん。そのごはんの中に私のおかあさんの

顔がうかんできました。「文江、おたべ。」「うん、たべるよ。」と、心の中で思いながら、ゆっくりゆっくりかみしめてたべました。おかあさんなんか、家でせっせと働いているだろう。私たちは、こんないい所に来て、みんなといっしょに遊んだり、ねたり、ごはんをたべたりしている。しあわせだなあと思いました。おかあさんに、家に帰ったら、聞いたことや、見たことや、自分で思ったことを、全部教えてあげようと思いながらたべました。（森杉文江）

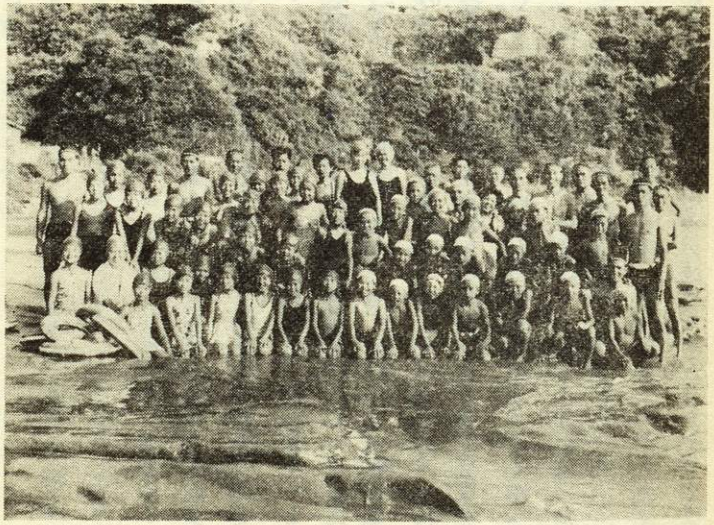
★太平洋の黒潮に。

臨海学校に来て、初めて泳いだ。みんな至楽荘ではだかになり、水泳パンツになって海へ行った。体操は生活班でした。泳ぐ時は、水泳班のA・B・C班に分れた。先生が旗を持って「ここから沖へ行くんじゃあない。」と言って沖へ行かせなかった。先生は、僕たちの命をあずかっている。僕たちは、先生の言うとおりにしなくてはいけないのだ。（田中和憲）

「そおれ、くるぞう。」
宮沢先生の声。
波がおれを

ぶんなぐるようにとっこんできた。
おれは、体をかたくして
きちがいのようにとび上がった。
波がおれを見上げた。
波なんか
ぶったたいてやるぞお。
（坂本英雄）

高さ一メートルぐらいの波。
水しぶきをあげて
ぼくの体にぶっつかってくる。
まけるもんか波などにまけるもんか。
きたな
足を前に出して
波よかかってこい。
体を前にたおして



鵜原の海岸にて　右から2人目が筆者

ザーザー、ビシッン
ぼくの顔にピシャン。
勝った勝った。
海の波に勝った。　（村木　勉）

ザザザザーざぶーんと、波がおしよせてくる。「ほうれきた。」つづけさまの二丁けんじゅうだ。こっちは二回つづけてはねかえる。そこへ小林まさえ先生が「校長先生、校長先生」と呼んだけど、校長先生は、海の中のぼくたちを見つめている。波の音で聞えないらしい。校長先生は、ぼくたちを見つめてくろ潮の波にあたっている。小林先生は、「校長先生」と呼んでいた。校長先生はやっとわかった。小林先生の方を見た。小林先生は「少し早いですが、かねをならしましょうか。」と言っている。そのうち小林先生は岸へ上がっていった。

今は波があらい。足がひきづられていくぐらい波が強い。いつもの波とちがう。早く岸へ上がるのだなと思った時、かねがなった。やっぱり校長先生も、早く岸へ上がるように言ったのだなと思った。（栗原　弘）

三回目の泳ぎが終って休みの時、やわらかくてふわふわしたパンが、ジャムをつけてくばら

れた。泳いで体がつかれていたので、もう一つ食べたいくらいおいしかった。

浜辺の水がくる所ですわっていた。波がくるとおしりの方の砂が、海の方へずずずずとさらわれていく。おしりがくすぐったくなる。立って見たら、おしりの下に穴があいていた。
（松原春子）

どどどーと大きな波がおしよせてくる。あ、波だと思うとたん、波はぼくたちを、大きな口をあけてるみたいにのむ。波はすぐそばにきた。うわとぼくはあわててとび上がった。おそかった。がぶり、うわーしょっぺえ。水をのんでしまった。又、波がきた。よし、あれがやぶれればと、その波の中にとび込んでいった。出きた。成功した。（久保田俊男）

ざざざざ、ぱしゃん。「わあ、またきた。」「波のいせいで、すうっといくからやってみろ。」大きな声でどなった。「あっほんとうだ。おもしろいな。」まっ子ちゃんが笑いながら言った。「こんど、手をつかわないで、泳いでみ。」と孝子ちゃんが、できるぽって言った。私はやったけど、少ししずんでしまった。だけど、できないなんて言うのはやだから、「できた、できた」と大声で言った。水ものんでしまった。からい、ものすごくからい。川の水では浮かないのに、海の水では、どうして浮くのかなと思った。（田中千代子）

臨海学校にきて、夜ねる時になると、家の者を思い出す。おかあちゃんにあいてえ。早く家へ帰りてえなあと思う。朝や昼間は、みんなと遊んでいるから思い出さないけど、夜ねる時、なんだかわからないが、家に帰りたくなる。（金本現祥）

八月七日の午後は波が大きく荒くなった。静かな午前中でも、海の中へ子どもたちを入れるとき、先生方は先生方の体が「注意」ということでかたまるくらいになっていた。波が高くなるとそれはよけいにそうなった。

校長先生をはじめ先生方は、みんなのおとうさん、おかあさんからみんなをあずかってきている。命がけだ。全く真剣なのだ。

泳がせるとき、三つの大事なことがあった。

一、潮の流れはどうかということ。田中さんの話にもあったが、潮の流れは多摩川の流れよりも早い。しかし、鵜原のこの海岸は、浜辺より二百米から五百米沖に出ないと、このような潮の流れは見られない。

二、泳がせる海の底はどうなのかということ。鵜原の海岸はずっと沖合まで砂地で、しかもゆるやかな傾斜の遠浅の海岸であって、もう三十年以上も事故は起っていない。

三、泳がせる海の場所をはっきりさせること。これには、陸に五十米の幅で大きい紅白の旗を

立てた。その五十米の幅で、浜辺から二十米の間をC班の場所として右と左に「3」の旗を立てた。更に五米沖に、つまり浜辺から二十五米沖に「2」の旗を立てて、この間をB班の泳ぐ場所にした。そうして更に五米、浜辺から三十米沖に「1」の旗を立ててA班の場所とした。それから、左右の「1」の旗を結ぶ中央に、とび込み台を置いて看視台とし、これより沖には絶対に泳ぎ出させないようにしていた。

最近の臨海学校では、色のあるブイや浮き標や、コースロープを使用しているが、この頃には、こういう用具も出来ておらなかった。海中に印になる旗を直立させて目につくようにさせるのには相当工夫をしていた。まだまだ、一般の小学校でも臨海学校を実施しているところが大へんに少なかった。鵜原の海岸も小学校は本校だけで、二、三の高校が臨海学校を実施しているだけで、海岸も海も、広い場所を自由に使うことができた。

★海に向って、お父さん、お母さん

おとうさーん
おかあさーん
みんな海に向って叫んだ。

おれは
おとうさん、おかあさんなんて言ったことはない。
おとうちゃん、おかあちゃんだ。
二回目、
「おとうちゃーん」
おとうちゃんが
大きな荷物をしょって働いている姿が
ちらりと見えて
波の上に消えてしまった。

（村木　勉）

きょうは海が荒れていて水泳はできませんでした。夕方、先生が浜辺に私たちを連れていきました。先生といっしょに、みんなで「おかあさーん、おかあさーん、おかあさーん」三回呼びつづけました。「おかあさーん」と一回目を呼んだ。波が荒いので、波の音が「はーい、はーい」と返事しているように聞えました。家のみんなはいまごろ「よし子は、千葉でどんなことをしているかな。」などと話しているように聞えてきます。女の子は呼びながら泣いています。

ほんとうにみんな、家へ帰りたくって、しょうがないのだな。私だっておかあさんのありがたさがよくわかってきたので、早く早く帰りたいのです。（細谷よし子）

「おとーさーん」「おかーさーん」。浜辺で大きい声で叫んだ。女の人は泣いている。実はぼくも、かなしくて泣きたかった。ぼくは今まで、なんでもおかあさんにさせていた。それは、まちがっていたんだ。初めてそれがわかったのだ。ぼくは今まで、おとうさんやおかあさんのありがたさがわからなかったのだ。浜辺で叫んで、初めておとうさんとおかあさんのことで、かなしくなった。そして、こんな時、涙を出してもはずかしくないものだと思った。臨海学校へきてよかったと心のそこから思った。（磯村　仁）

先生が、浜辺へつれて行った。浜辺に立って大波の海に向って、「おとうさーん、おかあさーん」と呼んだ。大声で精一ぱい呼んだ。私は家に帰りたくなって泣いた。おかあちゃんたちのありがたさが、はっきりわかったのだ。家ではみんなが心配していてくれるだろう。ただ至楽荘へ来て、遊ぶだけが臨海学校ではないのだ。団体生活をする。みんなが同じ気持ちでくらしていくのだ。私のかなしみが、みんなの人にわかってもらえるだろうか。私はただ一人で泣いているのだろうか。ちがう。私もみんなも同じ気持ちで、おとうさん、おかあさんと呼び泣

いているのだ。（細谷マス子）

「おとーさーん、おかーさーん」「おとーさーん、おかーさーん」二度目に呼んだ時には、声が小さくなって、どぶーん、どぼーん、ばさばさという波の音が、むねの中にはいった。と思ったら、おとうさんとおかあさんの顔が、海の方にうかんで「はーい」とにこにこしながらこたえた。自然に涙が目にたまってきた。ぽろぽろとほっぺたにおちた。

おとうさんに、いくらおこられたっていい。おとうさんとおかあさんのいる所へ帰りたい。家へ帰ったら、おとうさんに注意されないようにやって、おかあさんの手伝もしてやる。これを絶対に実行していこう。（松原春子）

★臨海学校閉校式の児童代表のお礼のことば（栗原　弘）

六年生を代表して、お礼を申し上げます。

ぼくたちが、臨海学校に来てはじめて海にはいった時、先生方は「これ以上前に出てはいけない。もっとさがって、もうちょっと」と、大声で浜辺と泳いでいる場所のきょりを見ながら、言ってくださいました。

先生方は、私たちの命をけんめいに守ってくださいました。ぼくはゆうべ、この原稿を先生方の打合わせておられるとなりの部屋で書いておりました。先生方は、きょうの反省をなさっていらっしゃいました。

ぼくが一人で書いていますと、先生方のお話が少しずつ聞えてきました。学級別に病気やけがをした人はいないか。又ぼくたちが、どうして立っているのか全く注意もしていなかった、海の中の旗にも、まきをしばりつけ、石をおもりにしてしばったりして、ぼくたちの目にわかるようにしていられたことも。そして、それが波のためにうまくいかなかったこと。又、来年からは、どうしたらいいのか。「たるを浮べたらどうか」「ビニールのふうせんを浮べたらどうか」「色は赤がよい」とか、こまかく考えていてくださいました。

受持ちの先生やほかの先生は、夜、ほんとうにおやすみになっていられたのかと思いました。ろう下のガラス戸がいつのまにかしまり、又、雨戸が朝にはしめられてあったり、友だちの話だと、先生方は、かい中電灯で一人一人をてらして、毛布をかけたり、ねぞうをなおしたりしていられたといいます。先生方は、いったい夜ねむられていたのでしょうか。

団体生活とは、しんけんに聞き、しんけんに考え、しんけんにすることからはじまり、みんなが一人一人きまりを守って、みんながたのしい生活をすることだと思いました。

三日ぐらいたつと、昼間は家のことを考えなくても、夜になると家のことを思い出したり、

おとうさんやおかあさんのことは考えていても、兄さんのことを忘れていたりして、いざ手紙を書くとなると思い出して、自分の分まで働いているだろうと思って、帰ったらうんと手伝ってやるよと書いたりしていました。

浜辺に立って、おとうさん、おかあさんと呼んだ時、涙が出ました。女の人は泣いていました。みんな、おとうさんとおかあさんのありがたさがわかったのだと思いました。こうやって、おとうさんとおかあさんのそばをはなれて生活してみると、ありがたさがよくわかります。

これも先生方のおかげだと思いました。

学校へ帰ってからは、もっと大きな団体生活なので、こまかい指導を下級生にして、りっぱな六年生になりたいと思います。

校長先生、先生方、PTAの会長さん、横田校医さん、田中さん、ありがとうございました。

★ 家へ帰る

朝ごはんを食べて食堂を出ると、ああ、もう今日はおかあさんやおとうさんのところへ帰えるのかと思った。やっぱり福生の自分の家の方がいいと思った。もうおみやげも百円で買った。家へ帰ると弟が喜ぶだろう。十時四十五分に臨海学校の家を出る。雨がふっている。食堂のおねえさんやおばさんに礼をして、福生一小の六年生は出発した。（太田喜美子）

「福生、福生」と駅員の人が言っていた。やっと福生に着いた。駅の中を見ると、むかえの人が、いまくるかと心配そうな顔をして待っていた。ぼくたちがホームの方へいくと、おばさんたちの顔が明るくなったような気がした。学校に着いて解散のとき、先生が「家のしきいをまたぐまで、おとうさん、おかあさんの顔を見るまで心をひきしめていなさい。」って言った時、先生の目が光った。先生の目に涙がにじんでいたように思った。きっと先生は、うれしいのだろう。ぼくたちを無事におとうさん、おかあさんにかえすことが出来るので、ほっとしてうれしかったのだろうと思った。（太田永才）

臨海学校から帰って来て、いきなり　かいこを見に行った。臨海学校に出かける前の日に見た時は、きょうの四分の一くらい小さかった。でっかくなったもんだ。かいこも、臨海学校のように、みんなとの団体生活だと思った。かいこも五日間、団体生活をして、大きくなったんだなと思ってじっと見ていた。（坂本英雄）

★その後の六年生

交通整理

及川　知子

ピーピーピ
ブブッブウ自動車が行く。
「さあ、通って」
生徒が通って行く。
私はきょう
交通整理だ。
青いわん章をつけて
「学校」と書いた旗を持ち
笛にあわせて旗をうごかす。
そして
ピーピーピー
バスが来た
それ旗を下ろせ。

全校指導

片山　孝子

ギッタンバッコ　これで一回
ギッタンバッコ
二回、三回、四回、五回、六回
ギッタンバッコ　ギッタンバッコ
十一回、十二回、十三回
ギッタンバッコ　ギッタンバッコ
「もう二十回よ、その次、私とこの子よ」
三年生ぐらいの女の子。
私は今、全校指導
帳面、えんぴつ、けしゴム持って
遊び道具の使い方の指導。
みんな私たちのつくったきまりを守っている
みんな一人一人が
自分勝手なことはいけないと知っている。

六年生としての活動もした。秋には学級対抗の球技大会もあった。

先生

細谷マス子

「しっかりやってくれな。
みんながんばれっ」
まっ赤な顔で手をあげた先生。
「ああ、また先生はでかけてしまう。
多摩の子の編集会だという。
球技大会だというのに。
先生はでかけてしまう」
ぐぐぐうとこみあげる。
私は
先生の後すがたをにらみつけ
歯をくいしばった。

ドッチボール

細谷　都

二組とドッチボールをして負けた。
「ふさえちゃん、泣くなよ」
「一人が泣くとみんなも泣きたくなるから」
私もくやしい。
教室に
カップを二つかざりたい。
三組は強い。
強いから負けると思ってはだめだ。
勝つと思ってやらなくては。
強い弱いで決まるのではない。
うんや、その時のことで勝つことがある。
みんなよお、がんばれえ。

板の間ふき

村木　勉

ギュウ　ギュウ
ぞうきんが鳴る。
「勉、力いっぱいふけ
　板の間をきれいにするには
　力いっぱいふけ」
胸の中で言っている。
顔が赤くなるまでふけ。
はあ　はあ　ふう　ふう
いきがはずむ。
ギュウ　ギュウ
ぞうきんが古くなるまでふけ。

麦ふみ

宮本　真弓

ぐぐぐぐぐっ
麦をふむ。
麦は土にかくれて
おしつぶされる。
おかあちゃんと
「麦、よくできるといいなあ。」
と麦をふむ。
ぐぐぐぐ
日はくれてきた。
虫が畑のすみで
コロ　コロ　キリ　キリと鳴いている。
ぐぐぐぐ
麦をふむ。

延長戦

坂本　英雄

延長戦
おれはキャッチャーだ。
満るいでツウダンだ。
高井君が打つ番。
おれはミットでベースをさして
「ここだ、ここだ」
でっけえ声でいった。
金子君は、
頭から汗を流して
プレートをふんで投げる。
球は高い球だ。
高井君はバットを重くふった。
からぶり
うれしい。
第二球もからぶり。
ボール、またボール。
おれはぐうんと泣きたくなる。
「はいるぞ、はいるぞ」
金子君はまいったように投げた。
ストライック。
チェンジ、
勝った。勝ったぞ。

加藤哲郎
（奥多摩町立小河内小学校長）

当時、基地の内側にいた子どもたちにとって、福生とはなんだったのか。

福生の思い出

ルービン・エリザベス

四歳の時　日本にきて

米国人である私は、子供の頃の三分の一以上も日本で育った。はじめて日本に来た三十六年、四歳ばかりであり、七歳の時まで滞在した。また十二歳の時から十五歳の時までもう一回来ていた。合わせて十六歳までの生活のうち、六年間も日本で過した。その二回とも福生市での生活であった。

福生市での子供の頃の経験によって、いろいろな思い出が出来たが、それを一つ二つ語らせていただきたいと思う。

日本へ来た一回目は、三十六年で、ライシャワー大使がまだ日本にいた頃であった。その時に父が若い米国空軍大尉であり、その役の関係で、父・母・弟と、家族四人で当時の福生町にある横田基地に来て、三年間も滞在することになった。

七五三の宮参り

はじめての日本の思い出は、日本の夏の蒸し暑さである。七月に福生町に着いて、基地のゲート一番とすぐそばの「ゲスト・ハウス」にはいった。基地に来たばかりの米国人家族が、家を見付けて引っ越出来るまで住めるホテルで、そこへ泊った。二週間がたったら福生町の北の方の羽村町にあった「ヨコタ・エーカース」という近くの家に住むことになった。それから二年たってまた国道十六号の西側の「ウエスト・アレア」という基地の中の近くの家に引っ越した。

その頃は福生市でなくてまだ福生町と呼ばれて、畑も稲田も多かったし、舗装道路がわりと少なかった。うちの裏側に鶏を飼っている玉子屋さんのところがあった。なにも知らなかった四歳の私にとっては、とても福生町のことを珍しく見た。

その頃の思い出は子供らしくて、日々の生活のではなく、特別な祭日とか旅等の思い出が多い。両親が日本のことがとても好きで、出来るだけ日本語、日本文化を勉強した。日本の友達が出来たり、弟と私を連れて日本の方々を旅行したり、日本の祭り等を楽しんだりして、日本のことを経験しようとした。

毎年、日本の浴衣を着て、福生市のすばらしい七夕祭りに出かけたし、五歳の時は、日本の着物を着て、明治神宮で七五三の宮参りをした。今でも、その日にはいた木履（ぽっくり）を、昨日

のことのように思い出せる。うるしが赤くて、上がたたみのようであった。紐が錦で作られていた。五歳の私の目から見ればとても高かった。中がくり抜かれていて、そこには小さい鈴がかけてあった。歩くと、ちりんちりんと鳴った。

祭りだけではなくて、学校の休みに家族四人で、伊豆半島、大島、京都、奈良、日光、富士山を旅行した。

あっ　外人だ

五歳になったら小学校に入学した。学校は基地の中であったが、一年生の時から「日本文化」と云う課目があり、日本人の先生に簡単な日本語をおそわったりした。日本の歌をうたったり、修学旅行をしたりして、いろいろ日本について勉強した。

小さくても、このように両親と一緒に、または修学旅行をしたりして、基地を出て日本を知るようにしようとすることが大好きであった。同時に、どんなに幼くてもはじめから私が外人であることがよく分かった。四歳の私の青い目、金髪が、まわりの日本人にいつも珍しく見られていたし何回も言われた。「あっ、外人だ」と云う言葉の意味が、小さくてもすぐ分かるようになった。これが子供の心の中にも苦痛であって、ある日母に、髪の毛を黒く染めて芸者見習いに出させてくれるように嘆願した。

当然のことでありながら、日本に来た二回目の思い出は、四歳の一回目の時より多いのである。二回目に来た時は四十六年で、福生市が十年前よりこんなに成長したことに感動した。舗装道路がほとんどになった。十年前に畑や稲田しかなかった所に、工場がいっぱいになっていた。

この二回目は、父がもう大佐になっていて、横田基地に来て直接に基地の中の家に入ることが出来た。この家が飛行機のターミナルのとなりで、今でも飛行機の飛び出し音を思い出せる。

度々、母と一緒に福生市のおみせへ買物に行った。母は、いつもおやさいとか、洋服の生地のある、福生市の八百屋さん、生地店等で買うことにしていた。また、母が友達と、福生駅から電車に乗って東京まで買い物に行くこともあった。基地でのアメリカ人の友人も、日本の歌手さんが好きになって、時々福生市のレコード店で好きなレコードをさがしに行った。その上、福生市の文房具屋さんも好きであった。日本の文房具が、アメリカのよりずうっと、ノート、手紙の紙、えんぴつ、けしごむ等がかわいらしいのがあって、私達若いアメリカ人の女性にとっては、非常に魅力的であった。

高校生なかまの交流

その時、私は高校生であった。毎日バスに乗って入間市のジョンソン基地の中の高校に通った。入間市の豊岡高等学校とジョンソン基地の高校生の間の交流のため、週二回、豊岡高校にお

じゃまして、そこの英会話クラブのメンバーに、勉強のため英語で話したり、アメリカの雑誌を見せたり、アメリカでの生活、社会を説明したりして上げた。これは非常に楽しかったし、今でもその英会話クラブの日本人の友達と、日本と米国の間の距離に橋をかけて、手紙を書きあうことにしている。

福生の思い出を大事に

福生市での生活の思い出は、このようなのである。今はもう国へ帰って来ているが、日本と米国との間の理解のもとにした友情、協力のために、一生懸命に努力しつづけるべき様に思われる。

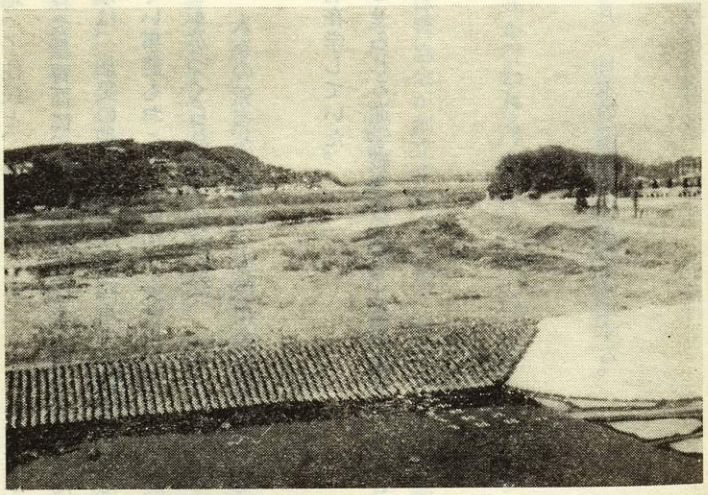
アメリカへ帰ってから大学に入って、日本の近代社会の勉強を中心にして専攻した。また卒業論文は、在日本米軍とその基地のまわりの市町村との間の問題についてであった。それを書くためにまた一年間の留学をして、三回目の日本に来たし、福生市のことでもそのためいろいろ研究した。それから卒業してからは、アメリカでの日本の会社の支店に入社出来た。このように子供の頃の福生市での経験に、今でも強い影響を与えられ、その思い出をいつまでも大事にしている。

（ルービンさんは、大学卒論の取材で、私どもにこられたことがある。その時、話すことも書くことも、私たちより達者な日本語であるのに驚いた。この文章も、原文のままである。　山崎）

第四話　汚れた　多摩川

子どもたちが、テレビを見ることをはじめた。テレビがある家は珍しいほどだったので、子どもたちは、テレビのある家を訪問して、その画面にくぎづけになり、それは大人とて同じであった。プロレスだ、野球だと、のぞき見にいそがしくなった。ポツポツそこここに、テレビアンテナが立ちはじめた。『PTAが、小学校にテレビを寄贈』というようなニュースも聞かれた。

生活にゆとりが生まれた人びとが、文化連盟を発足させた。女も目覚めよとばかり、婦人学級がにぎやかに活動をはじめた。体育協会も創立され、青年や一般市民のスポーツ熱



多摩川をはさんで、左に十二天・右が柳山

はよりひろまりを見せた。これらを通じて、土地っ子住民と、あたらしい町民たちとの交流が渦を巻いた。〝赤線の町〟への反発もあってか、社会教育面に、町民の関心はすこぶる高まった。

26年に第三小学校ができたのに次いで、34年には、加美の畑の中に、第四小学校が開校した。このころ、古くからの土地っ子には、理解しにくい事態もおこってきた。多摩川が、そこに変わらず流れているのに、各小学校に、児童用のプールがつくられた。川原には、『ここで泳ぐのは危険です。——PTA』という立札が目立った。人々の気づかぬ間に、多摩川の汚れが進んでいたのだった。

小学校の児童中に、米兵との混血児が、十数名在学していた。

子どもたちが、夏休みもとりあげられて勉強させられる進学戦争の波が、この福生にもおしよせてきたのも、このころからであった。

おもなできごと

一九五六（昭和31）年

4月　西多摩郡青少年問題協議会発足する。12月　日本の国際連合加盟決定する。

一九五七（昭和32）年

4月　福生第一小学校分校授業始まる（第四小学校の前身）。8月　東海村第一号実験原子炉

に「原子の灯」ともる。11月　第一回福生町総合美術展開催する。

一九五八（昭和33）年

3月　『多摩子ども詩集』第一号刊行される。4月　福生町文化連盟発足する。

一九五九（昭和34）年

4月　福生第四小学校開校する。・皇太子結婚式が行われる。

一九六〇（昭和35）年

4月　福生町陸上競技協会発足する。・福生町体育協会が創立する。5月　安保阻止国民運動全国に起る。6月　日米新安保条約成立。8月　一小・二小にプール完成する。11月　ボーイスカウト西多摩郡第一団発足する。

一九六一（昭和36）年

4月　ソ連、人間宇宙船ボストーク一号打上げ、回収に成功する。8月　福生町内の全小学校にプールが完成する。10月　文部省、中学校一斉学力テスト実施する。

一九六二（昭和37）年

6月　福生町青少年問題協議会設置される。・みどりのおばさんが配置される。10月　西多摩郡連合青年団陸上競技大会で、福生町青年団が完全優勝する。（この年が最後の競技会となる）

『第四話』では、つぎの皆さんに寄っていただいた。

出席者

（福生第一小学校31年度より35年度にわたる卒業生。）
石川信幸、笹本和一、笹本久子、榊田賢勝、田村昌己、千葉豊、古谷修一、富士野精一
（第二小学校）小林靖子、島田ウメ子

1/3の家にテレビがはいる

はじめに、つぎの質問に答えていただいた。

一、兄弟は何人ずつだった。
平均二、九人。最多四人、最少一人。

一、家族旅行（一泊以上）に連れていってもらったか。―男女一人ずつが一泊で出かけている。
（日帰りで）――女子は全員があり、男子は一人だけがあり。

一、家の手伝いは、どんなことをしましたか。
男　草むしり、水くみ、畑仕事、風呂たき、まきわり、家業手伝。（水くみが少なくなった）
女　水くみ、風呂たき、草むしり、家業手伝。（子守りがほとんどなくなっている。）

一、子どものために、家の中に備えられていたものは。
勉強机はほとんど全員が自分用あり、机なしが二人だけ。ラジオもほとんどの家にある。

一、1/3の家にテレビが入っている。
おけいこごとは、何かしましたか。
珠算だけが二人。習字と珠算が二人。日舞が一人。習字・珠算・剣道が一人。家庭教師につき学習が一人。なにもなしが二人。

一、誕生祝いはやってもらったか。
七人がやってもらった。二人がなし。お祝いは家でやり赤飯をたき、好きなおかずをつくってもらった。友人をよんでというのはない。一人だけ、ケーキを食べおこづかいでオモチャを買った。

一、クリスマスプレゼントはもらったか。
六人があり、三人がなし。ありのなかみは、菓子・アメなど。

一、家での親のよび方は。
三人が、おとうちゃん・おかあちゃん。六人がおとうさん・おかあさん。

一、お店へ買いものに入った時は。
男も女も変わりがなくなってきた。「売ってくれえ」は男二人だけ。「ちょうだいな」「くだ

さい」という調子になっている。

一、川へ魚をとりにいきましょう、というのは。

男で、「いくべえー」が三人。女には「べえべえ」はなくなっている。

むすび飯があまれば　すてた

あと一つの質問にも答えてもらった。

一、父親がいつもうるさく言ったことばは。

男に　○勉強しろ。○いたずらするな。○手を洗いなさい。（勉強しろ、が多くなった。）

女に　○女らしくしなさい。○勉強しなさい。

一、母親がうるさく言ったことばは。

男に　○歯をみがきなさい。○早く帰ってこないと人さらいにさらわれるよ。○宿題はやったか。○勉強しなさい。

女に　○女の子らしくしなさい。○勉強しなさい。

一、当時、ほしくても買ってもらえなかった物は。

男　テレビ・模型飛行機・カメラ・腕時計・グローブ（前回までとすっかり変わっている。）

女　オルガン・テレビ・フランス人形・皮靴。

一、タバコを吸う女の人を見て。

男　こわい人に見えた。いやな気がした。

女　ふつうの女の人に見えなかった。すごい人を見る感じだった。

一、遠足で、むすび飯をあまらせたら。

もちかえった。あまらなかった。すてた。他の人にわけた。（あまる傾向が出てきた。）

一、先生との会話は敬語を使いましたか。

敬語だった。敬語とまではいかなかったが、あるていどていねいだった。（両者半々になった。）

一、横田基地を（または米兵を）どう思っていたか。

○基地として日本で一番大きいと自慢したい気持があった。○外人はこわい感じだった。

○ハロー、チューインガムなどと言うとガムをくれた。○何でももってていいなと思った。

【座　談　会】

遊　び

司会　皆さんのころの遊びというと、どんなことをしたんですか。

○そうだね、思いつくのをどんどん言ってみましょう。ベエゴマ・野球・鬼ごっこ・かくれんぼ・

石けり・カンけり・げたかくし・馬乗り・陣取り、そんなものかね。

○女では、おはじき・まりつき・お手玉・馬乗り・石けりなどでしょう。

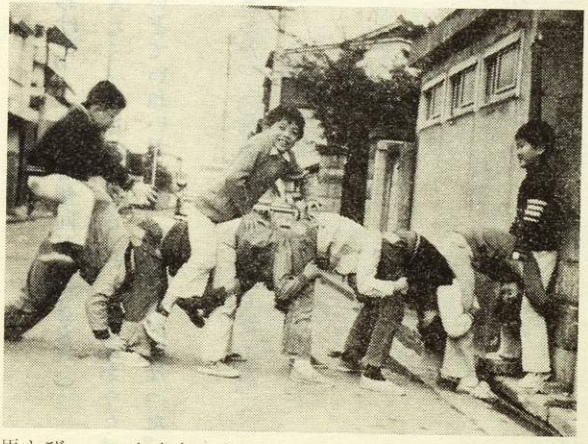
司会　お手玉は、あずきを使っていたかね。

○じゅず玉のような実を使ったり、あずきもあったと思います。あずきの中へ、たびのコハゼを入れておくと、とてもいい音がしたんです。

○宝島というのをやっただろ。土の上に迷路を書いて、それを進むとじゃま者が出てきて、それととっくみあいをしたりしておしのけて、最後に宝にとりつけばいい、というやつだ。

○エスというのもあったよ。Sという字をかいて、その先の二カ所の切れているところから両方が入って、たしか片足でぶつかりあったと思うな。早く反対の側へ出た方が、勝った。

司会　こういう遊びを、男と女と一緒にやれたかね。



馬とび……ハヤクとべよー　けつふっちゃいけねえだよー

○一緒にやりましたよ。学校で遊んでいる時はよかったんだ。でも家のまわりで遊ぶ時、女と一緒に遊んでいたなんて知れると、皆に何か言われた。だからそういう時は、「あした学校へ行ったら言うなよ」なんてね。

○学校から帰ってからも皆でよく遊んだな。まだ、そんなに塾に行っている子もいなかったし。かなりおけいこごとなんかやってた子もいたけど、でもよく遊んだよ。近所の子皆で、すぐ声をかけあって広場なんかへ集まって遊んだね。

司会　子守りしながら、という子もいたかね。

○子守りということはしなかったなあ。子守りをあてられた子は出てこなかったじゃないですか。

司会　戦争ごっこなんかはやりましたか。どうも戦争ごっこは、第一話の皆さんぐらいまでだったようだね。

○俺たちのころはチャンバラですよ。鞍馬天狗のまねなんかして。少年たんてい団とか、怪人二十面相なんて遊びしました。映画のまねですね。

○俺たちは、川原で泥でトンネルをつくって、それをよく固めて、ツバなんかつけてテカテカに光らせるのをやった。こわされないように、それを家にかくしたりしたんです。

司会　皆さんの時代には、テレビが入ってきましたな。

○俺が六年生のころは、まだなかったですよ。

○うちにはあったんです。わりと早い方だったから、近所の人がよく見にきました。プロレスの時なんか、座敷にいっぱいの人でたいへんでした。

○あのころは白黒だけだったね。ぼくも床屋やそば屋へ出かけて見ました。プロレスでは力道山が人気者でした。駅前のお店で、テレビを外から見えるようにしてあったので、その前が人だかりがすごいんだね、道をふさぐほどでしたよ。でもまだ自動車も少なかったから、そうもんだいにならなかったんでしょう。映画はたしか五〇円ぐらいで見られたと思います。ニュー福生は洋画が多くて、テアトル福生は日本のものを主にやっていました。笛吹童子とか、月光仮面なんかの時は、日曜日には子どもが長い列になっていましたね。

司会　ここの珠算通学した子で、珠算にくるついでに、あの看板を見るのが楽しみだった、という思い出をもっている人が多いですね。『月刊・ふっさっ子』からひろってみると、31年七月に「珠算の帰りにテレビを見ていて、家へ帰るのがおそくなる人がいるようだ。いけません」とある。そば屋さんとかラジオ屋さんのを見ていたのでしょう。32年の子どもの作文で「今はどこでもテレビがある。人工衛星もとんだ。世界はどんどん進んでいく。」というのがある。ずいぶん、テレビのある家が多くなったようだ。

子どもたちで、十二天の方などへも、出かけたかね。

○日曜日には、中学生のような大きな子が中心になって、近所の者みんなで行きました。十二天

とか滝山の方へね。

○その途中で、栗の実をかっぱらったり、悪いこともしたなあ。その栗を、運動会の時にゆでて持っていった時は、きょろきょろしながら食ったです。

○あのころ、地区単位の子ども会がさかんだったんだ。学校で、子どもたちで話しあって、その中から代表をきめて、その子が中心になって話をきめる。こんどの日曜に、十二天に行こうとか、駅の清掃をしようとかね。そこには、地区担当の先生が一人か二人ついていたな。夜、集まって先生が幻燈を見せてくれたりした。

司会　やはり『月刊・ふっさっ子』からですが、34年の記録にこうある。「牛浜子ども会は30年から熊川駅を、武蔵野子ども会はことしから拝島駅を清掃している。これに感激して、九月一五日に、この両子ども会を、東京鉄道管理局が表彰した。」とあります。

○PTAの中で、子ども会活動が形をととのえたのも、このころじゃないですか。町会の会館などで、地区単位に子どもを集めて、かくし芸大会とかやった。壁新聞を作って、町内の掲示板にはったりしました。

○だから、とても地区意識が強かったですね。

○運動会の時に、最後はその地区対抗リレーだったろ。あれでもりあがったよな。

紅梅キャラメル

○当時の子どもにとって、紅梅キャラメルというのは忘れられないじゃないの。赤い箱に、白っぽい梅の絵がかいてあったが、中に八コだか一〇コの、あまりおいしくないあめが入っていた。そのおまけに、野球選手のカードが入っていた。そのカードを集めてチームにすると、野球道具がもらえる、というものだった。皆、そのカード集めに熱中しちゃって、それを友だちで交換していっぱい集めた人がいたよ。それがどんどんエスカレートして、小学校の児童会で、キャラメル問題を何回も話しあったのを覚えていますよ。なかには、友だちの間でもめごとがおこったりということも出てきました。プロ野球選手には、川上・大下・青田・小鶴というような花形選手がいて、子ども野球もとてもさかんだったんだ。その野球熱と、紅梅がうまく結びついたんだろう。

司会　そのことでも『月刊・ふっさっ子』にこんなことがあります。32年です。「紅梅のホンコで角野君と守屋君と小池君が、三人でけんかをしてしまった。」とニュースになっています。

○そのころ、キャンデー屋がチリンチリン鳴らしながら売りにきた、あの自転車もなつかしいな。

○納豆屋さんの売声もよく聞けたでしょ。

○お菓子のかわりに、黒砂糖をなめたりしたでしょう。それと、さつまだんごというのを、よく

食べました。

○ガラスの中に、赤や白のゼリーが入ってるのもあっただろ。

○棒クジって言ったかな、台紙からはがしてまるめてあるクジを引くの。うちの近くの菓子屋で、おばあさんが店番をしていて、その店へ行ってクジをごまかしたりした。あのおばあさんには、悪いことをしたともうしわけない気持ですよ。

自　然

司会　そのころ、牛や馬は見られたかね。

○さあ、あまり見なかったじゃない。

○俺は、一小のわきの道のところで、馬がふんを出したのを見たよ。

○わたしは、たんぼが近かったので、よく見ましたよ。

○あの、マグソを踏むと、背が高くなるって言ってたでしょ。わたしよくふみました。

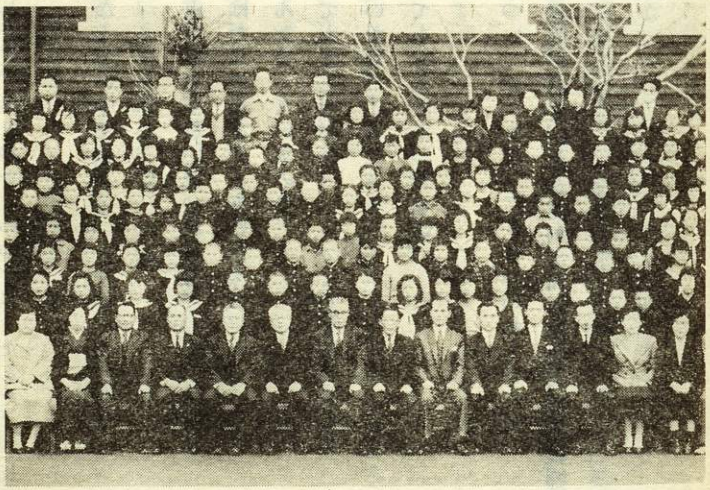
柳山と十二天　かつては雑木の緑におおわれ、清らかな水がゆたかだった。

司会　サワガニとりに行きましたか。
○行きました。前の人たちと同じように、みんなで行きました。
○ぼくは、清岩院のところでカニ釣りをよくやったよ。針金をまるめてそれへミミズを通すんです。その針をもめん糸でつるしてようすを見ていると、カニがはさみでミミズをつかむんだ。そこをひきあげるんです。ずいぶんとったよ。
司会　まだ多摩川で泳いだんだね。『月刊・ふっさっ子』の31年に田辺君が「泳いで向う岸まで行けてうれしかった。」とある。かなりの水量だったろうね。同じ年に、一小の地区子ども会がね、羽村の川を利用したプールに、遊びに行っているんです。
○多摩橋の方なんか、きたないなんて言われていたけど、永田橋の辺はきれいだったんだ。
○臨海学校へ行く前に水泳のテストがあって、一人ずつ泳がせられたろう。柳山のあたりで泳いだんだね。
○赤い旗が立っているところは、泳いではいけないということだった?。

学　校　で

司会　まだ、べえべえことばだったかね。
○男は、みんなそうだったね。

○みんなのことばが悪いっていうんで、児童会の今週の目標というのに、「べエべエことばをやめましょう」なんていうのがあったんです。
○べえべえがなくなったのは、テレビの影響かね。
○わたしは、高校へ通うようになって、なおしました。すぐにはなおらなかったですね。
司会　学校で、わるさなんかしたかね。
○やっぱり、前の人たちのように、黒板ふきのいたずらはやりましたね。
○俺たちのクラスはわんぱくがそろっていて、よく先生におこられたなあ。ひどかったのは、石炭ストーブが燃えていたのに、その煙突をはずしちゃった奴がいた。教室の中は煙とすすだらけになっちゃって。



昭和30年度　福生第一小学校卒業生と職員

○俺の先生は、いたずらのバツは、二人を向き合わせて、鼻と鼻をくっつけさせたんだ。これを男と女でやらされたのもいたよ。

○掃除なんかさぼってばかりいたなあ。便所掃除なんていやでね。

司会　運動会は、はだしでやったですか。

○運動靴をはいていた子が多かっただろ。はだしと半はんぐらいだったかな。

○かけるのに、はだしの方がいいからと言って、はだしのままの子もいたんだ。

司会　野球がさかんだったようだね。グローブなんか持っていたの？。

○学校では、小学生はテニスボールで素手でやっていました。

○俺は、シートを切って縫ったようなのを持っていたな。

○グローブ買ってくれ、なんて言ったって、買ってもらえなかったもの。

司会　給食はどんなでしたか。

○脱脂粉乳のミルクに、コッペパンで、おかずがついてきたんだ。アルミのいれものでね。

司会　それまで、給食の手伝いに、おかあさんが交代で出ていたんだが、34年に二人の給食婦が入ったんですね。

皆さんのころから、混血児が入ってきたんですか。

○下級生に、いく人かいたね。

司会　あの当時、やはり『月刊・ふっさっ子』で〝親の意見〟を聞いてみた。32年ですが、「この町の教育への要望」を書いてもらった。そこにはこんなことがらが出ていたのです。

○町の浄化・大人の生活が児童に及ぼす影響。○高校の設置。○赤線区域の隔離。○プールを小学校に。○飛行機の爆音をなんとかして。○母親教育をしたい。ことばづかいも両極端がある。

○文化施設がほしい。などです。

社会と子ども

司会　さきほども映画館の話が出たけど、映画に行くのはうるさくなかったですか。いつごろだったか、中学では廊下に、「今週の映画見てよい」とか「いけない」という印があったけど。

○そういう指示は、あったかどうか覚えがないなあ。

○あの時代じゃあ、見ちゃあいけない、なんて映画はなかったでしょう。

○洋画をやっている時なんか、米兵と女たちが大勢入っていて、悪いふんいきだったんだよ。

○でも、家の人が映画のことをあれこれ言ったということはないね。

○学校の庭でやったことがあるだろう。庭に幕を立てて。うしろへまわって見ると逆にうつっているのがおもしろかったな。

司会　クルマは、まだ珍らしかったですね。

○車の入っていた家なんて、何軒もなかったじゃないの。
○うちは商売で仕入れに行く時なんか車で行ったものだから、それに乗せてもらったりしていたんです。信号がなかったから、どんどん走れたですね。
○朝鮮戦争がおこって、戦争景気で大金をもうけた人がいたり、その反面貧しい人が多かったんですね。米兵相手の店などはよかったんじゃないですか。私の家もその貧しい方で、私が子どもの時、小づかいなんてもらえなかったんです。何かほしい時は、屑屋に行ったんです。鉄くず、米兵のビールのあきかん、牛乳のパックなどを拾い集めて売ったんです。ビールのかんが一本一円か二円、牛乳のパックも良いねだんで売れました。鉄くずでは、「あか」といった銅が高く売れました。そのお金で、コッペパンなど買って食べました。銀座通りにあったパン屋さんに、朝六時ごろ行くと、もう二、三人ならんでいました。くずパンとは、前の日ののこりものとか、パンの耳とかでした。それを一〇円か二〇円で買いました。それだって、とてもうまかったですよ。

それからアルバイトですが、エルピー・新聞・牛乳配達とか、アイスキャンデー売り・店番などで働いた小学生もかなりいました。新聞配達は、この中でいちばんつらかったですね。朝夕の配達をして、五百円から七百円ぐらいだったんです。それで一カ月の小づかいにというわけにはいきませんでしたね。かなり物価が上がっていきましたから。

○七夕まつりもだんだん賑やかになってきたんですね。
○そのころ福生病院の大火事があっただろ。木造のたてもので、昼間だったけどずいぶん長く燃えたね。まだ、まわりは畑ばかりで、そこに焼け出された病人が毛布をかけてふるえていた。その時、横田基地からきた消防自動車が、大きくてカッコよくて、火をどんどん消した。その時、アメリカはすごいなあ、と思いました。
司会　基地の町、赤線の町なんて、ずいぶん新聞などに書かれた。ふつうの少年非行でも、この町の事件では新聞の見出しは、大きく『基地の町の非行』なんて書く。福生の住人としていやだった記憶が多いけど、皆さんのその点での感じはどうでした。
○そう、特別に感じたことはなかったです。
○お店をやっている立場では、俺が子どもの時見ていたが、米兵は、おつりはいらないって言ったり、カンヅメをくれていったりで、良い印象だった。
○俺はね、水泳に行った時など、米兵と女が車の中で変なことをしていたのを見たりして、ああいやだなあ、と思っていた。
○ぼくもね、はじめ米兵を見た時、背が高くて、鼻が高くて、目の青い、毛むくじゃらの彼等を見た時、おそろしく感じた。家の近くにも、オンリーなんて言われていた女性がいたり、そこへ米兵がきたりでいやだった。でも、ときどきチョコレートをもらって、その味は今でも忘れられ

ないほどうまかったものです。なんとも複雑な感情でしたね。

当時の、この福生を言いあらわすとしたら〝ジェット戦闘機F4のものすごい爆音、ガラス窓がビリビリしていた〟〝東口のバー街のけばけばしさ〟〝神明社の清水がきれいだった〟〝福生病院のまわりは畑だけで、冬はその畑で凧上げをした〟〝多摩川がきれいで魚もいっぱいいたこと〟〝キノコ狩りに、西多摩病院のあるあたりの雑木林へ行ったこと〟などがつよく思い出されるんです。

司会　終戦っ子ブームなんて言われたのは皆さんのころかね。

○よく言われました。進学も大変、結婚もたいへん、なにからなにまで仲間が多くて競争がはげしいんだよ、なんて言われていました。

司会　『月刊・ふっさっ子』から、あといくつか拾い出しましょう。

31年あたり、この珠算の教室で、忘れものが多くて注意が出ているよ。学帽・野球帽など多かったようです。忘れものはここらからどんどん目立ってくるようだね。まもなく自転車の忘れものまで出てくる。物が多くなってきたんでしょう。33年に、女の子に馬とび遊びが流行、と出ている。34年の子どものお年玉最高額（珠算通学生で）が三千円です。一小の体育館わきの垣根はカシの木だったのが、この年、コンクリの万年べいに変わった。道路も広がったんです。そういうことで学校の周囲の道路も危険が多くなり、この年四月に、一小の児童会には、交通整理班が

できて、新入生のめんどうを見ています。二小では、このころ音楽教育がさかんだった。東京都教育委員会主催の音楽大会というのに、二小は東京代表の八校の中に入ったんだ。そして、日比谷公会堂での演奏会に出場している。同じ年のことだが三小で、五・六年生希望者による日米児童合同研究会というのができた。基地のガール・スカウトと三小が話しあって、おたがいのお国のことをもっと知りあいましょうという研究会で、三小を会場にして、三月一〇日から火曜日ごとに開かれた。

32年ごろからだが、都内では、麹町―日比谷―東大のコースというのがあこがれになった。夏休みも塾通い、ということを新聞などがとりあげて批判している。予備校生もふえ、有名校のためには一浪はあたりまえ、などと言われだしたのです。家庭教師について勉強というのも流行した。福生も例外ではなくなりそれらのことで、34年七月号の『月刊・ふっさっ子』が、特集記事にしている。そのときは、この町では学習塾という形になっていたのは、原島先生のところと、青梅からきていた三計塾ぐらいのものだった。ほんの小人数を相手に、という塾はこのほかにもいくつかできていましたね。

35年の春、この珠算学校の教室で調べた範囲では、この町から大学への合格者が二四名だったのです。しらべからもれた人も多かっただろうが、まず多くても三、四〇名ぐらいではなかったかね。やはりこの年の三月、米軍基地内のガール・スカウト一行が、珠算学校見学にきました。

三小での研究会といい、このことといい、米軍の方では、福生のこと、日本の子どもを理解しようと努力していた中の行事のようだったね。

このころ、福生の子どもたちの希望する職業では、男子は、野球選手・飛行機の乗務員、女子では、学校の先生・スチュワーデス・幼稚園の先生、などが多かったのです。また、学校を卒業して就職するとしたら、都内の方向へ通勤したい、というのがとても多かった。特に女子は都内通勤にあこがれたのです。

正月やお盆様で、一六日の藪入りの日は、まえには子どもたちがその日が休みになるのを、とても楽しみにしていた。ごちそうも食べられるし、あちこちに行っていた家族が寄りあえる日だったからです。でも、このころになると、そんな楽しみは、子どもには関係なくなってしまったようだ。35年から、珠算学校では、それまでの一六日の休みをなくしました。

ボーイ・スカウトが福生にできたのも35年。そして子どもの交通事故対策に香山勇さんが動き出したのもこのころだ。各学校にプールもできた。とにかく町がどんどん変わった時だね。

夏祭り（その二）

この項は、昭和27年度より35年度までの話を、まとめたものである。

司会　皆さんの時代、お祭りの準備はいつごろからだったですか。

○夏休みに入る、ちょっと前でした。

○本町は、夏休みへ入ってからだったよ。

○中学三年生の親分の号令で、新聞紙だとか粉とかをもらってあるいた。それをさぼると、お祭りせえねえ、って言われるのでね。

○卵や柿のしぶなんかももらいに行かされたよ。

司会　そんなの何に使ったんだね。

○太鼓にぬったんです。卵の黄身や柿のしぶは、太鼓の色つやを良くするってぬらされました。

○花づくりなんかもやったっけ。あのころは、紙が白いのだけだったんだ。それにインクをふきつけたりして色をつけたんです。

○十二天の方へ、太鼓の棒をとりにいって、山の人に見つかって追いかけられたりしたな。

○俺たちは、ごとう山（病院の裏手にあった雑木林）の方へとりに行かされたよ。

○万燈づくりも、子どもだけでやったな。昼間は、

女だってかつげます、まかしといてえー　54年8月

子どもがやっていて、夜になるとこんどは大人がやってきて、準備をしていたな。

司会　それでは、昔通りのことをやっていたんだね。

○本町では、そういうことをやらなかったよ。花づくりを少し手伝って、神輿みがきをさせられたぐらいですよ。あとは、PTAや町会の大人がやってくれたんです。

司会　いつごろから、そうなったのかな。

○30年ごろからじゃないですか。

司会　ジュースなどくれたりする、大人のサービスは、もうあったんですか。

○そうですね。カルピスとかアイスキャンデーをもらいました。

○俺たちは、お風呂の券をもらったよ。松の湯が町会の中だったからね。みんなで入りに行ったものです。

○神輿をかついで、ふだん気に入らない家へおしかけたりしたな。あのうちのじいさまは、こうるせえから、なんて言って、その家の庭へ入ってもんだりしたんです。

○あのころは、親も子どもの支度に気をつかってくれたね。男でも、鼻すじへ白いのをぬって、はんてんを着て、帯のところへ鈴をつけてもらったりして、今じゃあ、ふだん着のままかついでいるんだものな。

司会　お祭りがすんでから、中学3年生が下級生に分配するお金のことで、だんだん問題が出て

きたようだね。二小のPTAが、36年度に、夏祭りについて、町内会長や祭典委員に要望を出しているんだ。「夏祭りへの、児童の参加に問題があるので、特に金銭問題について、十分の配慮をしてほしい。」という内容だ。

○俺たちの方でも、そのお金の配り方では、大人があれこれ言い出したようだったな。

○中学3年生の、親分たちの配分金が多過ぎるんじゃないか、ということがありましたよ。

○本町は、わりと大人がそういうことでも管理しだしていたんだが、他の町会では子どもまかせだったので、そういう問題ができてきたようだ。

○なにしろ、上級生は千円単位でもらえたので、かなり使いでがあったんですよ。はでに

神明社に集まった神輿と子どもたち（29年7月31日岩下先生うつす）

使った子も、いたんでしょう。

○そういうことをPTAがとりあげたりして、だんだん子どもを管理しだしたんだろうな。そしてしだいになにもかも大人が準備してやるようになった。

○子どもにとっては、お祭り当日より、この準備の方がよほど楽しかったですよ。

司会　そういうことがなくなって、子どもたちはお祭りへの関心がなくなっちゃったのかな。

○お祭りの準備をしている時には、家のまわりの子どもで、「お祭り、やんべえや」なんて、タルミコシを作って、かつぎまわったりしたものですね。そして、本式のお祭りには、ほんものの神輿をかついで満足したんですよ。

司会　お祭りの準備という面では、この時代にもう、本町は新しい形というか、かなり大人まかせになっていたんだね。他の町会は、まだ昔どおりに進めていたようだ。そして、これから間もなく、どこの町会も本町式になっていったんだな。

それでね、また『月刊・ふっさっ子』の中に出ていた、このころのお祭りの話題を、いくつか拾いましょう。

『花造りを、五・六年生と子ども会役員が当り、一本十円にて全町内家庭に、一軒三本単位で負担してもらう。当日は、正副会長が、子若係、男子は神輿、女子は山車に参加。この際、子ども会への御祝儀・六二〇〇円、町会より援助金が八五〇〇円、おさい銭一万四―八千円を、子ど

も会会計にくり入れる。』これは牛浜町会のことで、36年の祭礼記録です。三小区域は、いわゆる新開地であり、子どもにも大人にも、こうしたことでのしきたりがないわけです。それで、もうはじめから、大人がすべて子どものために準備してやる型だね。

『お祭りの時、花場といって、寄付を受取ってそれをかざりつけるところがある。このごろ、子どもたちが〝おさい銭〟をもらって歩くが、どうもうまくないことだ。あの花場のあがりで、だいたいお祭りのかかりをすませるわけだが、地区によっては、子どもたちの慰労金がかなりかかるらしい。それで、子どもたちは、〝おさい銭〟もらいに歩く。もらえそうな家へは、二度三度行くこともある。くれない家にはいやみを言う。そして、中学三年生の手にするお金は、昨年で二六〇〇円ぐらいだ。本町から、志茂、牛浜辺では、こういうことはやらない。こういうことをやめられないだろうか。』という投書が載ったのは、37年のことである。

『子どもの神輿をかつぐ時間を、警察から制限されたので、いやがる子どもから神輿をしまわせた。そのあと、私のところへ、もっとかつがせろとさわいできて、せっかく大人がしたくした食べものを、そのままにして帰ってしまった。』と、困りきった町会役員さんもいた。

一時期、家の中での、親と子のむずかしさがそのまま、こういう行事の中で、表面化したことがあったようだ。が、最近の祭礼では、これらの問題はほとんどなくなっているようです。

いずれにしても、かつて、あれほどの情熱をもって、子どもたちが夏祭りを楽しんだ、そうい

う、福生の夏祭りという姿は、今はもうなくなっている、といえるだろう。

第一小学校卒業生たちによる座談会の記録は、ひとまずこれで終わりとした。まとめ方がうまくないので、その点では申し訳ないことだが、しかし、福生にとって、また戦後を生きてきた子どもたちにとって、貴重な生の記録となった。お話を聞かせていただいた皆さんに感謝したい。

基地の周辺と多摩川沿いと

昭和15年、それまでの福生村は福生町に変わった。町の東北部に、限りなくひろがっていた雑木林の地帯に、日本陸軍の飛行場ができたのは、そのすこしまえのことだった。日本の敗戦とともに、米軍はそこを空軍基地にとりあげた。そのころにはまだ、雑木林も、松山ともよばれていたような緑地も多く残されていた。しかし、米軍は容赦なくそのもてる力で、みる間に横田基地をつくりあげた。その近辺にできた、米軍人用の貸ハウス、そして商店街も、日を追って増えた。そこらで遊ぶ福生の子どもにとって、鉄条網にさえぎられた内側の、広い芝生で遊ぶ外人の子どもを見た時、なぜおれたちには、と不満も多かったろう。

昭和35年。福生町の小学校にプールができた。「多摩川で泳ぐのはいけません。」「遊ぶのも危険です。」ということになってしまった。その流れに汚物もまじり、川原には雑草が、ぶきみに

繁り、そのところどころに泥沼があって、子どもを近づけられなくなったのだ。昔から、福生の子どもは、多摩川にはぐくまれてきた。兄姉の背にくくられて遊んだ幼児期から、小学校の仲間になったころは、子どもの一日は、半日を学校、あとは川原で、というような日課であった。その多摩川で遊べなくなった。だが、川原に入れなくても、川沿いにはたんぼがひろがっていた。春はれんげ、秋は稲穂を眺め、冬はその刈跡で野球をやった。そのたんぼに学校が建ち、住宅がぎゅうぎゅうとつくられていった。

日曜日には近くの上級生の号令で、あたりの子どもの一連隊が、むすび飯弁当をさげて十二天へのぼった。そこでは、戦争ゴッコにチャンバラに、また隣町の一連隊との攻防にやっきとなったりの大遊園地であったものが、今はふかしぎな十二天に変わってしまった。都民のハイキングコースと指定されているその登口には、ある種の大人のための建物がでっかく看板をかかげている。子どもたちに目をつぶらせてそこを通過して、さてやっと昔の十二天らしさのある道をちょっと進むと、また金網である。大ゴルフ場が、その先一帯を占めてしまった。

福生の商店街をはさんで、かたや基地。かたや多摩川とその先の丘陵地帯（十二天）。ともに子どもたちには近づきにくい大地となった。このごろの多摩川には、かつての子は知らなかった、水鳥の群れが幸せをうたっている。

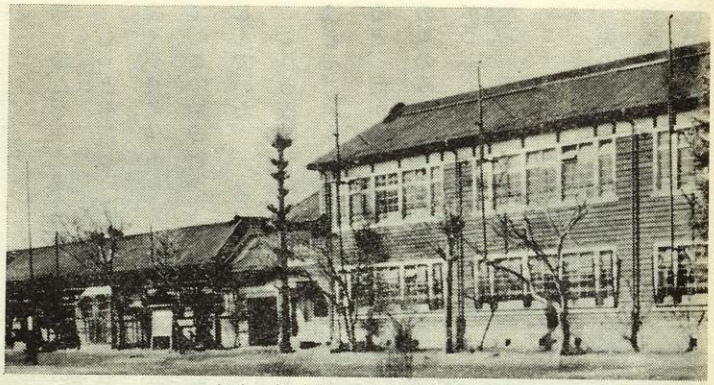
はじめに考えたとおり、第一小学校を卒業した人たちを中心に、小学六年生のころの話を聞か

せていただいたこの記録は、35年までとどめた。その間の人たちは、その住んでいたところによって、こんな環境変化を味わってきた。それから後の〝ふっさっ子〟には、これほど大きな生活の場の違いは感じられなくなる。そして、現代っ子につながるもろもろが入りこんでくる。進学熱、テレビ、過保護等々が子どもたちすべてにふりかかってきた。

ホタルもサワガニも、どこかに行った

ふと、各小学校の校歌について、その中で自然とのふれあいが歌われている部分を拾ってみた。

第一小学校はまず、〈白銀すがたいと高き　富士はみ空にそびえたり　学びの庭の教え子よ　高きをあれにたぐえつつ　心を磨けいざ共に　二番に入って〈その名もゆかし多摩川の　清き流れのほとりなる……　となっている。第二小学校の一番は〈みどりかがやくむさし野に　名もゆかしわれらが福生市　つばめとび交うゆく手のみち　ともにただしく　ともにただしく　見はるかす富士のすがた　福生第二小学校、と出て二番で〈ほたるとびたつながれのみち　三番に〈こがねなみうつみのりのみち、とある。第三小学校の一番は〈白雲は空にかがやき　山脈はゆるく流れて　武蔵野の開けゆくところ　福生なるよき名うけつぐ……　二番で〈多摩川のせせらぐところ、とうたう。第四小学校は〈春花の香る丘べに　秩父嶺の山波霞む　楽し学び舎福生四小　そ



当時の福生第一小学校校舎全景

して二番に〈多摩川の流れも清し　四番に〈富士の峰仰ぐ望みは、と入っている。この四小の開校は34年であり、まだここに歌いこまれた自然がのこされていたころだ。

だが、つぎの五小が開校となったころは、この姿がかなり変わっている。その校歌を作詞された岩下伴蔵先生は「そのころ、多摩川の汚れは気になっていました」と言われた。〈青空をきょうも浮かべて　絶え間なく多摩は多摩は流れる　絶え間なくからだきたえて……　二番に〈遠く見る御岳大岳　たくましく西に西に連なる、とうたわれている。第六小学校の一番は〈御岳　大岳さわやかな　風もみどりのかがやく校旗　お　みどりの校旗よ　かめの歩みのどこまでも　福生第六小学校、そして二番に〈多摩の青空あざやかな　富士にわきたつたのしい望み　三番で〈そそぐ多摩川きよらかな　心にあふれる学びのちから、とうたいこまれている。第七小学校の一番は〈多摩の山なみ緑にはえて　白いまなびや歌声ひ

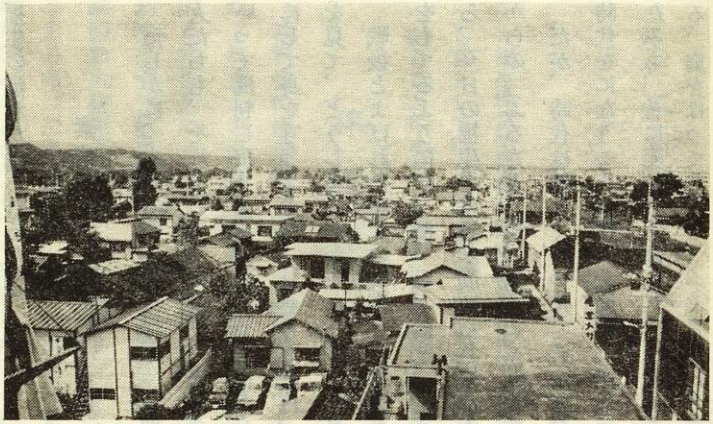
びく　たくましくからだきたえて　清らかに心みがこう　牛浜の学びの庭に　二番に〈豊かなる郷土おこそう　武蔵野の多摩の岸辺に、となった。

もっとも新しい第七小学校の校歌の作詞者である馬場悶先生は「市内のどの学校より富士山のよく見える位置にありながら富士山を入れなかった。それより、豊かなる郷土おこそうと入れて、この地の自然を大事にという心をうたわせたかった」と、失われてゆく福生の自然をいとおしんでいた。

これら校歌をくらべて見ると、七校のうち六校までが多摩川を入れ、また山なみと富士の姿をほとんどがうたいこんでいる。しかし、一小で歌いはじめたころの多摩川と、今の多摩川を考えると、何かのどにつかえる思いだ。〈ほたるとびたつ　も見られなくなり　〈こがねなみうつみのりのみち　もなくなっている。ただ、子どもたちの成長のなかで、これら自然とのむすびつきがつよく望まれているのだ。

〝ふつさ〟をよく見つめて

先の大戦中。都内からこのあたりに疎開してきた文化人が多かった。戦後、その人たちに影響された、文学・芸能が、福生にも見られた時期があった。福生の大人は、それらをアカイといいやピンクぐらいだと評してきらった。会館を借りてダンスを習う若者には、畳がいたむと苦情



最近の福生市街風景

をもちこんだ。いくらか開きかけた文化の蕾は、まもなく立枯れてしまった。いま一度の開花をねがう動きは小さかった。若者は、そんな福生の空気をきらってか、何かをやるには福生をはなれたがった。最近、市民のための体育・文化施設が立派に整備されつつあるが、そこにあった空白を満たして、市民がこれを活用している現在に到るまでには、相当の努力が必要であった。

子どものための市民活動についても、この話のはじめのころ、若者は地域のために活動し、それに、小・中学校の若い先生たちが積極的に協力した。皆が〝福生〟を愛してきた。が、福生の都市化とともに、そうした気風もどこかへ消えたようだ。戦地から帰ってきた若者が、自分たちの住む町にかけた、あの若さと情熱を復活し、それに現代っ子の知識と活力がかみあっていけたなら、これからすばらしい

福生の流れが見られるだろう。

素晴らしい福生の明日のために

たしかに、赤線の町とよばれ、〝基地の町の非行少年〟と書かれたりしても、親もまわりの大人たちも、それどころではない、という時代もあった。若者は、そうしたものを、福生かたぎといって批判した。他人に同調し、依存し、それにのっかっても、自から行なうことは避けるようにして身を守ってきた。純粋な心には、基地と町の結びつきの中の、そうした大人たちの生き方を見て、どうしてよいかわからぬもだえがあったのだろう。

戦後とよばれた時代の混乱。それを必死にくぐりぬけて、それからは生活にいくらかのゆとりをもてるようになった。つづいて、この町の発展を目指した時代。そうした人々の苦闘の中から、今日の福生の基盤が固められ家々も立ち並んだ。無心だった子どもたちが物心づいて、みずからの〝ふるさと〟に、いくらかの非難めいたものを感じたのも、こうしたころのことだろう。

だが、時代は新しくなった。この困難の中に育てられ成長した〝ふっさっ子〟が、この新しい時代をになうことになったのだ。学校の屋上から、富士山がよく見える。その手前の奥多摩の山なみも、昔に変わらぬ眺めだ。その足もとに、どこよりも素晴らしい福生の町がひろがっている。胸をはって我等の〝ふるさと〟と言える福生のために、力をあわせよう。

「ホタルの光　いつまでも」の背景

岩下伴蔵

福生珠算学校長の山崎茂男先生は「お話はどんなことでもいいから……」ということでした。しかし私としては、いろいろ考えた末「ホタルの光　いつまでも」の座談会の記事に沿って、その背景を語ることにより、山崎先生のご期待にこたえられるのではないかという結論に達しました。

第一話　耐乏生活

教科書に墨を塗ったという記事を読んで、終戦直後の学校のことを、まざまざと思い出しました。ほとんどの教科書に、軍国主義的なことや、神や日本を賞讃する文が載っており、それは軍国日本復活につながるから教えてはいけないということで、その所を墨で塗りつぶす作業をしたわけです。教科書はあつかえる部分がぐっと縮小されました。指導時間に余ゆう?が出来たので、米国の大統領のワシントンとかリンカーンの物語をガリ版印刷にして、それを授業に使用したりしました。二宮金次郎の物語も印刷しました。変わり身の速さということでなく、占領軍であった米国のことを少しでも理解したいという気持ちが強かったのでしょう。

一週間毎に、教室の並び順の列が変わったということ。たしかに窓側の暖い場所に、順ぐりに座らせるためでした。でも小学校時代（青梅市立第一小学校）ずーっと暖房のない教室で学んできた私には、戦後、石炭ストーブから始まって現在の重油使用による暖房が、なにか気にかかってしょうがないのです。福生の寒さは、暖房なしでも学校生活が送れるのではないか、そういうたくましい強い子が育つはずだ、またそのような子を育てるべきだと思えてならないからです。でも、現在の大人や子どもは（私も含めて）暖房なしでは無理なのかなあと考えると、なにかさびしい気持ちになるのです。

あのころの先生はこわかった。なんだか私、当時の浜中伴蔵のことを言われているような気がして、このところは二度三度と読みかえしまた考えました。そして私のことだけではないのだということを確認して、ほっと一安心？しました。当時の先生は、みんなこわい先生だったと思います。こわい先生、叱る先生、こういうタイプの先生がいいということではありませんが、こわかった先生達は、それだけ指導に熱中したということも言えましょう。私の経験では、私が一番叱ったどなったおこった学級の子ども達が、案外いまでも、先生先生と私に声をかけてくれているのです。叱られた子ども達がそうなのです。勿論、そうでない学級（すごく叱られなかった学級なんてなかったろうと言われればそれまでですが。）の子ども達や、叱られなかった子どもたち（叱られない子なんているもんかと言われればやはりそれまでです。）も声をかけてくれます。う

れしいことですし有難いことです。

さあ第一時間目の授業だと、勇んで教室の入口の扉をあけて中へ入ったとたん、頭上からホウキが落ちてきました。またある時は、バケツが落ちてきました。そこは武芸の達人？さっとよけましたが、こんな時は一応は叱っても、本当はうれしいことなのです。いたずらするだけ、こわい先生にも親しみを感じてくれているんだなあと思うからです。当時の福生第一小学校には、独身の男教師が、最盛時？には十一人か十三人いたことがあります。毎晩のように夜おそくなると、宿直室に何人かの独身男教師が集合して、教育談議をかわしたものです。そして必ず、いたずらっ子のことが話題にのぼります。そしてどの先生も、世話をやかせても叱っても、いたずらっ子がかわいいんだなあということを感じました。若い教師達は、ガムシャラに指導してきました。もっと、一人一人の子ども達のことをよく理解し、人間とはということを研究し、もっと教材研究や指導法の勉強をして、より子ども達にわかりやすい授業をすべきだったという反省を今はしております。その点当時の子ども達に申し訳なく思っております。私など、子ども達に「よく見よく聞き　よく考えて　自分で正しいと思ったことは　思いきって実行する人間になろう」という目標を示して指導にあたってきましたが、はたしてそれに沿った指導をしてきたかどうか考えると、やはり後悔するだけです。もっともっと子ども達の、自主性を思いやりの心を協力性を育成すべきだったのです。

昭和二十二年、学校給食が開始されました。母の会が結成されて、会員の方々が交代で、ミルクとおかず（一品）を作って下さったのです。子ども達は、お椀と箸を袋に入れて、その袋を持って毎日登校したのです。ところが私の担任した学級の中に、毎日のように給食袋（お椀と箸を入れた袋）を忘れる男の子がいました。その都度、給食室からお椀と箸を借りてきて給食をすませていました。あまりにも毎日のように堂々と給食袋を忘れるので、たまりかねた私はある日のこと「そう毎日忘れるようじゃあどうしようもない。きょうは給食を食べるな。」と叱りました。（注意しましたと書くべきでしょうが……）そして給食の時間になりました。みんなおいしそうに昼食を食べ始めました。（主食だけは家から持参するか、学校へ出張販売にきた土屋パン店のパンを買ったものです。）ミルクとおかずのないその子は、昼食を食べません。がまんしきれなくなった私は給食室に行きお椀と箸を借りてきて、その子にミルクとおかずをよそってやり「さあ〇〇君、食べなさい。」と言いました。するとその子は「先生が食べるなと言ったから食べない。」と言うのです。そして、食べろ食べないのやりとりが何回か続いた後、ついに私は大声を出して「これだけ言っても食べないのか。お前みたいのをヘソマガリというんだ。」と言ったとたん、その子も大声で「先生だってヘソマガリだ。」とこたえました。さあ、教室中爆笑の渦です。その子も私も、思わず大笑いしてしまいました。そのあとは、その子もきちんと給食を食べました。そしてそれからは、給食袋を忘れることが少なくなってきました。その子は成人したあと、ちょっ

と失敗をしたことがあります。ある夜、その子の友人と名のる青年が私の家にみえて「先生、〇〇が失敗して先生に申し訳ないと言ってあやまりに来ました。ただ、先生と顔をあわせるのはつらいと言って、自動車の中で待っています。私に代わりにあやまってきてくれというので、〇〇に代わってあやまりに来ました。」と申しました。私もその子が失敗したことは聞いて知っていて、かげながら心配していたのでした。顔をみて一言ことばをかけたかったのですが、その子の言うとおりにしようと会うのをがまんしました。そして友人に「〇〇君の気持ちはよくわかりました。私の所へわざわざあやまりに来てくれるなんて本当にうれしい。私は、〇〇君が失敗にくじけないで、立派に立ち直って成功することを深く信じている。このことを〇〇君に伝えて下さい。」と頼みました。勿論、〇〇君は立派に成功して、現在は社長として一つの会社を立派に経営しております。私が勤務していた学校のために、いろいろ奉仕してくれたこともあります。あの夜も、奉仕してくれた時にも、うれしさ有難さで、私は涙をこらえることができませんでした。このことを思い出すたびに、教師になって本当によかったということを、しみじみとしかも強く感じます。人間は、人間を信ずるべきです。たとえ相手が自分を信じなくても、自分は相手を信ずるべきです。私は、自分と縁のあった人を、みんな信じたいのです。そう努力していきたいのです。

「学校でさわいだ罰で、両手に水の入っているバケツを持たせられ教室に立たされるのは辛かった。でも、もっと辛いのは、女の子の前で立っていろと言われた時だ。これはみじめだった。」

こういう意味の文もありましたが、たしかに男の子は、女の子の前に立たされると、当分はいたずらをやめたようです。戦前は小学校でも、男女別学、別々の学級だった学校が多かったようです。一学年一学級の場合は男女共学でしょうけれど。一学年三学級の場合は、一組は男子組、二組は女子組、三組は男女組という編成もありました。それが戦後、男女共学となり、どの学級も男子と女子によって構成されるようになりました。ですから終戦後男女共学が始まった頃は、現在のように幼稚園からの男女共学と異なり、と中から共学となった学年もあり、男子と女子の仲は現在よりは、ぎこちないものがありました。現在より、男子対女子のいざこざが多かったように記憶しております。私は、男子と女子が何

学芸会のあとで（21年5月10日）中央が筆者

かトラブルを起こすと、仲なおりをさせた後、男子と女子に握手させました。心の中まではわかりませんが、男女で握手するということは、女の子より男の子の方がこたえたようです。この握手作戦は、特に男の子に効果があったようでした。男女共学が始まってしばらくたった父母授業参観日の時、私は、子ども達に男女共学についての感想を発表させました。お父さんお母さん達も、男女共学に強い関心を持っていたのです。女の子は忘れ物をしないから、消しゴムなど忘れてもすぐ借りられるからいい。男の子は力があるので、そうじの時など重い物をすぐ持ってくれるからいい。女の子はそうじの時すみずみまでよくきれいにするのでいい。今までは男の子にいじめられても男の子は助けてくれなかったが、男女共学になったら、男の子も助けてくれるからいい。このように発表が進めば進むほど、あとから発表する子は、前の子に言われてしまって、別のことを発表するのに困ってしまうのは当然です。いよいよ、ふだん少しそそっかしい点のあるA君の番になりました。指名されて立ち上がったA君はだまっていました。そのうちに頬が少し紅味をおびてきたとたん大きな声で「男は女が好きだ。」と言いました。さあ大変です。子ども達もお父さん（二、三名はいたと思います。）お母さん方も、それこそ腹の底から笑ってしまいました。私はとっさにA君を見ました。A君の顔は真赤になりました。泣きたくなるのをけんめいにこらえているように見えました。私は、さわぎを静めた後、A君と話しながら、A君としては、男子と女子が、前より仲がよくなったということを言おうとしたのだが、緊張して、ついあ

のようなことを言ってしまったのだということを、子ども達や父母達にわからせました。A君もほっとしたろうが私もほっとしました。でも、男は女が好きだと大声で言えたA君がうらやましかった。後日、A君の父親にこのことを話したところ、「先生、うちの子はおやじに似てそそっかしい所がある。うちの子の言いそうなことですよ。」と言って楽しそうに笑ったのです。さすがA君の父親です。A君の母親やきょうだいの顔を思い出した私は、A君のうちの人たちは、みんな明るい人だ。明るい家庭、楽しい家庭。このような家庭のあることを、うれしくたのもしく思いました。A君は、しあわせです。

多摩川での水泳も楽しい思い出の一つです。現在のようなプールでの水泳指導の方が、だれもが早く泳ぎを覚え、泳力もぐーんとつくでしょう。しかし自然と一体となっての水泳という点では、なんといっても多摩川での水泳でした。水にもぐって友人や先生の脚を引っぱったり、川底のきれいな石をもぐってとったり、流れにのって泳いだり……。フリキンで泳ぐ子もたしかにいました。家の人に水泳を禁じられている場合は、パンツをぬらすわけにはいきません。ぬれたパンツで家へ帰れば、水泳をしたことがすぐにばれてしまいます。パンツをはいて泳いだ後、木の枝などにパンツをつるして、かわかしてからそのパンツをはいて家に帰るという知恵者もおったようです。でも顔を特に耳を見たり髪の毛を見れば、いつもはきたない自分の子の顔や髪がきれいになっていることで、親はハハー川で泳いだなとみやぶれるのです。でも知らん顔をしていた

のでしょう。もっともその対抗手段として、土を顔に特に耳、髪の毛にこすりつけて帰宅したという子どもの話も聞きました。布製の米袋の浮き、そう長くもたないところがまたおもしろかったという印象が残っています。省資源の時代、このような知恵を、日常生活に大いに活用したいと思います。ゼイタクな物は無ければ無いで、それに代わる物は必ず発明発見されるはずです。また、そうしなければなりません。なにも外へ外へと拡張して行くことだけが人間の生き方ではないでしょう。内へ内へと必要最小限のものを追究して行く生き方の中にも、人間としての喜びがあるはずです。結局は、物の豊かさよりも、心の豊かさをとりたいものです。

玉川上水での水泳も、子ども達にとってはみりょくがあったようです。水深は一定しているし流れも一定しているし、また川よりは近いという利点もあったわけです。でも、これは禁止されていました。時々、上水の関係者より、学校にも苦情がきました。そのあとは先生方が、上水で泳いでいる子がいるかどうかパトロールしました。上水で泳いでいる子ども達を見つけても、その場で注意することは出来ません。流れに乗って逃げられてしまうからです。また先生達のいる場所の反対側に上がって逃げてしまうからです。これも自然と身についた子ども達の知恵でしょうか。こういう子ども達には、翌日学校で強く注意する気にはなれませんでした。ただ小さい子や泳げない子も一しょの時は、事故防止という面からの注意は強くいたしました。

終戦後も、元日には学校で新年を祝う式がありました。式後、ミカンとか時には菓子を子ども

達にあげました。しかし、元日は授業日ではないということで、この式もいつの間にか止めてしまったわけです。

夏休み中の福生の祭りについては、第二話のところで詳述いたします。

九月十九日の神明社の秋祭りにも、幾多の思い出があります。終戦後は、各地で素人演芸会が盛大に行われるようになりました。福生でもよく行われましたが、その中心はなんといっても青年団でした。神明社の秋祭りの夜、やはり青年団中心の素人演芸会が行われたことがあります。歌、舞踊、寸劇等なかなかバラエティに富んだものでした。そして芸の上手な青年達はなかなか人気がありました。舞踊と言っても、流行歌にあわせて踊るものが主で、伊那の勘太郎の踊りなど、盛大な拍手をあびたものです。ある時、私は担任している小学校高学年の子ども達を対象に、尊敬している人物の調査をしたことがあります。子ども達の尊敬している人物の第一位はだれだったと思いますか。両親でもなく、先生でもなく、二宮尊徳や野口英世でもなく、占領軍総司令官のマッカーサーでもないのです。なんと素人演芸会の人気者である青年団員の佐藤新平さんでした。他の団員の名も何名か出てきました。このあとは何も言いません。こういう事実があったということをお伝えしたかったのです。たしかに、長ドスを腰に差し、カッパをかぶげて三度笠を手にした、佐藤さんの踊りは見事なものでした。

青年団発足、PTA発足、臨海学校開始等、なつかしい出来事ばかりです。臨海学校が初期の

頃は、ジャガイモなどを宿舎の至楽荘（千葉県勝浦市鵜原）へ前もって送ったり、当日は子ども達（先生も）めいめいが、お米や梅干をリュックサックに入れて行ったものです。小学校六年間の生活の中でも、最も思い出深いものの一つでしょう。私の担任した古屋幸夫君も臨海学校の楽しさ、鵜原の海の良さを忘れられず、数年たって弟と二人で、鵜原の海岸にテントを張って海水浴を楽しみました。そして毎朝、鵜原駅前を二人で掃除したそうです。この年も私は臨海学校に行き、至楽荘管理人の田中斎一郎氏のお母さんから、古屋君兄弟の善行を鵜原の人達が賞讃していることを聞いて、本当にうれしく思いました。そして浜中雄一校長先生や管理人の田中さんの了解を得て、私は夜古屋君兄弟を宿舎の風呂に入れてやったことを今でも覚えています。なお、管理人の田中さん一家は、その後生まれ故郷の小笠原島にかえり、田中さんは現在、小笠原村の教育長をなさっております。田中さんは、至楽荘の管理人になる前は、小学校の先生をしておりました。また漁師の仕事をしながら管理人をしていたのです。海に関するお話、とくに大きな魚をとった時のお話とか、魚つけ林のお話とか、とにかくお話の上手な人でした。

第二話　町づくり

みなさんの愛読書の話を読んで、私はすぐ竹山道雄先生の書かれた「ビルマの竪琴」という本のことを思い出しました。読書は大切なこと必要なことです。でも学校で読書指導しても、すべ

ての子が読書がすきになるわけではありません。私は子ども達が少しでも読書がすきになるようにと、給食の時間に子ども達に本を読んできかせたのです。そしてその本の中で、私も子ども達も一番感動した本が「ビルマの竪琴」だったのです。

前にも書きましたが、初期の頃の学校給食はミルクとおかずだけです。したがって子ども達は主食を家から持ってくるわけです。また土屋パン屋さんが注文をきいて、コッペパンを学校で販売してくれました。どの級でも、何人かはパンを注文したようです。パンにはジャムかバターかクリームがつけてあったと思います。子ども達はジャムやクリームのパンを好んだようでした。しかし私は、バターパンを食べればバタバタふとるからと言って、自分の担任している子ども達には、バターパン以外のものは注文させませんでした。このことで、ある時ある母親から、先生のおかげで家の子もバターパンを食べるようになったのでうれしく思っていますと、感謝のことばをいただいて恐縮したことがありました。よき時代でした。現在このようなことを言っても、子ども達がはたしてがまんしてバターパンだけを注文するでしょうか。また保護者がだまっているでしょうか。むかしはよき時代でした。

修学旅行の話もありましたが、福生一小では戦後は昭和二十二年度に行った、箱根方面一泊旅行が、復活第一回の修学旅行でした。たしか姥子温泉に泊まったと記憶しております。勿論、主食の米を持参したわけです。宿舎で私が「箱根は何県にあるか」と子ども達に質問すると、当然

の如く「神奈川県」という答えがかえってきました。私が「別のこたえはないかなー、よく考えてみて。」と言いますと、しばらくしてから「あっそうだ。天下の嶮(けん)だ。」という声がしました。この時、宿の女中さんが大声で笑ったことも忘れられないことの一つです。修学旅行が何年か続いた後、臨海学校に変わったわけです。福生辺の子どもには、山より海の生活を経験させた方が、より教育的には効果があるとの判断から、六年生の修学旅行を臨海学校に切りかえたわけです。先生方にとっては、修学旅行より臨海学校の方が骨が折れるわけですけれども。（箱根の山は、天下の嶮。という歌があることは、みなさんご存じと思いますが、念のため書きそえます。）

グループ学習、家へかえっての勉強もグループで……。たしかに、話し合い学習、グループ学習とかいうものが戦後流行しました。そして現在まで続いています。そして私たち教師が今も後悔し心配していることは、話し合いだグループだといって、本当に子ども達一人一人の成長をみきわめてきたかどうかということなのです。一人一人がそれぞれ自分なりに考え判断することが根本なのですが、つい大勢に流されたり大きな声におされてしまってというようなことがなかったかどうか。そういうようなことがあったとしたら、いたらぬ指導を今改めてお詫び申しあげるだけです。

夏祭り。御神輿(おみこし)。この言葉を聞くだけで、五十八才のこの身体の、血が湧き肉が踊るのです。少し長くなりますがお許し願います。私が教師として初めて教壇に立ったのは、昭和十八年（三

月三十一日付）当時の福生第一国民学校です。四月より五年男子組の担任となりました。昭和十九年五月、海軍に現役兵としてはいり、二十年八月復員。再び福生第一国民学校へもどりました。そしていつの間にか、福生町の青年団の方々とも知りあうようになりました。青年団の演芸会の寸劇の脚本づくりを頼まれて一晩で適当に書きあげ、自分も出演したこともありました。その他いろいろのおつきあいがあったわけです。昭和二十一年七月三十一日の昼少し前、祭り姿の親友田村四郎氏（福生町長沢出身、現、昭島市立拝島第三小学校長）と二人で駅前通りを歩いていると、「浜中先生、神輿かつがないか。」と声をかけて下さったのが当時の青年団長橋本孝蔵氏（現、福生市収入役）と副団長の山崎良之助氏（元、福生市教育委員長、前、福生市議会議員）でした。はずかしいからとかなんとか言っておりましたが「先生だからって何も気どることはねえ。地元の人の中にとけこむのが本当の先生だ。」というような説得に服してしまいました。そして用意してくれたハンテン、帯、ハチマキ、ワラジ、テヌグイ等で祭り姿になり、シラフではかつぎづらいであろうという橋本、山崎両氏のご好意に甘え、三人で清酒一升を飲みました。ようやく勇気が出て、御神輿の集合場所である神明社へと出かけて行きました。神輿をかついでは時には飲み、飲んではまたかついでいるうちに、すっかりいい気分になりました。無我夢中で神輿をかつぐ境地は全く天国・極楽にいるようなものでした。その夜は、山崎氏の家にやっとたどりつき、山崎氏と一つカヤの中に寝てしまいました。勿論、本人はなんにもわからなかったわけです。翌八月

一日の朝、ふと眼が覚めた私は驚きました。前にもいったように、山崎氏の隣りに寝ているなんて全く気づかなかったのです。あわてて、山崎氏のおさえる手をふり切って学校へもどりました。しかしまだ朝早かったので学校の玄関も開いておりません。朝礼台の上で休んでいるうちに、疲れで思わず朝礼台の上で眠ってしまいました。そうです。祭り姿のままでした。こんな私の姿を何人かの人が見たからでしょうか「浜中先生は宵宮の晩、朝礼台の上で寝てしまったらしい。」という噂が流れ、その噂を一々打ち消すために、私もずい分骨をおりました。

次の年からは、夏祭りが待ち遠しくてたまりませんでした。結婚しても、子どもが生まれても、福生第一小学校から福生第二小学校へ転校しても、また第一小学校へもどっても、桧原村立共励小学校長となっても、福生第五小学校長となっても、なんといっても御神輿をかつぐのが大好きで大好きで、昭和四十六年の夏祭りまで四十九才の歳まで、福生の神輿をかついでしまいました。福生市の神輿は、福生分熊川分どこの神輿もすべてかつぎました。熊川牛浜部落で新しい神輿を造った年など、三十一日一日と二日間、呼ばれて（呼ばれなくても行ったでしょうが）喜んで神輿をかつぎに行ったものです。親友の石川保氏中村益雄氏等が熊牛にいたので、よけい熊牛の神輿はかつぎやすかったのでしょうか。毎年毎年、ハンテンなど誰かが用意してくれたのです。そこで妻が、ちゃんと自分用の祭りハンテンを作ろう作ろうと言ってくれていたのですが、いやことしこそはかつぐのを止めるからと言っているうちに四十九才になってしまったのです。度々、

もう神輿をかつぐ歳ではないと思いましたが、いつの間にか青年団顧問ということになり、本部祭礼委員（昔は神輿は青年団の管轄でした。）の徽章などをいただいたりして、有頂点になって神輿をかついでしまったのでした。青年団がなくなってからは、もうかつぐまいと固く決心をして、福生の夏祭りには顔を出すまい、自分の家にいようと考えたのです。でも七月三十一日になるともうだめです。せめて祭り見物や神輿見物ならいいだろうと、足が福生に向いてしまうのです。駅前通りを歩いていると、マルミ運動具店の方から駅へ向かってどこかの神輿が近づいてきます。胸がしめつけられるおもいです。「先生、かつぎませんか。」「先生かつげよ。」「先生がかつがねえと、祭りの気分が出ねえよ。」神輿をかついでいる連中からこういう声がかかってきます。昔の教え子の顔々、青年団幹部で親しかった昔なつかしい顔々。しかも、ちゃんとハンテン、帯、ワラジまで持ってきてくれる教え子もいるのです。なんでかつがずにいられましょう。三十一日にかついでしまえば、もう完全に神輿中毒？にかかってしまいます。一日は朝から胸がわくわく。本当に神輿天国神輿極楽です。昭和二十一年二十四才の時より四十六年四十九才の時まで二十四年間に、神輿をかつがなかったのは旅行等で二年、あと二十二年はかついだわけです。思い出はいくらでもあります。平井賢治氏が青年団長の時、三十一日の夜、どこの神輿もすっかりおさまった後、青年団の幹部達は後しまつといおうか反省会といおうか、ともかく飲んでしめくくりをしました。例年の如く私も仲間に入れてもらっておりました。気がつくと、平井団長宅に、私と

桜沢正一氏がいるのです。そして翌八月一日の朝も、桜沢氏と私は平井氏宅におりました。このあとは何を書かなくともおわかりでしょう。念の為申しあげます。山崎氏と平井氏の所に泊った時以外は、私はちゃんと自分の帰るべき所に帰っております。

神輿は大人用だけでなく、子供用もあります。子ども達も神輿をかつぐのは大好きです。楽しみにしております。昔は、神輿をかつぐ前、またかついでいて休憩した時、世話役の大人たちから、ご神酒を飲まされたものでした。喜んで飲んだ子もいたでしょう。飲もうとして、ひょいと前を見ると、祭り姿のこわい浜中先生（昭和二十七年よりは岩下先生）が立っているではありませんか。ぎょっとしたあと、ニヤッと笑うと、先生もニャッと笑います。あとは、私がその場を立ち去るか、横を向いて他の大人と話をするかです。これだけで子ども達と私の仲はぐっとちぢまるのです。先生も神輿をかついで、一緒に祭りを楽しんでくれるというだけで、子ども達は私にぐっと親近感をいだいてくれます。私も、ふだん学校では見られぬ子ども達の姿を見て、より子ども達に親しみを覚えます。ふだん学校ではあまり口をきかない子も、祭りの気分にのって、いろいろのことを私に話してくれます。質問にも喜んで答えてくれるのです。子ども達の祭り姿の写真も何枚もとりました。祭りが終わった直後の登校日には「先生、うちのお兄さんがね、先生と一緒に御神輿をかついで、いろいろお話したりして楽しかったって言ってたわ。」とか「先生、御神輿がうちで休憩した時、ビールを出したら、お酒ありませんかって言ったのは先生だったん

だってな。」「神輿が終わって青年達がクラブに集った時、先生も一緒だったんだってな。先生の歌とてもうまかったって言ってたよ。」とか、子ども達がろいろいろ話しかけてきます。私も「○○君、御神輿が夕方休憩した時、君はおにぎりを五個も食べてお腹がはって苦しんだそうだね。」とか「○○さん、あなたは山花車の金棒ひきをやったね。山花車を引いてる方が楽しいと言ったから、先生が、金棒ひきは山花車を引く人達を元気づけるための大切な役なんだと言ったら、うなづいてくれたけど、あの時は先生もうれしかったよ。」とか「○○君の兄さんはいい兄さんだね。」とか「○○さんのおじいさん、おもしろいおじいさんだね。先生、酒飲んだって神輿をかつげばすぐ汗になってしまうからって、先生にお酒を飲め飲めというのでまいったよ。」とか、いくらでも話しかけることがあるのです。子ども達が経験したことと同じような経験を持つことは、実に楽しいことです。子ども達の家族の人々を知ることは、より子ども達を知るということにもなるのでしょうか。祭りの時の子ども達のお金の分け方についても、学校に苦情？がきたこともあります。祭りの時の子ども達の非行？についての話もきました。でも、いつの間にかケリがついてしまったような気がしています。

まだまだいくらでも書きたい気がします。でも、ホタルの光いつまでもの背景から外れすぎた感がするので一応止めます。とにかく、いつかは夏祭りのことを話したかった書きたかったので、こういう機会を与えて下さった山崎茂男氏に改めて感謝いたします。

ここに一枚の写真があります。昭和二十九年八月一日、福生駅前通りの、青年団祭礼本部前での、青年団本部祭礼委員達がとった記念写真です。前列中央が青年団長祭礼委員長の設楽清一氏（現、福生市消防団長）向かってその右側が、岩下伴蔵です。体重は九十キログラム位あったでしょうか。でも、神輿をかついでもなんともありませんでした。（現在の体重は約七十五キログラムです。）笹本巳代治氏、村野吉蔵氏、木村氏、篠崎氏、坂本氏、岸氏、浦野氏、設楽氏、吉野氏、笹本氏、森田さん、森田さん、古谷さん等、なつかしい顔顔顔です。この一枚の写真を見るたびに、二十四才から四十九才までの私の青春時代？がよみがえってくるのです。

昭和四十九年に病気で休職した私は、昭和五十年四月一日、奥多摩町立氷川小学校長として復職いたしました。そして昭和五十四年四月一日、福生市立福生第四小学校長として福生にもどってまいりました。夏祭りが近づくと、保護者の方や学区域（加美・永田・長沢）の方々が「先生、御神輿かつがないか。」と声をかけてくれました。本当に有難いことばです。けれども、現在の私は右の手足が不自由で（脳溢血などの病気のためではありません。首の骨の右側が一部へこんで神経をおさえているためなのです。）とても神輿をかつぐことはできません。しかし何とかして保護者、学区域の方々の要望にこたえたいと考えました。その結果、福生第四小学校の若い男の先生方に、神輿をかついでみないかと話しかけてみました。夏祭りに学区域の御神輿をかつぐことの教育的意義を力説しました。その結果、門脇敏治、川辺一弘という二人の先生が、神輿をかつぐということになりました。私も責任上、二人の先生のかつぐ神輿の後を歩いて、時には激励し時には指導？もするという約束をいたしました。ところが昭和五十四年の夏祭りは、加美と永田は大多数の他の町会と同じように、七月二十八日（土）二十九日（日）の二日間に、長沢だけが本町の町会とともに例年通り七月三十一日（火）八月一日（水）の二日間に、行うことになってしまいました。したがって、門脇・川辺の二人の先生方は、四日間神輿をかつぐことになりましたし、私も四日間、神輿の後を追いかけて歩きました。阿波踊りではないけれども、神輿も、見て歩くより、かついで歩くほうがよほどらくですし楽しいことだということを、つくづくと感じ

ました。私の友達が「おめえは自分でかつげないので、身代わりをつくったな。」と言いました。「ああ、そうだよ。おれは身代わりを作ったんだよ。」とこたえました。御神輿かつぎの後継者を作るということは、結構なことだと信じております。子ども達の神輿かつぎや、山花車引きも激励できて充実した四日間でした。

第三話　基地の町

二部授業は、たしかに大変でした。急激に増加する児童数に比して、教室という施設の増築が追いつかず、ある学年が、または複数の学年が、ある週は午前中授業、次の週は午前中は休みで午後だけ授業という形をとったわけです。午前中遊びすぎてしまった為か、または時間をまちがえた為か、午後の授業に遅れる子が何人かはいました。また、午前中遊びすぎてしまって、午後の授業時間にはすっかり疲れてしまった子もいました。しかも標準より少ない授業時間数です。子ども達も大変だったけれど、先生達も大変でした。何よりもまず、少ない授業時間数の中で、いかにして授業の能率をあげることができるか、この問題を解決しなければなりません。徹底した教材研究、指導法の研究をしなければなりません。（今になってみると大したことをしていなかったのではないかと後悔しておりますが。）宿題を出して不足の時間のうめあわせもしなければなりません。宿題は楽しくないという子ども達の気持ちは充分わかっていても……。でも、午後

は子ども達と多摩川原で充分に遊びほうだい遊べたなんていうことは、二部授業の利点ではなかったろうかと思います。二部授業というハンディを乗り越えて、立派に成長した子ども達は、さすが、福生っ子です。また、そのような指導をした昔の先生も立派？だったと言えましょうか。苦難こそ、真の人間を育ててくれるものだと信じています。

「むかしの学校は、夕方なんか本当によい遊び場で、子ども天国だったよ。」まさにその通りでした。校庭で、セミとりができ、イチョウの葉集め、桜の花びら集めができ、赤トンボをとることができたのです。現在の福生市内の小学校からは想像できない風景が、昔の小学校の校庭では見られたのです。赤トンボで思い出しました。私の担任した級の森田和一君（現、本橋和一氏、私と同じようにムコに行ったのです。）の「竿ふって　どこまでも追う　赤トンボ」という俳句が、子ども向けの新聞である「少年タイムス」の俳句欄に入選したことがありました。私も一時、子ども達に俳句の指導をしたことがあったのです。勿論、私は俳句が得意であったというのではありません。子ども達の作った俳句を持っていっては、永田在住の俳人、持田花朝師（本名、改三、故人）に指導を受けていたのです。なお、持田改三氏の数多い男のお子さんのうち、二人のお子さんを私が担任したことがあるというのも、なにかの縁かもしれません。

第四話　汚れた多摩川

テレビ放送の初期の頃は、私も、プロレスやプロ野球に夢中になりました。子ども達はまさに熱烈なるプロレスファン、プロ野球ファンです。クラブ活動で、私が陸上競技クラブの担当をしている時でした。プロ野球の日本シリーズは、巨人対南海戦です。午後の二時間つづきのクラブ活動のある日は、丁度プロ野球日本シリーズのテレビ放送がある日です。子ども達はそのテレビを見たくてたまらないのです。なんとかかんとか私になぞをかけてくるのです。その気持ちがわかりすぎるほどわかる私は、一つの計画を考えつきました。校長先生の所に行って「陸上競技クラブは、きょうはマラソンをします。東秋留の二宮神社まで行ってきます。」と伝えました。「そうか。大丈夫かな。気をつけて行ってくれ。」という校長先生のお話だったので、しめたと喜びをおしかくして、二宮神社めがけて走り出しました。そうです、子ども達も私の考えをくみとったのです。私も私の計画を話しました。大きな目標に向かった時、人間とは思いもよらぬ力を発揮するものです。二宮神社を折り返して、本町の福井電気店の店頭のテレビの前に子ども達と私が並んだ時は、クラブ活動終了までには予想以上の時間がありました。試合は巨人がリードしています。私も、大部分の子ども達も大の巨人ファンです。昔の子ども達は、殆どが巨人ファンだったと言っても過言ではなかったと思っています。南海の反撃を巨人がおさえています。しかしク

ラブ活動終了の時刻は、刻刻と近づいてきます。ついに終了時刻になりました。しかしテレビは熱戦の模様を放送しつづけています。あと一分、あと五分……。ついに十分間すぎてしまったので、涙をのんで学校に帰りました。校長先生に「陸上競技クラブは無事にマラソンを終えました。」と報告したところ「ご苦労様。よくみんな走れたな。」とほめられました。この時の私の複雑な胸のうちは、なんと表現したらいいのか……。今だから話せることなのです。

多摩川での水泳。臨海学校にそなえ、子ども達の泳力をみて、いくつかの水泳班に編成することも、多摩川で行ったのでした。

運動会での徒競走にはハダシで走るということ。昔から、各地に、ハダシの方が速く走れるという迷信があったようです。一応スポーツは陸上競技を専門としてきた私としては、この迷信を打破しなければなりません。ハダシでは足の力が五本の指の方向に分かれてしまって一つにまとまらないのだ。靴をはいた方が、足の力が一つにまとまって前の方を向く。だからハダシより速く走れるのだ。このように説明したことを覚えております。

映画館のこと。私は映画狂と言っていいほどの映画好きでした。福生の映画館にもよく行きました。子ども達に人気のあった「笛吹童子」や「紅孔雀」などの映画は、子ども達より私の方が夢中になっていたかもしれません。教室で、子ども達と映画の話に花を咲かせたことはいうまでもありませんでした。映画の話であれ野球の話であれ、話に花が咲けば、子ども達と私との間に

は、より親しみが湧いてくることは当然です。と言っても私は、教育的見地からも無理をしてでも映画を見る努力をしたのだという言いわけはいたしません。なんと言ったって、私は映画が大好きだったし、今も大好きなのです。

汚れた多摩川ということについて、どうしても福生第五小学校の校歌にふれないわけにはいきません。福生第五小学校は、昭和四十四年四月一日に開校された、市内で第五番目の小学校です。校歌も校章も制定されておりません。遠足でバスに乗り、ガイドさんから「さあ皆さんの学校の校歌をうたって下さい。」と言われても、子ども達はうたうわけにはいきません。六年生の作文の授業に出る私に、どの子ども達も「校長先生、早く校歌を作って。」と頼むのです。そこで先生方とも相談して、年内に校章と校歌を制定し、校旗も作りあげてしまうことにいたしました。種々の経過がありましたが、校歌の作詞は、私と教頭の田村四郎先生が担当いたしました。はじめは、私の豊島師範学校時代からの親友で、小学校の教師をしたあと、ビクターの専属作詞家となった宮川哲夫氏（故人）に作詞を依頼したのです。けれども宮川氏は「おれも元は小学校の先生だった。けれども今は流行歌を作って生計を立てている。君と教頭の田村君で作ったらどうか。」というので、作詞のいろはから宮川氏の指導を受け、どうにか校歌が出来あがったのです。その時、宮川氏の強い希望により、私と田村氏との「協作」ということにしたわけです。この時、多摩川をどう表現するかでなやみました。昔からある校歌は、清き多摩川とか、流れも清しとか、きれ

いなとか、ともかく多摩川の水の清さをうたっています。けれども昭和四十四年代の多摩川は、どうしても清き流れではありません。どうしても清きという表現をとることができませんでした。結局「青空をきょうも浮かべて　絶え間なく　多摩は　多摩は　流れる」として「絶え間なく　からだきたえて……」に続けたのです。

あとがき

「ホタルの光いつまでも」の背景を語ろうなどと言いながら、結局は自分のことを語ってしまったようです。「どんなことでもいいから……」という山崎さんのおことばに甘えたわけではなかったのですが、書いていくうちに、いつのまにかこうなってしまったのです。人間としての弱さでしょうか。お詫び申しあげます。

きのう（昭和五十五年二月十日、日曜日）は寿久会（じゅうきゅうかい）の会合が福生駅前の料亭「あたみ」であり私も招かれて出席いたしました。寿久会というのは、当時の福生第一国民学校の昭和十九年度の卒業生（六年生）の会です。男子組と女子組の二組の卒業生が合同でつくった会です。この男子組が五年生の時の一年間（昭和十八年四月～昭和十九年三月）私が担任教師だったのです。私にとっては初めての教え子ということになります。男子二十名（卒業生六十三名中三名死亡）女子二十五名（卒業生五十九名中二名死亡）の方々が出席し、盛大な同窓会となりました。なお、新

井精一先生も出席して下さいました。教師としては、ただただ感激あるのみです。うれしいことありがたいことなのです。この会の代表の栗原仁氏（福生第五小学校の先生）と私は、福生第二小学校および福生第五小学校で、一しょに子ども達の指導にあたったこともありました。

きょう（昭和五十五年二月十一日　月曜日　建国記念の日）は、私の三回目の教え子、男子五人女子二人の計七人が、私の家に遊びにみえました。これも、うれしいことありがたいことです。昭和五十五年という年は、私にとって忘れられない、いい年になるような気がいたしました。寿久会の人達は四十八才、きょうの人達は四十一才、みな人生の充実期に在り、顔を見て話を聞くだけで、私も若返ったような気がしました。

さて、「ふっさっ子」とはなにか、どんな子なのか。私なりに解明しなければならないような気がしてきました。

「たくましい子」です。どんな困難にも負けず、それを乗り越えて行くたくましさがあります。「明るい子」です。いたずらをしても例え悪いことをしてもにくめません。どんな艱難辛苦にあっても、ニコッと笑顔をみせる明るい子です。腹の底までみんな見せてくれる子です。「やさしくおおらかな子」です。ことばづかいや動作がたとえ粗野であっても、他の人に対して親切です。他の人を受け入れます。他の人と協力します。他の人に感謝の気持ちを持っています。しかし「自分というものをしっかりと持っている子」なのです。

理由は一々書きません。まだまだ語らなければならない点があるかも知れません。ちがった見方をする人がいるかも知れません。

でも、私にとっては「ふっさっ子」とは、前に述べたような子なのです。

「ふっさっ子」の、ますますご多幸をお祈りして筆をとじることにいたします。

（前福生市立福生第四小学校長）

筆者と子どもたち
（昭和29年3月8日）

ふっさっ子と横田基地

前記の人たちより、何年か後の〝ふっさっ子〟に登場してもらう。彼等が福生に住んでいて横田基地をどう見ていたか、そのことで『ふっさっ子・第一集』よりひろい出してみた。

（一九六五・三）　小学　男子

いま、ベトコンとせいふ軍がさかんに戦争をやっているが、早くやめてほしい。それは、もしいまの戦争がひどくなると、アメリカやソ連のばくげき機が出て、横田きちもばくげきするだろう。だからこの福生町もあぶなくなる。

（一九六九・二）　中学一年　男子

ぼくが小学生の時、とてもこまったのは横田基地の飛行機の音だ。第三小学校は近いのでよけいだった。いくら一生けんめい勉強しようと思ってもできやしない。でも基地がなくなったら、福生町はさびしい町になるだろう。

（以下、ぜんぶ同年）　中学一年　男子

ぼくはないほうがいいと思う。そして、そこに学校をたてたり、団地や住宅をけんせつして、田んぼに学校をたてないで、もっと農業をさかんにしたらいいと思う。

中学一年　女子

基地はカーニバルなどあって、楽しいかもしれないが、それは外人がやって、日本人がそれを見にゆく。なんだか日本の方がしたっぺみたいだ。そりゃあ、戦争に負けたからかもしれないが。

小学六年　男子

ぼくたちで基地に不安なのは、

1、ジェット機の音がものすごい。音が大きいのはカッコいいけど、びっくりしてしまう。

2、基地の中には、しばふなどの広いあそびばがある。外人の子どもたちは安全に遊んでいる。でもぼくたちには、そんなしばふの遊び場なんてない。なぜ、日本の子どもにないのだろう。

小学六年　女子

私の父は横田基地で働いている。この間、自治会館で基地反対のデモをやっていたが、私はそういうのをみると、その人たちの前で大声でさけんでやりたくなる。「父が失業してしまう。」

中学二年　女子

福生の人でも、基地のことをうるさいとかいって、基地がないほうがいいと言っている人が多いが、基地のまわりの人はいろいろお世話になっている。

1、NHKの受信料が半額になっている。爆音がうるさくてもしかたないことです。

2、基地につとめている人もたくさんいます。基地がなくなったら、つとめていた人が失業する。

以上のことにおいて、とやかく言わないこと。

中学二年　女子

テレビの受信料が安いと言っても、それだけテレビのうつりが悪い。職業だって、食べたいものがあっても、それがないと思えば食べずにすむと同じように、横田基地がなければ他の仕ごとがあるはずだ。もしアメリカが他国と戦争すれば、福生町は戦場になるかもしれない。基地がなくなりあそこが住宅地になれば、福生もよい町になるでしょう。

中学三年　男子

基地があるほうがいいか、なければいいのか、ぼくはどちらも良い点と悪い点があると思う。それよりも、今の大人が横田基地に対してどういうふうに考えているか、どういうような態度をとっているのか、よく見つめたい。そして、ぼくらが大人になったとき、まだ安保条約が残っていたなら、今の大人の考え方をもとにして、ぼくらで正しいと思う態度をとるべきだと思う。

そしてこれは、『ふっさっ子・第四集』で、新井勝紘氏が「短かくて長い路」の中で述べられた、福生と基地に対する、当時の少年の心のかっとうの記録である。

その一部を抜粋させていただく。

カラーショック

新井勝紘

福生中学では、毎年秋になると写生大会があった。ぼくら生徒はその一日校外に出て写生をし展覧会を開くのである。黒い詰襟の服を着て、弁当と絵具と画板をぶらさげて、ぞろぞろと基地の中に入った。この日は特別な許可が下りていたのだろう。そして数時間のうちに一枚の絵を完成させるのだ。この時の水彩画は、ぼくらが日常見慣れている奥多摩の山々や多摩川、茅葺屋根の農家や白壁の土蔵などを描くときには滅多に使ったことのない色の絵具を使い、バカに原色だらけの絵が出来上った。水をためておくタンクだろう、赤と白のストライプ模様の鉄塔の下に、朱色やコバルトブルーの屋根の作業場や飛行機の格納庫、太陽光線に光るシルバー色の飛行機やフォードやキャデラックなど、画材には事欠かなかった。ぼくらはこうして〝カラーショック〟といえるような体験をしたのではないかと思う。

〝福生気質〟と民主主義

昭和29年の『多摩の子』には、こんな詩があった。

福生一小六年　矢沢年道

おじいさん、あれから三年たちました／おれは、こんなにでっかくなったけど／おじいさんが、あんなに大事にと思っていた／あの、いなり様のはたけは／間もなくかわれて赤線という場所になりました／バーというものがいくつもたってしまったのです／今は、後藤山から夕もやがおしよせるころ／そこは、アメリカの兵たいでごたごたし／やがて夜になると、赤、青、黄、みどりのネオンサインが／ギラッ、ギラッ、ついてはきえ、きえてはついて／レコードのはらわたをひっかきまわすような音楽が、ひっきりなしにながれてくるのです。おじいさん／おじいさんが思っていた福生とは、すっかりかわった福生になりました（後略）

（綿田三郎『児童詩を育てて三十年』より）

「おれが死んだら、あのはたけを大事にな」といって、じいさんが死んでから三年たった。この三年はまさに朝鮮戦争のピークであった。それまで米や麦、イモなどを丹精してつくっていたはたけが、アメリカ兵がたむろする赤線地帯に化け、まばゆいばかりの原色の灯がちらちらする、やすっぽい街に変貌してしまった。そこでは当時の日本人の生活レベルとは天地ほども違う、ふところの厚い人種が、夜ごと札束をまきちらしていったのである。そしてこの原色の世界の裏側では、日本の女たちが悲しいドラマを演じていたのだ。口紅を真赤に塗りたくったパンパンが、大きなアメリカ兵にしがみつくようにして歩いている姿を、ぼくらは街中でよくみかけた。軍国主義にかわって、アメリカから輸入された自由とか民主主義とかが、さかんに叫ばれていた時代でもある。ぼくらはこのような環境にかこまれて、いわゆる民主主義教育、自由主義教育をうけて育った世代なのである。

P・T・Aと　子供会の想い出

立川愛雄

「私が福生一小へ赴任したのが昭和二十二年四月であるから、いわゆる基地の町として発展（あまり名誉なことでもないが）の胎動期とも言える時であった。当時の学校教育の後援団体としてあったものは〝保護者会〟であって、主として経済面の後援を目的としたものであった。

終戦を契機にあらゆるものが百八十度の転換をし、学校教育に於てもおびただしい改革が行なわれた。この改革に伴う教育の推進は、世相の混乱とあいまってまことに困難な道であった。

この情況下にあって、父母側・教師側と時を同じくして叫ばれたことが、新教育への理解と自己研修の重要さであり、その結果として〝母の会〟の誕生（二二年九月二八日）を見、さらに二十四年には〝保護者会〟と〝母の会〟を母体としたP・T・Aの結成（五月七日）に発展したのであった。……木住野元一（元教員）」『福生第一小学校創立九十周年記念誌』

注　福生第二小学校（熊川）の場合も同じような経路をたどって、同年五月二十八日、P・T・A（父母と先生の会）の誕生を見たのでした。

会の組織としては、実行委員会が設置され、会員の教養向上・新教育の理解を目的とした文化部（後に成人教育部）、厚生・親睦・給食を目的とした厚生・給食部、教育環境の整備・校外指導―子供会の育成を目的とした児童教育部、と学年別委員会など、それぞれ家庭・学校・社会の三者が一体となって、児童教育の責務を分け合い協力して、児童をよりよく幸福にするために努力してゆくことになりました。

私が台湾から引き揚げて（昭和二十一年四月）福生の地にたどりついたのは、昭和二十三年九月の末のことでした。小学三年の娘と、一年坊主、それに三才の幼児をかかえての生活はなかなか容易なことではございません。

子は知らず　遅配に悩む　買い出しの　リュック姿の　父を怪しむ。こんな日々でした。

「孟母三遷の教え」と言う言葉があります。（中国、戦国時代の哲学者―孟子の母は、賢母の代表と称されています。その居所を、最初は墓地の近くに、次に市の近くに、最後に学校の近くにと、三度遷しかえて、孟子の教育のためにはかった故事によるものです。＝広辞苑より）

当時の福生は、基地の街として特異な発展をつづけており、基地依存の繁栄のかげには〝夜の女〟の存在など、あまりにも好ましからぬ、子供たちのための教育環境などには、およそ程遠い現状でしたが、そんなことを云ってはおられない住宅事情でありました。

桑畑の中を、都市計画による区画整理によって生れた新開地（今の志茂）です。第一小学校の学区内で、青梅街道―子供会―地区と呼ばれて、その頃までの児童数は三十数名のみでした。

まだ、電灯も、水道もなくて、しばらくは、石油の特別配給をうけて豆ランプを点し、バケツを下げて貰い水という始末でした。（翌二十四年三月念願の電灯がつくことになりました。）

福生第三小学校の誕生

「昭和十八年頃から疎開者の移住、終戦後は横田基地を目ざして方々から集った営業者、戦災のため家を失った人々が住むための都営住宅の建設等によって町の人口と共に、小学校の児童数も年々に増加しました。昭和十六年に九四三人、二十三年には一、〇九四人、二十六年には一、三二二人と増加の一途をたどり、したがって二十一の教室では吸収しきれず、二部授業を実施するようになった。二十六年十月には、牛浜・原ケ谷戸・志茂・中福生を学区域として、福生第三小学校が設置され、当時の児童数は四百人余で校舎が落成するまで、二階建表校舎を仮校舎として、一時同居の形で発足した。……」（前掲『九十年誌』より）

新開地の中に出来た新設校（三小）のこととて、子供達もみじめでした。教材もさることながら貧しい校舎（それは、六三制による中学校建設のため苦しい町財政の苦肉の策として、戦時中の村山少年飛行兵学校の兵舎を払い下げうけて移築したもので、二二年三月、三二万六千円とか）

施設の現状に、創設されたばかりのPTA、いえ父母としてのふんまんを、町へ、学校へ打ちつけて流れものの気易さと、無躾さから、今にして思えば無理な要求をも持ち込んだものでした。

福生第三小学校は、昭和二十六年九月十五日開校告示、初代校長広瀬義雄氏発令、同十月一日福生一小にて、南側校舎六教室を借り受けて開校、児童四五一名十三学級で発足。十月二十日にP・T・A創立結成、初代会長には村野喜平氏が推される。十一月二日、福生町牛浜一六三番地の本校舎（福生中学校は、十一月一日現校地の新築校舎に移転）へ、移転したのです。

この頃、はじめて私はPTA委員に推されて各種行事に参加見聞するにつけ、今まで生活に追われての自己中心的な自らを省みて愕然といたしました。基地の街の実態と、そのみじめさを、いやというほど痛感いたしました。PTAの使命は、先生と、父兄が、平等の立場で、子供のしあわせの問題を研究し実践するのだというが、これでよいものだろうかと真剣に考えました。

それから末娘が卒業する頃までの数年間、子供好きのせいばかりではなかったが、たずさわって来た子供会のこと、三小の行事などを乏しい記憶と、PTA会報などから拾って見ましょう。

P・T・A活動と子供会

『福生第一小学校PTA会報』№1（昭和24・7・15発行）によりますと、

昭和二十四年度予算　歳入　会費　三五万円　雑収入　二万五千円　計三七万五千円

歳出　事業費　二七万三千円　図書・備品購入・会員研究・校外指導
児童自由研究・学費補助・諸行事外
部費　四万一千五百円〈内児童教育部―六千円
文化部―一万五千円〉とある。

創始期の方々は、開拓精神にたって尊い奉仕と、模索をつづけられたことでしょう。

「学部便り＝児童教育部」の事業として、次のようなことをあげられています。

A　児童の不良化防止

a　子供会　子供自治会―組織化する。経費をかけない。
父兄座談会―学校職員、警察とも連絡する。
すべてを児童の不良化防止にもって行くことに重点をおく。

b　図書の回覧―学校自治会図書係で行うのを円滑に行く様協力する。

c　教育映画の鑑賞。

d　善行表彰―各学期十名、年に三十名位。

B　父兄の教育参加

a　運動会

b　展覧会

c　学芸会

d　授業参観（毎月十五日）

右につき、各地区毎の具体例の詳細は判りませんが、「学校便り―学校行事」から拾いますと、春の校外指導（遠足）に付添参加、春の小運動会・小学芸会に参加協力、授業参観日への積極参加、全会員による運動場の整地、秋の運動会・展覧会への参加協力、春の学芸会には、PTAが劇出演する等、積極的に学校行事に解け合い参加協力したことが報告されています。

翌二十五年度の『PTA会報』にも、各種学校行事に直接参加することによって、新教育の理解が深められ、自己研究がつまれたことがうかがえます。

全児童が一人残らず舞台へ出演したという〝学芸会〟の在り方には、大きな感銘をうけ、前年につづいて、PTAの劇上演、そして児童教育部が参観者のために下足番奉仕するという事などさらに、文化部主催の「小山文太郎先生をお招きしての講演と映画の会」も大盛況でした。

「……子供のよりよい幸福を、子供と共に築きあげるための努力、何と云う美しい事でありましょう。これはいつかは他人の子も我が子も共に包含された広い次代国民への愛の抱擁となって、大きな教育力の根源と成ることを信じて疑わないものであります。……浜中雄一校長」

夏休み行事として、早起会・幻灯会・海水浴・山遊び等が企画されました。

「青葉の露したたる八月一日より隔日に、五時を期して不動尊境内に鳴り渡る太鼓の音に床を

けって、女子は清掃に、男子は路上危険物の除去に、その身心の鍛練に資した。

八月十二日予定の千葉への実地見学は、悪天候に禍され目的地を奥多摩へ変更されたのは残念であった。地区担任先生の献身的御努力による予復習、幻灯会は三回に亘り和気あいあいのうちに終了。特に表彰児童の選出の時、児童の投票により決したが、児童間において投票による人選は一考を要すると痛感、休み中の児童不良化防止策はその目的を達したことを喜ぶ次第である。―星　光喜」以上は、本町七町会子供会の行事報告でした。

この年は、伝染病が流行したため、特に楽しい多摩川での水泳が禁止されたのが誠に残念だったことが、交々報告されていました。その頃は、学校プールなどはありませんでした。

二十六年度『PTA会報第一号』に、浜中校長先生は次のように述べられています。

「終戦以来六年間、あの戦争で爛れ果てたお互の気持ちは之を癒す暇もないままに、目まぐるしく毎日を送らねばならなかったが、その中にもお互の反省、相互の激励は『何とかして子供だけは守れ』と云う声になり、やっとのことで今日に致った。

あの何等の心の拠処もなく抛り出された子供達。

食物さえ満足でなかった子供達。

お互は笑を忘れ乍ら、然し何かしらあての無いものを探し求めているような子供達。

唯我々は、今更、大人としてのこの責任を痛感しないではいられない。……」

志茂の松永栄さんは〝夏休みと子供会〟という報告をされています。

「志茂子供会（青梅街道子供会）では、永い夏休みを楽しく有意義に過すため諸種の行事を実行いたしました。先づ夏休みに入ると同時に、弛緩する精神を緊張させ、身心鍛練の目的を以て、二十一日より父兄合同で、ラジオ体操の会を催しました。毎日午前六時半集合、遙に横たわる奥多摩連峰を望み、爽やかな朝の空気を満喫しつつ、担任先生の指導の下に、児童・父兄共に元気潑溂として、体操をやりました。毎朝盛会で三十一日まで十一日間実行しました。

次に、八月十二日には、千葉県幕張海岸に旅行をしました。此の旅行は前年よりの懸案で、当地は地理的に海岸線を遠く離れて居るので、海を知らない児童が多く、旅行には海を望む者が大多数であるが、経費の点で昨年も実現できず、今年は是非此の希望を叶えてやりたいと思い、父兄と相談し、七月一日より三十日間、各児童が小遣の中より一日五円貯金することとし是を実行、幸に父兄の理解ある援助に依り、加入者は九〇％を突破と言う予想外の好成績を挙げました。旅行の日は七時半集合、八時十八分福生駅発、十一時頃幕張着、海浜の休憩所に入り直ぐに支度して海に入り、子供達は嬉々として貝取りに興ずる者あり、泳ぎに夢中になる者等々、約三時間、海の歓楽を味わって引き上げ、小憩の後四時幕張を発ち、六時半頃福生駅着解散しました。

出発より帰宅まで全員元気で、一件の事故もなく終えたのは、担任の千葉、矢口先生を始め二十余名の父兄が参加され、熱心な御協力と援助の賜と感謝して居ます。

幻灯会は、七月二十四日と八月二十九日と二回催しました。二回共非常な盛会で、児童はほとんど全員出席、多数の父兄も参観されました。特に八月二十九日は、夏休み中の勉強の総さらえの意味もあって、独唱・舞踊・劇等盛沢山のプログラムも、全部児童自らの手でスムーズに進行、出演者の真剣な態度と、参観者の熱心な観賞は、和やかな雰囲気を醸し出して終始和楽そのもののうちに終了しました。

概略以上の通り夏休中の多彩な行事も無事に終り、元気で新学期を迎える事となりました。」

右については、PTAの本質的活動の一例として、東京都教育庁指導部へ報告されたのでした。

「PTAの本質的活動の一例」　報告者　福生第三小学校（校務主任）増毛雄三

「本校開校以後の本PTAの活動に就ては、我々学校職員として、委員各位の熱烈な教育愛の精神と、利害を超越した御苦労に感謝しているものであります。僅か半年でありますが、開校当時のあわただしさの中で始めてお目にかかった委員各位の熱誠さとその後の目覚しい活動とは、どの一つとして深い感慨なしには考えられない思い出であります。このような立派な活動をおいて特に開校以前の前記の事項を報告したのには、次のような私個人のPTAそのものに

ついての考えがあった為でした。

1、志茂地区の委員の方々の奉仕的な気持と活動が、純粋なPTAの精神に合致したものと思われるので。

2、家庭での指導が兎角学校に頼り勝ちで、それが宿題というような狭い意味に陥り易いのに、これは父兄の独自な考えから発案され実施され、しかも本質的な児童の指導の方法にあっていること。

3、計画が長期にわたって周密に行われ、単なる思いつきでないこと。

4、父兄全員の協力、児童全員の参加等が常に考慮されていた。

5、この福生町の特異性が生かされ或程度克服されていた。

6、子供の発達ということは、よみかきそろばんというようなものばかりでなく、こうした社会的な、協力的な活動的なものによってこそ望まれるものと思われる。

結論的にいうと、本当に子供の幸福を頼って活動し、よりよい成果を願う為には、全会員も委員も、並大ていの苦労ではないということである。

夏休み中の夏期施設（都のPTAの活動事例調査に報告のもの）

私たちのPTAは、委員が町の地区の父兄から選出され、地区には委員長・副委員長がい

て、これはPTAの実行委員会の構成委員となっている。この話の主人公のM氏は、S町会という地区の委員長であった。町とは云え農業あり、勤め人あり、商家もまた多く所謂新開地である。

新開地の子供は落着きがなく、近くの空軍基地の影響も大きく、諸種の社会悪にも染まり易い。こうした環境では、家庭には児童に適当な勤労の余地も少なく、遊び場もなくて長い休暇など特に父兄の悩みは大きい。

M氏や他の委員が寄り寄り相談して、長いこの休みを何とか子供たちに規則正しい生活を送らせ、休み中に兎角陥り易いだらけた気分を排して、悪習から遠ざけたいものと苦心したあげく、朝のラジオ体操と海水浴を実施することにした。前者は、健康と規律ある引きしまった生活を狙い、後者は、子供に希望と楽しみと夢とを持たせて、明るい休み中の生活を送らせようと願ったものである。

ラジオ体操の実行には、次のような協力があった。

(1)会員に一人の電気屋さんがいて、電蓄や拡声機の施設を快く提供してくれた。

(2)学校の教員が数日指導に当ってくれた。

(3)映画館の前の広場が使用出来た。（現在のトヨタオート多摩社周辺）

然し苦心もあった。

(1)子供が一度に集まらず、ラジオの放送では駄目なのでレコードを使い数回にわたってやった。

(2)委員に勤め人が多かったり、男の役員が少かった為、M氏が一人で朝早くから機械の準備などをした。

(3)学校の教員が来なくなってからは、六年の子供が指導に当ったが始めはうまくゆかなかった。

然し一般父兄からは非常に感謝された。子供が朝元気よく起き出して、規律正しい生活が送られた。この会は十日続けられた。委員全員が更に一段と協力し、子供の自治的訓練がふだんから積まれていたらと反省させられた。若しそうなったら、この朝のラジオ体操は、夏休み中続けることも可能であると思われた。

海水浴は、この土地の子供にとっては、たとえようのない憧れであり楽しみである。夏休み中せめて一度はと願うのは親の心でもある。こうして子供の希望と、親の愛情が一丸となって今までにも試みられたこともあったが、経費の点で仲間に入れない子供もいた。

親子手を連ねて出かける姿を見て、泣いて寂しがる子供たちの姿を見て、何とか全員がと心に誓ったM氏たち委員が考えたのは積立金のことであった。そして次のような方法がとられた。

(1)子供が一日に使う小づかいを十円とみて、内五円ずつ節約させて積立てをする。

(2)いくつかのグループを作って、六年の子供がその責任者となり、毎日五円ずつ集金する。

(3)全体のまとめ役や世話は、M氏が卒先引き受けた。

こうして、七月一日から始まった貯金は、七月一杯に百五十円となり、八月には地区の子供全員が参加して、千葉県の幕張に海水浴と貝掘りに行くことが出来て、子供達の望みは達せられた。

このくわだては、

(1)子供に明かるさ、希望を持たせ、張りのある休みの生活を送らせることが出来た。

(2)全員参加が町の空気を明かるくした。

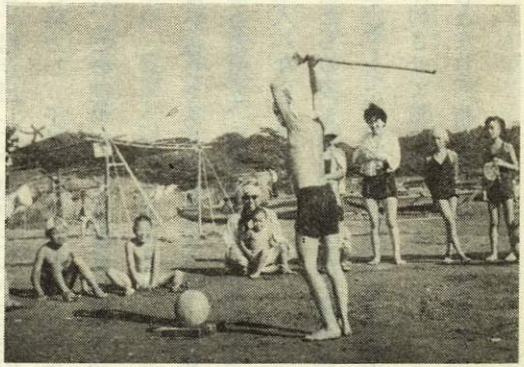
(3)五円ずつの節約貯金もよいことだった。

(4)グループを作って子供に集金させても弊害はなく、自治訓練のよい機会が与えられた。

(5)父兄の同伴も許され、積立金も子供と一緒に行われて、会員親睦のよい機会ともなった。

苦心もあった。

(1)毎日集まって来る金を、M氏が毎日貯金していったが、これはなかなかの苦労であったと思うし、献身的な努力がいることであった。



千葉県岩井海岸にて（黒めがねは広瀬校長先生）

(2)実地踏査など、委員には人に知れぬ苦心と、周密な準備が必要であった。以上」

（『福生第三小学校ＰＴＡ会報　№1　昭和26年度』）

これは、それから以後、志茂子供会の恒例行事となるのであったが、社会情勢の好転や、いろいろの事情もあって、積立金方法は、翌年のみで取り止めになってしまいました。

二十七年には、稲毛海岸へ。二十八年は、江の島材木座海岸へ。二十九年は、葉山長者ケ崎海岸へと実施されましたが、幸い大禍なく済みましたものの、事故防止（遠足事故が各地に発生）その他の面から考えさせられるものがありました。三十年は、網代へ川遊びに、三十一年度は、再び、葉山へ海水浴に行くことになりますが、悪天候のため参加者もすくなく無事に帰着は致しましたものの、その頃交通事故や、食中毒事件が各地で発生し、ＰＴＡとしての遠出を危惧敬遠する傾向もあり、しだいに近くの安全な川遊びなどを企画実施するようになりました。このことは、学校行事としての臨海・林間学校が実施されたことも大いに影響しておることでしょう。

三十一年度は、創立五周年記念の式典が挙行され、児童数六五七名。二代目校長館盛光先生作詞の校歌が、渡辺浦人先生の作曲で制定披露されました。

『白雲は空にかがやき　山脈はゆるく流れて　武蔵野の開けゆくところ
福生なるよき名受けつぐ　学び舎にわれら学べる　学ばなん
われらが母校　ああ福生第三小学校　――二・三章略』

ひたすらに子供達のためにと、学校施設の改善などとはおこがましいが、ＰＴＡの本旨にはそぐわなかったかも知れませぬが、全会員の総意によったさまざまのことが思い出されます。

殺伐とした校庭整備や植樹。児童の成長発達は、精神面と、肉体面と相俟つものであるとのことから、二十七年度のＣ型給食の開始。二十八年度には、運動・遊戯施設の整備。二十九年度は暖房設備のための創意、特に燃料としてコークスの採用は刮目された企画でした。三十二年度には、他校にさきがけて映画教室の整備実現、これらの資金調達は尊い奉仕の連続でありました。

私は、末娘の卒業と共に、昭和三十四年春以後は直接、学校行事―子供会活動に携ることがなくなりましたが、身の程も知らずに過して来ました往時を顧み感慨無量でございます。

ＰＴＡの在り方は、後援会的なものであると言うような、一つの大きな使命になっていたものが、いわゆる私費軽減で、学校の設備は都や町が完全に負担する。ＰＴＡの会費と言うものは、百パーセントＰＴＡでの活動に使わなければならないと言うことになりまして、ＰＴＡ規約が全面的に改訂（昭和四十三年）されました。ＰＴＡ本来の自主活動の確立のためにでした。

でも、子供会の育成は、いつの時でも、いつまでも等閑にすることは出来ませんことでしょう。時の流れと、往時を回顧して、拙い繰り言を述べましたが、学区内の変貌には驚くばかりです。

後記

昭和四十九年十二月六日、三重県津簡裁で酒井康夫裁判官は、子ども会ハイクで児童水死によるボランティアに責任ありとして、引卒責任者に罰金五万円の有罪判決を言い渡しました。

『子ども会活動に奉仕する育成者も社会条理上当然に、それぞれの立場に応じて、子供に対する保護責任を負担しなければならない……子ども会育成者の活動も社会奉仕活動として尊重されるべきだが、それぞれの立場で子供に対する保護責任を負うべきで公訴権の乱用にはあたらない。』

と判決理由で述べておられます。この種の事故でボランティア指導者の刑事責任を認めた全国初めての判決であり、今後、子ども会だけでなく、青少年育成や福祉関係のボランティア活動全般にさまざまな形で影響がでるものと予想される。（朝日新聞49・12・7）と報道されています。

（福生市文化財保護審議会委員）

私の思い出

——新米教師時代——

平沼次郎

私が教職に就いたのは、昭和二十年の後半で、敗戦の痛手から、日本が立ち直りかけた頃であった。先輩の話しによると、敗戦による思想の混乱が社会の秩序の乱れとなり、それが教育の場にも影響し、生徒の生活がとても乱れていたとの事であった。

私が職について間もない或る日、先生方が上ばきとして運動靴をはいていらっしゃるので、その理由をお伺いした処、「授業中逃げ出した生徒を追いかけてすぐにつかまえるためだ」と言う事を聞いて、ここにも生活の乱れの名残りがうかがえたと思いました。

私が教師になったその年は、学校が『道徳教育と教育課程改訂の指定を受け、学校全体の指導体制の重点が、生徒の躾等に置かれていたためか、私の受けた生徒の印象は、大変落着いている様に思いました。私が校長先生に紹介されて、壇上に立ち、初対面の挨拶をした時、非常に緊張した、而かも真剣なまなざしを思い浮べる事が出来ます。

その当時の中学校は一小、二小、三小、の三つの学区から入学して来た生徒達で構成され、そ

のために入学当初、慣れない生徒をまとめて、一つの学級らしい姿になる様に指導する担任の苦労は大変なものでした。而しこの苦労は昔も今もあまり変わりはないと思いますが、その生徒の気質はたいそう違って来ている様です。昔の生徒はいたずらにも、幼稚さと言うか、単純さと言おうか、何かしら可愛らしさがあった様に思います。

この間、研究会の帰りに、昔、私が担任した生徒（今は立派な社会人になっておられますが）のお宅にお邪魔し、中学校時代の思い出話を、聞きました。その人は、中学の一年の時、私に叱られたことがあるのだそうです。当時、小学校は平屋建てが多く、二階が少なかったせいか、中学校へ行く事の楽しみの中に、二階にあがれる事と、母親の作ったべん当が食べられる事（小学校は給食があったので）があったそうです。彼はその一つの楽しみの方を満足する気持が脱線し、二階から下に向って、上ばきを投げていたのを私に見つかって叱られたのだと言っていましたが、同じいたずらでも可愛らしさがありますね。

それから、ストーブの石炭を、その日が暖かいと、元の場所に戻さずに教室内にストックして、翌日それをもやして、先生に叱られたとか、英語の時間である筈なのに、教室に行って見ると、「先生、教室が違いますよ。」と生徒に言われ、確かに間違いないのではないかと、職員室に戻り、やっぱり、私の判断があやまっていない。「さては奴等、俺をかついだな」と腹を立てながら、生徒を一喝した事等、その事自体悪いには違いないが、子供らしさがあり、悪質ではなかった様

です。

それから、私が若いと言う年令的な面も影響したのかも知れませんが、生徒が教える側の気持を理解していた様に思います。それはある清掃の時のことですが、現在の建物と違って、木造建築だったので、水をこぼすと、必ず下の教室にしみ出して仕舞う様なので、雑布を固くしぼってふく様に指導していたのです。ある時、生徒があやまって、バケツの水を全部床にこぼしてしまったのです。さあ大変、下は校長室です。早速私が下に駈けつけて見ると、幸い下にあまり影響がなくて安心した訳ですが、当時の校長先生（橋本兵五郎先生）に事のしだいをお話ししました。あまりおこごとはおっしゃらなかった様に記憶していますが、その時も、私は全く別の件で、校長先生とお話しをしていたために、校長室にいる時間が長くなったのです。用事を終って廊下に出てみると、私のクラスの生徒が校長室の前に多勢集まっているではありませんか。「一体、何事か」と聞いてみると、「先生が校長先生にしかられているのではないかと僕達は心配していたんだ。水をこぼしたのは僕達だから、先生と一緒にあやまろうと思って」と彼等は口をそろえて言ったのです。私は胸にジーンと来るものがありました。本当に先生になりたての新米教師の事でもこんなに考えてくれるのかと思い「ありがとう、なんでもなかったよ」と私は彼等に言いました。

それに似通った事がもう一つあります。それは私が授業から帰って見ると、私の机の上に、一

本の棒があるのです。それはカメラの三脚の一部分の様に思いましたが、その側に一枚のメモがあり「先生この棒を授業の時に使って下さい」と書いてありました。当時、私はステッキを使わずに授業をしたり、使っても粗末なものを使用しておりましたので、恐らくこの生徒（名前が書かれておりませんので誰だか判りませんが）はそれを見かねて人知れず私にプレゼントしたものだと思います。

これなども、当時の生徒の気質を表わしている一例の様な気がします。

（福生市立福生第二中学校教諭）

アメリカに学ぶ　こどもの教育と躾

今井信行

私がアメリカに長期滞在したのは、高度成長時代たけなわの頃から、ニクソン・ショック、第一次オイル・ショックの直後にかけてでした。当時私は商社勤務をしており、ニューヨークの駐在事務所長として赴任しました。新規開拓と現地法人設立を主な仕事として、当時の他社の日本駐在員同様、馬車馬のごとく働いたものです。この間、二度の円切上げという大ショック（ドルと円の交換レートの三百六十円が三百八円への切上げと、三百八円時代のドルの十パーセント切下げ）、これで日本からの輸出は、ほぼ不可能になるであろうと思う程、日本が強く打ちのめされた時でした。

日本人には語学の才能がないのか？

赴任当時の私は、自分では日常会話には不自由しないであろう、商談が来日バイヤー（商談のため来日する外人）を相手に困ったことは少なかったので、なんとかなるであろう、ましてや世

界的に難しい言語といわれる日本語を話せるのであるからという自負（？）も手伝い、英語に対しある程度の自信は持っていたつもりです。ところがサンフランシスコの空港へ着いた途端、ハタッと困ってしまいました。空港のアナウンスは英語で早口に、しかも音が反響してしまって聞き取れなかったのです。

その時のショックは大きく、そのまま日本に飛んで帰りたい程心もとないものでした。ニューヨークの空港で知人の出迎えを受けた時は、そのショックも解消されたかに思えました。ところがこのショックは翌日、再び私を襲ってきました。私の事務所は五番街と42丁目の交叉点近くのビジネス街中心地の一角、ビルの一室にありました。同じビル内で秘書をしていたミス・レイコとエレベーターの前で会ったのです。ミス・レイコというのは本名ではなく、レッキとしたアメリカ人です。彼女は日本の新聞を持っていて、自分は麗子であると書いてくれました。世界一難しい日本語と信じていた私にとって、彼女が自分の名前以外にも多くの漢字まで書けることを知った時、やにわにその自信だけがエレベーターで下に落ちていったように感じられました。

カルチャー・ショックという言葉がマスコミで多用されたことがありましたが、文化や生活環境の相異による重圧ショックということで、駐在員やその家族がノイローゼや、時には自殺などにも発展したことを表現したものです。私もそのショックを受けた者の一人ですが、自信回復はミス・レイコと別れた直後でした。銀行に行く途中、在住の中国人と間違えられたのでしょうか、

アメリカ人らしき人から道を聞かれた時のことです。彼等も外国人だったのでしょう、ナマリの強いヘタな英語でした。私の秘書もアメリカ生れのユダヤ人でしたが、英語で困ることがありましたし、アメリカ人もフランス語やドイツ語・スペイン語・ラテン語などを学校で学びますが、上手に話せる人は少ないのです。お世辞ではありましょうが「貴方が英語を話す位、私も外国語が話せれば嬉しい」と何度も言われました。日本の駐在員の子供達は、アメリカの子供と負けぬ位上手に英語が話せるまでに半年もかかりません。環境への順応と努力次第では、すぐに語学はマスターできそうです。子供の母親がそれを実証しております。彼女達は何年経っても、子供達とは対照的に英語が上手になりません。日本人だけで固まり、日本人だけの社会を作ってしまうのです。百何十世帯という大きなアパートの半数以上が日本人であったり、日本食料品店へ行けば日本のミニ・スーパー並みの商品が揃っており、日本語で買物ができます。英語を使わず毎日生活できるのですから、上手になるはずはなく、子供との差は大きくなるばかりなのです。

愛国心

日本製品が氾濫しているだけでも日本に対する警戒心が強いのに、日本人が多く行くゴルフ場も決っていて、そこでは極端に日本人が目立ちアメリカ中が日本人に占領されてしまうのではないかという危機感を与える程にまでなってしまっています。

アメリカという国は生い立ちからして外国人が多いためか比較的そのようなことには寛大ですが、日本人のこの行動に類似した現象が最近では韓国人にも目立ち、アメリカは極東の一部になりつつあるような印象も与えかねません。しかしこのように異った外国人の寄せ集り的な国でありながら、言語はイギリスの英語とは変形はしてきているものの、日本のように外来語の氾濫が少ないのにはカンシンしています。日本では商品名でも、マスコミでも、やたらと横文字を使いたがります。それも正しい使い方ならまだしも誤用が多く、理解できないことがしばしばあります。もちろんアメリカでも言語の乱れが問題になっておりますし、昔から上流社会では、フランス語の諺や表現が多用される悪習はありますが、日本のそれに比したら比較になりません。

異国人の集団であればこそ、結束を重視するのでしょう。学校の教室には必ずといって良い程星条旗や著名な歴代大統領の写真や肖像画が掲げられています。授業でもアメリカ歴史を重視しております。私共がアメリカ人と話をしていて、理解できないことが起こるのは、それが宗教や歴史に起因した事柄が多いようです。

アメリカ人は、日本の歴史にも強い関心を持っていて、雑談の時などしばしば日本について聞かれましたが、返答に困ることが良くありました。アメリカ人の中には、芭蕉の研究をしている人などもいて、私より詳しい人もいます。その人の自宅を訪問したら、石灯籠のある日本庭園と茶室があったりして、またビックリということもありました。

躾と教育

アメリカは治安の悪さでは有名ですが、それは大都市に集中しております。私も事務所を二度乱され、タイプライターなどを盗まれました。事務所の廊下でピストルの打ち合いがあり、身の縮む思いをしたこともあります。駐車中の自動車がハゲタカに襲われた人骨のように、はずれる部品という部品を盗られてしまったこともあります。大都会の荒廃は、街路上に散逸するゴミとアルコール中毒の乞食にも表われておりますが、大半の犯罪は生活苦に基づいており、特に換金性の優れた物が狙われ易いのです。身の保善のため、常に数十ドルという現金を出せるようにし、万一襲われた時には、お金で解決できるようにしておりました。

アメリカの貧富の差の大きいことは、日本人の想像以上で、それが他の要素、例えばベトナム戦争による人心の退廃などと絡み、強悪犯罪にまで発展してしまうのでしょう。それに対し日本の犯罪は、生活の豊さに起因するように思えます。犯罪の若年化ということが重大問題化しておりますが、これは子供の教育、躾が誤っていることが主因と考えております。親が自分達の子供の頃の物資不足、自分の現状に対する不満足度等から、せめて子供には良くあって欲しいと願い教育に対する誤った考えと躾を軽視することにより、子供をあまりにも甘えさせすぎるからのように見えます。アメリカでは子供の躾は、愛情深く厳しいもので、子供は自律心が旺盛です。開

拓者精神が今日まで生き続けているのも、伝統的な躾の厳しさ、即ち、精神の強さを養うことを親が忘れていないからでしょう。

親子連れが地下鉄に乗り込んで座席が一つ空いていても、男の子が三才以上であれば親が坐り子供は立ったままです。それを見て、隣にいた私が席を譲ろうとしましたら、「ありがとうございます。でも子供は立たせておくことにしておりますので。」と言われました。日本ならば電車を待つ列を乱してでも子供は席の取り合いをし、親はそれを当然のように思うのではないでしょうか。

いつの時代でも「最近の若者は……」という発言はあるようですが、自殺の若年化に見られる最近の子供や若者の弱さは、親に責任があると思われます。親を見ていますと、子供の奴隷と化しているのに親がそれに気が付かず甘やかし過ぎているように思えます。子供の欲求をあまりにも容易に通し過ぎます。子供は自分の欲求がたやすく通るので、ますますいい気になり、自制心がなくなっていくのです。その点アメリカでは、悪いものは悪い、自分でできることは自分でさせる、我慢しなければならないことはさせる。悪いことをすれば尻を叩くという教育が徹底しているのです。

アメリカは人件費が高いためか、企業ではどこも人的余力は少ないのが普通です。デパートやスーパー等も売り子は少なく、レジでは長い列ができます。何十分も待たされても順番を待って

います。日本のレジのようにテキパキとしていて待たされるのならまだしも、ダラダラやられてはイライラします。中にはそれに我慢できず早くして欲しいと言う人も、時にはおりますが、「辛抱強く！」とお客がレジ係にたしなめられます。子供の時からの教育の賜でしょうか。

日本の公園では、「球技は危ないので止めましょう」という立て札が多く見られますが、アメリカでは自分の行為には自分で責任を負う、ということが教育されておりますから、自分で責任を負えれば危険なことでも禁止されていない訳です。しかし、人命尊重第一のアメリカでは、それが自分の破滅になることも知ってますので、「ヤルナ」と言わなくても人々はやらないのです。規則にその差が明白に現われております。日本では「○○はしてはいけない」という類のものが中心ですが、アメリカでは「××はしても良い」となっています。

日本では、子供の学業に対し、教育投資という名目で多くの資材を投じますが、アメリカのそれとは内容的に大きく異なります。日本では進学塾とか家庭学習機器や教材に対して出費しますが、アメリカでは、それに類似するものは皆無に近い程で、むしろ子供の心身の健全さを養うための教育投資が中心です。最近、日本でもアメリカのサマーキャンプに類似したものが開催されるようになりましたが、まだ一般化していないことと、日本のそれの生い立ちは事業的性格が強すぎます。サマーキャンプでは性格的には、日本の林間や臨海学校に類似していますが、学校や家庭ではやりきれないような心身の強化を、夏休みに自然に親しみながら指導する、専門的教育

を受けた人が指導リーダーとなっています。ボーイスカウトやガールスカウトが盛んなのも、受験教育が先か、学問をするための心身育成が先かの問題です。これは大学受験に重点を置く日本と、大学で学ぶことにポイントを置くアメリカとの差でありましょう。

人種・性差別

レディー・ファーストという言葉は、日本でも以前から知れておりますが、子供の頃から、弱者に対する強者のあり方は徹底して教育されます。日本で育ったゲームやスポーツでは、ハンディという考え方はほとんどありません。例えば柔道は東京オリンピックで正式種目に選ばれてから体重によるクラス分けをした競技になりましたが、それ以前は体重別による対戦という考え方はなかったのです。この体重別対戦とは、体の小さい人即ち弱者と大きい人・強者とを同じ土俵にあげることは不公平だ—言い換えれば—非民主的だ、ということからでしょうか、このような制度が導入された訳です。

レディー・ファーストは弱者に対する思いやりから出発したもので、アメリカで教育を受けた男子は一般的に礼儀正しく、女性に対するいたわりの気持ちがみられます。逆に女子の場合、常に男子にいたわられることが身につき、日本へ帰国後、学校や種々の集団で力仕事等をさせられると、レディーとして耐えられないことのように思え、アメリカはすばらしいと、懐古主義に陥

る恐れがある、ということで、日本へ帰国する時は注意した方が良いと言われています。

しかし、このレディー・ファーストのお国も、結婚すると家庭では亭主関白のところが多く、例えば家事・家財の購入の財布は主人が握っています。とは言うものの、子供の教育の手前もあり、子供がいる時は気をつかっているようです。

性や年令による差別だけでなく人種による差別もアメリカでは問題です。例えば企業が雇人を募集する時に、不採用の理由にこれらを挙げることは法的にはできません。特に人種差別問題には神経質になっています。日本人は有色人種の中でも比較的特別視されています。それでも差別されることがありますが、黒人問題は日本人には理解できぬ程、深く根をもつ問題のようです。単一民族で有史以来やってきた日本も、今後国際色豊かになる要素は多分にあります。日本人は閉鎖性が強いと言えるだけに、それをどう考えるか、どう子供を教育していくか、人種問題でアメリカの二の舞を踏まぬよう、将来に対する配慮が必要でしょう。

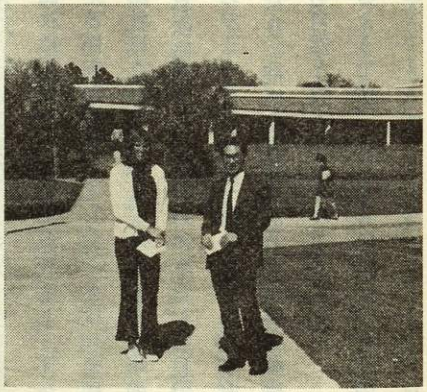
アメリカ留学について

近年アメリカ留学を目指す人が急増していますが、安易な気持でいますと不成功に陥るだけでなく、不幸な結果を招くことにもなり兼ねません。今日ではアメリカの学校に入学するための語学テストが日本でも受験できるようになりましたが、このテストに合格しても渡米後、使いもの

にならないことの方が多いのです。

アメリカの大学や大学院は一般的には入学は日本に比べると容易ですが、その入学も有名校になる程難しく、日本でいわれる一般論に惑わされないことが必要です。入学後も毎日のようにアサインメントという予習兼宿題が出されます。アサインメントとは何十ページという本を読破し、まとめをします。それをしておかないと授業についていけません。聴き取りだけでも苦労な日本人学生にとって、アサインメントに基づく討議への参加は並大抵のことではできません。渡米すればどうにかなるであろうという安易な気持ちでの結果か、あるいはしっかりした心構えを持って渡米しての結果かどうかは、わかりませんが、留学生くずれと呼ばれる日本人の若者がつまらないアルバイトでその日暮らしをしたり、金のために悪の道に入ったり、堕落した日本女性など多くを見てきました。

アメリカに留学した、ということは格好いいように錯覚している人が多いようですが、けっしてそうではありません。先に述べましたように、まだまだ日本は閉鎖的で外国の大学や大学院を卒業しても優遇してくれる企業は少なく、日本の大学を卒業した人と差別を設ける企業も多く、



フロリダ州立大学構内で

この傾向は大企業ほど大きいのです。日本に帰国しても陽の目を見ることはないから、ニューヨーク大学の教授をするのだという友人の淋しそうな顔は今でも思い出されます。

自動車

アメリカでは自動車はゲタのようなものと言われますが、その意味が果たして正しいか否か疑問に思うことがあります。アメリカは日本の国土の三十何倍という広さを持っており、隣の家まで何十キロも離れているような所もあります。そのような地方では文字通りゲタがわりです。ところが大都市周辺では何車線もある高速道路がラッシュ時には渋滞し、低速道路化もし、第一次石油ショックを契機に地下鉄や通勤電車・バスに切り換える傾向が強まりました。とはいえ広大な国ですので、自動車が必要不可欠のものであるという感覚はまだまだ強く、それが小型車の普及につながっているのでしょう。十代になると車所有の意欲は強まり、アルバイトをして自分の力で車を買います。彼等の買える車は、オンボロの中古のワーゲン（最近では日本車も増加していますが）と相場が決っております。しばしば故障をしたり、補修の必要がありますが、彼等は自分でやります。親も容易には手を貸しません。自律心も自然と育っていくのです。

自動車の氾濫は、車公害だけでなく、人々の足を弱めるようです。アメリカに目立つことの一つに足の悪い人があげられます。車イスを使用する程でなく、多くはツエを使っています。自動

車に頼りすぎが主因ではないかもしれませんが、遠因にはなっているのではないでしょうか。

食べ物

「アメリカに長くいると、日本の食べ物が恋しくなるでしょう」とか「日本から何かを送ってあげたいけど、何が良いですか」と良く言われましたが、ニューヨークですと、ほとんどの物が手に入ります。日本人主婦が安易に日本食品店に出入りすることが、英語を使わなくとも済ませ、彼女等の英語力向上を阻む一因となっています。それが又、日本人は食物に贅沢すぎると言われるゆえんでもありましょう。量での比較では無理はありますが、スーパーで紙袋一杯買物しても十ドル程度ですが、日本食品店で買えば二十ドルは軽く越えてしまいます。肉にしてもスーパーの品はまずいと言って肉屋通いをするのも日本人に多く、肉より高い魚を買うのも日本人です。

一般に肉は日本より安いため、毎日の食事は肉料理が中心になります。私共の娘はアメリカに生まれたのですが、彼女は今日でも肉料理等の洋食を好みます。それに対し、息子は日本風の食べ物を好みます。小さい頃の食物の影響かどうかはわかりませんが、やはりその影響があるのかもしれません。

最近日本でもシュガーレスガム（砂糖を使用してないガム）が売り出されるようになりました

が、ガムやチョコレートは虫歯の素ということで歯医者はそれらを控えさせ、それと共に日本でも普及し始めている口腔洗浄器の使用を親に指導して、虫歯の予防に努めています。歯科料金が高いこともあり、親は神経を使っているようです。

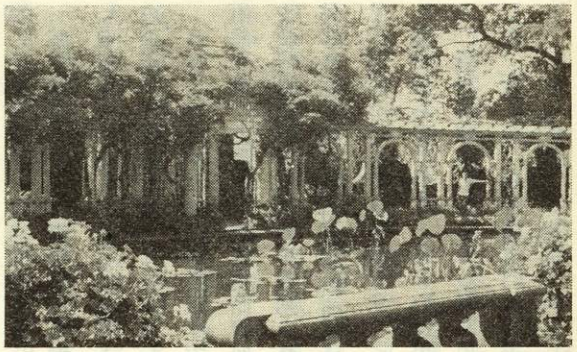
子供に食べ物で制限をしているものに、コーヒーがあることは日本でも知られていますが、最近はコーラ類もその仲間入りをしつつあります。コーラ類も砂糖を使わず人工甘味料を用いたものが増えています。元来、人工甘味料入りコーラは、ふとりすぎの人用に商品化されたものです。

日本でも肥満児問題が表面化しましたが、子供だけでなく大人も太り過ぎが問題で減量食品も各種揃っています。必要カロリーとの対比を考えて注意深くするよう、専門のコンサルタントがおります。

食品に限らず商品種が多く、選択の幅が広いのも日本と異なるところでしょう。日本でも種類は豊富ですが、各々特徴が少ないだけでなく価格も似ております。それに比し価格帯が広く、自分の生活程度に合わせた買物が可能だということです。

公共施設

「国民総生産第二位」「経済大国」等と言われ久しくなりますが、公共施設の蓄積には大きな差があり、まだまだその点では日本は後進国です。片側六車線（対面十二車線）の高速道路、砂



ホールド・ウエストベリー公園

漠のど真中にあるガソリン・スタンドの水洗便所。プールや運動施設等、数えると際限がありません。

街角に点在する小公園、ベンチの周りを駆け巡るリス。疲れて、一寸腰をかけた時、心を慰めてくれたものです。夏は樹陰を求める老人が、チェス盤になっているテーブルをはさんでの対戦。応援するというより一緒になって参戦している回りの人、ついそれに引き込まれる人々。買物の帰りに子供を遊ばせている主婦。昼間からテレビを見る主婦は少なく、井戸端会議ならぬ、公園自主セミナーに参加。

ニューヨーク市内から高速道路を三十分も車で走ると、「鹿に注意」の立札が立つ程の山の中。州立公園があちこちに見られ、週末のちょっとしたドライブ先となる。数も多いためかあまり混んでもおらず、公園の中にはゴルフコースやテニスコートなどもあり、わずかの費用で楽しめます。自然を活かした雄大な国立公園はどれも立派ですし、見応えがあります。ニューヨークから車で三時間程のところにあるエイミッシュという村では、未だに電気やガス、自動車など近代文明的なものは使用せず、十六世紀の移

民当時のままの生活をしているところがあり、女性は糸で逢う代わりに針で止めただけの衣服を着用しています。自動車の代わりに馬車に乗り、町全体が博物館化しているのです。これ程大規模でないまでも、先祖の功績を残すため、随処にミニ博物館があります。お金持が税金対策で寄贈した邸宅も多いようです。

歴史を重んじるお国柄は、実物大の蠟人形で歴史を再現させるだけでなく、歴史を体験させているのです。SLも然り。峡谷を登る鉱山までSLを走らせているところは沢山あります。終点の鉱山も博物館となっていたりします。

ニューヨークには美術館だけで数百あると言われます。ナンバー・ワンは、メトロポリタン美術館です。上野の国立博物館の何倍かの面積を持つこの美術館では、紀元前の美術から現代美術まで何万点というものが陳列されております。入館料は取らず、入口に入館者に寄付をさせる受付があります。館内の絵の前では模写をする若者があちこちに見られます。絵を楽しむだけでなく、学ぶこともできるのです。

図書館も多くあり、私のいた事務所のすぐ前のニューヨーク中央図書館は数百万冊の蔵書を持ち、資料情報集めにしばしば利用させてもらっただけでなく、語学学習にも利用させてもらいました。近くに、日本語専門の図書館もあり、多くの日本書籍や日本に関する書籍が蔵書されており、日本人が読書に利用するだけでなく、日本や日本語研究者に不可欠な場所ともなっています。

日本は世界一

アメリカ人の友人に「弟さんはどんな仕事をしているのですか」と聞いた時、どこに住んで何をしているか知らないという返事が返ってきました。行方不明であったり、悪の道に入ってわからなくなっているのではなく、兄弟でも他人同様、独立していて、特に関心がなければ、付き合わないのです。独立心が強いのは良いのですが、ここまでくると行き過ぎのように思われます。日本では、特に田舎に行く程、何かあるとワーッと集まって兄弟姉妹で何かをする。時には煩わしいこともありましょうが、一人っ子の私には羨ましい限りです。

アメリカでは早くから核家族化していますし、親の老後を子供が面倒みるという習慣もないため、老人は自活しなければなりません。かつては年金で生活できたのですが、物価の上昇と共に、それもできなくなり、公営養老院の世話にならなければ生活できない人が多くなってしまいました。老後は憧れのフロリダで悠々自適の生活を夢見、私財を投げ売って買ったフロリダの家に住みついたものの、生活資金が続かなくなってしまい、生活補助を受ける羽目になってしまった、かつての小金持が多いのも皮肉なフロリダでの現象です。アメリカの街角の公園で淋しそうに日向ぼっこをしている老人を見ると、孫に囲まれている日本の老人の方が私の目には幸せに写ります。

日本人は中流意識が強いと言われますが、アメリカでは貧富の差が大きいためか、貧しい人達

は想像がつかない程貧しく、それが人心を荒廃させていると言われています。貧しさから、あるいは麻薬や酒代欲しさに犯罪の若年化の著しいアメリカと比べると、問題にはなっているものの、まだまだ犯罪の少ない日本は平和です。世界一治安の良い国と言えましょう。

貧富の差が大きいだけでなく、人間の持つ資質、能力の差も大きく、教養の乏しい人があまりにも多いのにも驚きます。彼等を見ていると、日本人は有能な人種だと思われます。キャデラックの工場見学をした時、いくら設計が良くともあれでは日本の自動車産業に抜かれても当然だという思いがする程、労働の質の低さを発見しました。

日本の持つ欠点をカバーし、外国の良さを取り入れたら、まだまだ日本は良くなる可能性があります。しかし外国の悪い面を無批判に導入していては、国は悪くなるばかりで、病が重くなってからでは仲々良くなりません。私はまだ遅くないと思います。今なら日本人の持つ伝統の良い面を子孫に受け伝えることができます。

（筆者は、座談会、第四話年代の福生二小卒業生。福生中・都立立川高校・慶応義塾大学卒後、アメリカ・ラ・サール・エクステンション・ユニバーシティにて経営学を学ぶ。
（株）内田洋行貿易事業部勤務後、同社ニューヨーク駐在所長として市場調査・市場開拓をするかたわらアメリカ法人設立を進め、同社役員就任。帰国後、経営コンサルタントとして、カネボウ化粧品他多くの大手及び中小企業の海外経営戦略等、経営指導をしている。）

福生における貸本店の歴史

菅井憲一

はじめに

私が福生の教育委員会に勤務するようになりましたのが、昭和四十七年四月からでした。それまでは福生の町を通りすぎると言うだけでしたので、さっそく町の様子を知るためにずい分歩き廻ったものでした。その時、福生駅の東口に一軒の貸本店があることに気が付き、正直な気持、まだ福生には貸本店があるんだなあ、と思ったことでした。

その後、わかぎり分館の利用者である加藤守美さんとお話をしている折、話がいつか貸本店のことにおよびました。「そう言えば五、六軒の店があり、私もよく通いましたよ」と言う言葉がきっかけで、その時（昭和五十一年八月）は残っていた一軒（小林書店）も新刊本屋になっていましたので、今のうちに調べておかなければならないなと思いました。少しずつ調べているうちに『ふっさっ子』の山崎さんから、読書のことで何か書いてほしいと言われ、思い切ってまとめてみることにしました。

調査の方法は、店に行って次のようなことを質問し、まとめてみました。

一、店の名称　店主名　所在地
二、店の歴史　開店時～閉店時　その理由　現在の状態。
三、店の経営状態　店の規模　店頭の本の冊数　本の種類　内容　利用者の一日当の人数、利用者の層、売上額、仕入の方法、開閉時間及び日、貸本のシステム、料金、だれが店に出ていたか、店員等、その他気がついたこと。

店の紹介

一、溝口書房　店主溝口安一さん。初め志茂二〇五番地三井田歯科の斜め向い側に開店、その後志茂二一二番地、現在の朝日新聞販売所の右どなり（空地）に移転しました。創業時ははっきりしませんが、昭和二十三年頃から始めていました。二十八年十月頃からは新刊も扱うようになりましたが、貸本は三十一年でやめ、三十四年末頃閉店しました。なお三十二年より拝島駅前に新刊本屋の支店を出しています。（現在の伊藤書店）　福生で最初の貸本店でした。店の規模は二間間口の二間でした。店主が福生より転出しており連絡がとれませんので、経営状態ははっきりしませんが、利用者は多く成功していたようです。店は妹さんと番頭さん（伊藤書店の店主）がやっていました。

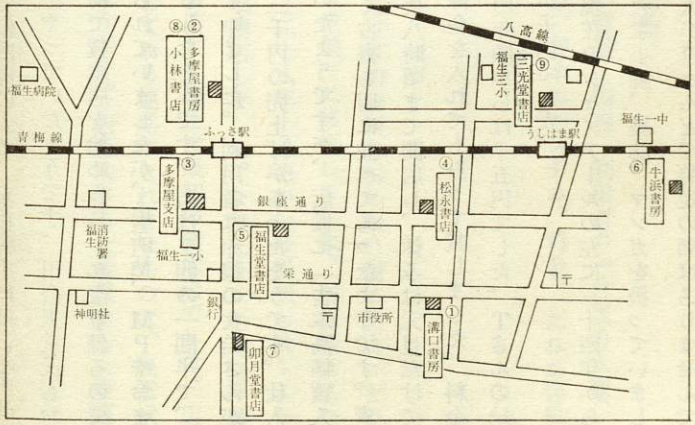
二、多摩屋書店　店主塀内（かきうち）さん。福生七八〇番地、福生駅東口小林書店の左隣りに二十四年より

開店、三十九年まで営業していました。店主塀内さんは四国の人で、現在福生にはいませんが、終戦の頃は青梅に住んでおられて、初め碁会所をやっていたそうです。川合玉堂氏もお客に見えていたそうですが、その後碁会所をやめて青梅で貸本店を始められ、かなり儲るので福生にも店を出したようです。店番はTさん親子がやられていましたが、場所柄、MPやおまわりさんも毎日立ち寄ったり、あいさつをしていったりしたそうです。店は二間の一間半で、大衆小説と雑誌を扱っていました。雑誌の付録は売っていました。利用者は赤線の女給さんが主で、かなり活発にかりられ、三十四年頃で一日当り三千円の売上げがあったそうです。仕入は主に塀内さんが、月に何回か、御徒町まで行かれていたようですが、店頭に「古本高価買入」のりっぱな字の看板が出してあり、新刊ばかりでなく古書も店に並べてあったようです。青梅の店の本とも交換していました。朝は八時半頃から夜八時頃まで開店し、休みは元旦だけでした。初めは信用貸しでしたが、後では二百円位の保障金を入れてもらって貸しました。料金は初めは雑誌一日五円、小説一日十円でしたが、三十四年頃からは十五円でした。Tさんの給料は三十年頃で一ケ月三千円で、四帖半のアパート代が千円でした。

三、多摩屋支店　店主塀内さん。福生一〇四三番地、現在のシャノアールの左に三十四年から三十六年まで営業していました。店は二間の一間で、大衆小説、雑誌、マンガを扱っていましたが、並んでいた本は古本が大半でした。利用者は大人がほとんどで特定の層はありませんでし

たが、なじみの人では毎日来る人もおりました。店番はFさんとTさんが、交替でやっていました。開閉時間、休日は多摩屋書店と同じでした。信用貸しで保障金はとりませんでした。料金は、一日十五円でした。

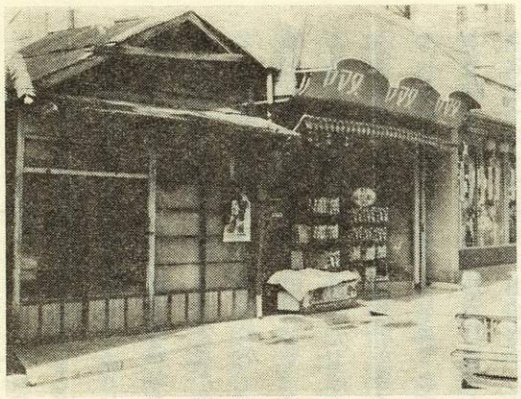
四、松永書店　店主松永栄さん。志茂一六〇番地、現在の松永書店の場所で三十一年より三十四年に新刊店を開店するまでのほぼ二年間営業された。きっかけは溝口書店が貸本をやめるので、その本をそっくり引き継いで始めたそうです。溝口さんと松永さんは町会の関係でお付合があったようです。店は一間の一間半で、小説とマンガ本が半々で新刊の週刊誌も扱いました。子供の利用が多かったが、売上げは一日百円位にしかならなかったそうです。仕入は週刊誌くらいで、やめるまでほとんど溝口さんから引きついだ本のままでした。料金は一日五円で、保障



貸本店所在地図（数字は店の紹介順序）

金はとりませんでした。朝は八時から夜十時までやり、休みは正月の一日と二日だけでした。当時の福生の商店街もほとんど同じようでした。余りもうからないので、三十四年より新刊本屋に変えたそうです。店番は主に奥さんがされていました。

五、福生堂書店　店主大石さん。本町六十八番地、銀座通り山田靴店の左隣りにて三十二年四月から三十九年十二月まで営業していました。店は二間の二間でした。大石さん御夫婦が亡くなられているので、店の内容については詳しいことはわかりませんが、三十七年位までは大変繁盛していたようです。開店した翌三十三年に、銀座通りではわりと早くにテレビを買ったそうで、三十四年四月十日の皇太子殿下の結婚式を近所の人が見せてもらったということでした。店番も、三十七年頃まで二人の女店員さんがいて交替で店に出ていました。朝は八時から夜十時半まで、正月の休みだけで年中無休でした。仕入は御主人が月に二回出かけられた様です。大石さんは塀内さんの身内の方らしく、そんな関係で店を始めたようです


今ものこる福生堂書店跡

が、ご夫婦とも相継いで亡くなられ三十九年十二月に閉店しました。

六、牛浜書房　店主佐藤二郎さん。熊川八八四番地、（玉川上水山王橋牛浜寄の角）。三十二年四月二十九日開店、三十七年に閉店。御主人が本が好きで始められた。店は自宅を改造し、一間半の二間で真中に棚があり、半分は雑貨店を兼ねていました。始め五月から開店する予定でしたが、近所の子供達が聞きつけてきて、せがまれて予定より二日早く開店したそうです。本は千冊位ありましたが、三分の二はマンガ本でした。小説、雑誌も扱いました。少年雑誌も置きました。信用貸しで、料金は一日マンガは五円、小説、雑誌は本の値段により十円より十五円でした。一日の売上げは百円くらいでした。朝八時から夕方六時までで、正月も休みませんでした。子供の利用が多く立読みが多かったのですが、みんな知っている子で借っぱなしということはまずありませんでした。店番は奥さんとおばあさんがされ、御主人は勤めておられ、月に一、二回仕入れに行かれたが、自分の好きな本を買ってくるため、大人の利用は少なかったそうです。山崎豊子の「暖簾」、深沢七郎の「楢山節考」、「赤銅鈴之助」、「さざえさん」等はよく読まれました。ドストエフスキーの「罪と罰」は一人しか借りる人がいなかったそうです。やめた理由は、だんだん子供達が借りに来なくなったためで、いくら新刊を入れてもだめだったそうです。でも、とても楽しかったそうです。子供が毎日来てくれてと感想を述べられました。

七、卯月堂書店　店主清水淑子さん。福生六九九番地（駅前通り現在福生コイン店の所）にて、三十四年四月から四十四年二月まで営業していました。清水さん自身が本が好きで始められたそうですが、子供を育てながらやれる仕事ということで、子供さんが四才の時から中学の二年の時までやられました。やめられた理由も、高校入試をひかえ、むずかしい年頃となり家にいた方がよいと判断されたためで、出来ることなら続けたかったそうです。御主人はお勤めをされていたとの事です。店は一間の一間半でしたが変形でした。本は二千冊くらいありました。マンガが三割、大衆小説五割、その他二割でした。始めは自分の蔵書二百冊と買い入れた本で出発しました。利用者は子供、主婦、サラリーマン、基地のオンリーさんがよいお客でした。一日五円で始めましたが、三十六年からは十円にしました。保障金は取りませんでしたが、身分を証するものを見せてもらいました。経費を除いて月七、八千円は純益があり損はしなかったそうです。利用者の要求に応じた本も仕入れましたが、二、三割は自分の道楽で仕入れました。当時御徒町のガード下には、貸本店専門の卸しの店が二十軒位あり、マンガ本、大衆小説は、新刊本が十二％引きで購入できました。月に一度位は行き、みかん箱に二箱位あるので、日通で送ってもらいました。朝十時から夜九時までやっていましたが、四十一年頃からは七時までになりました。正月の休みを除いて定休日はありませんでした。二十名くらいの常連がいて、商売よりも皆よくおしゃべりに来たそうです。もう亡くなられた田中しずえさんというお

ばあさんは、大変な読書家で、福生の読書人列伝の中に加えたいと思います。

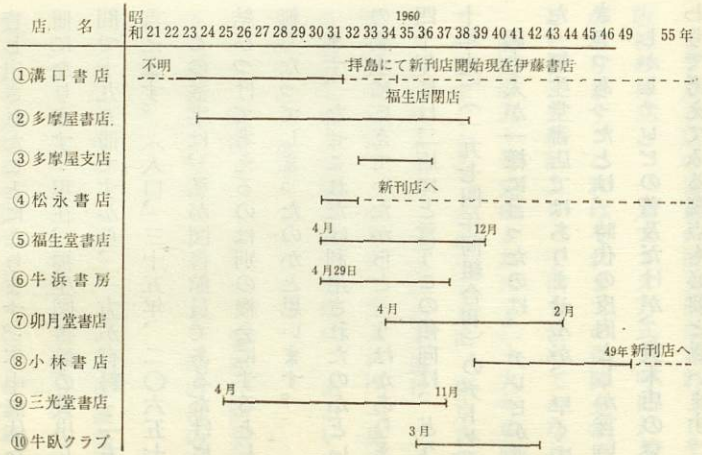
八、小林書店　店主小林キヨ子さん。福生七八〇番地、三十九年から四十九年まで営業、引続き現在は新刊本屋となっています。きっかけは隣りの塀内さんが郷里に帰ると言う事で閉店することになり、それを引継ぐかたちで店を始めたそうです。店は二間の一間半で、小説、マンガ本、新刊の週刊誌を扱いました。朝十時から夜九時までで、休みは正月位でした。利用者はバー街の女の人が多く、雨の日などは十冊以上も借りて上得意でした。料金は始めの頃は十円でしたが、閉店の頃は二十円でした。保障金を本に応じて百円くらいから毎回とったそうです。場所柄、本の回収には苦労したそうです。売上は一日千五百円から二千円くらいありましたが、終りの頃はさっぱり儲らなくなり、新刊本屋になるに至ったそうです。店番は奥さんがされ、御主人は勤められていました。現在新刊本屋となっていますが、福生にも東口に大きい本屋が出来、なかなか大変とのことでした。

九、三光堂書店　店主大谷福一さん。牛浜一四八番地、牛浜駅東口、昭和二十五年春から三十七年十一月まで営業していました。初めは易者に見てもらって朋詠(ほうえい)堂書店と言ったそうですが、むずかしくて子供が読めないので三光堂書店に改めました。子供向マンガ本を貸すことから始めましたが、雑誌、大衆小説もじきに扱いました。お客さんの要望があるので新刊の雑誌、小説、専門書も買い切り制にして扱いました。店は一間半の三間で三千冊位はあり、半分はマンガ本でした。仕入は神田神保町の特価本店から七掛で買って来ました。大谷さんが毎週オートバイで行ったそうですが、当時電車はものすごくこんでおり、五日市街道を通って行くと道はガラガラでうんと楽だったとのことです。一回に五十冊位仕入れて来ました。お客さんの要求する専門書なども古本屋街を一日かけて見つけてきたりもしました。貸出しは信用貸しで、マンガ十円から小説などは値段によって二十円でした。代金は閉店するまで同じでした。売上は一日最も利用された時で三千円位あり、割合とうまくいっていました。休みは正月三ケ日だけで、朝九時から夜八時まで毎日やっていました。お客さんは子供と基地関係の女の人が多く、子供と大人の利用は半々位でした。明星・人間の条件・砂の器、等はよく出ました。始めたきっかけは、大谷さんの勤め先(基地)の友人が、村山の中藤で貸本店をしておりすすめられた事と、奥さんも本が好きだったことからでした。当時はとても勤めだけでは十分食べて行けなかったそうです。店番は奥さんがやっていました。昭和三十七年、現在の商売であるテント店を始めるため、十一月に閉店しました。閉店する頃は余り儲らなくなってきました。本は全部秋川の老人施設に寄贈しました。当時の思い出すことは、牛浜の町づくりで、昭和三十年位までの牛浜は、電灯がなかったり(二十六年につく)、雨が降ると、原ケ谷戸やグランドの水がみんな流れて来て、駅のあたりは腰まで水が出たそうで、当時の町長を呼んできて実際に入ってもらったそうです。飲み水も使えなくなり、多摩川にリアカーで桶をつんで、飲み水を汲んで来た

りした苦労があり、道路、水道や下水の整備のために、役場へ何度も足をはこびました。そんな牛浜の人々の気迫に、ある町長は「おっかなくて牛浜にはいけない」と言ったそうです。

なお、チャタレイ裁判があった時（昭和三十二年三月十日最高裁判決で有罪決定）福生署の古物担当の警官が来て、店にあった「チャタレイ夫人」を持って行ったそうです。これは初版本ではなかったために返されました。又、マンガ本は、全部目を通した上で店に出しました。

十、牛臥（うしぶせ）クラブ福生支部　店主葉泰国雄さん。福生在住、配本制の貸本で店はありませんでした。昭和三十六年三月から四十二年まで営業、床屋さん、美容院をお得意とするマンガ本専門の貸本屋です。一組十五冊のマンガ本を二週間二百円で置いてもらいました。お客はおよそ、立川七店、青梅七店、五日市三店、秋川一店、昭島八店、福生八店で、常時三十店位でした。始めるきっかけは、友人が沼津で同じ方式の貸本店牛臥クラブをやっておりすすめられて始めました。そんな関係で、本は三十九年位までは沼津から送ってもらっていました。その後は、神田神保町の特価本屋から仕入れるようになり、三月に一回、百五十冊（十組分）買いに行きました。現金で、定価の$\frac{1}{3}$位で買えました。本を補強するためのビニールカバー、のり、糸も一緒に買って来ました。人気のあったのはチャンバラ物、アクション物の劇画でした。勤めが一日置きだったので、合間をみて週二日位をつかってやっていました。売上は月一万二千円位でしたが、自動車で廻っていて、ガソリン代が五〇〇円で済んでいたので、まあまあと言うところ



でした。やめたのは床屋さんが不況になり、待ち時間がほとんどなくなり、置いてくれる店が少くなってきたからだそうです。立川より先には、同業者がありましたが、西多摩は葉泰さんだけでした。

全国的な流れ

調べ出したら、九軒もの貸本店があったという事にまず驚きました（配本専門も含むと十店）。特に三十五、六年には同時に六店がやっていたのは表の通りです。この様に決して盛んとは言えないかも知れないが、存在していた店が、四十九年の小林書店を最後にすべて消えていってしまったのは、どうしてなのだろうか。余り正確な数とは言えないが三十五・六年の二年間は一日一店千円として六千円の売上げがあり、一冊十円として、六百冊の本が全体で

貸し出されたことになります。年中無休なので、年間にすると三六〇日×六百冊で二十一万六千冊になります。現在、福生図書館の貸出しが五十三年で一日一館二五〇冊、三館で七五〇冊、年間で十九万冊ですから、一方が有料、一方が無料と言う点を考えてみても大変な利用率だったと言えます。（人口、三十五年、二〇六五七人、五十四年四月、四八六六四人）

この数字は、私が図書館員であるだけに一つの衝撃である訳ですが、図書館の運営のあり方に結びつけて考えるのは別の機会にするとして、なぜこれだけの利用がありながら、潮の引く様に無くなってしまったのかと思います。

まず、なぜこれだけ利用されたのかという点に対しては、貸している本の内容からして、利用の要求に応えていたからと言うほかありません。しかし三十七年には五店、三十八年には三店、四十年には二店にと言うこの傾向は、どう考えたらよいのだろうか。これは「東京古書店組合五十年史」（一九七四年同組合刊）のデータによっても全国的な傾向と言えます。

店の人が一様に言ったのは、テレビが普及するようになってからだめになったと言うことでした。福生堂書店ではありませんが、早くにテレビを買えたのに、テレビにより閉店の時期が近づきつつあったとは、時代の皮肉としか言いようがありません。

しかしテレビの普及だけが、貸本店の衰退の原因と言えるかと言うと、すこし戦後史とのかかわりで考えてみる視点も必要と思います。

まず貸本店の盛衰の歴史的な流れとしては、戦後の書物への飢餓状態への反発があり、群小出版社の林立と、一方でネオ方式と呼ばれる関西系貸本店の進出（二十八年東京へも支店を出す）があります。これはそれまでの保障金制度による貸本を止めて、信用貸しによる貸本を始めたことです。これにより、子供も含めてかなりの利用者の増大をはかることが出来たと言えます。

前掲の五十年史によれば、二十九年の時点で、当時の警視庁の調べで三千軒に達したと言われています。また、この年十月に、東京古書組合に貸本部が設置され、三十八年二月に廃止されるまでおかれました。貸本店の全盛は、三十年代の前半までと言われていますが、梶井純氏の「戦後の貸本文化」（東考社）によれば「東京でも三分二が組合に加入していないと言うことから、全国的には未組織零細店の数は、あるいは二万軒とも三万軒ともいわれた数を上回っていたかもしれない」と述べています。

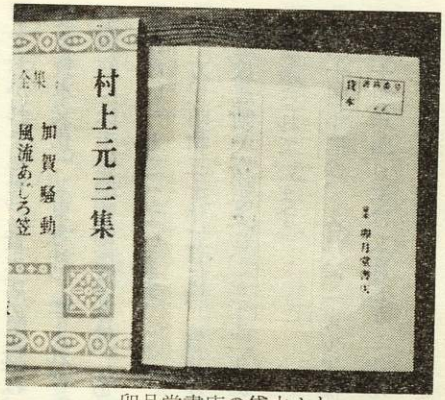
一方、昭和三十年五月に、警視庁防犯課による発行所取次店の一斉手入をきっかけとして、悪書追放運動が開始され、三十二年の母の会連合、日本子供を守る会などによって、貸本店の問題が論議されています。

三十四年には、各県に「青少年保護条例」がひろがりはじめ、有害図書追放を行っていった。

三十四年四月には文部省が「青少年の読書指導のための資料作成等に関する規程」を出し「図書選定申請制度要領」という告示を定め、同年四月二日から実施すると発表した。これは出版界

を上げての反対の中で中座されたが、最終的には出版取次店、書店による内部規制による悪書を出版しない、売らないという方向で逆に実施される形となり、結果的には出版取次の大手資本による系列化、統制という今日の出版界の土台をきずいたことになりました。なお少年サンデー、マガジンが昭和三十四年三月十七日同時に刊行しています。

この様な流れの中で、貸本店のイメージが暗くなっていき、営業がしにくくなり、ある地域によっては、貸本店への児童の立入禁止を決めるなどして、急速に転廃業されていったと言えます。福生では、貸本店の出入禁止が児童に言いわたされたという形跡はないようですが、昭和三十三年、三小で松永さんがPTA会長をされていた時、PTAの集会でマンガの問題が論議され、三光堂の大谷さんは、自分の店においてあるマンガ本を持って行って長所を説明したそうです。



卯月堂書店の貸本より

おわりに

貸本店が、町の一つの文化の灯をともしていた事は忘れてはならないでしょう。卯月堂の清水さんは、今の図書館の様子を聞いて「私も一時期、図書館の肩変りをしていたのかもしれませんね」と話してくれました。戦後急激に変っていく時代の流れの中で、私達市民が失ってはならないものを失ってしまった気がします。ミヒァエル・エンデが「モモ」（岩波書店）で、我々の目の前に説き明かしてくれた人間としての時間（考える時間・団らんする時間・働くことのよろこびを感ずる時間）を失ってしまいつつある現代人への、警告にも共通するように思います。貸本店が盛んだった時、町の人は本を通して何を感じ生きていたのでしょう。一定の時間がそこにさかれていたことを、もう一度ふり返る必要があると思います。

このつたない文章をまとめるにあたって、多くの市民の皆さんの御協力をいただきました。誠にありがとうございました。私はこの貸本店の歴史を調べてゆくうちに、思いもかけないことに気がつきました。それは戦後の激動期を、一生けんめい生きた方々の声を聞かせていただき、福生の町の歴史を知らず知らずに勉強していたと言うことでした。

戦後新たに出発した民主教育の中で、社会科は私達一人一人が政治の主体として尊重されなければならないと言う新憲法の理念を学習するために出発しました。その中で地理、歴史の教育は

私達の生活する郷土を学習することが大切な柱でした。又社会科社会では、地方分権、地方自治の役割を教えられました。この様なことを思い返しつつ、はからずも二十年ぶりに社会科の大切さをしみじみ感じさせられました。福生に住むようになって八年になりますが、福生の町が人々にとって本当に暮しよい町になるように、皆さんといっしょになってがんばらなくてはいけないなあと思っております。この様なわけで、ふっさっ子の山崎さんの仕事を改めて思い返し、今度(このたび)の機会を与えていただいたことに対して深く感謝しております。

内容につきましては、調査事実を前提としてまとめたつもりですが、私自身不十分なまま文章化してしまい、まことに恥ずかしいかぎりです。訂正等ありましたら、ぜひ菅井(福生市南田園一ノ八ノ十九)までお知らせ下さい。

参考文献として、文中に掲げたものの他に「戦後社会教育実践史(民衆社、昭和四十九年刊)第二巻」があります。

(福生市立図書館勤務)

月刊『ふっさっ子』

子どもの意見 より

「福生市子ども議会(架空)立候補にあたって一言」

(一九七六・五)

福生市子ども議会に君たちが立候補したら、どんな公約を叫ぶだろうか。

(外では、市長選挙戦の声が賑やかな時期である。)

男性候補者

テレビから、おとなの番組をぜんぶなくして、おとなにはもっと本を読ませよう。　六小五　菅原　一樹

横田基地のエンジンテストをやめさせます。　六小五　村田　浩司

先生のてい年を四十さいにする。　三小四　男　子

四小六　鈴木　敦史

ぼくは、世界中のマンガの本も、画家のかいた絵も、みんな福生にあつめてみたい。

三小四　長野　勇政

横田基地をぜんぶ原っぱにしてしまいたい。その中で、三年生ぐらいから、バイクにのって遊んでもいいことにしたい。

四小四　井梅　邦彦

学校の休み時間を、一時間ぐらいにしたい。

女性候補者

三小四　本橋　圭子

一、どうろはぜんぶ、子どものあそぶばしょにしたい。二、高校と大学をなくしたい。三、佐藤先生とあそびたい。

一小五　杉山ちづる

学校をつぶして、あそび場をつくらせる。

七小四　岸野志鶴子

一、お菓子はみんな百円で買えるようにする。二、おもちゃの千円のなんか、五百円か二百円にさせる。三、じゅくは、二つか三つしかつくらせない。

中二　女　子

このごろの大人は、子どもに期待しすぎるのです。ですから自殺する子がふえています。そのために親を教育しなくてはなりません。われわれは早く子ども議会をもうけて、まずストをおこしましょう。私はその先頭に立つために、かんぜんと立候補いたしました。

「きみたちにとって『多摩川』ってなんだろう」

（一九七六・一〇）

むかしの〝ふっさっ子〟に『多摩川は？』と問えば〝ふるさと〟と答えるだろう。いまのきみたちにとって多摩川って、なんだろう。

五小六　石川　善則

ぼくは五小なので、多摩川に近いです。理科の実験や、野鳥の観察には、とても多摩川が役立っています。それに、まだ緑が多いところです。冬になって雪が降ると、土手でやるスキーも楽しいのです。

三中一　大島喜代美

私たちにとって、多摩川は「自然にしたしむところ」だと思う。私は日曜日といえば、よく野鳥観察にゆきます。ときには中州に入るときもあります。そして、鳥たちに自然のすばらしさを教えられます。でも最近は川の水もよごれています。そして、多摩川へくる鳥もへっています。

だから、自然のたいせつさを、私たちの手でとりもどしたいと思います。

一中一　森田　和美

私は、幼稚園のころ、母や近所の人といっしょに、多摩川の方へ遊びに行ったものでした。そのころは、多摩川で遊んで、近くのたんぼではせりつみなどで楽しみました。今では、多摩川は遠くを流れ、思い出の場所は、団地や公園になってしまいました。

【昔】　地震・雷・火事・おやじ

【今】　地震・火事・雷・交通事故

（一九七八・一）

昔の人はこわいものは、地震・雷・火事・おやじ。ということだったけど、みんなのこわいものは、なんとなんですか。

二小六　木村　利幸

戦争・ふん火（火山）・地震・赤軍。こんど戦争をしたら、核兵器の放射能で、人るいが全滅してしまうかもしれない。

四小五　藤原加津代

交通事故・火事・地震・雷・大洪水。交通事故や火事では、家がなくなり死ぬ人も出るから。

三小五　無　記　名

不良・雷・注射・火事・車。いつかお使いにいった時、不良みたいな人に「金あるか」と聞かれて、とてもこわかった。

二小四　平綿真寿美

地震・雷・火事・どろぼう・通信表。通信表は、悪いのがあるとおこられるから。

二小四　金井　順子

地震・火事・車・ヘビ。ヘビは、お父さんにたのか、なんだかこわくてしかたがない。

二小四　比留間　隆

あと千年ぐらいたったとき、地球がどうなっているのか。それを思うとサイコーこわい。

さて個々にはこんなことだが、全体をまとめてみたら、こわい順は。（　）内は点数

1、地震（一五一）2、火事（一三二）3、雷（七一）4、交通事故（六三）5、学校の先生（五五）6、おばけ（五四）7、テスト（四六）8、父（三〇）9、病気（二八）10、どろぼう（二五）である。つづいて出たのは、戦争・母・通信表・死・毛虫・医者・暴走族、などだ。おやじ株が落ち、先生があがってきたのは、家の中でこわいものなしになった現代っ子の、ひとつの社会批判かもしれない。

「おさいせん」

（一九七五・一）

お正月には、あちこちの神社に初参りにゆく人が多い。その時、おさいせんをあげますか。

中学一　片倉　陽子

くだらないよ、お金なんかあげたって。もし美人になりたいって祈ったって、整形手術でもしなければ変わらないものね。

小学生　森田　裕子

願いごとをするのだから、あげるのはあたりまえです。私はふつう五十円ぐらいあげます。テストでいい点がとれますように、なんてお祈りします。

小学生　金沢　佳代

まえに一度に三百円入れておねがいしたけどかなわなかった。それからはいつも十円にしている。友だちは、十円で三つもおねがいするんじゃ、ぜんぶかなわないよ、といいます。

小学生　小林　栄子

お金を入れれば願いごとがかなうなら、お金をたくさん出せる人ばかり幸せになってしまう。お金がない人だったら、願いごとがかなえられないのかなー。

中学生　おおたけ

あんな箱に入れて何になる。それより自分で努力することだよ。努力せずに祈ったってだめだ。

「きみは　戦場に行くかい」

（一九七九・八）

こんど戦争がおこって、「戦場に行きなさい」と言われたら、きみは行きますか。

四小六　高田　賢一

ぜったいに行かない。それはむかしのように、天皇へいかのため、お国のために行ってこいなどと言われたらいやだ。戦争を起こさず、国と国のいざこざは話しあえばいい。世界大戦になったら米・ソの争いだ。ろうやに入れられても殺されてもいやだ。戦争が起きれば、とくをするえらい人もいるんだから。

四小五　野崎　昌利

ぜったいに行きたくない。まだ死にたくないし、死んだらぼくの好きな野球もできない。

六小六　渡辺　啓

ゆかない。日本の憲法では、国民主権・基本的人権の尊重・平和主義なんだから。もし行っても潜水艦の艦長になって、艦隊からはずれて逃げてしまう。

行く。そして一度でいいから「私は祖国のためなら死んでもいいんです」って、言ってみたい。

一小五　徳永　創

ぼくは海軍に行きたいと思っている。まえに図書館で本を読んだとき、海軍は勇ましくて、どうどうと戦かって強かった。だから海軍がいい。

七小五　熊谷　健二

ぼくは戦争に出されたら、空軍に入りたい。なぜかというと、ぼくはジェット機が好きだ。それからぼくのおじいさんが戦争に出たからだ。

三小四　栗原　雄一

「先生へのお中元」

（一九七五・六）

「うちでは今まで先生に何もおつかいものしなかったけど、やった方がいいかしら」とお母さんが言ったとする。あなたはどう思いますか。

だんぜん反対！。いくらお世話になっていても先生にものをあげたりしたら、自分の子だけよくみてほしいと願っていることを、さらけだしているだけじゃない。なんて考えるのは私だけかしら？。近所の人や特別おつきあいのある人にあげるのは、また考えなきゃあいけないと思う。

中三　女　子

私の家はこんなことをしていないと思うけど、もしあげていたら頭にくるな。おとなはこういう時、どう思って送っているのかしら。私たちは、成績をあげるのは自分の実力でやりますからよけいな心配はしないでください。

小五　女　子

私はいいと思う。お父さんの友だちなんかで、そんなにおせわになっていない人にあげるのに、いつもおせわになっている先生にあげないのは、とても不公平な気がする。

中三　男　子

別に現金で何十万円も渡すわけではないのだから、たとえごますり精神からだとしても、さして問題はおこらないだろう。まあ、学校の先生になるくらいの人だから、お中元をもらったくらいで生徒をひいきしたりするはずがない。

「先生！『わかりません』」

（一九七五・一）

このごろ学校で、「わかりません」という子がふえているそうだ。そこで、皆に先生になってもら

う。父母がたずねてきて、「うちの子は、わかりませんで困っている。」と相談されたら。……さて先生は。

四小三　井上　均

いくら勉強させても、自分でやる気がなければだめだと思いますねえ。

六小四　金子　広毅

一人や二人のために、わかっている人もおくれたらどうなります。というなあ、ボカァ

二小四　坂本　泰子

バカなら好きなことをさせられるから、バカでもいいですよ。

二小五　大沢智津子

○あそばせないで、家へ帰ったら復習させなさい。○勉強のできる子とあそばせなさい。○塾へゆかせなさい。○うんと本を読ませなさい。

二小五　森田　賢司

いつも夜おそくまでテレビを見ているから、ねぶそくでアクビばっかりしてボヤーッとしているから、よくねかせてほしい。

本年四月二日、福生市立中央図書館が開館した。中央図書館は、福生第一中学校のすぐ裏側、武蔵野の面影を残す雑木林の中に建設された。文化の殿堂にふさわしい優雅な姿である。

この図書館正面の壁面に、壮大な芸術作品、岡野法世氏の『日の出金色』が飾られている。

陶壁『日の出金色』

岡野法世

陶壁を作るに先立って、福生市長石川常太郎様に、図書館のあり方、夢等々お話を伺って、たいせつに思ったことは、「図書館を中心に、全世界に目を開き、はばたいて行ける人が育つ場であって欲しい。」と言うことであった。さて大変だ。こんな大きな夢を、私の力量で作り出せるだろうか。建物の格調を落しはしないだろうか。

昭和五十四年五月、目覚めると日の出。山間からの穏かな光。この時、陶壁のテーマが決まった。四カ月間、頭も心も捕えて離さなかったテーマが、こんなふうに一瞬にして決まるとは、自分でも想像外だった。私の作る大皿の中に、日の出を思い、窯詰して焼上げるものが有る。その大皿と、この朝が重なり合った。

『金色』の二字は福生在住の中国の士、胡蘭成先生に、そのあとつけていただいた。

私が好んで陶土を取寄せる滋賀県信楽町は古くからの陶産地で、植木鉢、庭園用テーブルセット、狸の置物等、巾広く陶器を作っている。

こんどの陶壁も、初めは信楽に出向いて作ろうと思ったが、大きな工場の燃料は、重油、灯油、ガス等に変わってしまい、松割木を燃料とする窯は、個人作家が維持している程度だ。私の思う『日の出金色』は、どうしても松を焚き、無釉（うわぐすりを掛けない）で焼〆たいと思い、自宅で作ることにした。陶土も、焼〆に合うものを探した。友人の島田さんと小川さんが、信楽の陶土屋さんまで来てくれて、三人で荒練を済ませた。トラックで帰る途中、東名高速道路上、袋井で数時間の渋滞に会いここでも日の出を拝んだ。下り線は、日本坂トンネルの事故のときであった。

焼上りでも、6×4、7メートルを、一面に作られる丸太小屋を自宅に作り、コンクリートを打ち、トロッコを作った。この頃から、兄弟弟子の菊田君は搬入の済むまで、友人の村岡さんも足しげく、夏休みの間は美大生の水野君、前記の島田さん小川さんも事あるごとに助けてくれた。トロッコは、青木鉄工さんの呑みこみが早く、あっと云う間にできた。準備完了だ。

信楽からの土を試験的に土板に伸ばしてみると粘りが足りない。持合せの陶土を混ぜ足した。まだだめだ。木節粘土を全部出すと600Kg有った。全体で3トンになるようにもう一度混ぜて練直した。小さな土練機ではなかなかはかどらない。3トンの土を16等分にして、菊田君と私で

踏練をして、おおよそ混じったものを、妻が土練機に掛けた。幾日か掛り、ロクロ場いっぱいの荒練土ができた。その頃になり、注文中の土練機が到着した。

いよいよ打込み。妻が旧土練機を使い、子供三人が練上った土を運ぶ。水野君は新土練機で、村岡さん、菊田君、私で、3Kg程に丸めた土を、中に空気が入らないように順次叩き込む。およそできあがると、厚くしたいところ、薄くしたいところに応じて、削り取ったり重ねたりした後、足で踏固めた。表面の調子を付けるために、川石で叩いたり、木のホロで押したりするうちに、割御影石の色々な表情の叩き分けにおちついた。つぎは、窯に入りよい大きさに切ることだ。不定形で自然なものを探すうちに、江戸城の石垣に思い当り、スケッチに出掛けた。面白そうな石を探し、その周囲に接する石を描くうちに、石垣の成立方を憶えて帰った。墨で書割をし、番号を書き、ベニヤ板（巾3cm～17cm、高さ12cm）で押すように切った。

焼物は分厚いと窯中で割れやすいので、半乾きのときに裏を溝状に削り取った。もう九月になっていた。

一カ月間はこわれないように薦（こも）掛で養生した。十月中頃よりストーブを焚き、乾き上りは十月末だった。この間に、岡山県備前焼で使う松割木がトラック二台届いた。私の小さな登窯では、前割（小割用斧の一種）を使い、直径2cm程に割って燻べる。十一月一日夕、火入れ。五日午前八時四十五分火止め。九日、窯出しとなった。ここ何か月か、心に描きつづけてきたも

のよりも美しく焼きあがった。

この窯では台風大雨の折、窯焚口に水が湧き、火入後も湿気がいつまでも抜けずに、温度が上りにくく、今までの窯焚のうち、最長時間記録であった。

十日　窯詰め始め。

十三日　火入れ。

十六日　午前七時、一の間焚上り。午後九時、二の間焚上り。1300度。

十七日　午前一時三十分、三の間、焚上り。

二十日　窯出し。この日のうちに、第三回窯詰め始め。

二十六日　完了。

早く、全体の調子が知りたいので、図書館に搬入するとともに、番号順に並べた。それをみつめて、感無量。

人々が、「きれいだね」。菊田君、村岡さん夫妻も「良かった、よかった」。

ねぎらいと祝福の声を耳にして、心の弾みはおさえようもなかったが、体は地底に沈むかのようだった。

（筆者は、座談会、第二話年代の福生一小卒業生。京都、岩渕重哉先生に師事。四十年に福生の生家に築窯後日の出町平井に移転、築窯。四十二年日本伝統工芸展初入選。日本工芸会正会員）

福生市（町）戦後文化史年表

（昭和20年より54年に至る）

年号	事項	参考事項
1945（昭和20）年		
8	B29により熊川駅付近爆撃される（八月二日八王子空襲される）	3 硫黄島の日本軍全滅。東京大空襲始まる
9	占領軍、横田基地に進駐する	6 沖縄の日本軍ほぼ全滅する
11	福生青年団発会式を行なう（団長　橋本孝蔵）	8 アメリカの空軍、広島・長崎に原爆投下、ポツダム宣言受諾、終戦の詔勅
12	熊川青年団発会式を行なう（団長　森田　正）○学校で教科書に墨ぬり　○原ケ谷戸の戸数は二六軒、学童数は二五名	10 連合軍総司令部（GHQ）東京に設置 11 財閥解体 婦人参政権を含む選挙法成立。修身、日本歴史、地理の授業停止
1946（昭和21）年		
4	NHKラジオ放送で熊川青年団が紹介される	1 天皇の人間宣言
9	西多摩郡連合青年団発足する	2 第一次農地改革実施
10	福生・熊川青年団、合同福生青年団として発足する（団長　橋本孝蔵） 第一回福生町青年団支部対抗陸上競技大会・西多摩郡連合青年団陸上競技大会を開催する ○青年による素人演芸会がさかん	3 労働組合法施行する 4 アメリカ教育使節団、報告書を発表する 第一回総選挙実施（新憲法による） 10 総司令部、歴史教育の再開を許可する。国定教科書「くにのあゆみ」発行 11 日本国憲法公布される
4	初の公選で福生町長に岸徳次郎当選する	2 二月一日ゼネスト宣言（中止）
5	町立福生中学校開設（福生第一小学校に併設）	4 第一回知事・市町村長の選挙

年	月	事項
1947（昭和22）年		する（初代校長　橋本兵五郎）
	8	同校ＰＴＡ発足する（初代会長　村野和助）
		あかざ会主催〝西多摩夏季大学〟開催する
		野球チーム〝多摩新産〟が誕生する
	9	福生第一小学校で母の会を結成する、給食開始（給食委員会）月額五〇円
		多摩川大水で熊川堤防が決潰し青年団が修復に出た
		○二小校長浜中秀次勇退、山崎彦尚就任（4月）　○米軍人相手の慰安婦がこの町にも出現したのが10月ころから
		六・三・三・四制の新学制実施（国民学校を小学校と改称）
	5	日本国憲法が施行される
	6	日本教職員組合（日教組）結成される
	7	静岡県登呂遺跡の発掘再開する
		社会科の授業開始する
	9	関東地方風水害（キャスリン台風）
		○『鐘の鳴る丘』放送開始
1948（昭和23）年		
	1	改正民法、児童福祉法が施行される
		帝銀事件が起る
	2	自治体警察が発足する
	4	新制高校・新制大学一二校が発足
		新祝祭日を決定する
	7	教育委員会法公布
	10	第一回教育委員選挙
	11	極東国際軍事裁判判決下る
	1	大都市転入抑制を解除する
		法隆寺の壁画が焼失する
	3	福生町自治警察署設置する
		福生町消防団を結成する
	7	福生中学校、牛浜の新校舎に移転する
	8	福生病院が開設される
		○福生児童劇研究会、一月に遺家族慰問演芸会開催　○修学旅行にはお米持参で　○福生・五日市間のバスの燃料は薪炭で　○一小で中学校に貸教室のため二部授業
	4	福生町婦人会発足する
	5	福生第一小学校と第二小学校ＰＴＡ発足する

年	月	事項
1949（昭和24）年		（初代会長　一小横田寿照、二小平井初五郎）
	8	福生町営グランド竣工する
	11	西多摩郡連合青年団総合文化祭演劇コンクールで福生町青年団の〝猿〟が優勝する
	12	福生町健康保険法を施行する
		○作文集『多摩の子』はじまる
		○テアトル福生・ニュー福生映画館開館する
	4	検定教科書使用はじまる
	6	労働組合法施行される
	7	下山事件・三鷹事件
	8	松川事件
	11	湯川秀樹、ノーベル物理学賞を受賞する
1950（昭和25）年		
	8	プロ野球公式戦、巨人・国鉄戦町営グランドで開催される
	10	福生町の戸数二、九二〇戸、人口一四、六六九人
		第一回青年団支部対抗駅伝マラソン大会開催
		福生町育英資金給与条例施行される
		○福生中学校議会での重点目標「悪い言葉を改める」また、進駐軍の残飯捨場でモノを拾っている人がいると警告　○町制10周年町民運動会を開催　○少年野球がさかん
	2	都教育庁、教員二四六名をレッド・パージ
	6	朝鮮戦争始まる（爆撃機横田基地に発着）
	7	日本放送協会（ＮＨＫ）特殊法人となる
	8	警察予備隊を設置する
		文化財保護委員会が発足する
	1	ラジオ東京開設、民間放送開始
	4	マッカーサー元帥解任、後任リッジウェイ中将
	5	児童憲章が制定される
	3	都立福生保育園舎落成する
	7	福生七夕まつり始まる
	8	福生第一小学校、千葉県鵜原ではじめての臨海学校を開く

1951（昭和26）年

9　福生第三小学校開校（初代校長広瀬義雄）
11　福生中学校、新校舎（現、福生第一中学校）へ移る。福生中学校同窓会創立される
　福生町柔道会発足する
12　青梅線福生駅東口を開設する
　○福生町長に加藤市蔵就任　○一小から三小を分離、児童数が一小九二一名、三小四一一名となる　○初の婦人町議が生まれた。○一小PTAの俳句サークルから発展した「霧の音」結成される

1952（昭和27）年

4　福生幼稚園開園する
6　福生中学校、東京都中学校実験学校に指定される
11　福生町教育委員会発足する（委員長横田寿照、教育長秋山誠一）
　○町長に森田幸造就任　○二小校長に石原駿吉就任（10月）　○人口が年に千人ずつぐらい増加　○9月に赤線地区が設定された　○紅梅キャラメルの野球カード集め流行　○三小一期生卒業式に海老原博幸（プロボクシング）がいた　○この年の物価、青梅線福生駅より立川まで往復四〇円、新聞代二二〇円、標準米10K・六八〇円

6　第一次公職追放解除される
　ユネスコに正式加盟する
9　サンフランシスコ対日平和条約・日米安全保障条約を調印する
2　日米行政協定調印する
5　メーデー事件
7　第一五回オリンピック大会（ヘルシンキ）に参加する
　警察予備隊を保安隊に改組する
10

1953（昭和28）年

4　羽村・草花自然公園指定される
6　青年演劇グループ〝ひこばえ〟を創立する
11　福生町風紀取締条例を公布する
　福生町の人口が西多摩郡内の筆頭となる
　友昇碑を友昇生家の松原庵の庭に建てる
　○牛浜地区で夜の女の問題で町の浄化運動が起きた　○NHK三ツの歌に原島卓雄さん一家が出演　○混血児収容所福生ホームを多摩橋際に設立

2　NHKテレビ放送開始する
7　朝鮮戦争終る
8　民間テレビ放送開始する

1954（昭和29）年

4　福生珠算学校が東京都から認可された
5　忠霊塔を建立する（二五七柱合祀）
7　福生簡易水道各戸給水が開始された
11　西多摩郡婦人生活館が竣工する
　○一小各教室にストーブ完備　○米軍人用家屋（ハウス）建築ブーム、年間二、三百戸増えている（32・33年ごろ最高となる）　○志茂二町会で子供みこしを求め、入魂式を行なう（一五万円）

3　日米MSA（相互安全保障法）協定に調印する
7　防衛庁、自衛隊および新警察制度発足する
9　青函連絡船洞爺丸沈没する

4　都立多摩高等学校福生分校（定時制）開校する（福生中学校舎内）

6　第一回日本母親大会開かれる
7　砂川町民大会（基地拡張反対決議）＝九月

年			
1955（昭和30）年	9	福生第一小学校で給食実施する、月二四〇円	
	10	福生第三小学校で給食実施する 福生町戸数四、二三七戸、人口一九、〇九六人 ○中学校長に岡野栄一就任（10月）　○ハウスからしみこむ汚水で井戸水汚染さわぎ　○福生町役場職員数五九人	10 強制測量開始 国勢調査総人口（八、九二七万余人）
1956（昭和31）年	4	西多摩郡青少年問題協議会発足する	
	5	福生第一小学校音楽クラブ、NHK器楽合奏に出演する	
	10	福生町教育委員任命される（委員長横田寿照、教育長大久保林作）	1 原子力委員会発足する 6 新教育委員会法公布される（任命制） 10 日ソ国交を回復する（日ソ共同宣言） 11 第一六回オリンピック大会（メルボルン）に参加する 12 日本の国際連合加盟決定する
	11	東福保育園乳児部増設される 福生市場、都知事より認可される ○三小校長に館盛光就任（5月）　○福生町長に秋山誠一就任（7月）　○子どもが親に買ってもらいたい物の中にテレビが出てきた ○混血児収容所福生ホーム閉鎖される	
	4	福生第一小学校分校授業始まる（第四小学校の前身）三・五年三五〇名	1 南極予備観測隊、昭和基地に設営する
	8	八町内児童会館開設される	8 東海村第一号実験原子炉に「原子の火」ともる
	11	第一回福生町総合美術展開催する（一小講堂）	10 日本、国際連合安全保障理事会非常任理事国に当選する

年			
1957（昭和32）	12	福生町夜間常備消防隊が設置される ○福生珠算学校の社会人学級開講する　○一小PTAがテレビを同校に寄贈した　○住民に基地従業員が増加、約三割の人が基地で働いている　○小河内ダム完成で福生辺の多摩川水量減り冷めたくなった	
1958（昭和33）年	3	都立熊川保育園舎新築する	3 関門トンネル開通する
	4	福生町文化連盟発足する（会長鮎沢信太郎） 福生町婦人学級発足する	7 文部省、道徳教育実施要項を通達する 小・中学校長に管理職手当法成立する
	5	第一回福生美術会展開かれる	9 総評、日教組、勤評反対統一行動
	9	福生町育英会発足する	12 はじめて一万円札発行される
	10	福生華道連盟。福生日本舞踊連盟発足する	
	12	福生駅西口広場が完成する 福生牛浜郵便局開局する ○一小校長浜中雄一勇退、山田久夫就任（4月）○『多摩子ども詩集』第一号発刊される	
34）年	4	福生第四小学校開校（初代校長細谷勇太郎・四三五名）	1 新国民健康保険法、メートル法の施行できる
	11	東京都優良青少年団体として、福生町青年団第一支部（南・内出）東京都教育委員会より表彰される	4 NHK教育テレビ局開く 皇太子結婚式が行われる

1959（昭和		鍋ケ谷戸読書会発足する ○NHKの全国中学校放送陸上競技大会で福生中三年の爪生喜蔵が走高跳で全国一位となる（38年には棒高跳の日本学生チャンピオンになる）　○二小音楽部がラジオ東京主催子供音楽コンクール器楽合奏で都決勝大会に出場した
1960（昭和35）年	4	福生町陸上競技協会発足する 福生町体育協会が創立する 西多摩郡自治会館落成式が行なわれる（総工費二千三百万円） 福生中学校の体育館竣工（西多摩郡で戦後初）
	8	福生第一小学校、第二小学校のプール完成
	10	福生町戸数五、五六二戸、人口二一、九九八人
	11	福生町役場福生町誌を刊行する ボーイスカウト西多摩郡第一団発足する ○二小校長に的場秀男、中学校長に島田友二郎就任（4月）　○福生町長に瀬古清蔵就任（5月）　○町の小・中学校に混血児が一六名在籍　○福生町婦人会二二支部で一、三○○名の会員　○大沢鉄男が自転車競技でローマオリンピックに出場　○永田橋ができた。
	1	日米新安全保障条約、ワシントンで調印する
	5	安保阻止国民運動全国に起る ソ連、人工衛星船第一号打上げに成功する
	6	日米新安保条約成立
	8	第一七回オリンピック大会（ローマ）に参加する
	9	カラーテレビ放送開始
	10	立会演説中、浅沼社会党委員長刺殺される

1961（昭和36）年	4	すみれ保育園開園する
	8	福生町内の全小学校にプールが完成する
	10	西多摩郡連合青年団陸上競技大会で福生町青年団が完全優勝する 福生町商工会が発足する
	12	国鉄、青梅線が福生駅まで復線となった 福生町老人クラブ（福寿会）を結成する
1962（昭和37）年	4	福生町社会教育委員会、体育指導委員会が発足する
	6	福生町が首都圏整備法による市街地開発区域に指定される みどりのおばさんが配置される 福生町青少年問題協議会設置される 西多摩郡連合青年団陸上競技大会で、福生町青年団が完全優勝する（この年が最後の競技会となる） ○婦人学級がさかんで二二七グループ、三六五名が参加　○役場職員のマイカー通勤者は一・二名　○子どもたちに腕時計が流行してきた　○この年の物価、福生駅より立川まで往復六○円、新聞代三九○円、標準米10Kで
	10	
	4	ソ連、人間宇宙船ボストーク一号打上げ、回収に成功する
	5	アメリカ、人間ロケットの打上げ、回収に成功する
	10	文部省、中学校一斉学力テスト実施
	2	東京都の常住推定人口一千万人を突破する
	3	東京都、流感で一、二三八校が全休する
	8	にせ千円札対策として新千円札の発行を決定する
	9	国産第一号大型研究用原子炉に〝原子の火〟ともる

八七〇円。

1963（昭和38）年

3	福生町生活改善センターが完成する	
	熊川神社境内に熊川公園完成する	
4	都立多摩工業高等学校が開校する	
8	中学生ソフトボール大会（町会対抗）開かれる	
9	福生加美郵便局開局する	
10	熊川南の団地へ入居開始する	
	○中学校長に赤尾英三就任（4月）　○役場で印刷用輪転機（二四万円）や電卓を入れた	
	○福生三曲協会発足する。（7月）	
8	小学校新入生に教科書無償配布する	
9	海老原博幸、プロボクシング世界フライ級の王座獲得する	
11	ケネディ・アメリカ大統領暗殺される	

1964（昭和39）年

1	福生町役場庁舎新築完成する	
2	ダイヤル式電話が開設される	
	ニュー福生・テアトル福生映画館閉館する	
3	福生第一小学校新校舎（鉄筋三階建防音）が完成する	
	聖愛幼稚園、福生多摩幼稚園開園する	
6	子供会リーダー研究会発足する	
	婦人自主学級開講する	
8	校外指導連絡会発足する	
10	オリンピックの聖火リレー福生町内を通過する	
	家庭教育学級が開講する	
1	横田基地などF一〇五配置・原潜寄港に反対統一行動行なわれる	
4	沖縄援助に関する日米協議会発足する	
8	東京の水不足深刻となり第四次給水制限実施する	
10	東海道新幹線営業開始する	
	第一八回東京オリンピック大会開催する	
	中国、原爆実験に成功する	

1965（昭和40）年

	○福生町長に石川常太郎就任（5月）　○福生町各小学校のカギッ子、全児童数の16％	
	○福生民謡民舞連盟発足	
4	福生町文化財調査会結成される	2
	牛浜幼稚園開園する	
8	福生の財政再建に地財法を準用する	4
10	福生町戸数八、六二五戸、人口三〇、七九〇人	6
12	清岩院幼稚園開園する	9
	福生町青年団ソフトボール大会を行なう（支部対抗陸上競技大会は中止）	10
	○青年グループ親睦ソフトボール大会開催	12
	○三小校長に細谷勇太郎、四小校長に竹島芳夫就任（4月）　○フォークダンスクラブ発足する　○福生町の婦人会活動低調	

1966（昭和41）年

4	福生第二中学校開校する（初代校長赤尾英三・生徒数四八二名）	1
	福生町に武道館できる	2
	福生緑地（柳山公園）と加美平グランドできる	3
6	福生町社会福祉協議会設立する	
	熊牛町会による〝ホタルまつり〟はじまる	6
7	福生音頭発表会が行なわれる	

年		
1966（昭和	9	福生町家庭の日がきまる
		台風二六号来襲し、被害甚大となる
	12	青梅線福生駅経由の東京駅直通電車が開通する
		○一中校長に臼井武一就任（4月） ○青年団体連絡協議会の前身、青年サークルが誕生した ○〝三ない運動〟いかがわしい出版物に対する運動おこる
1967（昭和42）年	2	加美平団地の入居始まる
	9	福生町地財法準用が解除される
	10	学校教育費の私費負担解消される
	11	第一回青年の集い開催される（青年団体連絡協議会）
		○一小校長に増毛雄三就任（4月） ○福生町武道館落成記念柔道大会にアメリカ青少年の参加多い ○多摩川沿いの水田地帯三八町歩で一七九戸の農家が耕作している ○カギッ子対策の学童保育が二小で始まる ○二小にテレビカメラが設置され校内放送開始 ○三小の校庭に散水装置ができた（新校舎協賛会寄贈）
	3	福生町青年団解散する
	4	東京都知事に革新系の美濃部亮吉当選
	8	公害対策基本法公布施行する
	9	ユニバーシアード東京大会開催
	10	吉田茂元首相の戦後初の国葬が行われる
	11	小笠原諸島の返還決まる
	8	中国、北京で紅衛兵が進出し文化改革を推進する
	9	台風二六号、東海、関東、東北を襲う
	12	「建国記念日」を2月11日とする政令を公布する
	1	アメリカ、原子力空母エンタープライズ、佐世保へ入港する
	3	東京高裁青梅事件の差戻し控訴審で全員無罪となる
	4	小笠原諸島の返還協定を調印する
	10	川端康成、ノーベル文学賞受賞
		政府、武道館で明治百年記念式典を行なう

年		
1968（昭和43）年	7	福生緑地に町民プールが完成する
		福生町消防本部設置される
		○二小校長に藤谷重三郎就任 ○町議員が柳山公園と各学校に桜の苗木二五〇本を植えた ○弓道連盟発足 ○青少年にシンナー遊びが増加 ○一小校長に藤高河澄就任（9月） ○福生町弓道連盟発足
1969（昭和44）年	1	多摩河原土地区画事業を決定する
	4	福生第五小学校開校する（初代校長岩下伴蔵・三三五名）
	6	『ふっさっ子・第一集』発刊する
		第一回町民バレーボール大会が行なわれる
	7	柳山公園に幼児用プールが竣工する
		○二中校長に田中貞雄就任 ○海の汚れで臨海学校とりやめの声が多くなってきた
	4	福生第一小学校分校を開校する
	7	福生市制を施行する（初代市長石川常太郎・職員数二六四名）
		福生市福祉会館が開館する
		福生市陸上競技協会主催、第一回福生ロードレース大会開催する
	1	東大、安田講堂が警視庁機動隊により封鎖解除される（大学紛争激化する）
	4	沖縄デー統一集会が行なわれる
	7	アメリカ、アポロ一一号、人類初の月到着に成功
	11	佐藤・ニクソン会談で沖縄一、九七二年復帰が決定する
	3	日本万国博覧会・大阪の千里丘陵で開かれる（六カ月間、六、四二二万人が入場）
	6	赤軍派学生、日航機「よど号」乗取り事件
		日米安保条約、自動延長に入る
	8	銀座、新宿など日曜・祝日ごとに「歩行者天国」がはじまる

1970（昭和45）年

8 長沢遺跡を発掘する
10 福生市戸数一一、二五三戸、人口三七、九四三人
第一回市民総合体育大会を開催する
福生市役所に公害係（10月）と心配ごと相談所（11月）がおかれる
12 吉増剛造、第一回高見順賞を受賞する
○四小校長に尾亦永作就任　○6月に多摩橋が新しくなった　○熊川団地親子読書会が軌道に　○10月に八高線のSLが姿を消した
○子どもにもボーリングが流行　○福生駅前通りで歩行者天国初実施

11 沖縄、国政参加初の選挙行なわれる
作家三島由紀夫が市ケ谷の自衛隊で割復自殺する
12 超党派の日中国交回復促進議員連盟発足する

1971（昭和46）年

4 福生第六小学校開校（初代校長鈴木信也）
都立福生高等学校開校
つくし保育園開園
第五小学校が都の愛鳥モデル校に指定された
12 市の木（モクセイ）市の花（ツツジ）決まる
○三小校長に木村不二夫就任　○バドミントン・バレーボール・スキー各連盟発足する
○福生ホタル研究会が、かわにな養殖用の川をつくる　○子ども向けハレンチマンが流行

1 ソ連の金星7号、初の軟着陸成功
2 米のアポロ14号、初の月高地着陸に成功
原油価格の大幅引上げ日本に波及
6 沖縄返還協定に調印
7 米のニクソン大統領、中国を訪問
10 中国の国連参加が決定
天皇・皇后両陛下ヨーロッパ親善訪問
12 沖縄返還協定の国連法案、衆参両院で成立

1972（昭和47）年

○光化学スモッグ注意報、初の発令

4 福生第一小学校に特殊学級を開設する
五小・六小に学童保育所を開設する
世界連邦建設同盟福生支部が発足する
5 高齢者職業相談所を開設する
8 福生市身体障害者福祉協議会が発足する
○剣道連盟・ソフトボール連盟発足する　○この年の物価、福生駅より立川まで往復八〇円、新聞代九〇〇円

1 グァム島、元日本兵横井庄一救出
2 札幌冬季オリンピック、七〇米級ジャンプで日本金銀銅独占
連合赤軍の浅間山荘事件
3 新幹線、岡山まで開通
沖縄返還交渉の外務省公電漏えい事件
4 奈良県高松塚古墳発見
作家川端康成、自殺する
5 東京都練馬区で光化学スモッグ被害発生
大阪千日ビルの火災
日本人ゲリラ、テルアビブで空港乱射事件
7 田中内閣成立
8 ミュンヘンオリンピック大会開く
10 ルバング島で元日本兵小野田寛郎発見

1973（昭和48）年

1 牛浜にチビッ子広場完成
3 福生市文化財保護条例制定
4 市民体育館開館する
市立図書館供用開始する
ホタル公園完成する
5 予防衛生センター完成する

1 ベトナム和平協定を正式調印
3 日中両国の初代大使が赴任
4 森永ミルク中毒にたいし訴訟
ウォーターゲート事件でホワイトハウス大揺れ
7 パリ発日航ジャンボ機乗取られる

6 消費生活モニター制度発足する
文化財専門委員決る
10 市制モニター制度発足する
○一小校長に藤谷重三郎、二小校長に畑井馨
四小校長に佐藤武文、一中校長に加藤哲夫就任する（4月）　○小学校卒業生で私立中学校への進学者は二〇名

8 金大中、東京のホテルから誘かいさる
10 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞する
11 日本シリーズで巨人九連覇
石油危機で物不足、買いだめが起る
東洋一のつり橋、関門橋開通

3 ゴミ減量運動週間始まる
家庭菜園始まる
4 福生第七小学校開校（初代校長馬場問）
福生第三中学校開校（初代校長上沼舜二）
福生団地に入居始まる
7 柳山公園沿いに自転車道が一部完成
市庁舎屋上に大気汚染自動測定室完成する
○五小PTAに福生で初の女性会長が就任
○五小校長に宮下鉄三就任（9月）　○一七次南極観測越冬隊が出発、巻田和男隊員も（昭31年生・一小出）　○アキカンが公害化してきた　○市内の小学児童数四、一四八名
○柳山・金堀・桜・ほたる・富士見・明神下・南、と多摩川べりに公園ならぶ

4 モナリザ展開かれる
5 日本女子登山隊、女性初のエベレスト登頂成功
8 伊豆半島地震で大被害
アメリカ、ニクソン大統領辞任
9 三菱重工ビルで時限爆弾が爆発
台風16号襲来、多摩川決潰し狛江市の17戸流失
11 長嶋茂雄選手、巨人軍監督となる
12 田中首相、金脈問題で辞任後、三木内閣が成立

3 福生市植物調査（中間報告まとまる）
五日市線から南公園までの自転車道完成
7 多摩河原区画整理事業完成
福生リトルリーグ発足
10 市役所に少年相談所開設される
福生町戸数一四、七六五戸、人口四六、四五七人
11 全国老人スポーツ大会弓道の部で荒井平吉、日本一に
○三小校長に並木信一就任　○しあわせを生む、国鉄福生駅の切符売れる（48年末より）
○この年の物価、新聞代一、七〇〇円、標準米10K、二、四九五円

3 福生市基本構想制定される
4 福生駅東口区画整理本格化
福生第一中学校に心障学級開設される
原ケ谷戸児童公園が完成する
わかぎり会館完成する
5 福生消防署に七階まで届くハシゴ車入る
福生駅北側に自転車置場をつくる
6 北条氏照制札など一〇点を市文化財に初指定
7 モントリオールオリンピックで二中出身の斉

3 新幹線、博多まで開業
4 完全失業者一〇〇万人を突破
5 三菱石油水島製油所で重油流失
7 沖縄国際海洋博覧会開く
8 日本赤軍、クアラルンプール事件をおこす
台風5・6号で各地に被害
10 ソ連の金星9号、金星表面の写真伝送に成功
11 小林則子、女性単独ヨット最長記録で太平洋横断
12 三億円事件、時効となる

1 中国の、周恩来首相死去
鹿児島市立病院で五ツ子誕生
7 オリンピック、カナダモントリオールで開幕
バイキング1号、火星の軟着陸に成功
ロッキード事件で田中前首相逮捕される
8 桜美林高校が夏の高校野球で初優勝する
9 台風17号西日本に被害を
中国の毛沢東主席死去

1976（昭

藤文夫バスケットで活躍
第二中学校女子バレーボール部関東選手権大会で優勝する
11 市青少年問題協議会がポルノ雑誌自動販売機追放運動を開始する
○六小校長に木村一夫、一中校長に上野幸雄就任（4月）　○市内中学卒業生は五二三人でうち93％が進学者　○福生市民謡連盟。卓球連盟。はやし連合会発足する

1977（昭和52）年

1 福生市消防団、東京消防協会長賞を受賞する
親子読書の会（熊川団地）七周年記念誌を発刊する
福生不動尊遺跡発掘調査する
4 わかたけ会館開館する
福生駅自由通路開通する
6 福生市民会館、公民館開館する
7 香山勇、児童の交通安全功労者で総理大臣賞を受賞する
10 福生保健所開設される
福生消防少年団発団する
12 ○一小に小川皓右、二小に吉川博千、五小に田島虎雄、三中に伊佐嵩、各校長が就任（4

10 酒田市繁華街で大火
王（巨人軍）七一四号本塁打でベーブルースと並ぶ
12 福田内閣成立

1 毒入りコーラ殺人事件発生
アメリカの大統領にカーター就任
4 日本初の高速増殖炉「常陽」に原子の火がともる
8 北海道の有珠山大爆発
連続降雨二二日で長雨新記録
9 巨人軍の王、本塁打世界最高七五六号を
10 西独赤軍、ルフトハンザ機乗取る
日航機、日本赤軍に乗取られ六人の釈放犯とアルジェへ
12 ロンドン市場で円高新記録（二三六円）
喜劇王チャップリン死去

月）　○福生市吟詠連盟発足　○子どもの凧揚げが洋凧になってきた

1978（昭和53）年

6 扶桑会館開館する
市内一部地域で下水道供用開始する
7 熊川神社本殿を市重宝に指定する
商工会館開設される
10 第一回老人運動会開催
11 健康センター開設される
○市民会館玄関に木内克制作による「エーゲ海に捧ぐ」公開される　○五日市線多摩川鉄橋で五三年ぶりに橋げた交換

5 成田、正式に開港（12年ぶり）
福岡市の板付遺跡で縄文末期の水田跡と足跡を発見
6 宮城県沖地震発生一都七県で被害
8 日中平和友好条約を締結
9 稲荷山古墳出土の鉄剣から金石文百拾五字を発見
10 円、戦後最高の急騰
11 大平内閣発足

1979（昭和54）年

3 栗原一郎、安井賞候補展に出品する
5 松林会館開館する
11 福生市高齢者事業団発足する
12 岡野法世の陶壁を市立中央図書館に搬入する
○四小校長に岩下伴蔵、二中校長に川島代吉が就任（4月）　○インベーダーゲーム過熱
○六小校長に庄司勉が就任（5月）　○「少年少女愛鳥作品コンクール」で五小五年の野村亮が一席に入選

2 航空機疑惑で国会証人換問始まる
3 政府石油の5％節約策を決定
4 東京都知事選挙で保守系の鈴木俊一当選
江川卓投手巨人軍入り
6 OPEC総会、基準原油価格引上げを決定
カーターアメリカ大統領来日
9 上野動物園の「ランラン」急死
日本鉄道建設公団、不正経理発覚
10 小学六年、父とヨットで太平洋横断成功、最年少記録

	韓国朴大統領射殺される
11	広島カープ、日本シリーズで初の日本一となる
	国際電信電話公社が組織的密輸

（参考資料）

『広報ふっさ』『福生町誌』『福生一小・二小記念誌』『福生百年史』『月刊ふっさっ子』

この年表の、昭和20年より45年までは、『第二集』のときのものを補正して再録した。

『子どもの暮し　うつり変わり』

福生一小卒業生による（昭和19年～35年）座談会から

年度 事項	20～23（耐乏生活）	24～26（さあ、町づくりだ）	27～30（基地の町）	31～35（汚れた多摩川）
兄弟数は	平均五人	〃　四、八人	〃　三、八人	〃　二、九人
家族旅行は	なし	なし・一部には日帰りが	〃	一泊がでてきた。日帰りは多くなってきた。
家の手伝いは	水汲み・子守り・畑仕事	〃	〃	水汲みが少なくなり、子守りもほとんどなくなった。
おけいこごとは	なし	珠算流行・習字ボツボツ	珠算・書道・踊り。二つ以上習うのがふえた四つ習っている子も	家庭教師ボツボツ。学習塾通いはまだ少ない
学校で	教科書に墨ぬり。先生がこわかった。女子もべえべえことば（福生中学校ができたPTAも）	体育の時間ははだし。靴など配給のくじ引きで。修学旅行には米を持参（三小ができた）	校庭でセミとり。金次郎より宮沢賢治（高校への進学は約50％が）	べえべえをやめましょう。下駄ばきがなくなり靴に。35年には水泳は学校のプールで（四小ができた）

あそび	兵隊ごっこ。水あび。魚つり。ベエゴマ。かくれんぼ。自転車は三角乗り	ガキ大将。紙芝居。野球（グローブも手作りで）。サワガニとり。馬乗り。お手玉。おはじき	れんげ畑。桜の花びらつみ。映画をまねたチャンバラ。おてんばがふえる。紅梅キャラメル景品集め	お店へ行ってテレビを見る。テレビを入れる家がふえた
家での勉強は	それどころではなかった。（勉強は学校でやるものだった）	少しは勉強しろ。しねえなら仕事手伝え	宿題はやったか。（グループ学習組もあった）	勉強しろ。手伝いはしなくてもいいから。（家庭教師がきた家も）
むすび飯があまったら	あまらなかった（遠足で）	あまればもち帰って、兄弟に見せびらかして食べた	〃	他の人に分けてやり、すてたことのある子も出てきた
ほしかったものは	食べるもの	野球のグローブ。おさがりでない服や靴	自転車。長靴。人形。こうもり傘。皮のグローブ	テレビ。カメラ。腕時計。オルガン。フランス人形
親のしつけ方	遊んでばかりいねえで仕事を手伝え	わるさをするんじゃねえよ。おそくなると人さらいがくるぞ	行儀がわるい。女らしくしなさい	歯をみがきなさい。手を洗いなさい

お祭り	わらじばきにはんてんを着て。準備は子ども中心で。最上級生の権威大	長沢・永田・加美・中福生は、昔の型で。新開地（志茂・牛浜等）は大人（子ども会役員）が管理	本町は子どもが準備に出ることが少なくなった。（神輿みがきぐらい）	古い地区で、お金の扱い方で上級生の取分が多く、非行と結びつくとPTAなどが発言
多摩川で	泳ぎはフリキンで、女子もパンツだけ。砂利ふるいのアルバイトも	永田、中福生などの地元連がいばった。川魚漁も見られた	臨海学校の訓練で、水泳検定もあった	水が冷めたくなり汚水が目立つ。水泳危険の立札が多くなった
横田基地は	米兵はうすきみ悪かったけど、チョコなどもらった	父親が勤務していたので好印象。トラックなどすごいなと思った。建物などの原色が強烈	ジェット戦闘機F4のすごい音。三小では校舎に外人の子の投石被害も。	外人の子と遊んだ。店番をしていて、外人からガムなどもらった。親善のための交流さかん